

---

# 真・恋姫無双 新たな6人の天の御遣い!

地獄の傀儡師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫無双 新たな6人の天の御遣い！

### 【Nコード】

N6808M

### 【作者名】

地獄の傀儡師

### 【あらすじ】

青年は鏡を割り、目が覚めたら其所は青年の知らない三国の世界だった。

彼は其所で一人の女の子と出会い一緒にいる内に変わっていく。

これはそんな青年と女の子の物語である。

真・恋姫無双の夢小説です。

本来のストーリーとオリジナルストーリーを追加した話になります。

初めて書いたので自信がありませんが、楽しんで読んでください。

## 過去の仲間との遭遇（前書き）

初投稿で緊張しますが楽しんで読んでいただきたいと思います。

## 過去の仲間との遭遇

男「た頼む見逃してくれ！金はいくらでも払う！お願いだ」

？「失せるクズ！死ね！」

と言うと？は右腕に持っていた日本刀で男の首を斬り裂いた

？「いつまで俺はこんな殺人を繰り返すのだろうな」

？は一瞬そう言い軽く笑うと殺した男の首をビニールに包みそれを持ってその場から消えた。

？の名前は懷渡<sup>かいと</sup>彼はある暗殺企業に所属するプロの暗殺者であり先程の殺人も暗殺依頼があったので仕事としてやったのだ。

懷渡（いつまでこんな仕事をするのかな俺は）

などと思いながら暗殺企業が経営する会社に到着した。

懷渡（さて依頼人は何処だ）

会社に到着し依頼人を探しているとスーツ姿の男が俺に向かって手招きをしていたのでその男のところに向かった。

懷渡「依頼は完了した。」

依頼人「では何か証拠になる物をお見せください」

依頼人がそう言ったので俺は持っていたビニールの中のターゲットの首を見せた。

懷渡「これが証拠だが構わないか？」

依頼人「あつああ構わないよ」

依頼人は驚きながらそう言ったまあいきなり死体の首など見せられたら当然だな。

依頼人「では依頼金を」

依頼人がそう言うと懷から封筒を出した。俺はそれを受け取ると何も言わず会社を後にし銀行に向かった。

貰った依頼金の使う分だけ財布に入れ後は自分の口座に入れた後俺はその場を後にし昔修行で使っていた小屋（現在の家）に向かう為その場を後にした。

小屋に向かっていている途中博物館の近くの道で学生二人が戦闘をしているのを見つけた。

片方は木刀を持った学生、もう片方は何かの対術のようなものをつかっている学生である。

見たところ対術をつかっているほうの学生が木刀を持っているほうの学生を完全に圧倒しているようだ。

だがその時対術をつかっていた学生が持っていた鏡を落としその瞬間二人のいるところが光に包まれ対術をつかっていた学生が何かを言っていた

学生「もう遅い……」

そこから先は聞こえなかったが光が消えた後二人の学生は消えていた。

懷渡「あの対術をつかっていた学生何処かで見たことがあるな、それにあの対術も。」

残された俺は昔の記憶を思い出していたらある一人の青年が頭に思い浮かんだ。

左慈、前に暗殺能力や戦闘能力を上げる為にある師のもとに弟子入りした時にいた俺と同様弟子入りしていた青年だ。

だが対術や容姿から見ておそらく奴は左慈だろう。

懷渡「だが何故今更奴が。」

懷渡は考えた何故今更奴が現れたのか、目的は何なのかを

懷渡（おそらく目的はあの鏡か）

俺は奴が大事そうに持っていた鏡でピンときた。

懷渡（「確かあれと同じような鏡が小屋の近くの倉庫にあったな」）

懷渡のいる小屋の近くの倉庫には古い物がたくさんあり前に師が自



慢気に鏡を見せびらかしていたのを思い出した。

懷渡（「狙いが鏡なら奴は必ず俺の目の前に姿を現すだろう。その時に鏡を狙っている理由を吐かせ始末しないとな」）

懷渡はそう心に決めその場を後にし自身の小屋に向かった。

懷渡「何処にあつたんだっけな」

次の日懷渡は倉庫の中を探していると左慈が盗んでいた物と同じような鏡が出てきた。

懷渡「うーむ」

懷渡は鏡を見ながら首を傾げた。これがそんなに凄い物なのかと、確かに売れば金になりそうだが奴の言っていた言葉を思い出すと売る為に盗んだとは思えないのだ。

懷渡「何か特別な鏡なのか？それとも何か細工でもあるのか？」

暫く鏡を見て仕掛けなどがないか見てみたが古いだけで別に特に変わったところはなかった。

見ても何も変わらないので懷渡はとりあえず鏡を仕事用のカバンに入れ会社に向かうことにした。

懷渡が会社に向かっていく途中携帯に連絡がきた。

懷渡「もしもし」

？「よう懷渡」

懷渡「その声は齋藤知也さいとうちもぜだな。

知也「その通りだがよく俺だと分かったな」

懷渡「俺に連絡してくる奴などお前しかいない」

齋藤知也とは前に仕事の依頼を受けた時に暗殺ターゲットのボディガードをしていた軍人だ。

奴と戦った後にお互い意気投合し携帯の番号を交換したのだ。

懷渡「何のようだ？」

知也「ちよつと依頼を受けてな」

懷渡「ほうどんな依頼だ？」

知也「それはな・・・」

と奴が言った瞬間何かが飛んでくる気配がし咄嗟に刀でガードした。

懷渡「何！」

飛んできた物は銃弾であり懷渡は電話中の知也に

懷渡「貴様どういっつもりだ！」

と怒鳴りながら聞くと知也は

知也「お前から鏡を取り返せという依頼を受けた。悪いがお前の持っている鏡を俺に渡してもらおう。」

そう知也は言う。と携帯は切れ同時に50mぐらい離れたところから軍服を着更に両手にマグナムを持ち背中にもスナイパーライフルを持った男斎藤知也が現れた。

懐渡「依頼されただと貴様誰に依頼をされた？」

知也「さあ知りたいなら力づくで聞いてみる！」

知也がそう言う。と両手に持っていたマグナムを懐渡に向かって発砲した。

懐渡「ちっ」

懐渡は銃弾を全て刀で弾いたが刀VS銃では近寄れない限り刀のほうが圧倒的に不利であり更に奴の照準は完璧であり迂闊に近寄ろうとすればおそらく今はけっこうギリギリで銃弾を弾いているが近くで射たれ続けたら全てを弾くことは不可能である。

はっきり言えば劣勢であり更に此所は普通の道路、戦闘を続けければ周りの人間にもいずれ被害が出るはず。

そう判断した懷渡は場所を変える為に走り出した。

知也「何処へ行く気だ？」

知也も発砲しながら走り出した。

懷渡「場所を変える此所ではその内被害が出る。殺るなら俺が行く場所に着いてこい」

そう懷渡が言った後知也は発砲するのをやめ懷渡の後を追うように着いてきた。

向かう場所は小屋の近く、あそこは山の中だから誰も来ないと考えたからである。

山に入って少しした後懷渡は知也のほうを向き刀を抜いた。

懷渡「行くぞ！お前を立てなくして依頼人が誰か吐いてもらっ

知也「やれるもんならやってみな」

懷渡「行く！」

懷渡はそついうと知也に向けて抜刀状態で突撃した。

知也「馬鹿が死ね！」

知也が懷渡に向けて銃弾を発射した。抜刀状態で向かって行った為に弾くことは不可能だと知也は思った。

懷渡「鉄塊」

キンキン

知也「何！馬鹿な」

放った銃弾は懷渡に全発命中したが、懷渡に当たった銃弾は全て彼の身体に当たった瞬間金属音のような音がし弾かれたのだ。

懷渡「はあー！」

知也「くっ」

ガキン

驚いている知也に懷渡は抜刀した。

知也「ぐはっ！」

知也は咄嗟に両手の銃でガードしたが威力を殺しきれず吹き飛び大木に激突した。

知也「何故銃が効かない？確かに全弾直撃した筈だ」

懷渡「特殊対術6式の一つ鉄塊、これは身体を鉄のように堅くするもの。お前の銃ではダメージはくらわん。」

知也「そうかなら鉄の防御でも防げない攻撃をすればいいだけのこと！」

知也は銃を後ろにしまい懷渡に向かって拳をふるった。

懷渡「鉄塊」

懷渡は鉄塊でガードをしたのだが

懷渡「グハッ！」

知也の拳は鉄塊をつかっている懷渡の腹にめり込んだ。

懷渡「何！鉄塊を貫通するだ」と

懷渡は腹を抑え距離をとった。

知也「まだまだこんなもんじゃないぞ」

知也は懷渡に突っ込んで行った。

懷渡「くっ」

懷渡は刀を抜いて応戦した。

ガキン キン ガキン



刀と拳が何回もぶつかりつめぜり合いになった。

懷渡「くっ」

知也「ちい」

力は互角スピードでは若干懷渡のほうが優勢だが

知也「お前まだ力を隠してるだろ？何故本気にならない？」

懷渡「お前も人のことは言えない筈だが、それに俺は本気になる気はない」

懷渡は力を隠していただがそれは知也も同じことだったようだ。

知也「ならやめだ」

懷渡「何」

いきなり知也が戦闘をやめてしまった。

懷渡「どういっつもりだ？依頼を放棄する気か？」

知也「元々依頼など遂行する気はない。ただお前の力を見なかっただけだ。」

懷渡「ふっまあいいならお前に依頼した奴の名前を教えてください」

知也「ああ俺に依頼した奴の名前は・・・」

と知也が言った瞬間

？「死ね！」

背後から突然何者かが知也に蹴りを振るった

ガン

知也「やはり来たか」

だが知也は奴が来ることが分かっていたかのように銃で蹴りをガ―ドした

？「何故俺が来ることが分かった？」

青年は距離をとり知也に聞いた

知也「お前のような人間を俺は何回も見ている。依頼が終わったり失敗したら証拠隠滅の為に殺しに来る奴をな」

知也は銃を構え戦闘態勢に入った

懷渡「やはりお前が依頼主だったか左慈」

懷渡は刀を構えながら青年を見た。

かつてのライバルであり仲間だった青年左慈を

左慈「ふっ久しぶりだな懷渡さぁお前の持っている鏡を寄越せ！」

懷渡「断る俺は絶対にお前を許さん。したっていた師を殺し俺の片腕を奪ったお前を俺は許さん」

懷渡は左慈に向かって刀を振るった

懷渡「飛天御剣流龍巢閃！」

左慈「嘗めるなあ！」

懷渡の剣術に対し左慈も対術で応戦

ガキン ガン ギン

剣術の連撃と対術の連撃がぶつかり両者はつめぜり合いの状態になった

懷渡「言え！何故あんな鏡を狙う」

左慈「貴様には知る必要がないことだ死ね！」

知也「俺がいることを忘れるなよ」

左慈「ちっ」

左慈が懷渡に攻撃しようとした瞬間知也が銃弾を発射した

左慈はギリギリでそれを避けると少し距離をとった

だが偶然銃弾の一発が懷渡のカバンに当たり中に入っていた鏡が落ちてしまった

左慈「もらった！」

左慈は驚異的なスピードで地面に当たりそつな鏡を手で掴んだ

左慈「これで貴様達に用はない俺は去らしてもらっ」

左慈はそついうと先程と同じぐらいのスピードで逃げたしかし

懷渡「飛天御剣流奥義」

と言った瞬間懷渡が消え左慈の真後ろに現れた

左慈「何！」

左慈が驚いた瞬間

懷渡「天翔龍閃！」

飛天御剣流の奥義である超高速の抜刀術 が左慈に直撃した

左慈「ガハッ」

左慈は血を吐きその場に倒れた

バリッ

その時何かが割れる音がした。

懷渡「何の音だ？」

それは左慈が持っていた鏡が割れる音だった

そして鏡が割れた瞬間まばゆい光が周辺を包みこんだ

知也「何だこの光は！」

懷渡「分かったが何かおこるぞ！」

今の状態は博物館の近くでおきたのと同じ現象懷渡はすぐに何かがおこると気付いたのだ

左慈「ふっもう遅い」

懷渡「何！」

倒れていた左慈が足をふらつかせながら立ち上がった

左慈「もうお前は逃れられない！だが忘れるな貴様は俺が必ずこの手で殺す！」

懷渡「くっどうという意味だ？」

左慈「直に分かる貴様の運命もな！」

と言った瞬間左慈は消えた

知也「ぐ懷渡大丈夫か？」

懷渡「ああ知也気をつける俺達はとんでもないことに首を突っ込んじまったようだからな」

まばゆい光は懷渡達を包み込み懷渡と知也はそこで意識を失った

同時刻ある4人の男達も同じように光に包まれ意識を失っていた

3人は同じ現代の人間もう一人は未来にいる人間

男達の名前は一人は伊東大輝<sup>いとっだいき</sup>世界一頭がいい青年



二人目の名前は杉浦一光すぎうらかずき傭兵部隊に所属する青年

三人目の名前は海道竜也かいどうたつや世界一力がある青年

最後は黒神紅魔くろがみこうま未来にいる剣術家の青年

光に包まれた彼らはこの後一体何を見るのだろうかこうご期待！

## 違う世界（前書き）

剛鬼（懷渡）視点で話を書いて行こうと思います

他のオリキャラも随時出すので心配しないでください

## 違う世界

バン

大きな音と共に懷渡は目を覚ました

懷渡「う此所は何処だ」

懷渡は立ち上がると辺りを見渡した

懷渡「何故荒野に俺はいるんだ？」

辺りは一面荒野、山の中にいた筈の懷渡が疑問に思つのも当然だ

懷渡「ちつ此所が何処だか知らんがとりあえず顔を隠しておこう」

懷渡はそう言つとカバンの中にしまっておいた暗殺をする時に使う鬼の仮面を顔にかぶった

懷渡「そう言えば知也は何処だ？」

周りを見渡したが知也の姿は何処にもない

？「おいその仮面の兄ちゃん」

不意に誰かが声をかけて来た

振り向いて見ると黄色い布を頭にかぶつり馬に乗っている男に話掛けられた

懷渡「何だお前達は？」

男達の後ろには同じように黄色い布を頭にかぶっている奴等が大勢いた

数はおそらく5万ぐらいだ

男1「おい仮面野郎命が欲しければその珍しい服と剣を置いていきな！」

と男は懷渡を睨んで言った

懷渡（「珍しい格好ってこの服装のどこが珍しいんだ？」）

懷渡の服装は下がグレーのジーパン上が黒の長袖でその上に赤い革ジャンを羽織っている状態

懷渡「お前らこそ珍しい格好してるな。黄巾党の格好何てお前達は三国志オタクか？」

こいつ等の格好は三国志に出てくる黄巾党の格好にそっくりだったので一瞬三国志オタクか何かと思ったのだが

懷渡（「この剣は作り物じゃなく本物か」）

こいつ等の持っている剣はところどころ血が付着しており作り物ではないとすぐに気付いた

黄巾党1「貴様おたくだと？訳が分からんことを言いやがって服と剣を置いていけと言っているのが聞こえないのか？」

黄巾党らしき人物が怒鳴りながら言う

懷渡「断る」

黄巾党1「何！」

黄巾党2「てめえ頭の言うことが聞けねえっていうのか」

といいながら黄巾党らしき男が剣を片手に近寄って来たので懷渡は刀を抜刀し近寄って来た男を殺した

懷渡「失せる雑魚どもそんなに服と刀が欲しければ力づくで奪ってみろ」

懷渡は黄巾党らしき集団を挑発し刀を構えた

頭「てめえいい気になりやがってお前一人で何が出来る？こっちは5万人いるんだ構うことはねえ全員こいつを殺っちまえ！」

黄巾党「おおー！」

懷渡「殲滅開始」

懷渡は大勢の黄巾党のらしき集団に突撃した

曹操 side

夏侯淵「華琳様黄巾党を発見しました」

曹操「こんなところで？」

夏侯淵「はいおそらく移動中だったではないのでしょうか」

懷渡のいた場所より少し離れた場所に曹操とその部下の夏侯淵、夏侯惇がいた

夏侯惇「黄巾党など所詮雑魚が集まった烏合の衆我らの敵ではないさ」

夏侯淵「姉者突撃したいなどと言っなよ」

夏侯惇「な秋欄別にそんなこと思ってないさ」

曹操「思っていたのね春欄」

曹操が呆れ顔で言う

夏侯惇「華琳様まで私はそんな猪武者ではありませんよ」

夏侯淵「フッフ姉者は可愛いな」

などと夏侯淵がからかっていると曹操が本題に入った

曹操「それで秋欄黄巾党の動きは？」

夏侯淵「はいそれが・・・」

夏侯淵が言葉に詰まった

曹操「？どうしたの秋欄」

曹操が聞くと

夏侯淵「戦闘が始まっているようなのです」



曹操「戦っている者とはどのくらいの兵力なのかしら？」

夏侯淵「それが・・・一人なのです」

夏侯惇「秋欄いくら何でも一人はないだろ報告では5万はいるんだぞ」

曹操「そんなところに突っ込んでいく者など春欄と同じかそれ以上の馬鹿がやることよ」

夏侯惇「華琳様何気に私を馬鹿だと言わないでください」

夏侯惇が泣きそうな声で言った

夏侯淵「しかし見てください一人の男に黄巾党が圧されているようなのです」

そう夏侯淵が言うと曹操と夏侯惇も戦闘の様子を見た

曹操「本当ね・・・あれだけの数の黄巾党を完全に圧しているよね」

夏侯惇「しかし戦っている男は誰だ？珍しい格好をしているが」

夏侯惇が言つた後夏侯淵が曹操に何か耳打ちをした

夏侯淵「華琳様あの男はもしや」

曹操「ええおそらく管輅の占いに出ていた7人の天の御遣いの一人かもしれないわね」

夏侯淵「なら華琳様あの男を勧誘する気で？」

曹操「ええ秋欄そのつもりよ戦闘が終わったらあの男の元へ行くわよ」

夏侯淵「御意」

不適に笑う曹操は懷渡が敵を殲滅するのを待った

懷渡  
side

懷渡（「さっきから何やら視線を感じるが今は気にしないでおう」）

懷渡は曹操達が見ているのに気付いていたようだが集中して敵を殲滅している

黄巾党1「死ねー！」

懷渡「遅い！」

ザシュ

黄巾党2「この！」

懷渡「失せろ！」

グサ

黄巾党3「くそ一気に殺っちまえ！」

20人ほどが同時に来るが

懷渡「飛天御剣流龍巢閃」

ザンザンザン

黄巾党3「うわぁー！」

黄巾党4「動きが見えねえー！」

黄巾党を次々に斬りふしていく懷渡に頭らしき人物が

頭「おい何やってやがる早くアイツを仕留めろ！」

と言った瞬間

懷渡「飛天御剣流九頭龍閃」

頭の目の前の兵士達が倒れ逃げようとした頭だったが

懷渡「逃げるのが遅かったな」

懷渡の刀は頭を貫いていた

頭「ガハッ」

懷渡「貴様達の頭は殺した大人しく退け！それでもかかって来たいなら殲滅してやる」

黄巾党4「うわぁー化け物だー！」

黄巾党5「全員逃げろ！」

黄巾党は逃げ出した無論向かって来た奴等は全て殺した

曹操 side

曹操「どうやら勝負がついたようね。行くわよ春欄 秋欄」

夏侯淵「はい」

夏侯惇「何処にですか華琳様？」

夏侯惇がキョトンとした顔をしながら曹操に聞いた

曹操「あの男を勧誘しに行くのよ」

そついうと曹操と夏侯淵はさっさと行ってしまった

夏侯惇「あ待ってくださいよ華琳様」

その後を夏侯惇も追った

懷渡「さてとりあえず村でも探してみますか」

懷渡がその場を後にしようとしたら

？「そこのお前待て！」

懷渡「誰だお前達？」

懷渡の目の前に馬に乗った二人の女性と一人の少女がいた

しかし懷渡は同時にあることを思っていた

懷渡（「こいつら強いな覇気の量がそこらへんの雑魚どもとは桁が違う」）

と分析していると少女に話掛けられた

少女「あなた名は何ていうの？」

懷渡「人の名を聞くときはまず己の名を名乗れと習わなかったのか？」

女性「貴様華琳様に無礼なことを言うな！」

黒髪の女性が怒鳴りながら怒りをあらわにした

少女「やめなさい春欄！」

だが少女はそれを一瞬で止めた

少女「そうねそれが礼儀よね私の名は曹操字は孟徳よ」

懷渡「何！」

懷渡は驚いたあの三国志の曹孟徳と名乗った少女に対して

懷渡（「やはり此所は三国志の世界か？だが曹操は男のはずだが」）

曹操「それであなたの名は何と言うのかしら？」

状況を分析していると曹操と名乗った少女が問い掛けてきた

懷渡（「ここが何処だか分からん以上名前を変えておくか」）

懷渡「俺の名は剛鬼だ」

懷渡は咄嗟に考えついた名前を言った



曹操「剛鬼？性と字はないのかしら？」

剛鬼「ないというより俺は自分の名を知らないんだよ」

曹操「そうだったの通りで妙な名だと思う訳だわ」

剛鬼「ところでさっきから曹操とは別の名前を後ろの二人が言っているがもう一つの名前か何かか？」

曹操「貴方真名を知らないの？」

剛鬼「ああできれば意味を教えてください」

曹操「真名とはその人の本当の名よ。例えば知っていたとしても真名を預けていない人に真名を呼ばれたらいきなり斬られても文句は言えないそれぐらい大事な名なのよ」

剛鬼「そうか俺の国では性と名しかないからそのことを聞けてよかったよ」

女性「性と名だけだと」

青髪の女性が驚きながら言った

曹操「貴方の国とは何処かしら？」

剛鬼「日本だが」

曹操「日本？聞いたことないわね秋欄知っているかしら？」

女性「いえ知りませんね」

曹操「その日本とは何処にあるのかしら？」

剛鬼「この大陸から海を越えた先にある島国だ」

曹操「そうなら知らないのも無理はないわね」

剛鬼「ところで後ろの二人は夏侯惇と夏侯淵か？」

三人「な！」

剛鬼「黒髪が夏侯惇で青髪が夏侯淵であっているか？」

夏侯淵「ああその通りだ」

夏侯惇「貴様何故私達の名を知っている？」

剛鬼「勘だよ勘」

一応適当に誤魔化しておいた

曹操「ところで話があるのだけど」

剛鬼「何だ？」

曹操「貴方私に仕えてはくれないかしら？」

剛鬼「それは無理だ」

夏侯惇「貴様華琳様の勧誘を断るとは何様だ！」

曹操「静かにしなさい春欄！私は今この男と話しているのよ」

夏侯惇「はい」

夏侯惇はそういうと後ろに下がった

曹操「何故無理なのかしら？」

剛鬼「俺は命令されるのが嫌いだからだ」

曹操「なら貴方が春欄に勝ったら私は諦めましょうそれならいいかしら？」

剛鬼「なら俺が勝ったら頼みを聞いてもらう方がいいか？」

曹操「ええ分かったわ貴方が勝ったらあなたの頼みを聞きましょう」

夏侯淵「いいのですか華琳様そのような約束をして」

曹操「いいのよ秋欄」

剛鬼「戦闘不能にすれば勝ちでいいか？」

曹操「ええじゃあそろそろ始めてもらおうかしら春欄」

夏侯惇「はい華琳様見事打ち負かせてみせますよ」

というと夏侯惇は大剣を剛鬼に向けた

剛鬼「さてそれじゃあ始めますか」

剛鬼は拳を構える

夏侯惇「貴様何故自分の武器を抜かない？」

剛鬼「抜いてほしいなら抜かせてみる」

夏侯惇「ほざけ今言ったその言葉を後悔させてやる！」

曹操「では始め！」

夏侯惇「うおー」

合図と同時に夏侯惇は突っ込んで来た

剛鬼「ほうけっこうはやいな」

だが剛鬼は一步も動こうとしない

夏侯惇はそんなことはお構い無しに大剣を剛鬼にふり下ろした

夏侯惇「ハァー！」

夏侯淵「あの男死ぬ気か？」

曹操「何か策があるんじゃないかしら」

だがそのまま剛鬼は夏侯惇の大剣に斬られ真っ二つになった

夏侯惇「ふん他愛ない」

剛鬼「何がだ？」

三人「な！」

三人は斬られたはずの俺が生きていて驚いているようだ

夏候惇「何！バカな確かに手応えがあつた筈だ」

剛鬼「お前が斬つたのは変わり身だ」

そう言つた後三人は剛鬼の斬られたところを見た

そこには真つ二つになつた木の板が落ちていた

夏候惇「くだが今度こそ！」

夏候惇は再び剛鬼に向かつて突つ込み大剣をふるつた

剛鬼「鉄塊」

ガキン

剛鬼は夏侯惇の大剣を鉄塊でガードし大剣を掴んだ

夏侯惇「何故斬れない？ガードすらしていないはずなのに」

夏侯惇はかなり驚いているようだ。

まあ自分の渾身の一撃をガードもしていないのに傷一つなく平然と立っているのだから無理はない

剛鬼「この程度では俺には勝てんよ」

剛鬼は大剣を離し夏侯惇はそれと同時に距離をとった

剛鬼「そろそろ終わりにするか」

剛鬼はそう言うと抜刀状態で構えた



夏候惇「何だその構えは？」

剛鬼「これは俺の国にある構えださあ来い！」

夏候惇「行くぞ！」

夏候惇がさつきとは比べものにならないスピードで突っ込み大剣をふるった

剛鬼「ふっ」

そして剛鬼の抜刀術が夏候惇の大剣とぶつかった

ガキン ザク

夏候惇の大剣は弾かれ地面に刺さった

剛鬼「俺の勝ちだ」

剛鬼は刀を夏候惇に向けた

曹操「勝者剛鬼！」

剛鬼「ふう」

剛鬼は刀をしまい曹操のほうを向いた

剛鬼「曹操約束通り頼みを聞いてもらおうか」

曹操「ええで何が望みかしら？」

剛鬼「飯をおごってほしいんだ腹が減っていてな」

剛鬼は腹を抑えながら言った

曹操「それぐらいお安いご用よ」

剛鬼「助かるならその時に俺が何者なのか教えるでしょう」

曹操「ええ分かったわじゃあ行きましょつか」

そう言つと曹操達は馬に乗った

夏侯惇「剛鬼次は必ず勝つからな！」

そう言つと夏侯惇も馬に乗った

曹操「剛鬼はどうするの？私達の後ろに乗る気がしら？」

剛鬼「俺は走って行くからいいさ」

その後剛鬼達は近くの村に食事をしに向かった

曹操「それで貴方は一体何者なの」

食事が終わり正体を明かす時がきた

剛鬼「はつきり言えば俺はこの世界の人間ではない」

夏侯惇「何！」

夏侯淵「それはどういう意味だ？」

剛鬼「はつきり言えば俺はこの世界より未来の世界から来たといっても信じられる訳ないか」

曹操「当然ね。まあ何かそれを証明できる物があれば別だけど」

剛鬼「こんな物でもいいか？」

剛鬼はカバンの中からシャープペンを出した

曹操「これは何かしら？」

曹操はおもむろにシャープペンを手に持つ

剛鬼「シャープペンといって墨をつけなくても文字が書けるんだよ」

夏侯惇「本当なのか？」

剛鬼「実際に書いてやるよ」

剛鬼はカバンから紙を出しその上に字を書いて見せた

夏侯淵「確かにこのような物は今の世にはないな」

夏侯惇「ああ確かに」

曹操「どういう仕組みなのかしら？」

曹操が興味津々で言ってきた

剛鬼「中に入っている細いしんを上の部分を押して少し出せばこんなふうに書くことが出来る」

一応簡単に説明しておいた

曹操「ふーんそうなの」

曹操がまじまじと見ていたので

剛鬼「よければ一本やるが」

ついあげたくなってしまった

曹操「いいの？」

剛鬼「ああしんもつけてお前にやる」

曹操「そうありがとう」

曹操はけっこう嬉しそうな顔をした

剛鬼「これで一応未来から来たというのは信じてくれたかな？」

曹操「ええ信じましようというより信じるしかないみたいね」

夏侯淵「ところで剛鬼殿何故素顔をそのような仮面で隠しているのだ？」

夏侯惇「私もちょうどそれを聞きたかった」

曹操「何故なの？顔に怪我でもしているのかしら？」

三人が問い掛けてきたのでとりあえず剛鬼は適当に訳を話すことにした

剛鬼「昔から顔をあまり見られなくてなだからこんな仮面をつけているんだよ」

曹操「昼食の時も仮面を外さないで口の部分が開いていたわね」

夏侯惇「本当にそれが理由か？ただカッコ悪くて見せられない顔何じゃないのか？」

剛鬼「顔はそこそこだと思うが」

夏侯惇「なら仮面を外してもよかろう」

その後も夏侯惇が仮面を外せと何回も言うので剛鬼もとうとう外すことにした

剛鬼「分かったよ外せばいいんだろう」

そう言うと剛鬼は鬼の仮面を外した

曹操「ふーん以外と男前ね」

曹操は剛鬼の顔をまじまじと見ながらそう言い

夏侯淵「どうやら姉者の予想は外れたようだな」

夏侯淵が笑いながら夏侯惇に言い

夏侯惇「く貴様よくも恥をかかせおって」

夏侯惇は顔を赤くし不機嫌そうに言った

剛鬼「さてではそろそろ俺は行くでしょう」

剛鬼は仮面をかぶり立ち上がった

曹操「何処に行くつもりなの？何か宛があるのかしら？」



剛鬼「とりあえずこの洛陽に行くつもり何だがどう行けばいい？」

夏侯淵「洛陽なら・・・」

俺は夏侯淵に道を聞くと礼を言い店を後にした

夏侯淵「よかったですか華琳様？」

曹操「何が秋欄？」

夏侯淵「剛鬼殿を行かせてですよ」

曹操「いいのよ彼とはまた会える気がするからその時に剛鬼を手に入れてみせるわ」

曹操がそう言った後三人も会計を済ませ店を後にした

普通の三国志とは違う世界に來た剛鬼はこれからどうなっていくのか次回に続く

## オリキャラ紹介1（前書き）

今出てるオリキャラの説明です

後のオリキャラも話が進むにつれて出していくつもりです

## オリキャラ紹介1

剛鬼こうき

現実世界では懷渡かいとと名乗っている

生まれた後すぐに両親に捨てられた為に、本名を知らずずっと偽名を名乗って生活をしている暗殺者の青年

仕事の都合上、素顔を鬼の仮面で隠している

暗殺の腕は確かで、受けた暗殺の依頼は確実に成功させる

昔から他の人間とは違う、オーラのようなモノを出しているようで、誰も近寄ってこず常に孤独で生活していた

何故か、見よう見まねで鍛練をしていたら、飛天御剣流 牙突 御庭番式小太刀二刀流 倭刀術 六式などを修得してしまったある意味無茶苦茶な男

忍術や暗器などの使い手でもあり、懷には手裏剣やクナイなどを隠し持っている

武器は妖刀（斬）

持ち主の血を刀身に垂らせば、刀の威力が上がったり妖力で短くなるが双刀のようにも出来る妖刀（但し持ち主以外の者が、触れるとその者は殺人衝動に襲われる他、持ち主以外の血は何故かつかない）  
や手裏剣やクナイ

体術もそこそこ出来る模様

右腕は全てが義手であり、そこに自分の力をコントロールする仕掛けを施している

性格は若干無口でクールであり、女の子に対しては鈍感（あまり女の子と話したことがない為）である

年齢は二十歳

左慈とは昔の仲間であったが、彼の手により昔の師や自分の片腕をなくしたので左慈をかなり憎んでいる

さいとうともぢ  
斎藤知也

元軍人であり恋姫の世界に来るまでは、ボディガードや暗殺などの仕事をしていた青年

軍人時代では、スナイパーという名がついたほどの射撃の腕前をもっている

実力も、剛鬼と同じぐらいだと思われる

武器は両手に持ったマグナムと、背中に背負っているスナイパーライフル

だが本気の際は、拳による白兵戦の戦闘スタイルになる

何故か二重の極みを会得している、他まだ色々と体術を使える模様

性格はクールであるが、誰とでも仲良くなれそうな器を持っている

年齢は二十歳

剛鬼の近くにいたために、恋姫の世界に来てしまった  
たある意味災難な男である

## 飛將軍呂布との出会い（前書き）

恋の口調は難しいですね

オリキャラの剛鬼君は恋の前では本来の性格では若干なくなっ  
てけ  
っこう恋思いな優しい性格になっている感じですね

## 飛將軍呂布との出会い

剛鬼「はあ」

剛鬼は洛陽を目指し煙草を吸いながら歩いているがまだもうちょっとかかりそうなので溜め息をこぼしていた

剛鬼「このままだと今日もまた野宿になりそうだな」

ここ何日か野宿をしていた為更に溜め息をこぼす

剛鬼「野宿は慣れているが賊に襲われると面倒何だよな」

剛鬼が野宿をしていると必ず賊共が剛鬼のところにやって来るので剛鬼にとってはかなり迷惑なのだ

剛鬼「おっ！あれは」

溜め息をこぼしながら歩いていたら近くに村が見えた

剛鬼「ようやく賊共に襲われないで眠れそうだ」



剛鬼はそう言い右腕に触れた

剛鬼「力量解除 剃」

剛鬼は力のリミッターを外し六式の高速移動剃を使い一気に村に向かった

剛鬼「リミッター作動どうやら戦闘中らしいな？」

剛鬼は力のリミッターを元に戻し辺りを見回すと黄色い布を頭にかぶった奴等黄巾党と戦っている赤い髪に二本の触角がある女の子を見つけた

彼女の周りには数えきれかいくらいの死体が周りにある

剛鬼「あんただ山積みになんて殺していつて息がある奴がいたらどうする気だ？」

などと考えていたらまだ息がある奴等が彼女の身体を掴んだ

女の子「！」

彼女は離れようとしているがあれだけの敵と戦ったのだおそらく疲労がけっこうきていたのに対し、何十人の男に身体を掴まれている為に離れられないのだろう

剛鬼「あのままじゃまずいな」

剛鬼は刀を抜き黄巾党達のところに突撃した

?side

黄巾党1「ハハハやっと動けなくなったようだな」

女の子「……………」

黄巾党2「どうしますこいつけっこういい外見してますから頭のところに入れていきましょうか？」

女の子「……………離せ」

黄巾党3「ハハハそんな顔するなよ可愛い顔が台無しだぞ」

黄巾党の一人が彼女の顔に触れた瞬間

女の子「…………恋に触るな」

ガン

女の子は黄巾党の男に思いっきり頭突きをした

黄巾党3「ぐわっこの野郎」

黄巾党の男は彼女に剣を刺そうとした

彼女は死を覚悟したその時

？「鉄塊」

ガキン

誰かがいきなり間に現れ黄巾党の剣を掴んだ

? side END

剛鬼「ギリギリ間に合ったようだな」

剛鬼は戦闘中に彼女が刺されそうだったので剃で彼女の元へ向かったのだ

黄巾党3「何だてめえは！」

剛鬼「黙れ」

ズバッ

剛鬼は目の前の黄巾党を殺した

黄巾党4「そこのお前動くな動くとこの女の命が」

と黄巾党が言った瞬間

剛鬼「死ね」

ザク

彼女の身体を掴んでいた奴等の頭にクナイを投げ殺した

彼女は動けるようになると剛鬼の服の裾を引っ張ってきた

剛鬼「何だ？」

女の子「……誰？」

彼女はキョトンとした顔で言ってきた

剛鬼「紹介は後だまずはこいつらをどうにかしないと」

女の子「……（コクッ）」

彼女は頷くと自分の武器を構えた

剛鬼「疲れてるなら俺に任せて下がっている。俺が必ず守るから」

女の子「……大丈夫」

彼女は少し顔を赤くしながら言った

剛鬼「分かったよ。じゃあ殲滅を開始する」

剛鬼が突撃しようとした瞬間

頭「全軍退け！」

と言って黄巾党は逃げるように退いて行ってしまった

剛鬼「何故逃げる？数では圧倒的に有利なはずなのに」

敵の数はおよそ五千はいるはずなのに高々二人相手に退いたので剛鬼は不思議に思い頭らしき人物を見た

剛鬼「そういうことか」

剛鬼は頭の顔を見てすぐに逃げた訳が分かった

頭をしていた男はこの前黄巾党と戦った時に頭の傍にいた男だったのだ

まあ確かに5万で勝てなかった男を5千などでは倒せないと悟ったのだろう

そう剛鬼が思っていると剛鬼の後ろにいた彼女が服の裾を引っ張っていたので振り向いた

女の子「……恋を助けてくれてありがとう」

剛鬼「ああ女の子を助けるのは当然だよ」

ナデナデ

剛鬼は彼女の頭を撫でながら言った

女の子「……／／／」

彼女の顔がけっこう赤くなった

剛鬼「俺の名前は剛鬼君の名は？」

剛鬼が頭を撫でながら聞くと

女の子「呂布奉先」

剛鬼「何！」

剛鬼は驚き頭を撫でていた手を止めた

呂布「・・・どうしたの？」

呂布がキョトンとした顔で言ってきた

剛鬼（「この子が董卓を殺す呂布？とてもそんな風に見えない」）

剛鬼は思ったこんな子が董卓を殺す呂布の筈がないと



剛鬼は再度呂布を見た

呂布「？」

呂布はどうかしたと言つ顔でこっちを見てきた

剛鬼「何でもないよ呂布はどうして此所にいるの？」

呂布「（フルフル）恋」

呂布は首を振りながら言つてきた

剛鬼「恋て？」

呂布「……真名」

剛鬼「真名で呼んでいいの？」

呂布「……（コクッ）」

呂布は少し顔を赤くしながら頷いた

剛鬼「どうして？」

恋「・・・剛鬼恋を助けてくれたそれに・・・」

恋は更に顔を赤くしながら少し下を向いて言った

恋「・・・恋のこと守ってくれるって言ってくれたから／／／」

そんな恋が可愛いくてまた頭を撫でてしまった

恋「・・・／／／」

そんなことをしていたら村の人が来た

村人「あのお取り込み中のとこすいませんけど」

剛鬼「ああすいません構いませんよ」

剛鬼は恋の頭から手を離れた

恋「あっ」

剛鬼「どうかしたか恋？」

恋「・・・何でもない」

恋がそう言ったので気にしないことにした

剛鬼「何か俺達にようですか？」

村人「はいよければ今日泊まっていってほもらえないでしょうか？  
黄巾党を追い払ってくれたお礼がしたいので」

剛鬼「いいんですか？じゃあ遠慮なく恋も泊まっていくな？」

恋「・・・（コクッ）」

剛鬼「じゃあお願いします」

村人「ええじゃあこちらに」

村人に案内されながら剛鬼と恋は宿に向かった

剛鬼「はあ」

剛鬼は床に腰を下ろしながら溜め息をこぼした

宿に着いたら村人が空いてる部屋が一つしかないと言ったので剛鬼と恋は同じ部屋に泊まることになったためである

恋「・・・剛鬼」

恋が不意に声をかけてきた

剛鬼「どうした恋？」

恋「・・・仮面外してほしい」

剛鬼「俺の顔が見たいの？」

恋「……………（コクッ）」

剛鬼「分かったよ」

剛鬼は仮面を外し恋の顔を見た

恋「……………（ジイー）」

恋がジイーと剛鬼の顔を見る

剛鬼「俺の顔に何かついてるか？」

恋「……………（フルフル）」

剛鬼「ならあまり見るな俺はあんまり人に顔をじろじろ見られるのは好きじゃないんだ」

恋「……………（コクッ）」

恋は頷くと剛鬼の隣に腰を下ろした

剛鬼「なあ恋そう言えばお前何でこんなところにいるんだ？仲間は  
どうしたんだ？」

恋「・・・恋気付いたら迷子になって暫く馬で走ってたらこの  
村に着いたそしたら村が襲われてたから戦った」

剛鬼「そうかあまり無理をするなよ。恋みたいな可愛い女の子が怪  
我するところ何か見たくないからさ」

と言ったら突然恋がピクツと反応した

恋「・・・嘘」

剛鬼「何が？」

恋「・・・恋可愛いく何かない」

恋は顔を赤くしながら下を向いて言った

剛鬼（「ああ一体俺は何言ってるんだ？戦闘中もそうだけど何で恋  
を守る何て言っただろう？それに今も」）

いつもなら軽く流す剛鬼なのだが何故か恋には自分の気持ちのよう  
なモノを伝えようとしてしまう

剛鬼「そんなことないさ恋は十分可愛いよ」

恋「・・・本当？」

恋が泣きそうな子犬のような目でこっちを見てきた

剛鬼「ああ本当だよ」

フワッ

そう言っていると剛鬼は恋の身体をフワッと包み込むように優しく抱きし  
めた

恋「！」

恋はかなり驚いているようだ

何故こんなことを剛鬼がしたかと言うと昔彼の師から女が泣きそうになったら優しく抱きしめてやれというのを思い出したからである

剛鬼「ごめんつい抱きしめちまって」

剛鬼がそいいい恋から離れようとする

ガシッ

恋が剛鬼の服を掴んだ

剛鬼「恋？」

恋「・・・離れちゃダメ」

と顔を真っ赤にしながらいい剛鬼に抱きついてきた

剛鬼「分かったよ恋」

剛鬼は優しく微笑みながらいい恋を優しく抱きしめた



暫く抱きしめていたら恋のお腹が凄い音で鳴った

恋「・・・・あっ」

恋は恥ずかしそうな顔をした

剛鬼「そろそろ飯に行こう」

恋「・・・・（コクッ）」

そう剛鬼が言うと二人は立ち上がり剛鬼は鬼の仮面をつけその後当たり前のように恋の手を握って歩き出した

恋「パクパクパクパク」

剛鬼「恋はよく食べるんだな」

恋は料理が並ぶとすぐに食べ始めたそれも凄い速度で自分の分を平らげていく更になりにたくさんの量を食べるのだ。

何故か食べている姿の恋に剛鬼は何故か癒されている感じがした

恋「パクパク」

剛鬼「そんなに慌てなくても誰も取らないよ恋」

若干苦笑いしながら言う剛鬼

恋「（パクパクゴクンパクパク）」

剛鬼「聞こえてないなこりゃ」

苦笑いしながら恋が食べ終わるのを待った剛鬼だった

恋「」

食べ終わりご機嫌の恋だが口の周りがかかなり汚なかったなので拭いてやることにした

剛鬼「恋口の周り拭くからそのまま置いてくれ」

恋「……………（コクッ）」

恋の口をハンカチで拭いていたら

？「よう懷渡」

と言って誰かが俺の前の名前を呼んだ

剛鬼「知也お前無事だったのか？」

呼んだ人物は知也だった

知也「ああ何とかなうん懷渡こっちの子は彼女か何かか？」

知也が恋を見ながら言って来た

剛鬼「まあそんなところだちなみに今の俺の名前は剛鬼だからな」

知也「ほうもう女を口説くとはやるな剛鬼」

剛鬼「口説いて何かねえよよしきれいになったな」

剛鬼は恋の口からハンカチを離した

恋「・・・剛鬼誰？」

恋が指を指して聞いてきた

剛鬼「こいつは斎藤知也まあ俺の仲間みたいなもんさ」

知也「よろしくで君の名は何ていうの？」

恋「・・・呂布奉先」

少し警戒しながら恋も名乗った

知也「この子が呂布か」

知也がまじまじと恋を見た

剛鬼「驚かないところを見るとお前も武将に会ったようだな」

知也「ああ俺は趙雲とその連れに会ったよちょっと前に別れたがな」

そう言った後剛鬼知也に近づき耳打ちをした

剛鬼「知也頼みがある」

知也「何だ」

剛鬼「反董卓連合戦の時に董卓の手助けをしてくれ」

知也「普通の歴史なら董卓は悪政を働いているがこの世界ではそうじゃないといたいのか？」

剛鬼「ああおそらくあの呂布を見ていると俺には董卓がそんなことをするような奴に思えないんだよ。俺はそれを確かめる為に洛陽へ向かう」

知也「分かった俺も洛陽に向かうつもりだなその時に董卓がどういう奴か見てきてくれその時にまともな奴だったら協力しようだが」

そうじゃなかったら」

剛鬼「分かっているその時は俺が殺す」

そう言った後剛鬼は知也から離れた

知也「なら俺は先に行くぞ」

剛鬼「ああ分かった気をつけろよ」

知也「ああ」

知也はそう言つと会計を済ませ店を後にした

剛鬼「恋俺達もそろそろ戻るか」

恋「・・・・（コケッ）」

剛鬼が恋の手を握って宿に戻った

恋「すうすう」

剛鬼「ふう」

恋は剛鬼の手に抱きつきながら眠っている

ベットが一つしかないので剛鬼が床で寝ると言ったのだが恋が一緒に寝るときかないのでこうしている状態

剛鬼「変わったな俺普段なら絶対床で寝てる筈なのに」

と言い隣を見ると幸せそうな顔で眠っている恋の寝顔があった

剛鬼「恋に会ったからだよなおそらく」

そつ言い恋の頭を優しく撫でると

恋「・・・剛鬼好きすうすう」

などと寝言で言った

剛鬼「ありがとう恋」

剛鬼はそう言った後静かに目を閉じた

朝になつたらたいへんなことになるということも知らずに



## 泣かせた責任（前書き）

剛鬼君のキャラが恋の前ではけっこう変わります

この話でも恋思いの優しい剛鬼君が見れます

剛鬼「何で俺はラブストーリーみたいなことをやってしまったんだろうな」

作者「それは君が恋のことが好きだからだろ？」

剛鬼「まあ確かに俺は恋が好きだな」

作者「ハハハ認めたな」

剛鬼「誰にも言つなよ言ったら殺す！」

作者「はい言いません」

泣かせた責任

剛鬼「すう」

次の日剛鬼はよく眠っていた

恋「・・・剛鬼起きて」

ゆさゆさ

恋が剛鬼の身体を優しく揺すっている

だがまだ少し眠いので引き続き眠っていると

チュ

剛鬼「うん？」

不意に剛鬼の唇に何か柔らかい物が触れた

剛鬼は目を開けると恋の顔がすぐ近くにあった

つまり言えば剛鬼と恋はキスをしている状態だ

暫くすると恋が唇を離した

恋「・・・剛鬼おはよう／＼／」

恋は顔を赤くしながら言ってきた

剛鬼「恋朝っぱらから何するんだよ驚いたじゃないか」

剛鬼がそう言ったら

恋「・・・剛鬼がゆすつても起きなかったらキスして起こしてくれって言ったから・・・」

剛鬼「あっ」

そう言えば昨日眠る前に恋にゆすつても起きなかったらキスでもして起こしてくれと（当然恋はキスなど知らないから一から教えた）

言ったことを思い出した剛鬼

恋「・・・・（ガタッ）」

恋は立ち上がると走って何処かに行ってしまった

剛鬼「おい恋待て！」

剛鬼は仮面をつけて恋の後を追った

剛鬼「恋何処に行った？」

恋の後を追ってきたら森に到着した

恋「・・・・ヒク」

恋の声が聞こえそこに行くと言は座りながら声を殺して泣いていた

恋「・・・・ヒク剛鬼怒ってる恋があんなことしたから剛鬼恋のこ  
と嫌いになったヒクヒク」

剛鬼「恋・・・」

自分の言った一言で恋を泣かせてしまった

ふと昔師に教えられたことを思い出した

師「いいか懷渡女の子は絶対に泣かせちゃ駄目だぞ」

懷渡「どうして？」

師「それはお前が男だからだ」

懷渡「いや訳が分からない」

師「男は女を守る者何だよ。もしお前が女の子を泣かせたらちゃんと責任とってやれよ」

懷渡「責任て？」

師「自分の嫁にするんだよ」

懷渡「いやそんな責任とらねえし」

師「いいからとれよ分かったな！」

懷渡「へいへい分かりましたよ」

と昔言つたのを思い出した

剛鬼「・・・責任とらないとな」

剛鬼は仮面を外すと座っている恋を後ろから優しく抱きしめた

恋「・・・！剛鬼？」

剛鬼「恋俺は怒って何かいないよちょっと驚いただけだ。それに恋のことも嫌いに何かなってないよ」

恋「・・・本当？」

恋は涙を流しながら子犬のような表情で聞いてきた

剛鬼「ああ本当だよ」

チュッ

恋「・・・！」

剛鬼はそう言つと恋にキスをした

剛鬼が唇を離すと二人共顔が真っ赤になっていた

剛鬼「恋ごめんな泣かせちゃって」

恋「・・・（フルフル）恋が勘違いしただけだから剛鬼は悪くない」

剛鬼「ありがとう。恋もう絶対に泣かせないから俺がお前を守るから」

恋「・・・恋も剛鬼守る」

剛鬼「ハハハありがとうまさか女の子に守る何て言われるとは思わ

なかつたよ」

恋「・・・恋剛鬼好き剛鬼のお嫁さんになりたい／＼」

恋が顔を更に赤くしながらプロポーズのようなことを言った

剛鬼「ありがとう恋なら俺のお嫁さんになって」

剛鬼はさりげなくとんでもないことを言ってしまった

恋「・・・（コクッ）／＼」

その後二人はまたキスをした

帰り道で剛鬼は今更だが自分がとんでもないことを連続で言ってしまったことに気がついた

剛鬼（「ああ俺は一体何やってんだ？恋にプロポーズみたいな台詞普通に言っちゃったし最近の俺は変わりすぎだな」

こんなことを思っていた剛鬼だったがこの恋をお嫁にするという発



言のせいで後々苦労することを剛鬼はまだ知らない

剛鬼は恋の手を握りながら宿に帰った

剛鬼「さて明日洛陽に行くが恋も洛陽に戻るよな？」

恋「……………（コケッ）」

明日いよいよ洛陽に向かうことにしたので恋にどうするか聞いているのだ

剛鬼「なあ恋董卓ってどんな奴何だ？」

恋「……………月は優しい」

剛鬼「そうか」

あまり恋から董卓の情報を得られそうにないのでこの話をやめた

剛鬼「それじゃ今日はもう寝るかな」

恋「……（コクッ）」

恋は頷き剛鬼がベットに横になると恋も隣で横になり剛鬼に抱きついてきた

剛鬼「おい恋あまりくっつくなよ！」

恋「」

恋はかなりご機嫌なようで剛鬼の胸板に顔を擦り付けている

そんな恋が可愛いくて剛鬼が頭を撫でて いたら

恋「すうすう」

恋はいつの間にか眠っていた

剛鬼「おやすみ恋」

そう言った後剛鬼も目を閉じた

さてこんな感じに二人は結ばれてしまったがこれからの二人の関係はどうなるのかな？ とうとう期待！

## 董卓の覚悟（前書き）

剛鬼君と恋はこの話でもけっこうラブラブな状態です

剛鬼「俺のキャラがどんどん変わっていく気がするな」

作者「なら恋を嫌いになるといい」

剛鬼「そくだなそうすれば俺のキャラが戻るのなら俺は恋を嫌いになろう！」

作者「剛鬼君」

剛鬼「うん？どうした？」

作者「後ろ」

恋「……」

剛鬼「えっと恋どうしたの？」

恋「・・・剛鬼の馬鹿！」

恋は走り出す

剛鬼「わぁ待ってくれ恋！」

作者「あーあ追いかけちゃったよこれじゃ元のキャラには戻れないな」

## 董卓の覚悟

剛鬼「さて行くか」

恋「……………（コクッ）」

朝恋のキスで起こされた後（決してキスをしてほしくて遅く寝ている訳ではない）洛陽に向かう為に宿を後にした

剛鬼「ふう」

剛鬼が行く途中で煙草を吸うと恋が興味津々で見してきた

恋「……………旦那様それ何」

剛鬼「これは煙草っていうんだよ恋。それと旦那様は照れるからやめてくれ」

恋は朝起こす時も旦那様と言ってきたので起きた時にも言ったのだが恋は頷づくだけでやめてくれない

恋「・・・・・・たばこ美味しい？」

剛鬼「不味いよ」

恋「・・・・・・不味いのになんで吸う？」

恋が頭に？を浮かべながら聞いてきた

剛鬼「何となく気分だよ」

そう言った後吸い終わった煙草を携帯灰皿に入れる

剛鬼「うん近くに村が見えるから休憩していくか」

恋「・・・・・・（コクッ）」

そう言った後剛鬼達は村に向かった

村の茶店で休憩していると村人が何か話していたのを聞いた

村人1「洛陽の董卓が凄い悪政をして民を苦しめているらしいぞ」

村人2「マジかよ？」

剛鬼「ちよつと失礼」

剛鬼は村人のところへ向かい聞いた

村人1「はい何か？」

剛鬼「その董卓が悪政をしているという話誰が言ってるんですか？」

村人1「袁家の袁紹が言っているそうです。近々連合を組んで董卓を倒すらしいですよ」

剛鬼「そうですかありがとございます」

男に礼を言つと剛鬼は恋のところに戻った

剛鬼「恋少し急ごう」



恋「・・・・・・・・どうかしたの？」

恋が不思議そうな顔で聞いてきた

剛鬼「董卓に悪い噂が出ているそれを知らせる為だ」

恋「・・・・・・・・！どうして？月は優しい悪い事してない」

恋は少し泣きそうな顔になりながら言った

剛鬼「さああなたが急いで知らせてやらないとな」

剛鬼は恋の頭を撫でながら言った

恋「・・・・・・・・（コクッ）」

恋は少し顔を赤くしながら頷いた

剛鬼「よしじゃあ行くか」

恋の頭から手を離すと

恋「あっ」

恋が前のような反応をした

剛鬼「ごめんなもうちょっと撫でてあげたいけど急ぐからこれで我慢してくれ」

チュッ

剛鬼は恋に軽いキスをした

恋「・・・！」

突然だったのやはり恋は驚いたようだ

剛鬼「じゃあ行くか恋」

恋「・・・（コクッ）／／／」

恋は顔を赤くしながら頷いた

急いで向かったおかげで洛陽には次の日の昼ごろに着いた

洛陽はかなり賑やかで活気に満ちていた

剛鬼（「やはり袁紹の話は嘘か大方朝廷の傍にいる董卓が気に入らなくてあんな情報を流しているんだろう」）

剛鬼は拳を強く握りしめ思っていた

剛鬼「さてとまずは董卓のところへ向かうか」

恋「・・・・（コクッ）」

恋が頷いた瞬間恋のお腹が凄い音で鳴った

恋「あっ」

剛鬼「お腹空いたか？」

恋「・・・・（コクッ）ごめんなさい」

恋が申し訳なさそうな顔をして頷いた

剛鬼「いいんだよそんな顔しなくてもじゃあ肉まんでも途中で買っ  
て行こう」

恋「・・・・（コクッ）」

剛鬼達は途中の肉まん屋に寄った

剛鬼「おじさん肉まん30個ほどください」

肉まん屋「へいらっしやいってあれ呂布將軍じゃないですか最近来  
ないんで心配しましたよ」

肉まん屋の主人が後ろの恋に気付き嬉しそうな顔で言ってきた

肉まん屋「それで呂布將軍こちらの方は知り合いですか？」

肉まん屋が剛鬼を見て恋に聞くと

恋「……………（フルフル）恋の旦那様」

恋は顔を赤くしながら剛鬼の片腕に抱きついて言った

剛鬼「おい恋それは言つなと言つたろ！」

剛鬼が慌てながら言った

肉まん屋「ハハハそうですかでは待っていてください今すぐ美味しい肉まんを作りますから」

剛鬼「……………はいお願いします」

もう剛鬼はどうにでもなれという気持ちになっていた

暫くして肉まん屋が肉まんが大量に入った袋を二つ持ってきた

剛鬼「あのこんなに頼んだ覚えはないんだが？」

どう見ても30以上ある肉まんを見ながら言う剛鬼

肉まん屋「私達からの気持ちですよ」

と嬉しそうな顔をして言う肉まん屋

剛鬼「じゃあ遠慮なくえつと会計は・・・」

と剛鬼が言つとその言葉を肉まん屋に遮られた

肉まん屋「いいですよお代は今後とも呂布將軍とお幸せに」

という肉まん屋は剛鬼達に頭を下げた

剛鬼「じゃあ貰って行きます」

剛鬼が肉まんの袋を二つ持って恋と一緒に店を後にするとお幸せにと最後にまた聞こえた気がした

恋「パクパク」

恋は先程買った肉まんを凄いスピードで食べている

剛鬼「パクパク」

剛鬼もちょうど腹が減っていたので肉まんを同じように食べている

恋「パクパクゴクンパクパク」

恋は相変わらず美味しそうに食べている

剛鬼「この身体の何処にあれだけの量が入るんだ？」

剛鬼は恋の身体を見ながら考えていた

剛鬼「とても俺じゃあこれだけの量は食えないな」

剛鬼はまだ何十個も残っている肉まんの袋を見て言い恋のほうを向いたらちょうど食べ終わったようだ

剛鬼「お腹いっぱいになったか？」

恋「……………（コクッ）」

恋は上機嫌な顔で頷いた

剛鬼「じゃあ残りは董卓達に渡すでしょう」

剛鬼は恋の口周りをハンカチで拭きながら言った

剛鬼「それじゃ行くか」

恋「……………（コクッ）」

剛鬼達は董卓のいる城に向かった

城の前に行くと門番が恋に気付いて近寄ってきた

門番「呂布將軍ご無事でしたか！」



恋「……………（コクッ）」

門番「安心しました董卓様や賈馮様 張遼様 華雄様 陳宮様皆さんがとても心配していましたよ」

恋「……………後で皆に謝る」

門番「そうしてください私達も心配したんですから」

恋「……………（コクッ）」

門番「ところで呂布將軍そちらの方は？」

門番が剛鬼のほうを向いて言った

恋「……………恋の旦那様」

門番「はっはあ」

門番が混乱してるようだったので剛鬼が口を開いた

剛鬼「董卓殿と話がしたいのだが通してくれないか？」

門番「そうですかではちょっと待っていてください」

そう言つと門番は中に入つて行つた

剛鬼（「はあまた何か中で言われる気がする」）

剛鬼はさっきの恋の旦那様発言で何か絶対言われると思い溜め息をこぼした

暫くすると門番が来た

門番「許可がとれたのでどうぞ」

門番がそう言つた後剛鬼と恋は中に入った

玉座の間の扉を開いたらそこには董卓の將軍だと思われる女性が数人いて玉座に一人の少女が座っていた

恋が最初に入ると

？「恋殿！」

と言って少女が恋に抱きついていた

そんな光景を見ながら剛鬼が中に入ったら

？「陳宮キック」

剛鬼「紙絵！」

入った瞬間少女が恋から離れ飛び蹴りをしてきたので剛鬼は六式の紙絵を使い避けた

？「避けるなのです！」

敵意むき出しの少女に恋が近寄った

恋「……陳宮キックしちゃダメ」

恋がそう言つと少女は困つた顔をした

陳宮「しかし恋殿」

恋「・・・分かつた？」

陳宮「はい」

恋「・・・いい子」

恋が陳宮の頭を撫でる

？「ごほん話をしていいかしら？」

剛鬼「ああ構わないよ」

眼鏡をかけた女の子が剛鬼に話掛けてきた

？「まず自己紹介ね僕は賈馱」

？「うちは張遼や」

？「私は華雄」

陳宮「音々は陳宮なのです」

最後に玉座の少女が

？「私は董卓といいます」

と全員の名前を聞いた後剛鬼も自己紹介をした

剛鬼「俺の名は剛鬼だ」

剛鬼は名前を言った後董卓の顔を見た

剛鬼（「この子が董卓とは俺の歴史の董卓もこっちのほうがいい気がするな民思いの優しい子のようにだし」）

などと考えていると

賈馱「ちょっと聞きたいんだけど」

と賈馱が言ってきた

剛鬼「何だ？」

賈馱「あなたが鬼面でいいのよね？」

剛鬼「鬼面何だそれは？」

賈馱「黄巾党5万の部隊を一人で倒した男のかぶっていた仮面が鬼の仮面だったからそう言われているのよ」

剛鬼「確かにそれは俺だな」

剛鬼が納得していると陳宮が怖い顔でこっちを見てきた

陳宮「そんなことはどうでもいいのです！お前恋殿に旦那様と言われているのはどういふことなのか！」

董卓軍「えー！」

陳宮「どういふことなのか答えるのです」

剛鬼「えーとそれは」

何か適当ないい訳を考えていると

恋「・・・陳宮旦那様いじめちゃダメ」

まさかの恋の爆弾発言恋そこでそれを言っても火に油を注いだけだぞ

張遼が剛鬼の方を掴んだ

張遼「あんさんやるな恋は本当に仲良くないと口すらろくに聞かない奴何や。その恋に旦那様言われてるんは恋が相当好きうちゅうことやで」

剛鬼「ああそうなの」

適当に張遼の言ったことを流しておいた

張遼「でどうやって口説いたんや？」

張遼が興味津々で聞いてくる

剛鬼「いや口説いて何かないし」

と言っていたら

陳宮「恋殿ー恋殿はアイツに騙されているのですよー」

陳宮が恋の傍でかなり失礼なことを言っている

賈馱「とりあえずその話は後にしてくれない。剛鬼あなた董卓様に話があるんでしょ」

剛鬼「ああそうだったお前達にも関係あるから真面目に聞いてくれ」



そう言つと全員元の配置に戻つた

董卓「剛鬼さん私に話とは？」

剛鬼「もうすぐ君を倒す為に反董卓連合なるものが出来るそれを知らせに来た」

董卓軍「え！」

賈馱「何であんたがそんなこと知ってるのよ？」

剛鬼「此所に来る途中村人から聞いた」

華雄「その反董卓連合には誰が参加するんだ？」

華雄が聞いてきたので剛鬼は言つても大丈夫だと思い参加する人物を言い始めた

剛鬼「袁紹 袁術 曹操 孫策 公孫賛 劉備だ」

賈馱「猛将揃いね特に劉備 曹操 孫策のところには天の御遣いが

何人かいるらしいし」

剛鬼「賈馱天の御遣いとは何だ？」

剛鬼が気になったので賈馱に聞いてみた

賈馱「管輅と言う占い師が出した占いに出てくる7人の天から来た者達のことよ」

剛鬼「劉備のところにいる天の御遣いの名前は分かるか？」

賈馱「確か北郷一刀と最近現れた伊東大輝と言う者よ」

剛鬼「そうかなら俺も天の御遣いの一人のようだな」

董卓軍「なっ！」

恋「？」

恋以外（恋は意味が分かっていない模様）全員驚いているようだ

賈馭「どうしてそう思っの？」

賈馭がこちらを睨みながら言ってきた

剛鬼「俺達の国には性と名の二つしかないだからその二名は俺と同じ世界から来たと思われるからだ」

賈馭「でもアンタは名しかないじゃないの」

賈馭が少し考えた後言ってきた

剛鬼「俺は本当の名前を知らないから偽名を名乗ってるんだよ」

賈馭「でもアンタが天の御遣いと言っんならその服装以外何か証拠になるような物はないの？」

剛鬼「こんな物でいいか？」

剛鬼はカバンからボールペンを出した

張遼「何やこれ？」

張遼が不思議そうな顔でボールペンを持った

剛鬼「墨を使わなくても文字が書ける道具」

張遼「本当何かそれ？」

剛鬼「上の部分を押しこの紙に何か書いてみる」

そう言うと剛鬼は紙を出し張遼を剛鬼の言った通りに上を押し紙に字を書いた

張遼「おおホンマや」

賈馱「どうやらあんたを天の御遣いと認めないといけないようね」

剛鬼「信じてくれたようだな」

張遼「なあ剛鬼これ貰ってもええか？」

剛鬼「ああやるよ」

張遼「うっしゃー」

張遼は嬉しそうに飛び跳ねている

剛鬼「董卓殿あなたに幾つか質問があるんだがよろしいか？」

そう言つと場がシーンとした

董卓「はい何でしょうか？」

剛鬼「それは・・・」

と言つた瞬間剛鬼は剃を使い全員の見ている目の前から消えて董卓の目の前にクナイを向けて立っていた

賈馱「月！」

華雄「くそ奴は最初から董卓様に行くぞ霞」

張遼「ああ分かった」

張遼と華雄が武器を持ち動こうとした瞬間

剛鬼「動くな！動いたらコイツを殺す」

剛鬼がクナイを董卓に近づきながら言う

陳宮「恋殿やはりアイツは恋殿を騙していたのですよ」

恋「……剛鬼」

恋が動こうとした瞬間

剛鬼「恋お前も動くな！」

剛鬼が睨んで恋に言った

恋「……どうしてどうして月を殺そうとする？」

恋が泣きそうな顔で言ってきた

剛鬼「とにかく全員動くなさて董卓君に今から質問をするから正直に答える」

董卓「はい」

剛鬼「まず悪政をして民を苦しめたか？」

董卓「いいえ」

董卓はまっすぐ剛鬼の目を見て言った

剛鬼「もう一つ今の答えは誠か？」

董卓「はい」

剛鬼「この洛陽の民達は好きか？」

董卓「はい」

剛鬼「最後に民を守る為なら君は戦う覚悟はあるか？」

董卓「それは・・・」

剛鬼「どう何だ？」

董卓「私は戦いは好きではありません。でも民を守る為なら戦う覚悟はあります」

剛鬼「そうか」

剛鬼はクナイを持っている手を上げた

董卓軍「月！」

恋「・・・月 剛鬼ダメ！」

董卓「・・・」

董卓は目をつむり刺されるのを待った



剛鬼「いい答えだ」

董卓「え？」

董卓が目を開けたらそこには仮面を外し優しい顔をした剛鬼が自分の頭を撫でていた

剛鬼「すいません董卓殿本心を聞く為とは言え乱暴なことをしてしまつて」

剛鬼が謝ると

董卓「いえ気にしないでください」

董卓は笑つて許してくれた

華雄「あれは芝居だったのか」

張遼「全くいきなり驚いたで」

賈馱「本当よ心臓に悪いわ」

陳宮「同感なのです」

全員緊張の糸が切れてその場に腰を下ろした

恋「・・・剛鬼」

恋が俺の名を呼んだので恋のほうを向いた

剛鬼「ごめんな恋睨んだりして」

いつもの剛鬼の顔を見た恋はその場に倒れそうになった

ガシッ

剛鬼「ふう危ない危ない」

剛鬼は剃を使い恋を抱き止めた

恋「……よかった剛鬼やっぱいい人」

そう言つと恋は剛鬼に抱きついてきた

暫く抱きしめていると

陳宮「陳宮キック！」

とまた陳宮が飛び蹴りをしてきた

剛鬼「鉄塊」

ゲシッ

思わず鉄塊でガードしたら陳宮が足を抑え痛そうな顔でこっちを見てきた

陳宮「はやく恋殿から離れやがれなのです」

剛鬼「恋離れてくれ陳宮が睨んでくるから」

恋「……………（コクッ）」

と頷くと恋は剛鬼から離れた

剛鬼「董卓殿」

剛鬼は董卓のところに向かった

董卓「はい何ですか？」

剛鬼「俺を客将として此所に居させてください」

董卓「はい。いいですよ」

董卓はあっさりOKしてくれた

剛鬼「ありがとうございます」

と礼を言つと董卓はにっこりした顔で

董卓「剛鬼さん私のことはこれから月って呼んでください」

と真名を教えてくれた

剛鬼「ああ分かった月」

賈馱「月が真名を預けるなら僕も預けるよ。僕は詠」

張遼「うちは霞や」

華雄「私は司だ」

陳宮「むむむ」

陳宮が剛鬼を睨んでいると恋が陳宮に言った

恋「・・・音々真名」

陳宮は困った顔をしたが

陳宮「むむむ恋殿が預けると言うのでしょうがなく預けるのです。

音々は音々音なのです」

と仕方なさそうに言った

剛鬼「宜しく音々」

そう言つと剛鬼は音々の頭を撫でた

音々「音々は子供じゃないのです」

音々は顔を赤くしながら言つた

恋「・・・」

隣で恋がもの欲しそうな顔をしていたから恋の頭も撫でた

恋「・・・／／／」

音々「それより恋殿の旦那様発言のことをさっさと教えるのです」

剛鬼「馬鹿くだらないこと思い出すな」

司「そう言えばそんな話をしていたな」

霞「剛鬼詳しく理由聞かせてや」

詠「恋に一体何をしたのかもね」

月「私も聞きたいです」

剛鬼「勘弁してくれー!」

剛鬼はこの後恋の旦那様発言についての事を尋問されるのであった

尋問を受けた後剛鬼は持ってきた肉まんを月達に渡した後剛鬼は用意された部屋で眠りについた

こうして董卓の客将になった剛鬼だったがもうすぐ開幕する御遣い同士の戦いの本当の狙いを彼はまだ知らない





## 手合わせ（前書き）

恋と剛鬼君はまだまだラブラブですね

それに剛鬼君は戦うと強すぎます

作者「女にモテて強いつて凄いな君は」

剛鬼「訓練すれば強くなるものさ」

作者「ほう恋愛も訓練すればあんな風にラブラブになれると？」

剛鬼「それは知らんそれとラブラブ言っな！」

作者「ハハハその内子供が出来ちゃうかもな」

剛鬼「貴様！」

作者「ギャー逃げろー！」

作者は逃亡した

手合わせ

剛鬼「すう」

剛鬼がいつも通り眠っていると

恋「・・・剛鬼起きて」

ゆさゆさ

いつも通り恋が剛鬼を起こしにくる

そしていつも通り起きないと恋が剛鬼にキスをしようと身体を近づけたら

ガシッ

恋「・・・!」

剛鬼が突然恋の腕を掴みベットに押し倒すとそのまま抱きしめた

剛鬼「恋好きだ」

恋「・・・！んちゅくちゅはむ／＼／」

剛鬼「ちゅくちゅレロくちゅはむくちゅ」

剛鬼は寝ぼけているせいか恋を押し倒し更に恋を求めるようにキスをしてしまった

暫く続けていたら詠がこっちに來た

詠「剛鬼あんたいつまで寝てってあんた達朝から何してるの！」

剛鬼は詠の怒鳴り声で目が覚め恋とキスをしているのに気付き唇を離すと起き上がった

剛鬼「えっとすまんちよつと寝ぼけててな」

詠「へーそんないい訳が僕に通用すると思ってるの？」

剛鬼「いやそう言われても事実俺寝ぼけてたんだが」

詠「へー寝ぼけてて恋を押し倒し恋の唇を奪う何てあんな器用ね」

剛鬼「うっそれは。恋俺寝ぼけてたよな？」

恋「・・・今日の剛鬼ちょっと違ういつもは恋からしてるのに今日は剛鬼からだった／＼」

詠「へーいつもは恋からしてもらってたの？」

剛鬼「恋火に油を注ぐようなことを言わないでくれ！」

詠「否定しないってことはそうなのね恋の旦那様」

そう言つと詠が怖い顔でこっちに近寄つて来たので

剛鬼「恋ちよつとごめんな」

剛鬼はそう言つと恋をお姫様抱っこした

恋「・・・・剛鬼／／」

恋の顔は赤くなっていた

剛鬼「悪いが此所は逃げる剎！」

詠「お待ちなさい剛鬼！」

剛鬼は恋をお姫様抱っこしたまま剎で詠から逃げた

剛鬼「ふう此所までくれば」

剛鬼は詠から逃げる為に剎を使い洛陽の市まで来ていた

恋「・・・・剛鬼」

剛鬼「うん？ああごめん今降ろすから」

そう言つと剛鬼は恋を静かに降ろし恋は立ち上がった

剛鬼「恋ごめんな押し倒したり何かしてそれに無理矢理ちよつと違  
うキスしたりして驚いたろ？」

恋「……（フルフル）少し驚いたけど剛鬼ならいいそれにあの  
キス気持ちよかった」

剛鬼「俺ならいいってじゃあ俺が変なことしてもいいのか？」

恋「……変なことって？」

剛鬼「いや何でもない気にしないでくれ」

恋「……？」

剛鬼「それにあのキス気持ちよかったのかよ」

恋「……またあのキスしてほしい」

剛鬼「あれはさすがに」

恋「……ダメ？」

恋が泣きそうな顔で言ってきた

剛鬼「うつ分かったよ二人っきりの時にな」

恋「……（コクッ）」

恋は嬉しそうに頷き剛鬼に抱きついた

剛鬼「はあとりあえず俺の部屋に戻るか」

恋「……（コクッ）」

剛鬼は溜め息を溢し恋を抱き上げると剃で自分の部屋に戻った

剛鬼「さてとりあえず調練場に行くか」

恋「……（コクッ）」



剛鬼は着替え斬を持ち仮面をつけると恋と一緒に調練場に向かった

司「ハァー！」

霞「ふつトリヤー！」

ガキン キン ガキン

調練場に向かったら霞と司が全力で打ち合っていたので暫く観戦することにした

剛鬼（「パワーでは若干司スピードでは霞が勝っている。だが実力はおそらく霞のほうが上だな」）

と分析していると司が霞に圧され始めた

剛鬼「さてちょっと面白いことをしてくるか」

恋「・・・どんなこと？」

剛鬼「恋今からあの二人の間に入ったら・・・するからそうした

ら．．．．してくれ」

恋「．．．．分かった」

剛鬼「よしさて剃」

剛鬼は剃を使い司と霞の間に入った

剛鬼「ようお二人さん頑張ってるねえ」

司「なっ剛鬼！」

霞「お前死ぬ気かい！」

いきなり剛鬼が出現して驚いて武器を止めようとするが全力で振った為お互いの武器は止まらず剛鬼を斬り裂いた

恋「．．．．剛鬼！」

恋が走って剛鬼に近寄った

恋「・・・ヒク剛鬼死んじやったヒク」

恋は泣きながら剛鬼を見ている

霞「恋ごめんな恋の大切な奴こんな風にしちゃって」

司「まさか剛鬼が現れるとは思わずすまない恋」

司と霞が恋に近づいた瞬間

剛鬼「クククハハハ」

司と霞「何<sup>やと</sup>」

司と霞は笑い声が聞こえ後ろを見るとそこには笑っている剛鬼が立っていた

剛鬼「ハハハこんなに引つかかってくれるとは思わなかったななあ恋」

恋「……………（コケッ）」

恋は頷くと剛鬼の隣に立った

司「なっ馬鹿な確かに手応えが」

霞「あつたんやけどな」

剛鬼「二人共後ろをってみろ」

そう言った後二人は後ろを見て斬った物を確認した

司と霞「木の板<sup>やないか</sup>！」

剛鬼「お前達が斬ったのは変わり身だそして恋は嘔泣きをしてたんだよ」

司「くはめられるとは」

霞「華雄ちゃんならいざしらずうちまで騙されるとわ」

司「霞それはどういう意味だ！」

霞「言った通りの意味や！」

司「貴様！」

剛鬼「はいはい喧嘩しない」

剛鬼が仲介に入るが

司と霞「元々お前が原因だ（や）」

剛鬼「うっ」

見事に仲介失敗

恋「……喧嘩よくない」

恋が仲介に入ると

司「ああそうだな」

霞「そうやな」

二人共喧嘩を止める

霞「ところで剛鬼此所に来たんやからちよつと手合わせしてや」

と霞が言ってきたので

剛鬼「ああ構わないよ」

と言っておいた

司「次は私と手合わせだからな」

恋「……その次は恋とも」

剛鬼「ああ分かってるよ」

そう言った後霞は自分の武器の飛龍偃月刀を構え剛鬼は刀を抜いた

霞「ほな行くでハァー！」

霞は剛鬼に突っ込み高速の衝きを放った

シュ シュ

剛鬼「紙絵」

ふっ ふっ

剛鬼は紙絵を使いそれを全て避けた

司「何て避け方だ！まるで紙のようにひらひらと避けているぞ」

恋「・・・剛鬼凄い」

詠「やはり強いわね霞の攻撃を完璧に避ける何て」

月「剛鬼さんかっこいいです」

いつの間にか詠と月も来ていたようだ

霞「やっぱり強いなうちの衝きを全部避ける何て」

剛鬼「お前の衝きは速いが威力があまりないようだな」

霞「うちの持ち前は神速やからな」

剛鬼「そうかはっ」

ガキン

剛鬼は霞の偃月刀を斬で弾き距離をとった

剛鬼「なら今からお前に本当の神速と言つのを見せてやる決して動くなよ！」

霞「何で動いちゃダメ何や？」



剛鬼「ちよつとでも動けば死ぬからな」

少し殺気を出して言うと

霞「ああ分かったで」

霞は少しびびりながら返事をした

剛鬼「行くぞもう一度言うが決して動くなよ！」

霞「分かつてるわ動かへんよ」

剛鬼「飛天御剣流九頭龍閃！」

全員「何<sup>やど</sup>！」

全員の目の前から剛鬼が消え霞の後ろに現れた

剛鬼「どうだ霞動けそうだったか？」

霞「無理やな今の攻撃防御も回避も不可能やる迂闊に動いたら死んでたで」

剛鬼「ほうよく分かったな」

剛鬼が感心していると

霞「うちの負けやな剛鬼強すぎるわ」

そう言って霞が月達のほうに向かった

司「次は私だ」

司が戦斧を構えた

剛鬼「いいだろう」

そう言うと剛鬼は刀を鞘に入れた

司「どういっつもりだ剛鬼私には剣を使わない気か？」

剛鬼「司全力で俺に攻撃をしろそしたら刀を抜いてやる」

司「何！分かった全力で行くぞハァー！」

剛鬼「鉄塊」

ガキン

司の全力の攻撃を剛鬼は鉄塊でガードした

全員「え！」

司「馬鹿な！」

剛鬼「どうしたこんなもんか？」

全員やはり驚いたようだまあ普通なら死んでるぐらいの攻撃をくらって傷一つなく平然と立っていれば当然の反応だな

剛鬼「話にならん雑魚が」

少し挑発を試してみたら

司「貴様！」

司は激怒し怒りのままに戦斧を振り続ける

剛鬼「冷静になれこんな怒りに任せた攻撃など他の奴にも当たらんぞ」

剛鬼は避けながら言つと

司「黙れ！ハァー！」

聞く耳持たずで戦斧を振ってきた

剛鬼「お前は武力そして精神面でも雑魚すぎるんだよ！」

司「黙れ！」

剛鬼「飛天御剣流龍巢閃！」

司「な！」

キン ガキン カン カキン

司は何とか剛鬼の龍巢閃をガードしたが全部はガードできずその場に倒れこんだ

司「ぐは」

剛鬼「俺の勝ちだ」

剛鬼は司に刀を向けた

司「何故だ何故負けるのだ？」

剛鬼「お前は武力はそこそこあるが精神面が雑魚すぎる。あんな怒りに任せた戦い方では一般兵にすら負けるかもしれないぞ」

司「だがあんな風に侮辱をされて黙ってなどいられるか！」

剛鬼「別に怒るのは構わんだがそれでも冷静を保ちながら戦えそうすればさっきのような戦いにはならない筈だ！」

司「・・・お前の言う通りだな怒りに任せて戦うのは自分の実力を半減させているんだろ？」

剛鬼「そうだから冷静な心を常に保てそうすればお前は強くなれる」

司「ありがとうな剛鬼」

と言って司も月達のほうに向かった

恋「・・・最後は恋」

と言って恋が方天画戟を構える

剛鬼「しょうがないがやるか」

恋「・・・行く！」

と言うと恋が凄いスピードで突っ込み衝きを放った

剛鬼「鉄塊」

ガキンキンカキン

剛鬼「くっ」

剛鬼は鉄塊でガードしたが恋の衝きの威力が予想より強く剛鬼は少しダメージをくらった

剛鬼「やるな恋鉄塊を使っている俺にダメージを与えるとは」

恋「・・・剛鬼強いだから恋本気で行く！」

恋がそう言った瞬間恋からいつもの感じは消えていた

まるで獣を相手にしているような凄まじい闘気が恋から出ている

剛鬼「いいだろう時間をかけるのは面倒だこれで終わらせてやる」

剛鬼はそう言いつと抜刀状態で柄を握った

恋「・・・剛鬼倒す！」

恋はさつきとは比べものにならないスピードで剛鬼に突っ込み

剛鬼「やってみる恋！」

剛鬼も抜刀状態で恋に向かっていった

剛鬼「ふっ」

剛鬼は恋に向かって抜刀をした

ブン

恋「・・・く」



しかし恋は紙一重でそれを避けた

恋「…………ふっ」

恋が剛鬼に方天画戟で攻撃しようとした瞬間

ドコッ

恋の方天画戟を持っていた腕に何かが当たり恋は吹っ飛ばされた

剛鬼「飛天御剣流双龍閃二段抜刀術だ」

気付いたらいつの間にか剛鬼が恋の前に立っていた

恋「…………最後の全然見えなかった」

そう言うと恋は仰向けで倒れた

音々「恋殿ー！」

いつの間にいたのか音々が恋の元に向かってきた

音々「恋殿起き上がれますか？」

恋「・・・無理」

剛鬼「おそらく身体に受けた衝撃が強かったからだろう」

音々「お前恋殿の旦那様なら恋殿にもうちよつと優しくしゃがれな  
のです」

ゲシッゲシッ

そう言つと音々は剛鬼の足を何回か蹴ってきた

剛鬼「痛い音々。ちゃんと手加減したよ」

音々「これのどこが手加減したと言つのですか？」

音々が恋を指さして言う

剛鬼「俺が本気で双龍閃を打っていたら恋はおそらく死んでいたよ」

音々「それぐらい威力があるのですか？」

剛鬼「ああ死ななかったとしても右腕の骨は砕け臓器をいくつか潰していたな」

音々「た確かにそう言われるとお前は手加減したようですね」

恋は立ち上がれないがおそらく怪我は打撲ぐらいですんだだろう

剛鬼「ごめんな恋痛い思いさせて」  
そう言つと剛鬼は恋を抱き上げた

恋「・・・（フルフル）恋が戦ってほしいって言って戦ったから  
剛鬼悪くない」

恋はそう言ってくれたがやはり少し罪悪感が残る剛鬼

詠「やっぱり仲がいいのね二人共」

と言って詠達がこっちにやって来た

剛鬼「恋が立てないと言っているから抱き上げてるだけだが」

詠「ふーん」

詠が怪しそうな顔で剛鬼を見る

霞「いいなあーうちも剛鬼に抱き上げてもらいたいなあー」

月「私も」

霞と月がそんなことを言った

剛鬼「おいおい勘弁してくれよ」

と苦笑いしながら言う剛鬼

司「また手合わせを頼むぞ剛鬼」

そう笑顔で言う司

音々「恋殿ー大丈夫ですか？」

音々は相変わらず恋のことを心配している

剛鬼「とりあえず医務室に行きたいから詠場所教えてくれないか？」

詠「いいわよじゃあついて来て」

そう言うと言は歩き出しその後を俺達がついて行った

剛鬼「ふう」

剛鬼は恋を医務室に連れて行った後部屋に戻り煙草を吸って一服していた

コンコン

音々「剛鬼いるですか？」

音々が来たようだ

剛鬼「ああいるよ」

音々「失礼するのです」

そう言つと音々はドアを開けて入ってきた

剛鬼「恋の具合はどうだ？」

音々「そんなに大きな怪我はないから大丈夫なのです」

音々はそう言つと空いてる椅子に座つた

剛鬼「何だ？他に何かがあるのか？」

音々「あつたらいけないのですか？」

剛鬼「別にそうじゃないが音々が俺を尋ねてくる何て珍しいからさ」

音々「聞きたいことがあったから来たのです」

剛鬼「聞きたいことって？」

音々「反董卓連合軍と戦った後剛鬼はどうするつもりなのですか？」

音々が真面目な顔で言ってきた

剛鬼「さあなその時にならんと分からんよ」

剛鬼は煙草を携帯灰皿に入れながら言った

音々「出来れば恋殿の傍にいてほしいのです」

音々の発言に剛鬼は少し驚いた

剛鬼「いつもは恋の近くにいると目の敵にして蹴ってくるお前がそんなことを言うとは以外だな」

音々「別に音々は目の敵にしてるわけではないのです。ただ恋殿がいつもお前と一緒にいるからちょっと寂しいのです」

剛鬼（「寂しいから蹴るってそれはつまり俺はとばかりを受けているということじゃねえか」）

などと思っていた剛鬼

音々「今の恋殿はいつも楽しそうな顔をしています。でもお前がいなくなったら恋殿は絶対に悲しい顔をして元気がなくなってしまうのです」

剛鬼「だから俺に恋の傍にこれからも居てくれと？」

音々「恋殿の悲しい顔は見たくないのです。だからお願いするのです」

音々は泣きそうな顔で剛鬼に頭を下げながら言った

剛鬼「いいよ別に」

音々「えっ！」



音々は頭を上げ剛鬼の顔を見た

剛鬼「いてやるよ死ぬまで一緒に音々に言われなくてもそうするつもりだったしな」

音々「本当なのですか？」

剛鬼「嘘ついてどうするんだよ」

音々「よかったです！」

音々は嬉しそうな顔をして笑っていた

剛鬼（「それがあの時恋を泣かせた時にとった責任だからな。それにお嫁になってくれって言っちゃったしな」）

剛鬼は音々の顔を見ながらそう心で呟いた

音々「話が変わりますがお前は動物は好きなのですか？」

剛鬼「動物？まあ好きだが」

音々「そうですねらいいのです」

音々はそう言つと立ち上がつて扉に向かった

剛鬼「最後の質問は何か関係があるのか？」

音々「フッフそれは秘密なのです」

音々はそう言つと剛鬼の部屋を後にした

音々 s i d e

音々「アイツは恋殿の言う通りいい奴みたいなのです」

音々は頼みを聞いてくれた剛鬼がいい奴と認識したようだ

音々「さてと医務室に向かわないのです」

そう言うと音々は医務室に向かった

音々「恋殿ー」

音々は医務室に行くと恋の元に向かった

恋「……音々剛鬼何て言ってた？」

音々「アイツも動物は好きと言ったのです」

最後の質問は恋が音々に頼んだことだったのだ

恋「……よかった」

恋は笑顔になった

音々「それじゃあ音々は仕事に戻るのです」

恋「……音々ありがとう」

そう言うと恋が音々の頭を優しく撫でた

音々「エへへ」

音々もご機嫌になり

仕事に戻って行った

音々side out

剛鬼「今日も疲れたからもう寝よう」

そう言うと剛鬼は眠りについた

彼の動物が好きという発言でまた面倒なことがおこるのは勿論彼は知らない

## 黄巾党殲滅作戦と剛鬼の過去（前書き）

今だに剛鬼君と恋はラブラブ状態です

作者「いつになったら喧嘩するんだろ」

剛鬼「しないさそんなこと」

作者「いや僕が喧嘩したと書けばそうなるんだよ」

剛鬼「それは卑怯じゃないか？」

作者「戦いに卑怯もくそもない」

剛鬼「いやお前戦ってないじゃん」

作者「まあもうすぐデカイ戦いがおこるから精々頑張ってくれ」

剛鬼「俺は恋を守る為に戦うまでだ」

作者「どこの王子かお前は」

作者「全くでは楽しんで読んでください。書いてほしい内容などありませんと言ってください書ける範囲で書きますので」

## 黄巾党殲滅作戦と剛鬼の過去

詠「剛鬼いる？」

朝剛鬼が煙草を吸っていたら詠が尋ねてきた

剛鬼「ああいるよ」

そう剛鬼が言うと詠が中に入ってきた

詠「あんたに頼みたいことがあるんだけどいい？」

剛鬼「ああ別に構わないが」

そう言うと詠が話を始めた

詠「霞と恋と音々と司達と一緒に最近この当たりの村に出る黄巾党達の本隊を潰してきてほしいんだけど」

剛鬼「黄巾党の本隊を？まあ村で暴れている部隊を殲滅するよりそのほうがはやく終わるな」

詠「ええそれと出来れば村で暴れてる黄巾党も退治してほしいんだけど」

剛鬼「ああだが村で暴れている黄巾党の数はどれくらいだ？」

詠「約5000ほどよ」

剛鬼「5000ぐらいなら俺が一人で殲滅してきてやるよ」

詠「あんた一人で？まああんた5万の黄巾党達を一人で倒してたわね」

詠が少し呆れた顔をして言った

剛鬼「作戦はまず俺が一人で村の黄巾党を殲滅してその間に霞達を本隊の近くに配置し村の奴等を殲滅した俺が合流し一気に畳み掛けるこんな感じでいいだろう」

詠「うん確かにそれが妥当ね」



詠が納得したように頷いた

剛鬼「ところで本隊のほうは数はどのくらいだ？」

詠「確か4万よ」

剛鬼「俺が全部一人で殲滅というのは無しか？」

剛鬼は一応聞いてみた

詠「兵士が減らないからそれが一番いいんだけどでも霞達<sup>が</sup>が許してくれないわよ」

剛鬼「確かにな」

詠「まあ後で軍議を開くからその時に細かいことは決めましょう」

剛鬼「ああそうだな。軍議は何時ごろ開く？」

詠「二時間後よ場所は玉座の間ちゃんと来なさいよ」

剛鬼「ああ分かってるよ」

詠「それじゃあまた後でね」

詠はそう言つと剛鬼の部屋を後にした

剛鬼「二時間後ならまだ時間があるから知也と会つとしよう」

剛鬼はカバンから携帯を取り出し画面を見るがやはり圏外

剛鬼「まあ電話してみますか」

剛鬼は知也の番号を入力しダメ元で電話をかけてみた

ブルルルブルルル

何と圏外なのに呼び出してしまった

知也「剛鬼か？」

剛鬼「！」

更に電話がかかってしまった

剛鬼「知也一度会いたいんだが大丈夫か？」

知也「ああ問題ない城門の前で待っているからな」

剛鬼「了解した」

プツ　ツウー　ツウー

電話がきれた後剛鬼は考えた

剛鬼「何故電話が出来る？普通なら電話など出来ない筈」

剛鬼の考えはももつともだ電波がないこの世界で電話など出来る筈がないのだ

剛鬼「まあ電話が出来るならこれで少しは楽になるかもな」

剛鬼はそう言つと仮面をかぶり斬を持つと城門へ向かった

剛鬼が城門へ向かうと城門の前に知也がいた

知也「よう剛鬼」

剛鬼「知也手早く済ませたい話の内容だけ言つぞ」

知也「ああ分かった」

知也はそう言つと剛鬼の目を見た

剛鬼「董卓は悪人ではなくちゃんと民思いのいい子だった」

知也「そうかまあ市を見た感じそんな気はしていたさ」

剛鬼「じゃあこの前の約束の通り頼んだぞ」

知也「ああ陰ながら援護するさ。さて俺は調べることがあるから退散するな」

剛鬼「ああ分かった」

知也「じゃあな」

知也はそう言つと何処に消えた

剛鬼「まだ時間があるから市でも見るか」

剛鬼はそう言い市に向かった

剛鬼「いつも通り賑やかだな」

剛鬼は市を見ながら歩いていると

ワンワン

剛鬼「うん？」

剛鬼は足下を見るとそこには剛鬼の足に顔を擦り付ける赤いバンダ

ナを首につけた犬がいた

剛鬼「お前俺が怖くないのか？」

そう言つて犬を抱き上げると犬は剛鬼の顔を舐めた

剛鬼「ハハハくすぐつたいじゃないか」

暫くじゃれあっていたら

？「セキト」

と聞き覚えのある声がし犬が剛鬼から離れ声をする方に向かって行った

剛鬼「よう恋お前が飼い主か？」

恋「……（コクッ）」

どうやら恋が飼い主のようで恋は頷くとセキトを抱き上げた

ワンッ

主人に会えてご機嫌のセキト

ふと気付くと恋は片手に紙袋を持っていた

剛鬼は気になったので聞くことにした

剛鬼「恋何か買ったの？」

恋「……………（コクッ）セキト達の餌」

そう言つと恋が剛鬼の手を握った

恋「……………恋今から家で皆にご飯あげる」

剛鬼「ああそうかで何で恋は俺の手を握ってるの？」

恋は少し顔を赤くした

恋「……剛鬼も一緒に来てほしい」

剛鬼「ああ分かったよ」

そう言った後恋に手を引かれ剛鬼は恋の家に向かった

剛鬼「けっこうデカいんだな」

剛鬼は恋の家に着くと少し驚いた

恋「……ただいま」

恋がそう言ってドアを開けたので剛鬼も後に続いた

剛鬼「なっ！」

剛鬼が中に入ったら啞然とした

家の中にはかなりたくさんの犬や猫がいたからである



ニャー ワンッ

犬や猫が一斉に剛鬼に向かって行った

剛鬼「おいおいやめろお前等」

犬や猫達はじゃれあうかのように剛鬼の顔を舐めてきたのだ

恋「……剛鬼家族の皆気にいつてくれたみたい」

恋が剛鬼の顔を見ながら言った

剛鬼「恋助けてくれー」

剛鬼はいつの間にか犬や猫の中に埋まってしまい恋に助けを求めた

恋「……皆ご飯」

というと犬や猫達は剛鬼から離れ恋の元へ向かった

恋は袋から餌を出すと中身を器に出した

三個ぐらい山盛りにした器を犬や猫達の前に出し

恋「…………お食べ」

恋がそう言つと犬や猫達は食べ始めた

動物達と一緒にいる恋は母親のように見えた

剛鬼「動物好き何だな」

剛鬼が恋の隣に来て言つた

恋「…………（コケッ）」

剛鬼「そうか俺もけっこう好きだよ」

そう言つと剛鬼は恋の頭を優しく撫でた

恋「・・・知ってる」

恋は顔を赤くしながら言った

剛鬼「何を？」

恋「・・・剛鬼が動物好きなこと」

剛鬼（「あれ何で俺が動物好きなこと恋は知ってた？」）

考えてみたらこの前の音々の最後の質問を思い出した

音々「お前動物は好きなのですか？」

剛鬼（「あの質問は恋が頼んだものだったのか」）

剛鬼は納得した

剛鬼「恋は幸せだなたくさんの人や動物に囲まれて」

剛鬼はついそんなことを言ってしまった

恋「……？剛鬼も皆に囲まれてる」

剛鬼「ああ今はな」

恋「……？」

剛鬼「俺はこつちの世界に来るまでほとんど一人だったんだよ」

剛鬼は過去の話は何故か話すことにした

恋「恋も最初一人だったそれで気付いた時には戦ってた」

恋も自分の過去の話をした

恋「……恋は強かったせいか人が誰も寄って来なかった。皆恋のこと怖がってたから、暫くしたらセキトと会った」

話をしている恋の顔は悲しそうだった

恋「……セキトと一緒に歩いていただけお腹が減って倒れた。  
気付いたら此所の兵士に城に運ばれてた」

剛鬼「じゃあ恋は此所にはお腹が空いて倒れてたら運ばれて戦って  
勝てばご飯をくれるから此所に居るの？」

恋「……（コクッ）」

つまり言えば成り行きでこうなったのだろう

まあ確かに恋なら戦って勝てばご飯をあげると言えば此所にいるだ  
ろう

恋「……それからは恋の周りに人がたくさんいた月や詠 霞や  
司 音々や兵士達が恋の周りにいた」

剛鬼「恋はやっぱり幸せみたいだなたくさんの人に囲まれて」

つい同じことまた言ってしまった

恋「……剛鬼は今幸せじゃない？」

剛鬼「今は幸せかな恋と一緒にいれるから」

そう言ったら恋の顔が真っ赤になった

剛鬼「でも前はそんなこと思ったことなかったな」

恋「……………どうして？」

剛鬼「俺はこつちの世界に来るまで自分を道具だと認識したからさ」

剛鬼がそう言っていると恋は悲しい顔になった

恋「……………剛鬼道具何かじゃない」

剛鬼は恋の顔を見るとその顔は今にも泣きそうな顔だった

剛鬼「俺は昔から人も動物も全てが俺を避けていた。周りにいた奴等は俺の暗殺の腕しか見ようとしぬい奴等ばかり、俺は暗殺するだけの道具に周りの奴等には見られていた」

剛鬼は話を続ける

剛鬼「だから俺は自分は道具だと認識した暗殺をする為だけに存在する道具とな」

恋「……違う!」

剛鬼「えっ」

恋は少し強い口調で言ったそして彼女の目から涙が零れ落ちた

恋「……剛鬼道具何かじゃない恋のこと守ってくれるって言ってくれた恋のことお嫁さんにしてくれるって言ってくれた……」

剛鬼「恋」

剛鬼は泣いている恋を優しく抱きしめた

恋「……恋にとっては剛鬼は恋の一番大切な人」

恋は泣きながら剛鬼に言った

剛鬼「ありがとう恋もう泣かないでくれもう恋の泣いてる顔見たくないからいつも通り笑ってる俺の好きな恋の顔を見せてくれ」

恋「・・・（コクッ）」

恋は泣き止み笑顔になった

最初剛鬼は何故恋が泣いたのか分からなかった自分のことではないのに何で泣くのか

だが剛鬼は気付いた恋が凄く優しい子だと恋は剛鬼が悲しいと思うことを一緒に悲しんでくれ自分のことのように泣いてくれるとても優しい子なのだ

剛鬼（「また泣かせちゃったな」）

剛鬼は同時に恋をまた泣かせてしまった為どう責任をとろうか考えた

剛鬼（「まあそれは黄巾党を殲滅した後考えよう」）



剛鬼はそう心で呟くと恋から離れた

剛鬼「そろそろ軍議だから行こう恋」

恋「・・・（コクッ）」

剛鬼は恋の手を握り玉座の間へ向かった

玉座の間へ入った瞬間

音々「陳宮キック！」

ガシッ

いきなり音々が陳宮キックをしてきたから咄嗟に両足を掴んだ

剛鬼「何か釣れた」

そう言つと剛鬼が逆さづりの音々を上にした

音々「この離すのです！」

音々は腕をばたつかせながら言う

剛鬼「ああ分かった」

剛鬼はそう言い音々を離した当然音々は尻餅をついた

音々「くう覚えていろなのです！」

そう言うとき音々は自分の席についた

その後剛鬼と恋も席についた

詠「じゃあ軍議を始めるわよ」

とりあえず軍議が始まった

詠が剛鬼の言った作戦を全員に言ったら

恋「……剛鬼が行くなら恋も行く」

恋が剛鬼一人で村の黄巾党を潰すという作戦を聞くと行ってきた

音々「恋殿ーコイツについて行く必要はないですよ」

音々が恋を止めようとしたが

恋「……剛鬼恋も行く」

恋は音々の言葉を見殺し剛鬼に泣きそうな顔で言った

霞「面倒やから全員で行ったらよくない？」

と霞が言った

剛鬼「だなそうしないとめんどくさいことになるからな」

剛鬼がそう言つと皆も納得したようだ

詠「なら村の黄巾党は剛鬼と恋と霞の三人で頼むわね」

剛鬼「了解」

恋「・・・分かった」

霞「分かったでー」

詠「その間に音々と司は本隊の近くに伏せていて」

司「ああ分かった」

音々「了解なのです」

詠「剛鬼達は村の黄巾党を倒したら少し休憩をはさんでその後司達と合流して本隊を潰してちょうだい」

剛鬼「ああ了解した」

月「皆さん頑張ってください」

剛鬼「ああ」

剛鬼はそう言つと月の頭を優しく撫でた

月「へうー」

月は顔が真っ赤になっていた

詠「あんた月に何してるのよ！」

剛鬼「紙絵！」

詠の正拳が当たりそうになつたので紙絵で避けたら

ゴチン

月「へう！」

月の顔面に詠の正拳が直撃し月はその場に目を回して倒れた

詠「月大丈夫！」

詠が慌てて月に近寄る

月「あうー」

月は目を回している

剛鬼「とりあえず医務室に運ぶぞ」

剛鬼はそう言つと月を抱き上げ医務室に向かった

剛鬼「はあ」

剛鬼は月を医務室に送つた後何故か詠に説教されている

詠「剛鬼聞してるの？」

剛鬼「聞いてるよ」

ああめんどくさいさつさと終わらないかなと思っている剛鬼

詠「剛鬼分かった？」

剛鬼「ああ分かったよ」

話をほとんど聞いていなかったが一応返事をしておいた

詠「なら出陣の準備をしてあ後あんたの旗だけどどんなのがいい？」

剛鬼「旗に書く文字は鬼 色は血のような真っ赤な赤にしてくれ」

詠「血のような赤？分かったわ」

そう言つと詠は行つてしまった

剛鬼「さて始めての出陣だがうまく行くかな？」

そう言つて剛鬼は城門に向かった

剛鬼の発出陣がもうすぐ始まるが剛鬼はうまく指揮をとれるのか？  
次回に続く



## 黄巾党殲滅戦（前書き）

剛鬼君の強さは健在最早敵無しみたいな感じですね

作者「だがどんなに強くても剛鬼君は恋には弱い」

剛鬼「お前何が言いたい？」

作者「そんな風に睨んでいいのかな？恋とキスした回数霞達にはばらすぞ」

剛鬼「待て！それはやめてくれ！」

作者「ハハハさてまあ楽しんで読んでくださいご意見や書いてほしいことなど遠慮なく言ってくださいね」

## 黄巾党殲滅戦

剛鬼「待たせな」

剛鬼は城門の前にいる霞と恋にそう言い隣に立った

霞「うちらもさっき来たところや」

恋「・・・恋も」

三人はそう言つと兵を連れ出歩き出した

洛陽の入り口のところまで行つたらそこに月達が立っていた

月「皆さん無事に帰つて来てくださいね」

剛鬼「ああ了解した」

恋「・・・（コクッ）」

霞「任せときちゃっちゃつとやつて帰つてくるわ」

三人共笑顔でそう答えた

音々「剛鬼恋殿を頼んだですよ」

剛鬼「ああ分かってるよ」

音々「霞も頼むですよ」

霞「剛鬼がいれば大丈夫やて」

霞が笑顔で音々にそう言う俺ってそんなに信用ないのかな？

司「私達は本隊の近くで様子を見るなるべく早めに合流してくれよ」

剛鬼「ああ出来る限り早く合流するよう努力するよ」

剛鬼はそう言うと三人は村に向かおうと歩き出す瞬間

詠「剛鬼ー！」

詠がこつちに走ってきた

剛鬼「詠どうしたそんなに急いで？」

息を荒くしている詠に剛鬼が聞いた

詠「あんたの旗を届けに来たの」

そう言うところ詠は剛鬼に持っていた旗を渡した

剛鬼「わざわざすまないな」

剛鬼はそれを広げてみた

旗は剛鬼の希望通り血のような赤色で真ん中に鬼と書かれていた

剛鬼「ありがとう詠」

詠「急ぎで作らしたからそれ一つしかないけど帰ってくる頃には何枚か出来てる筈よ」

剛鬼「そうか世話をかけるな」

詠「剛鬼 恋 霞絶対帰って来るのよ」

詠が泣きそうな顔で言ってきたので

剛鬼「ああ任務了解した」

恋「……絶対に帰る」

霞「ああ必ず生きて帰るで」

三人は詠にそう言つと洛陽を後にした

村に向かっている途中

霞「なあ剛鬼」

剛鬼「何だ霞？」

霞「本当に馬に乗らんでええの？」

霞がそんなことを言ってきた

霞達が馬に乗っているのに対し剛鬼は歩いていたら当然だな

剛鬼「ああ問題ない」

霞「そか。もしきつくなったら言ってやうちの後ろに乗せたるさかい」

剛鬼「ああありがとうな霞」

と霞に礼を言ったら

恋「・・・剛鬼疲れたらいつでも恋の後ろに乗っていい」

恋も乗してあげると言ってくれた

剛鬼「恋もありがとんでもまだ大丈夫だからいいよ」

恋「・・・分かった」

恋は少し残念そうな顔をしていた

霞「なあ剛鬼」

霞がまた話しかけてきた

剛鬼「今度は何だ霞？」

霞「今度また手合わせしてほしいんやけど」

剛鬼「ああ構わないよ」

霞「それでそんな時に何か技教えてくれへんか？」

剛鬼「技？俺は長物は使ったことないぞ」

霞「剣術でもええねん何かうちに来る技ない？」

恋「……恋も剛鬼に教えてほしい」

二人に技を教えてほしいと言われても何か出来る技がないか探す剛鬼

剛鬼「あああれなら多分二人でも出来るな」

霞「ホンマか？どんな技や？」

恋「……恋も気になる」

二人が教えてほしそうな顔をしたので教えることにした

剛鬼「牙突というものだ」

剛鬼が言つと二人は頭に？が出ていた

霞「牙突？どんな技何や？」

恋「……どんなのか分からない」



二人は全く分かっていないようだ

剛鬼「まあ殲滅した後に教えてやるよ」

剛鬼はとりあえずそう言っておいた

霞「他にはないんか？その牙突以外に？」

剛鬼「そうだなあ」

剛鬼は再度探してみる

霞「あの飛天何とか流の技で何かないんか？」

剛鬼「飛天御剣流で出来そうなのはああるぞ」

霞「どんな技や？」

恋「……剛鬼教えて」

二人は目を輝かせながら言ってきた

剛鬼「はいはい殲滅した後にな」

剛鬼はまた一応言っておいた

霞「よかったな呂布ちゃん」

恋「・・・（コクッ）」

恋も霞も新しい技が教えてもらえるとと思うと心が弾んでいた

それから一日ぐらいたって村に到着した

剛鬼「ひどいな」

剛鬼は村で暴れている黄巾党を見て言った

霞「ホンマやな全く虫酸がはしるで」

ブチッ

剛鬼が強く拳を握っていたら皮が破れて血が出てきた

恋「・・・剛鬼手から血出てる」

それを見た恋が心配した顔で言ってくれた

剛鬼「ああ強く握りすぎただけだから大丈夫だ心配してくれてありがとう恋」

恋「・・・大丈夫ならよかった」

恋はそう言い村を見た

剛鬼「こいつ等の相手はそんなにしてくれないからこっしよっ」

と言うと剛鬼が説明を始めた

剛鬼「まず俺が一人で突撃して相手の注意をひく、その間に恋と霞は兵士と共に包囲し各自殲滅おそらく頭を潰せば奴等は本隊と合流するだろうから深追いはするな」

恋「・・・分かった」

霞「了解や」

剛鬼「今回の目的は本隊だからあまり被害を出さないうちに終わらせるぞ。目標は頭を早く殺すことだ」

霞「分かったで」

恋「・・・剛鬼一人で大丈夫？」

恋が心配そうな顔で言ってきた

剛鬼「大丈夫だよ俺は雑魚には絶対負けないから心配しないでくれ」

そう言つと剛鬼は恋の頭を撫でた

恋「……分かった気をつけて」

剛鬼「ああ」

霞「……」

何か霞がものほしそうな顔をしていたので剛鬼は霞の頭を撫でた

霞「ありがとな剛鬼／＼」

霞は顔を赤くしながら言った

剛鬼「じゃあ俺は行く包围が出来たら恋達も戦闘を開始してくれ」

恋「……分かった」

霞「分かったで」

二人の返事が聞こえた後剛鬼は黄巾党の元へ向かった

剛鬼「お前等の相手は俺だ！」

剛鬼は黄巾党の中に斬を抜き突撃した

黄巾党1「何だてめえは？」

剛鬼「死ね！」

ザシュツ

黄巾党2「てめえよくも！」

剛鬼「黙れ」

ザク

黄巾党3「ええい一斉にかかれ！」

30人ほどが剛鬼の前に突撃するが

剛鬼「嵐脚！」

ズバッ バッ バッ

剛鬼は六式の一つ嵐脚を無数に放ち突撃してきた黄巾党を斬り刻んだ

黄巾党4「怯むな！包囲して殺せ！」

黄巾党が包囲しようと動き始めたがそれを黙って見ている剛鬼ではない

剛鬼「剃！」

ズバッ    ザシュッ    グサ

剛鬼は剃で移動し囲もうとしていた奴等を全員斬り捨てた

黄巾党5「ば化物だ！」

黄巾党6「ううわぁ！」

黄巾党は剛鬼の前からあたふたと逃げだしたが

黄巾党7「ぐはっ」

ちょうど相手の士気が下がった時に霞と恋が包囲を完了し突撃した  
為一気に奴等の士気は下がった

剛鬼「ふっ」

ザシュッ ザシュッ

剛鬼は黄巾党達を斬りながら進み霞と恋は剛鬼の道を開きながら戦っている

霞「そらあー！」

ザク ザク ザク

黄巾党8「がはっ」



霞の神速の衝きが黄巾党を次々と倒し

恋「……邪魔だ！」

ブン

黄巾党9「ぐはー」

恋は一振りで多くの黄巾党を倒している

剛鬼「見つけた！」

剛鬼は頭らしき人物が逃げようとしているのを見つけると

剛鬼「逃がさん！」

剛鬼は手からクナイを頭の足に投げた

グサ

頭「ギヤアー！」

剛鬼はその後頭に高速で近寄り

頭「頼む命だけは」

剛鬼「指銃！」

ブシュッ

頭「ガハ」

頭の言うことが聞こえる前に剛鬼は六式の技指銃で頭の頭を貫いた

剛鬼「お前達の頭は潰した命がほしければ消えろさもなくば全員皆殺しだ！」

剛鬼がそう言うのと黄巾党達は悲鳴をあげながらすぐに何処かに逃げて行った

霞「剛鬼お疲れ」

霞が剛鬼の肩に手を置いて行ってきた

剛鬼「ああ霞も恋もお疲れ」

剛鬼は笑顔で二人に言った

恋「……剛鬼手」

恋は剛鬼の血まみれの手を見ながら心配そうに言った

霞「剛鬼その手どうしたんや？」

霞も血まみれの手に気付き驚きながら言った

剛鬼「さっき頭の頭を貫いた時についたものだから大丈夫だよ」

剛鬼はそう言うと言っていた水筒の水をかけ手についた血をおとした

恋「……よかった剛鬼怪我したのかと思った」

恋が安心した顔で言い

霞「ホンマびつくりしたで」

霞も安心しどこかホッとした顔で言った

剛鬼「少し休憩をしたら司達と合流するぞ。霞被害はどれくらいだ」

霞「剛鬼が一人で頑張ってくれたおかげで被害は最小限で抑えられたわ」

剛鬼「そうかならよかった」

剛鬼達は少し休憩を挟んだ後司達のところへ向かった

向かっている途中

霞「なあ剛鬼聞きたいことがあるんやけど」

霞がいきなり言ってきた

剛鬼「何をだ霞？」

霞「剛鬼前に華雄ちゃんや呂布ちゃんの攻撃まともにくらったのに傷一つなく平然と立ってたけどあれって何かの技何か？」

恋「……恋も気になってたあれは何？」

二人は興味深そうに聞いてきたので答えることにした

剛鬼「あれは身体を極限まで鍛えた者ができる体術だ」

霞「体術？あれが体術で」

恋「……恋と司の時に使ったやつは何て言うの？」

恋が聞いてきたので答えることにした

剛鬼「あれは鉄塊と言って身体を鉄のような硬度にする技だよ」

霞「鉄のような硬度でそれじゃ鉄を砕くぐらいの攻撃せんと通用しないんか？」

霞が驚きながら言った

剛鬼「ああそうだ。無論パワーが凄くある奴にはもちろん鉄塊は通用しないガードしきれなければダメージはそのまま身体にくるからな」

霞「うちの衝きを避けてたあれもそう何か？」

剛鬼「あああれは紙絵と言って敵の攻撃を紙のようにひらひら避ける技だ」

霞「へえー色々あるんやな。そう言えば呂布ちんが衝きした後剛鬼体制崩したけどあれは鉄塊のガードより強かったから何か？」

剛鬼「ああその通りだ。恋の攻撃が鉄塊より少し威力があつたから俺もダメージを受けたんだよ」

霞「鉄のガードより威力がある攻撃出来るとはさすが呂布ちんやな」

霞が笑って言うのと恋の顔が少し赤くなっていた

剛鬼「これは普通の技とは違うから二人共教えてほしいなどと言わないようにな」

剛鬼が一応教えないと言っておいた

霞「ああ分かってるで相当きついことやらんとあんなの絶対無理やしな」

恋「・・・やっぱり剛鬼は凄い」

霞は残念そうな顔をし恋は剛鬼のことを褒めていた

剛鬼「さてそろそろ合流地点だが」

と言って辺りを見た剛鬼は啞然とした

剛鬼「何故もう戦闘が始まっている？」

剛鬼は目を疑った

合流する地点に司達はいなくて何故か本隊と戦っている光景を見て

霞「あちゃー大方華雄ちゃんが我慢できなくなつて突撃したんやろうな」

霞が呆れた顔で言った

恋「・・・音々」

恋が心配そうな顔をして言った

剛鬼「ちっしょうがない俺達も行くぞ！」

霞「ああ分かったで！」

恋「・・・分かった」

剛鬼「全軍このまま向かうぞ！」

兵士「おー！」



剛鬼が先頭を行き恋と霞達もそれに続き音々達の元へ向かった

司 side

司「ちっ」

司は無我夢中で戦斧を振っていた

烏合の集だと嘗めてかかり剛鬼達を待たず突撃した結果包囲されてしまった

黄巾党1「死ねー！」

司「死ぬのはお前だ！」

ザシュッ

黄巾党2「うらあー！」

司「ハァー！」

ザシュッ

司「ハァハァ」

司は向かってくる黄巾党を倒しているがさすがに疲労が見られる

司「ハァー！」

ザシュ ザシュ

黄巾党「ぐはー！」

バタバタ

司が戦っている時に部下が寄ってきた

部下「華雄將軍前方に砂塵を確認旗は鬼 呂 張」

司「剛鬼達が来てくれたか」

司は安心した顔で言った

司 side out

音々 side

音々「恋殿達が来るまでもちこたえるのです！」

音々は必死だった司が突撃してしまつて剛鬼達と合流して畳み掛ける作戦がパアになつてしまい敵より数の少ない音々と司の部隊で剛鬼達が来るまでもちこたえる為に

音々「各自包囲して戦つてくれなのです。危険と思ったら後退してくれなのです」

音々は今とれる最善策をとっていると

兵士「陳宮様」

兵士の一人が陳宮の元に来た

音々「どうしたのですか？もうもちこたえられないのですか？」

兵士「いえ砂塵を確認しました。旗は鬼 呂 張」

音々「恋殿達が来てくれたようなのです」

音々は安心した顔で言った

音々side out

剛鬼「音々！」

剛鬼は音々の元に向かった

音々「剛鬼ごめんなのです。音々には司を止められなかったのです・  
・・・」

音々が泣きそうな顔で剛鬼に言った

剛鬼「ともかく俺は突撃して司と合流する恋と霞達は各自音々の指示に従ってくれ」

霞「了解や」

恋「・・・分かった」

剛鬼は二人の返事を聞くと敵軍に突撃した

剛鬼「お前等の相手は面倒だ一気に司の所まで行かせてもらっ

剛鬼はそう言つと剃を使いながら刀を振るい司の元へ向かった

司 side

司「ハアハア」

司は戦斧を振るい黄巾党を倒して行くが疲労がきており動きが鈍くなっていたそしてその時

黄巾党「死ねー！」

司「くっ」

司が背後から来た黄巾党に反応しようとしたが身体がうまく動かず間に合わなかった

司（「剛鬼私はここで死ぬようだ」）

司が死を覚悟した瞬間

ザク

黄巾党「ぐはっ」

突如黄巾党は倒れ

剛鬼「この猪がお前は死ぬ気か？」

司の目の前に剛鬼が現れた

司 side out

剛鬼「はぁギリギリ間に合ったか」

剛鬼はそう言つと司も自分の武器を構えた

司「剛鬼すまない。私の勝手な行動で皆を危険にしてみました」

剛鬼「司謝るのは戦いが終わった後だ。部隊を下げる」

司「何！」

司は剛鬼の部隊を下げろと言つ発言に驚いていた

剛鬼「いいから早く下げろ！」

剛鬼が強い口調で言う

司「分かった全軍下がれ！」

司の指示で全員剛鬼の後ろに下がった

剛鬼「さあてじゃあこいつを見舞ってやる」

そう言うとき剛鬼は片足を上げ回り出した

司「剛鬼一体何を」

司は突然回り出した剛鬼を見て言った

剛鬼「行くぜ雑魚共これが最強の嵐脚周断だ！」  
あまねだち

そう言うとき剛鬼は回していたほうの片足から巨大な嵐脚を放った

ズバッズバツバツバツ



黄巾党1「うわぁー！」

黄巾党2「何だこれわー！」

巨大な嵐脚は黄巾党の群れを斬り裂き倒して行き剛鬼が見た時には黄巾党はほとんど死んでいた

かろうじて生き残った黄巾党は

黄巾党3「ば化物だぁー！」

黄巾党4「あんなのに勝てる訳ねぇー」

と言って逃げて行った

剛鬼「殲滅完了。うん？」

剛鬼はそう言い後ろを向くと司や兵士達が固まっていた

剛鬼「おーいお前等戻ってこい」

剛鬼が言っても全員固まったままだ

剛鬼「六王銃！」

剛鬼はそう言つと地面に六式の最強技である六王銃を放った

バン

司「はっ何だ今の音は？」

司は衝撃音で戻り他の兵士も戻ってきたようだ

司「何だこの穴は？」

音がしたところを見るとそこにはデカいクレーターが出来ていた

司はクレーターを見たらそこには剛鬼がいた

力を加減したがやはりけつこう威力があるようで剛鬼はクレーターの中にいたようだ

司「剛鬼大丈夫か？」

司がそう言つと兵士も全員剛鬼を見た

剛鬼「やっと動けるようになったか」

剛鬼はそう言つと軽くジャンプしクレーターから出た

その後の洛陽に戻る為休憩していたら

霞「この馬鹿野郎！」

ゲシッ

司「ぐはっ」

霞が司の顔面を思いきり殴り飛ばした

霞「お前自分が何やったか分かっとなるな」

司「作戦を無視し独断で突撃したのは私が悪かったすまなかった。  
だがただじつと待つてはいられなかったんだ！」

霞「このボケ！」

司はまた殴られると思い目をつぶった

ゲシッ

剛鬼「うつ」

司「なっ！」

痛みがこないと思い目を開けたら何故か剛鬼が司の代わりに殴られていた

霞「剛鬼何で？」

霞は驚きながら言った

剛鬼「こいつの行動を計算に入れなかった俺の責任だ。だから代わ

りに俺を殴れ」

剛鬼は申し訳なさそうな顔で言った

霞「剛鬼のせいやない剛鬼はうちの為に一人で突撃していっぱい助けてくれた剛鬼は何も悪くないんや」

霞がそう言っても剛鬼は退かない

剛鬼「なら俺の顔に免じて司を許してやってくれ頼む」

剛鬼はそう言くと霞に頭を下げた

霞「剛鬼にそこまでされたらうちは何も出来へん」

そう言つて霞は座りこんだ

司「皆すまない」

司がその場に土下座をしながら言った

剛鬼「頭を上げる司」

司「だが私は・・・」

恋「・・・司顔上げて」

剛鬼「恋もそう言ってるんだから顔を上げてくれ」

司「すまない」

司は顔を上げ霞の元へ向かった

司「霞すまなかった」

霞「もうええようちのほうこそ殴ってごめんな」

霞は司の顔を見て謝った

音々「全員いるですか？」

音々がこっちに来た

剛鬼「ああ全員いるよ」

音々「なら休憩を終わりにして洛陽に戻るのです」

霞「そうやな月達も心配してるやろっし」

司「早く帰ってやるか」

剛鬼「よしじゃあ皆帰るか」

全員「おおー！」

その後一日かけて洛陽に到着した

入り口で月と詠が待っていた

詠「皆おかえり」

剛鬼「ああやっと帰ってこれたよ」

恋「・・・疲れた」

霞「ああホンマ疲れたわー」

音々「本当くたくたなのです」

司「何だ全員だらしないなもつとしゃっきり全員」「お前のせいだ！」  
（はいすいません）

月「皆さん無事でよかったです」

剛鬼「月も元気そうで安心したよ」

そう言っていると剛鬼は月の頭を優しく撫でた

月「へう」



月は顔を真っ赤になっていた

詠「今日の夜は勝利の宴をひらくからそれまで皆ゆっくりして」

剛鬼「ああそうさせてもらっよ」

剛鬼がそう言つと全員洛陽に入つた

無論この後剛鬼はゆっくり出来ないと言つことは知らない

## 鍛錬と宴（前書き）

作者「更新遅れてすいません」

剛鬼「ただ書くのがめんどかったんだろ？」

作者「そんなことはない」

剛鬼「ふっどうだな」

作者「では楽しんで読んでください」

## 鍛錬と宴

剛鬼「ああだるい」

司「ハァー！」

霞「タァー！」

恋「ふっ」

ガキン キン カキン

剛鬼はそう言いながら三人と戦っていた

ことの発端は殲滅戦が終わり宴の時間まで部屋で眠ろうと思った時から始まる

剛鬼は眠ろうとしたら

コンコン

恋「剛鬼起きてる?。」

恋が尋ねて来た

剛鬼「ああギリギリ起きてるよ。」

あくびをしながら言う剛鬼

恋「入っていい?。」

剛鬼「ああいいよ。」

と言うと恋は部屋に入ってきた

剛鬼「どうかしたか恋?。」

恋「鍛えてもらおうと思って。」

剛鬼「はぁつまり相手をしてくれと?。」

恋「うん」

剛鬼（今から鍛錬？面倒だなやらずにすむ方法はないかな？）

剛鬼が考えていたらあることを思いついた

剛鬼（この前恋を泣かせた時の責任をまだとってなかったしな）

剛鬼は思い出しながらもう少し考え

剛鬼（相手が恋ならその後眠っても文句言わないだろ）

そして剛鬼はそれを実行に移した

剛鬼「恋」

恋「？」

恋が反応した瞬間剛鬼は恋をベットに押し倒した

恋「剛鬼どうしたんちゅくくちゅ／／／」

剛鬼「んくちゅれろちゅく」

剛鬼はその後前に寝ぼけた時にやったキスを恋にした

恋は始めは驚いていたようだが自然に剛鬼に身体を預けた

恋「ちゅくれろくちゅちゅくちゅはむ／／／」

剛鬼「はむくちゅれろちゅくちゅちゅく」

剛鬼は少しのつもりだったが寝ることも忘れ恋とキスを続ける

暫く続けた後唇を離したら

恋「もうちょっとしてほしい／／／」

何と恋が顔を真っ赤にしながらおねだりをしてきた

剛鬼（恋何か凄く可愛い）

剛鬼はそんな恋に見とれてしまい

剛鬼「ああ分かった」

そう言って剛鬼がキスしようとした瞬間

バン

剛鬼の部屋の扉が勢いよく開き

司&amp;霞「剛鬼鍛錬してくれ（や）」

二人が剛鬼の部屋に入ってきた

剛鬼「あっ」

恋「霞 司」

二人は剛鬼が恋の上にいるという状況を見ると

二人「お前等一体何してるんだ（や）！」

二人が怒鳴りながらこっちに向かってくる

二人「剛鬼これはどういうことだ（や）」

二人が怖い顔で近寄ってきたので

剛鬼「恋ごめん」

恋「！／／／」

剛鬼は恋を抱き上げると

剛鬼「退散！」

剛鬼は剃で逃げ出した

霞「待たんか剛鬼！」



司「待て！」

霞と司は剛鬼を捕まえに向かった

剛鬼は移動してる最中

剛鬼（危ねえ危ねえ、もし恋とキスしてるとこ見られてたら更にたいへんなことになってたな）

剛鬼は少しホツとしながら逃走した

剛鬼「はあさてひとまず大丈夫だろ」

剛鬼と恋は調練場にいた

剛鬼「じゃあな恋」

剛鬼は恋を降ろすとその場から退散しようとしたが

ガシッ

恋「剛鬼鍛錬の相手」

恋に服を掴まれ言ってきた

剛鬼「ごめん恋今それどころじゃ」

恋「ダメ（ウルウル）？」

恋が泣きそうな顔で言ってきた

剛鬼「うつ分かったよ」

剛鬼ははあと溜め息を溢しながら言つと拳を前に出し構えた

剛鬼「恋準備はいいか？」

恋「いい」

恋は方天画戟を構えた

剛鬼「よしなら来い！」

恋「行く！」

恋が突撃をし突きを放った

剛鬼「嵐脚」

ガキン

恋「くっ」

ブン

恋は衝きを嵐脚で弾かれた後方天画戟を横に振ったが

剛鬼「剃」

剛鬼はそれを剃であっさり避け恋のすぐ前に向かった

剛鬼「ふっ」

ガン

剛鬼は拳を恋に向けて振ったが恋はそれを方天画戟でガードしたが

剛鬼「三王指銃！」

剛鬼は六王指銃の片手バージョン三王指銃を咄嗟に考えつき放った

バン

恋「！」

恋は軽く吹き飛ばされその場に倒れた

恋「やっぱり剛鬼強い」

そう言くと恋は立ち上がり方天画戟を構える

剛鬼「まだあれでも力を抑えているがな」

剛鬼は笑いながら言ったその瞬間

霞「トリアー！」

司「ハアー！」

霞と司が背後から隙をみて攻撃した

剛鬼「紙絵」

すっ

剛鬼は二人の攻撃を紙絵で避けると距離をつめ抜刀した

剛鬼「は！」

キンッ

霞「くっ」

司「くそ」

霞と司はガードしたが軽く吹っ飛ばされた

剛鬼「不意打ちでくるとは思わなかったよ」

剛鬼は余裕そうな顔で言う

霞「不意打ちでも意味なかったみたいやけどな」

霞が残念そうに言う

剛鬼「さて誰から来る？」

剛鬼が三人を見て問うと

霞「そりゃ」

司「もちろん」

恋「（コクッ）」

三人が同時に武器を構える

剛鬼「三人同時かよ面倒だな」

剛鬼がそう言った瞬間三人は剛鬼に突撃した

そして今にあたる

剛鬼「そら」

剛鬼が霞に斬を振るうと

霞「くっ」

霞はそれをガードし

司「ハアー！」

剛鬼「紙絵」

すっ

司がその隙を攻撃し

恋「ハア！」

剛鬼「ちっ」

ガキン

恋が避けた隙を攻撃してくる

さっきからこの繰り返しを何回もやっている

剛鬼「さすがに飽きたな」



剛鬼はそう言つと距離をとり刀を鞘にしまった

無論三人はそんな無防備な剛鬼に向かつて同時に自身の武器を振る  
つた

剛鬼「鉄塊空木<sup>てつき</sup>」

ガキンッ バアン

霞「何やと！」

司「何！」

恋「！」

だが攻撃したと同時に三人は吹っ飛ばされた

霞「な何や今の？」

司「何故攻撃した我々が吹き飛ばされた？」

恋「どうして？」

三人は何がおこったのか分かっていなかったなので説明することにした

剛鬼「お前達の打った全ての衝撃をお前達に返したただけだ」

三人「何！（やと）」

三人は驚きながら再び武器を構えようとしたが

霞「う腕が動かへん」

司「何故動かん？」

恋「動かない」

剛鬼「お前等の神経に衝撃がいつてるんだから当然だ」

剛鬼はそう言うと三人の前にいきそれぞれの武器を取り上げた

剛鬼「俺の勝ちだ」

剛鬼は三人の目の前で言った

霞「ああ全く剛鬼強すぎやわー」

司「全くだな」

恋「恋でも剛鬼には敵わない」

三人はそう言うと言座りこんだ

剛鬼「お前等とは鍛え方が違う」

剛鬼は三人に自慢気に言う

霞「そう言えば剛鬼技教えてほしいんやけど」

恋「恋も」

司「出来れば私も」

剛鬼「ちっ分かったよ」

剛鬼三人の目を見たら何故か断れず承諾してしまった

霞「じゃあまず牙突ちゅうの教えてくれへんか？」

剛鬼「霞と司は駄目だ」

二人「何故？」

剛鬼「牙突はパワー スピードの両方がなければ駄目だからだ。霞はスピードはあるがパワーがない、司はパワーはあるがスピードがないから駄目だ」

二人「ううー」

二人は剛鬼に自分達の長所と短所を言われ呻いている

剛鬼「よって両方とも均等にある恋に教える」

恋「どんな技？」

恋が興味津々で聞いてきた

剛鬼「牙突はこういう構えから打つ技だ」

剛鬼は左腕を前にやり右腕を少し後ろに下げた格好をした

恋「こう？」

恋が同じ格好を試してみたが

剛鬼「もうちょっと体制を低くしてそれと右腕を少し上げて、よしその体制だ」

恋「何か動きにくそう」

恋が構えをとりながら言った

剛鬼「牙突は字の通り突きをする技だ。動く時は突進をする感じで

敵に向かいそして敵を突き刺す」

恋「突きが外れたらどうするの？」

剛鬼「横薙ぎへの派生ができるから大丈夫だ」

恋「分かった」

剛鬼「じゃあ試しにその木に牙突を打ってみろ。うまく出来たらご褒美やるぞ」

恋「うん」

恋は「ご褒美という言葉にはりきり剛鬼が指さした木に向かって行った

恋「ふっ！」

恋はかなりのスピードで木に接近し牙突を打った

バン めきめきドシン

恋が牙突を打った木は凄い音をたて倒れた

霞「凄い威力やな」

司「それにあのスピード凄まじいな」

霞と司はそんなことを言いながら見ていた

恋「剛鬼どう？」

恋が心配した顔で聞いてきた

剛鬼「威力 スピード共に文句無しだな」

恋「よかった」

恋は嬉しそうな顔で言った

剛鬼「さてご褒美やらないとな何が欲しい？」

剛鬼は恋に聞くと

恋「キス／／／」

剛鬼「キス？」

恋「キスしてほしい／／／」

恋が顔を真つ赤にしながら言った

剛鬼「二人が見てるから後ろ向いてくれ」

恋「うん／／／」

恋と剛鬼は後ろを向き

チュッ

剛鬼が軽く恋にキスをした



恋「剛鬼ありがとう／＼／」

恋が顔を真っ赤にしながらお礼を言う

剛鬼「ああ」

その後二人は霞達の元へ向かった

霞「最後後ろ向いてたけど何かあったん？」

霞が鋭い質問をする

剛鬼「牙突の派生技の説明をただけだ」

剛鬼はいつもの調子で言う

霞「ふーんまあええわ、次はうちに何か教えてくれへんか？」

剛鬼「いいだろう。お前には飛天御剣流龍巢閃を教えてやる」

霞「それって華雄ちゃん倒した時の連撃みたいなやつ？」

剛鬼「ああそうだ」

司「私には出来ないか？」

剛鬼「お前には無理だ」

司「何故だ？」

剛鬼が即答すると司が何故か聞いてきた

剛鬼「龍巢閃は高速の乱撃術、スピードがないお前には無理だと思  
うが」

司「うー」

司は悔しそうな顔をしながら呻いている

剛鬼「今の霞のスピードなら俺には及ばないが、けっこう速い龍巢  
閃が打てるだろう」

霞「でもどうやってやればいいんや？うちの偃月刀じゃあ剣みたい  
に出来へんで？」

剛鬼「剣のようにやる必要はない。お前の神速の突きが俺の軽い龍  
巢閃に負けなければそれで完成だ」

霞に理解出来るか分からんが簡単に説明した

霞「ああなるほどな」

どうやら霞は理解出来たようだ

剛鬼「よしなら始めるぞ！」

剛鬼が斬を構える

霞「おう！」

霞も自身の飛龍偃月刀を構える

剛鬼「飛天御剣流龍巢閃」

霞「ウリヤー！」

カンッ ガキンッ キンッ カキンッ

剛鬼の龍巢閃と霞の神速の突きが何度もぶつかりあい5分ほどが経過した

剛鬼「よしこんなもんだろ」

剛鬼は攻撃止めたのと同時に霞も止めた

霞「ハアハア」

霞は息があがっていた

剛鬼「今やった突きのスピードなら問題ないだろう。後はスピードを少しずつ上げることと、スピードを持続するスタミナをつければかなりのものになる」

霞「ああ正直スピードを持続するのにこんなに疲れるとは思わんか

ったわ。でも確かに龍巢閃覚えたで」

霞は嬉しそうな顔で言った

剛鬼「ふっさてお前にも何かご褒美をやるか、何か欲しい物はあるか？」

剛鬼が聞くと

霞「なら抱きしめてほしいんやけど／＼」

霞は顔を赤くしながら言った

剛鬼「ああしょうがないな」

フワッ

剛鬼は少し困った顔をした後霞をフワッと包み込むように抱きしめた

剛鬼「ちゃんとさっき言ったことを忘れずにやれよ」

剛鬼は霞の耳元で言った後霞から離れた

霞「分かってるで・・・剛鬼ありがとうな」

そう言うと霞は司達のほうへ向かった

剛鬼「さて次は司だが・・・恋何で俺を睨んでるんだい？」

恋「・・・・（ジィー）」

剛鬼は司に技を教えようと思ったのだが、恋が剛鬼をジィーと睨んでいるので訳を聞くことにした

霞「剛鬼何で呂布ちゃんが睨んでるのか分からの？」

剛鬼「すまんが分かん」

霞が聞いてきたので素直に分らないと言っておいた

司「鈍感だな」

霞「ああ鈍感やな」

二人が納得したようにそう言った

剛鬼「うっ、とりあえず恋怒らせたんならごめんな」

剛鬼はそう言いながら恋の頭を優しく撫でていたら

恋「抱きしめて」

剛鬼「え？」

恋が剛鬼の顔を見て言った

恋「恋も抱きしめてほしい」

剛鬼「はあ分かったよ」

フワッ

剛鬼は恋を包み込むように優しく抱きしめた

剛鬼「俺に嫉妬したの？」

剛鬼が恋の耳元で言う

恋「嫉妬何かしてない。ただ剛鬼が霞を抱きしめた時に胸が痛くな  
ったから」

恋は素直に訳を話してくれた

剛鬼「あんまり睨まないでくれよ、恋は俺のお嫁さん何だからさ」

まさかの剛鬼の爆弾発言に

恋「うん／＼／」

恋は顔を真っ赤にしながら頷いてくれた

剛鬼「もう離れていい？」



剛鬼がそう聞くと

恋「・・・うん」

恋が少し残念そうな顔をして頷いた

剛鬼「さてとじゃあ司お前に技を教えてやる」

そう言うと剛鬼は恋から離れた

司「やっとか」

司が待ちくたびれたように言った

剛鬼「お前はパワーがあるから俺が少し改良した飛天御剣流土龍閃を教える」

司「土龍閃とはどういう技だ？」

剛鬼「実際にやってやる」

剛鬼はそう言っていると近くにあった木を見た後

剛鬼「飛天御剣流土龍閃！」

剛鬼は地面に斬を叩きつけると

バンッ ガガガガガ

軽い衝撃波のようなものが叩きつけた後に発生した

ガンッ

衝撃波は木にぶつかった

剛鬼「これが土龍閃だ」

司「威力があまりないような気がするのは気のせいかな？」

土龍閃は木にぶつかったが少し穴が空いた程度だった為司がそう思うのも尤もだ

剛鬼「お前に覚えてもらうのは俺が少し改良したほうだ」

剛鬼はそう言つと

剛鬼「土龍斬衝撃！」

同じように斬を地面に叩きつけ

バンツ ガガガガガ

同じように衝撃波が発生しただが

バアン

衝撃波をくらった木は大穴をあけて倒れた

司「なっ！」

司は倒れた木を見て唖然とした

剛鬼「これがお前に覚えてもらおう土龍斬衝撃だ」

剛鬼は唖然としている司に言った

司「どうやってやればいいんだ？」

司はやり方が全く分からず剛鬼に聞いた

剛鬼「武器を自分の身体の一部と思い武器を握っている手に力を集中すれば出来る」

司「分かった」

司はそう言い試しにやってみた

司「ハァー！」

司は戦斧を叩きつけた

バンッ ガガガガガ

剛鬼の時と同じように衝撃波が発生し近くの木にぶつかった

ガンッ

木には少し大きめの穴が空いた

司「くっ駄目か」

司が悔しそうに言った

剛鬼「上々だいきなり土龍閃が出来る奴はそうはいない」

剛鬼が司に近寄り言った

剛鬼「完全に武器を身体の一部と思え、そして武器と腕に力を集中しろ」

司「分かった」

また司は戦斧を構える

司（武器を身体の一部と思い込みそして力を集中させる）

暫くの沈黙の後

司「今だハァー！」

司は戦斧を地面に叩きつける

バンッ ガガガガガ

さっきよりデカい衝撃波が出来木にぶつかる

バァン

木に大穴をあけて倒れた

司「やった剛鬼出来たぞ！」

司が喜びながら剛鬼のほうに行く

剛鬼「やるじゃないか司。後は今のを常に放てるよう努力しろよ」

司「ああ」

剛鬼「よし恋 霞こっちにこい」

剛鬼は恋と霞を呼んだ

霞「何や剛鬼？」

恋「剛鬼どうかした？」

二人がこっちにやって来た

剛鬼「今日はこれで鍛錬を終わる。だが一言だけ言いたい」

三人「うん」

剛鬼「お前等優秀すぎるんだよ」

剛鬼が苦笑いしながら言った

霞「それって褒めとんの？」

霞が聞いてきた

剛鬼「ああ一応褒めてるぞ」

司「褒めてるように聞こえんぞなあ二人共」

二人「うん」

剛鬼「ちっ分かったよお前等凄いなあんなに早く技覚えてよ」

霞「当然や」

司「私を誰だと思っている」



司が聞いてきたので

剛鬼&a m p・霞「猪」

二人が声を揃えて言った

司「うつくそーやはり私は猪なのかー」

司が悔しそうな顔で言った

恋「恋頑張った」

剛鬼「ああ恋も頑張ってたな」

剛鬼がそう言い頭を優しく撫でる

恋「うん／＼／」

恋が顔を赤くしながら頷く

暫く恋の頭を撫でていたら

音々「陳宮キック！」

剛鬼「よいしょ」

ガシッ

音々が後ろから陳宮キックをしてきたので足を掴んで逆さづりにした

音々「うう離しやがれなのです」

音々が腕を振りながら言う

剛鬼「じゃあ二度とキックしないと見えそつしたら話してやる」

と剛鬼が言ったが

音々「嫌なのです」

音々はそれを断固拒否

剛鬼「じゃあお前このまんまな」

音々「恋殿ー」

音々が泣きそうな顔で恋に助けを求めた

恋「剛鬼音々離してあげて」

恋が音々を離してくれと言ってきたのでちょっと意地悪をしなくな  
った

剛鬼「離してもいいけどその代わり、これから頭撫でてあげないし  
抱きしめてもあげないしキスしてもあげないよ?」

剛鬼が恋の耳元で言うと

恋「それは嫌だ」

即答だった

正直ホツとしたいいつも実は嫌がってるかもしれないと思っていたからだ

剛鬼「ハハハ冗談だよ恋」

そう言うと剛鬼は音々の降ろした

音々「うー」

音々はその後すぐに恋の後ろに隠れた

恋「冗談でもさっきのこと言わないでほしい」

恋が悲しそうな顔で言った

剛鬼「ああごめんよ恋にはいつも嫌な気持ちでやってないから安心して」

剛鬼はそう言つと恋の頭を撫でた

恋「うん／＼／」

恋は顔を真つ赤にしながら頷いた

霞「そのいい雰囲気のお二人さん」

剛鬼「別にいい雰囲気何かじゃねえよ」

霞「まあまあ剛鬼そう怒らんといて」

剛鬼「別に怒つてねえよ」

霞「恋結婚式には呼んでや」

恋「／／／」

剛鬼「ちやかすな霞！」

霞「ハハハ」

恋は顔を真つ赤にし霞は恋の顔と剛鬼の態度を見て笑っている

剛鬼「そう言えば音々お前何しに来たんだ？」

話を逸らす剛鬼

音々「あつ忘れてたのです。宴の準備が出来たから皆を呼んでこいと詠から言われていたのです。」

剛鬼「なら早く行かねえと詠の説教がありそうだな」

音々「うつ確かに」

霞「ならはよ行こつや」

恋「うん」

司「そうだな」

とりあえず皆は宴の会場の中庭に向かった

中庭に向かったら詠と月それに兵士が待っていた

詠「遅いわよアンタ達！」

ついた途端に詠が怒鳴ってきた

剛鬼「悪い謝るから始めよう」

剛鬼がそう言うのと詠が俺達に杯を渡してきた

月「乾杯は剛鬼さんが言ってください」

そう笑顔で言う月

剛鬼「えっ！俺より月が言ったほうが」

詠「何言ってるのよ。今回の手柄はほとんどあんたのもの何だからいいのよあんだで」

詠がそう言うので言うことにした

剛鬼「えっと全員のおかげで俺達は勝つことが出来た。今日はそのお祝いだ皆楽しんで行こう乾杯！」

全員「乾杯！」

全員の乾杯の声の後に宴が始まった

恋「パクパク」

恋は宴が始まったと同時に料理を食べている

俺はそんな恋を見ていたら

霞「剛鬼一緒に飲まへん？」

剛鬼「ああ」



霞が誘ってくれたので一緒に飲むことにした

霞「まあ剛鬼まず一杯」

霞はそう言つと酒をついでくれた

剛鬼「ああありがとう」

ごくごく

剛鬼「ハア美味しいな」

剛鬼は飲みほし言つた

霞「イヤー剛鬼いい飲みっぷりやなー」

霞がそう言つとまたついでくれた

剛鬼「霞も飲めよ」

剛鬼はそう言つと霞についてやった

霞「イヤー悪いな剛鬼」

ごくごく

霞「プハー」

剛鬼「皆楽しそうだな」

ごくごく

剛鬼「ハア」

そんな感じで暫く霞と飲んでいたら、音々がこっちに来て霞に泣きついた

音々「恋殿ー何でいつもあんな奴と一緒にいるのですかー」

霞「いや音々うち呂布ちゃんやないし」

音々「恋殿ー」

剛鬼「聞こえてないな」

霞「ああそうみたいやな」

音々は酔っているせいか恋と霞を間違えていることに気づいてないし、泣いているせいか霞の言葉も聞こえていないようだ

司「剛鬼私はなあ」

司はいつの間にか剛鬼の隣に出現していた

司「剛鬼私はそんなに弱いかさんなに弱いのかー」

と言って泣き出したどうやらこの人は酔うと泣き上戸になるようだ

月「剛鬼さん」

剛鬼「月と詠もこっちで飲まないか？」

月と詠が近くにいたので誘ってみた

月「はい」

詠「ええ良いわよ」

そう言つと月と詠はこっちに来て座つた

剛鬼「月に詠まあ飲んでくれ」

剛鬼はそう言つと二人についでやった

月「はい」

ごくごく

月「美味しいですね」

飲んだ後既に月の顔が赤くなっていた

詠「あんまり月に飲ませないでよ」

そのせいか詠に注意を受けた

詠「ところで司と音々は何をしてるの？」

詠は剛鬼の隣で泣きながら何かを言っている司と、霞に泣きついて  
いる音々を見て言った

剛鬼「気にするな。ただ馬鹿な酔い方してるだけだからよ」

詠「確かにそうね」

と言いながら詠も酒を飲む

月「剛鬼さん」

剛鬼「どうした月？」

月が呼んできたので月のほうを向くと

月「私実は剛鬼さんのことが」

と言った瞬間

月「へー」

月は顔を真っ赤にして倒れてしまった

詠「月！」

詠が慌てて駆け寄る

詠「ああもうとりあえず月を医務室に運んで来るわね」

剛鬼「ああ分かった」

詠はそう言った後月を連れて医務室に向かった

恋「剛鬼」

剛鬼「うわっと」

恋がいきなり抱きついてきた

剛鬼「恋口のまわり汚いから拭いてあげるな」

恋「うん」

恋が頷いた後口のまわりをハンカチで拭いて綺麗にした

剛鬼「恋も飲む？」

剛鬼は恋に酒をすすめた

恋「うん」

と頷いたので恋の杯についでやった

ごくごく

恋「美味しい」

恋が嬉しそうな顔をして飲んでいたら霞が来た

霞「恋もいい飲みっぷりやなー」

剛鬼「あれ霞音々はどうした？」

霞「音々やったら華雄ちゃんのところにおるで」

霞がそう言ったので司のほつを見たら音々が司に泣きついていた

霞「まあ二人とももっと飲もうやないか」

剛鬼「ああそうだな」

恋「うん」

また暫く三人で酒を飲んでいたら

恋「すうすう」



恋がいつの間にか剛鬼の隣で眠っていた

霞「呂布ちゃん寝ちゃったみたいやな」

剛鬼「そうみたいだな」

などと霞と話していたら

恋「剛鬼大好きすうすう」

恋が寝言で言った

霞「剛鬼よかったなー大好きやって」

それを聞いた霞がちやかしてきた

剛鬼「ちやかすなよ。さて俺は恋を俺の部屋に寝かせてそのまま休むからな」

霞「分かったでー寝てるからって呂布ちゃん襲うなよー」

剛鬼「襲わねえよ！」

そう言った後剛鬼は眠っている恋を抱き上げ自分の部屋に運びベツトに寝かせた

恋「すうすう」

剛鬼「幸せそうな顔してるな」

剛鬼は恋の頭を優しく撫で

剛鬼「おやすみ恋」

と言って恋から離れようとしたら

ガシッ

剛鬼「うん？」

恋が剛鬼の服を掴んでいた

剛鬼「しょうがない傍にいてやるか」

剛鬼は近くの椅子をベットの近くに置き

剛鬼「おやすみ恋」

そう言った後椅子に座り眠りについた

朝まためんどくさいことになるのは勿論剛鬼は知らないのであった

## 鍛錬と宴（後書き）

作者「感想少ないな」

剛鬼「感想来ても悪い点しか書かれてないな」

作者「まあ感想書いてもらえるだけいいさ」

剛鬼「全く呑気な奴だまあ書いてほしい話などあったらこいつに言うといい。18禁のも書いてくれるかもよ」

作者「なるべく書ける話なら書きますので、あったら遠慮なく言うてください」

## 反董卓連合結成と剛鬼の真意（前書き）

作者「今回は剛鬼君と恋のラブラブなシーンはあまりありません」

剛鬼「いつもラブラブではないということだ」

作者「だが期待してる人もいるかもしれないぞ多分ないと思うけど」

剛鬼「はあ全く疲れる。まあ楽しんで読んでくれると嬉しいです」

## 反董卓連合結成と剛鬼の真意

次の日の朝

剛鬼「ああよく寝た」

剛鬼が珍しく早く起きた

恋「すうすう」

ベットでは恋が気持ちよさそうな顔をして眠っている

剛鬼「ちよつと筋トレでもやろう」

筋トレをやる為に椅子から立ったが恋が俺の服を掴んでいたことを思い出した

剛鬼「ごめんな恋」

剛鬼は恋の手を袖から離そうとしたが

剛鬼「離れない」

剛鬼が離そうとしても恋は凄い力で掴んでいるようで手が離れない

剛鬼「ああもういい諦めよう」

いくらやっても離れないので諦めた

剛鬼「瞑想でもして恋が起きるのを待とう」

俺は目を閉じ瞑想をし恋が起きるのを待った

？「剛鬼」

暫くしたら何かが俺に話しかけてきた

剛鬼「斬か？」

剛鬼は目を開け斬を見る

？「ああ剛鬼お前に伝えたいことがある」

作者「説明しておこう妖刀斬には前の持ち主の侍の魂が宿っており稀に剛鬼に話しかけてくるのだ」

剛鬼「何だ？」

斬「私の半身とも言える刀がこの世界にあるようだ」

剛鬼「何！」

作者「また説明しておこう。妖刀斬は本来は妖力が強すぎる妖刀だった為に刀を二つにし妖力を弱めていたのだ。そして剛鬼は刀を元の一つに戻す為にずっともう片方を探していたのだ」

剛鬼「何故こっちにあると思うんだ？」

斬「何処にあるのかは分かんがもう片方の鼓動を感じるんだ」

剛鬼「ならば早く見つけだしてお前を元の一つの刀に戻さないとな」



斬「一つの刀に戻したら妖力は今の数倍増すぞ。そうなたらお前は私を制御できないと思うが？」

剛鬼「ふっそう思うか？」

斬「思えないな。とりあえず伝えたいことは伝えた」

剛鬼「もう片方の刀はどう探せばいい？」

斬「刀が近くにあれば私の鼓動が聞こえるようになる。近ければ近いほど鼓動は速くなる」

剛鬼「理解した」

斬「ではまた会おう」

斬がそう言った後俺は顔を上げたその瞬間

音々「陳宮キック！」

剛鬼「鉄塊！」

ゲシッ

音々「ううー」

顔を上げた瞬間陳宮キックが飛んできたのでギリギリ鉄塊でガードした

恋「剛鬼大丈夫？」

剛鬼「何が？」

音々「何がじゃないのです！お前恋殿がずっと呼んでいたのに無視し続けた理由を教えやがれなのです！」

音々が右足を抑えながら言う

作者「またまた説明しよう。剛鬼が斬と話をしている時は何故かずっと下を向いていて話が終わるまで何をやっても反応しないのだ」

剛鬼「お前何気に出てんじゃねえよ！」

ツツコンでみたが返事が帰ってこず

音々「お前誰と話しているのですか？」

恋「？」

二人には首を傾げられ

剛鬼「何でもない気にするな」

何故か俺だけ恥をかいた

恋「剛鬼本当に大丈夫？」

恋が非常に心配そうな顔をして見てきた

剛鬼「大丈夫だから安心して」

ナデナデ

言ったついでに恋の頭を撫でておいた

恋「よかった／＼／」

恋は少し顔を赤くし安心した顔で言ってくれた

音々「ううー」

剛鬼「よしよし」

音々が寂しそうだったので頭を撫でた

音々「ううー音々は子供じゃないのです」

音々は顔を赤くしそう言うが悪い子供にしか見えない

剛鬼「ところで音々何か用か俺の部屋にわざわざ来て？」

音々「はっそうだったのです。詠に至急玉座の間に連れて来いと言われていたのです」

剛鬼「じゃあ早く行かないと」

俺は仮面をかぶり斬を持った

剛鬼「二人共行くぞ」

二人「分かった」

俺は恋と音々を連れ玉座の間に向かった

玉座の間

詠「遅いわよ！」

いきなり詠の怒鳴り声が響いた

剛鬼「ああすまないで全員集まって何の話だ？」

詠「曹操が黄巾党を打ち倒したそうよ」

剛鬼「ほう黄巾党を」

詠「情報によれば天の御遣いの二人も黄巾党潰しに貢献したそうよ」

剛鬼「なるほどでそれだけでわざわざ集めたのか？」

霞「うちも気になっとなやまだ何かあるんやろ？」

霞と俺が聞くと月と詠が悲しそうな顔をし詠が一枚の紙を出した

司「何だこれは？」司は紙を見て言う

詠「袁紹からの文よ逆賊董卓を討とうと言う内容の」

剛鬼以外全員「何！」やと

剛鬼「やはりこうなってしまうのか」

ちっやはり歴史は変えれないのかよ

月「全部私のせいです」

月が泣きそうな声で言った

詠「月は悪くないよ！悪いのは」（「全て袁紹だ」）剛鬼？」

詠が言っている最中に俺は詠の言葉を遮るように言った

剛鬼「月は何も悪くないよ。だから自分をせめないでくれ」

そう言い俺は月の近くに行った

月「剛鬼さん・・・」

剛鬼「泣くな月な」

ナデナデ

月の頭を優しく撫でてやる

月「へうありがとうございますもう大丈夫です」

月は顔を赤くしながら言った

詠「剛鬼あんたに聞きたいことがあるんだけど」

剛鬼「何だ？」

詠「何でアンタは僕達に協力してくれるの？」

詠が真剣な顔で聞いてきた

剛鬼「何故そんなことを聞く？」

詠「アンタほどの腕があれば曹操や孫策達のような猛将なら簡単に将にしてくれるはず、なのにアンタはわざわざ反董卓連合が出来るのを知っているながら僕達のところへ来たどうして？」

ここは素直に答えておこう



剛鬼「歴史を変える為というのがあったが月と会ったら気が変わった」

詠「どういうこと月と会ったら変わったって？」

何かややこしいことになりそうだから真実を言っておこう

剛鬼「俺の知っている歴史では董卓はひどい悪政をして民を苦しめていたらしい。だから最初はそんな奴なら俺が呂布の代わりに始末しようと思った。だが月はそんなことを一切していない民思いのいい奴だと分かった。だから俺は月達を守ることにした」

詠「どうして月を殺すことに恋が関係しているの？」

詠が不思議そうな顔で俺を見てきた

霞「呂布ちゃんが何かするんか？」

恋「？」

霞が恋のほうを見ると恋は頭場に？が浮かんでいた

司「説明してくれないか剛鬼？」

音々「そうなのです。恋殿が一体何をするといつのですか？」

二人が聞いてきて全員が俺のほうを見るまあ一応説明しておこう

剛鬼「俺の歴史では呂布が董卓を殺すからだ」

全員「えっ！」

全員が驚愕の声をあげる

詠「どういつことよ恋！月を殺すって」

詠が恋に近寄り怒鳴る

恋「恋月殺そう何て思ったことない」

恋が悲しそうな声で言う

司「だが剛鬼がお前が月を殺すと言っているぞ！」

司も恋に向かって怒鳴る

霞は何か考えているのか何も言わずに立っている

音々と月は驚いていて何も言えない状況のようだ

恋「本当に思ったことない……」

恋は泣きそうな顔になっていた

剛鬼「落ち着け二人共」

俺は恋の前に行き二人に言った

詠&amp;p・司「でも！」

剛鬼「話を最後まで聞け！」

俺は二人に向かって怒鳴って言った

全員「なっ！」

全員俺の怒鳴り声でびびったようだ

剛鬼「それはあくまで俺の歴史だ！今のこの世界の話じゃない」

霞「それに賈馱っちや華雄くんは本気で呂布くんが月を殺そうとしてる思ってるの？」

二人「それは」

二人はそう言っていると黙りこむ

剛鬼「それに俺の知っている歴史に出てくる武将は全て男だ」

全員「えっ！」

全員かなり驚いているようだ

詠「それってつまり」

霞「うちら全員」

司「剛鬼の世界では」

月「男性と」

音々「いうことなのですか？」

5人は見事に繋げるような感じで言った

剛鬼「そういうこと」

俺ははっきり言った

全員「えー！」

またまた全員一斉に驚く

剛鬼「だから実際は俺の歴史とは違うんだよ」

恋以外全員「確かにそれなら違う」

俺がそう言つと恋以外全員（恋はおそらく内容が分かっていない）  
が納得したように頷いた

詠「恋そのごめん」

司「私は勘違いしてそのすまなかった」

歴史が違つということが分かり詠と司が恋に頭を下げた

恋「詠に司頭上げて」

恋はいつも通りの顔で二人に言う

二人「でも・・・」

それでも二人は頭を上げない

剛鬼「恋がいいんじゃないか？そうだと恋？」

恋「うん」

二人が頭をあげないから少し口出しをしたら恋が頷いた

詠「恋ごめんね」

司「すまなかった」

二人はそう言つと頭をあげた

音々「ところでお前は歴史を知っているんなら反董卓連合との戦いはどっちが勝つのか知っているのですか？」

音々がどうなるのか聞いてきたので答えておこつ

剛鬼「はつきり言えば俺達は負ける」

詠「やっぱりね」

詠が分かっていたように言った

剛鬼「だが負けると分かっているもお前等は戦うだろ？」

霞「当然や」

司「ああ例え負けると分かっているでも私達は戦う。主君を守る為にな」

恋「月や剛鬼達の為に恋戦う」

詠「月を守る為に僕も戦う」

音々「当然のことを聞くななのです」

月「皆さん」

全員の意志は決まっているようだ



主君を守る為に負けると分かっているけど戦うとはだが

剛鬼「そういうのも悪くないな」

剛鬼は何故かそう思ったいつもならくだらないと馬鹿にして何処かに消える筈なのに

月「剛鬼さん」

月が俺を見る

月「私達に力を貸してくれませんか？」

月の言葉に今までにない決意を感じた

無論答えは決まっている

剛鬼「ああ俺も戦おう。お前等を守る為にな」

それが今の俺の真意だった

剛鬼は歴史を変えて月達を勝利に導くことはできるのか？こつこつ期待！

反董卓連合結成と剛鬼の真意（後書き）

作者「ああ全く」

剛鬼「どうした作者？」

作者「何でもない」

剛鬼「何か機嫌が悪いようだがまあ気にしないでおう」

作者「どうせ僕何て」

剛鬼「では次回も宜しくお願いします」

作戦会議と二人の時間（前書き）

作者「ようやく更新出来た」

剛鬼「全く次からはもうちょっと早く更新しろよ」

作者「ああ頑張ってみるさ」

剛鬼「では楽しんで読んでくれ」

## 作戦会議と二人の時間

現在玉座の間で作戦会議中

詠「やはり籠城戦しかないようね」

剛鬼「ああまあシ水関と虎牢関が抜かれない限り問題はないだろう」

詠「ええそうね」

音々「しかし一人突っ込みたいと言いつ出しそうな馬鹿がいるのです」

剛鬼& a m p ; 詠「確かに」

俺と詠と音々は司を見た

司「何故私を見る？」

剛鬼「司今回はシ水関と虎牢関で敵を抑えることになった」

司「なら私が突撃して敵を蹴散らそう」

三人「はぁー」

俺達は同時に溜め息を溢した

馬鹿だこいつは

剛鬼「お前は馬鹿か？突撃何かする必要ねえよ」

司「何故だ！？」

剛鬼「シ水関も虎牢関も敵が目の前に大勢いる状態になる。そんな中突撃して的中になりたいのか？」

司「うつ」

剛鬼「まあお前はおそらく挑発されて怒って俺達の言うことを聞かず突撃すると思うがな」

司「私はそこまで馬鹿ではない！」

司が否定するが

音々「この前剛鬼との合流を待たずに敵に突撃した奴が言っても説得力がないのです」

司「それは・・・」

霞「そして見事に敵に包囲されてボコボコにされてたしな」

司「えっと・・・」

恋「剛鬼がいなかったら恋達も危なかった」

司「うつ・・・」

剛鬼「俺が間に合わなかったら本当にどうするつもりだったんだろ  
うか」

司「・・・」

司は何も言えなくなった

詠「本当に司の突撃癖には困ったものね」

司「うー」

遂には下を向きながら唸っている

霞「配置はどうするんや？」

詠「そうね音々どう配置したらいいと思う？」

唸っている司を無視し話を続ける

音々「シ水関に司と霞 虎牢関に剛鬼と恋殿と音々と詠でいいと思うのです」

詠「やっぱり僕と同じかじゃあ配置はこれでいい？」

全員「問題ない（で）」



詠「じゃあこれで配置は決定」

配置は決まった

シ水関 霞 司

虎牢関 剛鬼 恋 音々 詠

詠「それじゃあ軍議は終わりよ、各自明日決めた配置についてもうわよそれじゃあ解散」

配置が決定したから軍議は終わった

剛鬼「詠二つばかり頼みがある」

軍議が終わった後に詠に頼んでみることにした

詠「何よ？」

剛鬼「一つ司が出陣したら俺が救援に向かっていいか？」

詠「はあどうして？」

剛鬼「いや皆守るって言ったからさ」

詠「ああ分かったわよ」

何とか了承してくれた

剛鬼「二つ反董卓連合の本陣に行ってきた方がいいか？」

詠「はあー！」

詠がかなり呆れた顔で俺を見てきた

詠「アンタ馬鹿？本陣に行くって死に行く気？」

剛鬼「いや敵を見ておきたくてな」

詠「恋ちよつと」

恋「？」

詠が恋を呼んだ

恋「詠どうかした？」

詠「剛鬼が反董卓連合の本陣に行きたいんでって」

詠め恋に俺を説得させる気だな

恋「剛鬼行っちゃ駄目」

案の定恋は俺に行かないでくれと言ってきた

剛鬼「今回は恋の頼みでも聞けない」

恋「一人で行ったら死んじゃう」

もう恋は泣きそうな顔になっている

剛鬼「俺は死なない絶対に生きて恋のところに帰るよ」

恋「でも・・・」

剛鬼「じゃあ約束だ」

恋「約束？」

剛鬼「ああ俺は絶対に生きて恋のところへ帰ると約束するよ」

恋「本当？」

剛鬼「ああ本当だよ」

恋「絶対帰って来る？」

剛鬼「ああ絶対帰って来るよ」

恋「約束破ったら恋剛鬼嫌いになる」

剛鬼「それは困るな」

ナデナデ

俺は恋の頭を撫でた

剛鬼「行ってもいい恋？」

恋「・・・うん／＼」

恋はけっこう迷ったようだが了承してくれた

詠「はあ恋を説得したんなら行って構わないわよ」

詠がかなり呆れながら了承してくれた

剛鬼「ああありがとう」

詠に礼を言って部屋に戻ろうとしたら

ガシッ

剛鬼「うん恋どうした？」

恋が俺の服を掴んだ

恋「今日は剛鬼、恋と一緒に／＼」

恋が顔を真っ赤にしながら言ってきた

剛鬼「今日は俺と一緒にいたいなの？」

恋「うん／＼」

剛鬼「分かったよ何処に行きたいところある？」

恋「市に行きたい」

剛鬼「ああ分かった」

俺は恋の手を握って市に向かった

現在市

市はいつも通り活気に満ちていた

剛鬼「行きたい店とかあるか？」

恋「うーん」

グウー

恋「あっ／＼」

恋が何処に行くか考え始めたのと同時にお腹が凄い音で鳴った

剛鬼「昼飯にするか」

恋「うん、剛鬼いつも恋にあわせてくれる」

剛鬼「まあそうだな、じゃあ適当に飯屋に入るぞ」

恋「分かった」

俺と恋はとりあえず近くの飯屋に入った

恋「パクパクパクパク」

剛鬼「相変わらずよく食べるな恋は」

恋は並んでいる料理をいつも通りのスピードで頬を膨らませながら食べている

俺はそんな恋の顔を見ながらゆっくり食べている

恋「パクパクゴクン剛鬼」

剛鬼「どうした恋」

恋が俺を呼んだので恋をみた



恋「剛鬼アーン」

恋が手に点心を掴み俺の口の前にやる

剛鬼「アーン パク」

恋が食べさせてくれるようだったから素直に食べた

恋「美味しい？」

剛鬼「ああ美味しいな」

恋「よかった」

恋が嬉しそうな顔をして俺を見る

剛鬼「じゃあ俺からも恋アーン」

俺は箸で点心を掴み恋の口の前にやる

恋「アーン パクパク」

剛鬼「美味いか？」

恋「うん／＼」恋は顔を少し赤くしながら頷いた

そんな感じで食べさせっこをしながら俺達は昼食をとった

昼食が終わり現在はぶらぶらしている

剛鬼「なあ恋」

恋「？」

剛鬼「服屋にでも行かないか？」

何となく聞いてみた

恋「うん、でも恋あんまり可愛い服とか似合わない」

恋は自信なさげに言った

剛鬼「恋は普通に可愛いけどな」

恋「そんなことない／＼」

などと話しながら恋と服屋に入った

剛鬼「色々あるな」

恋「たくさんある」

服屋には俺の時代の服はあまりないが似ている服がたくさんある例え

剛鬼「・・・何故これが？」

俺の手にはメイド服に似ている物が握られている

剛鬼「恋ちよつとこれ着てみてくれ」

恋「分かった」

俺は恋にメイド服を渡すと恋は頷いて着替えに行った

暫くたつと

恋「・・・どうかな？」

恋が恐る恐る着替えて出てきた

剛鬼「あっ！」

黒と白のメイド服を着た恋はいつもと全く感じが変わった。そして何処から持ってきたのかカチューシャまでつけている

恋「剛鬼？」

暫く固まっていたら恋が心配した顔で俺を見ていた

剛鬼「あ悪い凄く可愛いよ」

恋「本当？」

剛鬼「嘘言ってどうするんだよ」

恋「ありがとう／＼／」

恋は顔を真っ赤にしながら俺に礼を言ってきた

剛鬼「ととりあえず他に何かあるか探してみよう」

俺は少し慌てながら言った

恋「うん」

その後何着か恋に試着してもらったが、どれを着ても恋は凄く可愛いかった

剛鬼「それでいいのか？」

恋「うん」

恋の腕には最初に着たメイド服が握られている

「着好きなのを買ってやると言ったらすぐに恋はこれを持ってきたのだ

剛鬼「分かったよじゃあ払ってくるから貸して」

恋「うん」

恋は俺にメイド服を渡すと店を後にした

恋side

剛鬼が服屋さんに連れて行ってくれた

恋はあまり乗り気じゃなかったけど、剛鬼が行こうと言ったから行くことにした

剛鬼「恋ちよつとこれ着てみてくれ」

剛鬼はそう言つて服を渡してきた

恋「分かった」

あんまり着たくなかつたけど剛鬼が選んでくれたから着ることにした

恋「出たくない」

着てみたけど正直似合つてるか分からないし、似合つてないって言われるかもしれないから

でも剛鬼が待つてるから出ることにした

恋「・・・どうかな？」

剛鬼「あっ！」

剛鬼は恋を見ると固まった

恋やっぱり似合っていないのかな

恋「剛鬼？」

固まった剛鬼が心配だったから声をかけた

剛鬼「あ悪い、凄く可愛いよ」

剛鬼が可愛いって言うてくれたでもちょっと信じられなかったから

恋「本当？」

と剛鬼に聞いてしまった

剛鬼「嘘ついてどうするんだよ」

本当に剛鬼は可愛いと思ったみたい



恋「ありがとう／＼」

剛鬼が可愛いつて言ってくれて凄く嬉しかった

剛鬼「とりあえず他に何かあるか探してみよう」

恋「うん」

剛鬼の顔が一瞬赤くなって慌ててるところが可愛かった

暫く剛鬼が選んでくれた服を着たけど剛鬼は全部可愛いつて言ってくれた

好きな服を一着買ってくれて剛鬼が言ったから最初の服を持っていた

剛鬼「それでいいのか？」

恋「うん」

この服は剛鬼が始めて選んでくれて可愛いつて言ってくれた服だから

剛鬼「分かったよじゃあ払ってくるから貸して」

恋「うん」

服を剛鬼に渡して恋はお店を出ることにした

今度剛鬼にあの服を着て起こしに行こう剛鬼喜んでくれるかな？

恋 s i d e o u t

剛鬼「恋買ってきたぞ」

俺は服を買い恋の元へ向かった

恋「ありがとう／＼」

恋は顔を赤くしながら嬉しそうな顔で服の入った袋を受け取った

剛鬼「さてじゃあ適当にぶらぶらするか」

恋「うん」

俺は恋の手を握りまた歩き始めた

恋「」

服を買った後の恋はかなりご機嫌だった

暗くなってきたのでそろそろ戻ることにした

剛鬼「今日楽しかった？」

俺は戻っている途中何となく聞いてみた

恋「うん楽しかった」

恋は普通に楽しかったと言ってくれた

剛鬼「ならよかった」

昔から誰かと何処かに行くことなど一切なかったから少し心配だった

恋「剛鬼は楽しくなかった？」

恋が聞いてきた

剛鬼「楽しかったよ。恋の色んな格好が見れたしさ」

恋「うう／＼／／」

恋は顔を赤くし下を向いて唸っている

他愛ない会話をしていたら恋の家に着いた

剛鬼「じゃあな恋」

俺は手を離そうとしたが

ギュッ

恋が俺の手を強く握ったため離せない

恋「・・・一緒」

そう言えば今日は一緒にいると言ってしまったな

剛鬼「でも動物達はどうするんだ？」

こう言えば動物の世話の為に諦めると思ったのだが

恋「音々がお世話してくれるから大丈夫」

恋は即答だった

剛鬼「じゃあ俺の部屋にとりあえず行くぞ」

恋「うん」

俺はとりあえず恋と一緒に自分の部屋に戻ることにした

剛鬼「……………」

恋「……………」

部屋に着いてから俺と恋は無言でベッドの上で寄り合っていた

恋「剛鬼」

剛鬼「どうした恋？」

俺は仮面をはずして恋を見る

恋「明日無茶あまりしちや駄目」

恋がそう言つと彼女の身体が少し震えていた

剛鬼「ああ分かつてるよ」

俺は恋の身体を優しく抱きしめた

恋「絶対死んじゃ駄目」

剛鬼「ああ約束は絶対まもるよ、俺は生きて恋のところに帰って来るからさ」

恋「うん」

剛鬼「そうだ恋にこれを渡しておく」

俺は恋から離れると鞆から真ん中にルビーのついたネックレスを出した

何お前の鞆は何でもでるのかって？そんな便利なポケットのように何でも出る訳ないだろ

剛鬼「これを取りに恋のところに戻るまで恋がつけてくれ」

俺はそう言った後恋にネックレスをつけてあげた

恋「分かった。大切にする／＼／」

剛鬼「ああ」

恋の嬉しそうな顔を見て俺も嬉しかった

でもまだ恋の身体は震えている

恋「剛鬼」

剛鬼「どうしんっ！」

俺が言おうとした瞬間恋が唇を重ねてきた

恋「はむちゅちゅるるちゅく／／／」

剛鬼「ちゅくれろはむちゅちゅく」

暫くしたら恋が唇を離し離れた

恋「／／／」



恋は顔を真っ赤にし下を向いてしまった

剛鬼「恋からしてくるとは思わなかったな」

俺はついついそんなことを言ってしまった

恋「嫌だった？（ウルウル）」

恋が泣きそうな顔で言ってきた。嫌なわけなのに

剛鬼「そんなわけないだろ。俺からしよと思ったたしよ」

恋「ん！／／／」

俺はそう言つと恋を押し倒し唇を奪った

少しして唇を離したら

恋「恋剛鬼にしてほしい／／／」

恋が顔を真っ赤にしながら言った

剛鬼「してほしいうてそれは本当に好きな奴に」

俺は言っている意味に気付き断ろうとしたが

恋「恋剛鬼のこと好き／＼、それに霞が好きな人にしてもらうのが一番幸せなことって言ってた／＼」

剛鬼「・・・」

何て言えばいいのか俺にはわからなかった

恋「やっぱり恋じゃ嫌・・・（ウルウル）」

そんな顔されたら断れないじゃないか

剛鬼「本当に俺でいいのか？」

恋「うん」

剛鬼「後悔しないか？」

恋「うん」

恋は全て即答だったなら俺も気持ちに応えよう

それに俺も恋のことが好きだからな

剛鬼「痛かったらごめんな」

恋「うん」

俺はその後恋としてしまった（何をしたのはご想像にお任せします）

恋「すうすう」

剛鬼「はあ」

俺と恋はし終わりベットで横になっている

剛鬼「明日無事に帰ってこないとな」

恋はもう疲れて眠ってしまったようなので俺も目を閉じた

いつもより翌朝たいへんなことになることは勿論二人は知らない

作戦会議と二人の時間（後書き）

作者「剛鬼君恋とラブラブだな」

剛鬼「・・・・・・」

作者「キスも何回もしてるし」

剛鬼「・・・・・・」

作者「おまけに最後にやったみたいじゃないか」

剛鬼「ああ五月蠅そんなことはどうでもいいだろ！」

作者「はいはい次回集う御遣いと武将達」

剛鬼「ではまた次の話で会おう」

集う御遣いと武将達（前書き）

作者「最近剛鬼君恋とラブラブすぎやしないか？」

剛鬼「気のせいだ」

作者「君何回恋とキスした？」

剛鬼「覚えてない」

作者「ちっいいいよな剛鬼君はさ」

剛鬼「拗ねるなよ全くでは楽しんで読んでください」

## 集う御遣いと武将達

次の日の朝

剛鬼「すう」

俺は気分よく眠っていた

ムニユ

剛鬼「うん？」

不意に左手に何か柔らかい物を掴んだ感触がした

剛鬼「何だこれは？」

俺は分からずとりあえず強くしたり弱くして掴んでいたら

恋「ん／＼／／／」

隣で眠っている恋がちょっと色っぽい声を出した

剛鬼「恋が掴むたびに反応するということは！」

俺は布団を上げてみるとそこには裸で眠っている恋の胸を掴んでいる俺の手があった

剛鬼「そう言えばやった後すぐ眠ったからな」

昨日俺と恋はやってしまいすぐに眠ってしまった為に今の格好は裸である

剛鬼「はあ全く面倒だな」

俺は服を着ると恋を起こしに行く

剛鬼「恋起きろ」

ゆさゆさ

恋「うん」



ゆすつても中々起きない恋

剛鬼「ちっしょうがない」

チュッ

俺は恋に軽いキスをした

恋「うゝん剛鬼？」

恋が寝惚けながら起きたようだ

剛鬼「恋おはよう。とりあえず服着てくれ」

俺は恋の服を渡して言った

恋「・・・（コク）／／／」

恋は顔を赤くし黙って頷いて服を着た

剛鬼「さてまだ時間けっこうあるから、恋鍛錬の相手をしてくれな  
いか？」

恋「分かった」

恋が服を着た後暇だったので鍛錬をすることにした

剛鬼「ああそれにしても昨日の恋は可愛かったな」

俺は調練場に向かう時に昨日のことを思い出し呟いた

恋「そんなことない／＼／」

恋は顔を赤くし下を向いている

剛鬼「俺の赤ちゃん産みたいって言った時が一番可愛かったな」

あの発言の時の恋は本当に可愛かった

恋「それは言わないでほしい／＼／」

恋は更に顔を赤くした

剛鬼「まあ確かに音々に聞かれたらたいへんなことになるな」

音々のことだ睨むまくって陳宮キックを何百発もうつてくるだろう

恋「またしてほしい／＼／」

またまさかの恋のおねだりまあ予想はしていたが

剛鬼「ああ分かったよ今度な」

また泣きそうな顔で言われたら困るのでそう言っておいた

恋「うん」

相変わらずの恋の嬉しそうな顔を見ると何故か俺も嬉しくなる

霞「あれ剛鬼と恋やないか」

調練場に向かう途中に霞と会った

剛鬼「おはよう霞。今から鍛錬か？」

霞「ああそうやけど剛鬼と呂布ちゃんも？」

恋「うん」

剛鬼「ちょうどいい一緒に行かないか？ちょっと面白いこともするしな」

霞「ああええよ」

こうして俺達は三人で調練場に向かった

霞「剛鬼準備はええか？」

ついで早々霞は飛龍偃月刀を構えた

剛鬼「まあ、さて今武器を出すから」

俺はそう言つと制作を開始した

剛鬼「これでいくかこい正式外典ガマリエル！」

霞& a m p ; 恋「えっ！」

霞と恋は目を疑つた

それはそうだが何もなかった俺の右腕に見たことがない武器が突然現れたのだから

剛鬼「重さは問題ないのだが動きにくいな」

俺はガマリエルを軽く振りながら言つた

作者「一応武器の説明正式外典ガマリエルとは弦楽器のような形をしたパイルバンカーである」

剛鬼「一々出てくるな」

一応ツツコンだがやはり返事が返ってこない

霞「なあ誰と話してるんや？」

剛鬼「何でもない」

また俺だけ恥をかいた

霞「まあいいかほな行くで！」

霞が飛龍偃月刀を構え突っ込んできた

剛鬼「くっ」

俺はそれをガマリエルを盾にして防いだ

霞「硬！何やその武器」

剛鬼「こいつは動きにくいが盾にもなるんだよ」

ブン

俺はガマリエルを振るったが見事に空を斬った

霞「危な！それ当たったらアウトやな」

霞は普通に避けていた

剛鬼「ちっやっぱり慣れてない武器は扱いにくいな」

霞「普通に使いこなしてるように見えるんやけど」

剛鬼「さあどうかな」

霞「ちようどええうちの龍巢閃試させてもらっで」

剛鬼「いいだろう来い」

俺はガマリエルを構える

霞「ハア龍巢閃！」

霞が龍巢閃を放つ

剛鬼「ほうちゃんと鍛錬をしたようだなだがハア」

ガキン

霞の龍巢閃をガマリエルを振るい弾き俺は次の攻撃に繋いだ

剛鬼「ハア！」

バキン

ガマリエルから凄いスピードで刃を前方へ放った

霞「なっ！」

当然霞はパイルバンカーなど知らない為その攻撃に驚いていたが咄嗟にガードした

霞「くっ！」



ガードはしたものの威力が凄まじく霞は軽く吹っ飛んだ

霞「くう」

剛鬼「俺の勝ちだな」

俺はガマリエルを霞に向けた

霞「ああまた負けたわ」

そう言っただけは起き上がった

剛鬼「ちゃんと龍巢閃の鍛錬を続けていたようだな」

霞「まあうちも強くなりたいからな」

剛鬼「これからもちゃんと鍛錬しろよ」

ナデナデ

俺は霞の頭を優しく撫でた

霞「ああ分かつとるよ／＼／」

霞は顔を赤くして返事をした

うーむどうも最近撫で癖がついてしまったようだ

恋「・・・剛鬼」

恋が呼んだので振り向いたら恋がもの欲しそうな顔をして立っていた

剛鬼「よしよし」

ナデナデ

俺は恋の頭を優しく撫でた

霞「相変わらず仲がいいな二人は」

霞がからかってきた

剛鬼「いいだろ別に」

霞「ハハハ」

霞は笑って離れていった

剛鬼「じゃあ恋鍛錬するぞ」

恋「うん」

恋は頷くと方天画戟を構える

剛鬼「さて次は何で行こうかな」

俺は制作を開始した

剛鬼「今度はこれだなこいルシフェル」

俺は魔界の武器ルシフェルを制作し装着した

作者「また一応武器説明ルシフェルとは爆発する剣を無限に出せる魔界の武器である」

剛鬼「そんなにでたいのかお前はよ」

またツツコンでしまったがやはり返事は返ってこない

恋「剛鬼誰と話してる？」

剛鬼「何でもない」

くそまた俺だけ恥をかいたというか奴はそれが目的なのか

剛鬼「まあいいかいくそ恋」

俺は両手に赤い剣を出現させた

恋「行く」

恋はそのままある構えをした

剛鬼「ほう牙突か面白い」

そう恋は牙突の構えをしたのだ

剛鬼「お前の鍛錬の成果も俺に見せてみる」

俺も両手の剣を構える

恋「ふっ！」

恋が牙突を放ってきた

カキン

剛鬼「痛」

俺は両手の剣を重ねてそれをガードしたが少しダメージを受けた

霞「はや！」

霞はその速度にかなり驚いているようだ

実際教えた時より遥かに速いし威力も比べものにならなくなっていた

剛鬼「恋もちゃんと鍛錬してたようだな」

恋「うん」

剛鬼「だがまだ俺の領域には程遠いな」

俺は笑って言った

恋「鍛錬して剛鬼と同じくらい強くなる」

おいおいじゃあどれだけ鍛錬する気なんだ恋は

剛鬼「剃」

俺は剃を使い恋から距離をとった

剛鬼「恋と霞この剣実は剣として使う以外にもう一つ使い方があるんだ。どういう使い方が分かるか」

恋「・・・分からない」

剛鬼「恋もうちよつと考えるよ」

恋は即答だった。恋も頭がよければ最強と言えるんだがな

容姿もいいし美人だしスタイルも結構いいし武力は最強といえるし

だが唯一の欠点は頭が悪く若干猪なところ

剛鬼「はあ霞分かるか？」

とりあえずそこそ頭がきれる霞に聞くことにした

霞「普通の剣より小さいから投げるのに使っんか？」

剛鬼「けっこう鋭いな当たりだ」

恋「投げる？」

恋は意味がよく分かっていないようだ

剛鬼「つまり剣としても使えるし、矢のように相手に向かってとばして使うということも出来るということ。分かったか？」

恋「うん」

恋は一応頷いたから分かったようだ

剛鬼「だがこの剣には他にある能力があるんだよ」

恋& a m p ;霞「能力？」

剛鬼「まあ今から恋相手に試してやるよ行くぞ恋！」

恋「（コク）」



恋がいつも通り方天画戟を構える

剛鬼「ふっ！」

俺は持っている剣を投げた

キン　ザク　ザク

しかし剣は普通に恋に弾かれ地面に刺さった

剛鬼「まだまだ」

俺は移動しながら両手に三つずつ剣を出現させ一つずつ投げた

だがそれも全て恋に弾かれ地面に刺さった

霞「剛鬼そんなもん投げても呂布ちゃんには当たってないで」

剛鬼「当てるのは目的じゃない」

霞「あっ！」

霞は気づいたようだ恋のまわりに剣が刺さっていることに

剛鬼「ふっ！」

俺は一つ剣を出現させ投げた。それと同時にっていた薔薇も投げた

カキン バン

恋「！」

恋が剣を弾いた瞬間剣が爆発しまわりに刺さっていた剣も同時に全て爆発した

剛鬼「そらよ」

ガキン ザク

砂煙でまわりがよく見えない中俺は剣を出現させ恋の方天画戟を弾き飛ばした

剛鬼「この武器は今のうちに好きな時に剣を爆発させれるんだ」

霞「ほえー凄い武器やな」

恋「いきなり爆発してびっくりした」

二人ともけっこう驚いているようだ

剛鬼「さて鍛錬はこれぐらいで終わるか」

俺はルシフェルを外した。するとルシフェルは消えた」

霞「なあ剛鬼うちに使ってた武器と今の武器何処行ったんや？」

恋「恋も気になる」

剛鬼「もう使わないから消しただけだよ」

説明が面倒なので俺はそう言って歩き出した

現在虎牢関

鍛錬の後に俺達全員は配置された場所に向かった

剛鬼「さてそろそろ行くか」

恋「絶対約束まもる」

恋が心配そうな顔で言ってきた

剛鬼「ああ分かってるよ」

ナデナデ

とりあえず恋の頭を撫でておいた

剛鬼「じゃあな行ってくるな恋」

恋「・・・うん」

剛鬼「そんな顔するな」

恋「でも心配」

はあ全くまあこれが当然の反応だよな

剛鬼「大丈夫だって」

俺はそう言い恋を優しく抱きしめた

恋「絶対帰ってくる」

剛鬼「ああ絶対帰ってくるよ」

俺は恋に軽いキスをした

恋「帰ったらまたキスする」

恋が顔を赤くしながら言ってきた

剛鬼「ああじゃあ俺は行くぜ」

恋「うん」

俺はその後恋から離れ反董卓連合の本陣に向かった

現在本陣

剛鬼「けっこう兵士がいるな」

やはり本陣というだけあって兵士がたくさんいる。特に金色の鎧の兵士が

剛鬼「とりあえず奴等が集まっている天幕を探すか」

俺は気配を完全に消し武将達が集まっている天幕を探した

？「オーホッホッホ」

不意に天幕から馬鹿な笑い声が聞こえた

剛鬼「此所だな」

俺は天幕に黙って侵入した

中に入ったら曹操達や他の諸侯達がいた

剛鬼（何やら決めているようだな）

俺はとりあえず壁にもたれて話を聞くことにした

話の内容は総大将を誰にするかと言う内容だった

剛鬼（全く阿呆かこいつらは）

しかもさつきからずっと同じ話をしているようだし

呆れていたら数人の男女が天幕に入ってきた

袁紹「あら貴方達は誰ですの？」

袁紹が入ってきた奴等に聞いた

劉備「平原の相劉備です」

ピンク髪の少女が自己紹介し

一刀「劉備軍の天の御遣い北郷一刀だ」腰に日本刀を持った青年が  
その後に自己紹介し

大輝「同じく劉備軍の天の御遣い兼軍師の伊東大輝だ」

背中に薙刀を背負った青年がその後について自己紹介した

袁紹「そちらの皆さんは？」



袁紹はまだ自己紹介していない奴等に聞いた

一光「魏の天の御遣い杉浦一光だ」

腰にサバイバルナイフを持った青年が言った後

紅魔「同じく魏の天の御遣い黒神紅魔だ」

身の丈ぐらいある大剣を持った青年が自己紹介した

曹操「あら二人ともどうしたの？」

曹操が二人に話掛けた

一光「華琳が遅いから様子を見にきた」

紅魔「ついでに他の諸侯達を見にきた」

曹操「そうまあ今はこんな感じよ」

曹操がそう言うと二人は状況を理解したようだ

袁紹「それで残りの貴方達は？」

孫策「袁術の客将孫策よ」

ピンク髪の奴が名乗ると

周瑜「孫策軍の軍師周瑜だ」

眼鏡をかけた奴も自己紹介し

竜也「孫策軍の天の御遣い海道竜也だ」

最後に身の丈を越える鎌を持った男が自己紹介した

袁紹「貴方達が御遣いなどと言う胡散臭い方達ですの？」

袁紹が少し挑発紛いなことを言った

一光「だつたら何だ？」

一光と名乗った青年が袁紹を睨んだ

袁紹「いえ何でもありませんわそれより皆さん」

袁紹はまた総大将の話をする

袁紹「それで誰が一番適任だと思いますか？」

正直に自分になりたいって言えばいいのに本当にただの馬鹿のようだ

剛鬼「お前等いつまでこんなくだらないことやるんだ？」

終わらせてやろうとつい口を出してしまった

全員「何！」

いきなり俺が出現して驚いているようだ

曹操「剛鬼！」

曹操以外「鬼面！」

剛鬼「袁紹総大将はお前でいいだろ別によ」

俺がそう言つと

袁紹「し仕方ないですわねじゃあ私がやりますわ」

袁紹は総大将になった

剛鬼「さてじゃあ俺はこれで消えるぜ」

袁紹「待ちなさい」

歩きだそうと思ったら袁紹に呼び止められた

剛鬼「何だ？」

袁紹「貴方袁家に仕えてみませんか」

袁紹が勧誘してきたが

剛鬼「俺は馬鹿に仕える気はない」

即答してやった

袁紹「何ですって!」

袁紹は激怒したようだ

剛鬼「それに俺は今客将何でな」

曹操「へー誰に仕えているのかしら?」

曹操が尋ねてきた

剛鬼「董卓にだ」

全員「えー！」

一刀「つまりお前は俺達の敵ってことだよな？」

一刀と名乗った青年が聞いてきた

剛鬼「ああそうだな」

孫策「貴方一人で敵陣に乗り込んで無事に帰れると思うてるの？」

孫策が殺気を放ちながら聞いてきた

剛鬼「お前等ごときに俺が殺られると思っているのか？」

俺は殺気をフルに放ち答えた

バタ　バタ

御遣い達と龍備　孫策　曹操達はギリギリ耐えているがそれ以外は  
全員気絶したようだ

剛鬼「ほう俺の殺気に耐えられるとはやるな」

劉備「どうして貴方は董卓さんに仕えているんですか？」

不意に劉備が質問をしてきた

剛鬼「お前達に話す気はない」

俺はそう言い天幕から出ようとした瞬間

剛鬼「鉄塊」

ガキン

御遣いの一人黒神紅魔が攻撃してきたので俺は鉄塊でガードした

紅魔「何！」

剛鬼「此所が戦場じゃなくてよかったな」

ゲシッ

紅魔「ぐはっ」

俺は黒神を殴り飛ばした

剛鬼「じゃあな連合の皆さん、戦場で俺に会わないようせいぜい気をつけるんだな」

俺は剃を使い天幕を後にした

現在虎牢関

剛鬼「恋帰ったぜ」

俺は戻ってすぐに恋の元へ向かった

恋「剛鬼」



剛鬼「うわっと」

恋が抱きついてきたので俺は優しく抱きしめた

恋「剛鬼無事でよかった」

剛鬼「約束したる無事に帰るって」

恋「うん」

その後俺は恋に帰ったらキスすると言ったのでキスしようと唇を近づけた瞬間

音々「陳宮キック!」

ゲシッ

剛鬼「ぐはっ!」

完全に油断していた為に陳宮キックをもろ背中くらってしまった

剛鬼「まさかお前のへなちょこキックをくらうとわ」

俺は背中を抑えながら音々を見る

音々「恋殿に無理矢理口づけしようとしたからなのです!」

いや無理矢理じゃあないし

恋「剛鬼大丈夫?」

恋が俺の背中をさすってくれる

音々「恋殿そんな奴に気遣いは無用なのです」

恋「・・・五月蠅い」

音々「れ恋殿?」

恋は怒っているようだ。まあキスするの邪魔されたからだな

恋「・・・次に剛鬼蹴ったら恋音々のこと許さない」

恋が少し睨むながら言った

音々「れ恋殿ーもう蹴らないから許してくれなのです」

恋「分かった」

恋がいつもの顔に戻った

音々「覚えていやがれなのです」

音々はそう言って行ってしまった

剛鬼「これで当分蹴られなくてすむな」

恋「剛鬼もう大丈夫？」

剛鬼「ああ大丈夫だよ」

俺はその後恋に軽くキスをした

剛鬼「恋キス好き？」

何となく聞いてみた

恋「剛鬼がしてくれるなら好き／＼／」

恋が顔を赤くしながら答えてくれた

剛鬼「そうかならよかった」

何か最近キスばかりしてる気がして実は嫌だと思われるのか心配だったのだ

剛鬼「うん？」

何だ洛陽にかなりたくさんのお配を感じたと思ったら一瞬でお配が全て消えた

恋「剛鬼気付いた？」

どうやら恋も気づいていたようだ

剛鬼「ああ気配が一瞬で全て消えた」

洛陽で何かおこっているのか？

剛鬼「まさかな」

恋「？」

剛鬼「何でもないよ恋」

俺はそう言ってまわりを見渡した

剛鬼「何か嫌な予感がするな」

この剛鬼の嫌な予感が的中するのはまだ剛鬼を含め勿論誰も知らない

## 集う御遣いと武将達（後書き）

剛鬼「遂に御遣いが全員出てきたな」

作者「これからのストーリーに彼等そして君も大きく絡んでくるよ」

剛鬼「そうかなら俺も頑張るとしますか」

作者「恋をとられないようにか？」

剛鬼「違う！戦闘とかだよ」

作者「ハハハ分かってるさ。ではまた次回に会いましょう」

## シ水関攻防戦（前書き）

作者「やっと更新出来ました」

剛鬼「今回はけっこう長いな」

作者「確かにでも今回君はかなり凄いようじゃないか」

剛鬼「そんなことないよ」

作者「では楽しんで読んでください」

## シ水関攻防戦

詠「司と霞大丈夫かしら」

剛鬼「何とか大丈夫だろだが司が一番心配だな」

二人「はあ」

俺と詠は同時に溜め息を溢した

剛鬼「詠シ水関がおちたらお前は洛陽に戻れ」

詠「何で戻らないと行けないの？」

剛鬼「さっき洛陽でたくさんの気配が現れたと思ったら一瞬で全て消えた」

詠「え！」

剛鬼「もしかしたら誰かが裏で暗躍してるかもしれない。だからシ水関がおちたらお前は月のところに向かってほしいんだよ」



詠「分かったでもアンタ達はどつするの？」

剛鬼「戦うには戦うがやばくなったら洛陽に戻る」

俺はそう言っておいた

詠「分かったわじゃあ音々達にさっきの話してくるから」

剛鬼「ああ頼んだ」

詠はその後音々達の元へ向かった

恋「剛鬼」

剛鬼「どうした恋」

恋が呼んできたので恋のほうへ向かった

恋「お客さん」

剛鬼「客？」

誰だろうと考えていたら

知也「よう剛鬼」

何か背負った知也が恋の後ろにいた

剛鬼「知也かちょうどいいお前洛陽に突然現れた気配をどう思う？」

知也「それ何だが近くでこんな奴を捕まえたんだよ」

知也はそう言っていると背負っていた男を降ろした

剛鬼「誰だこの白装束？」

知也「こいついきなり俺を悪の根源とか言っただけ襲ってきたんだよ」

剛鬼「意味が分からんことを、だが洛陽の気配の正体はこいつ等かもしれないな」

知也「ああおそろくな」

確証はなかったがおそろくこいつ等だろう

剛鬼「警戒が必要なようだな」

知也「ああじゃあ俺は援護する場所に戻るぜ」

剛鬼「ああ頼んだ」

知也「じゃあな」

知也はそう言つと虎牢関を後にした

現在シ水関側

司「離せ霞！あそこまで馬鹿にされて黙ってなどいられるか！」

現在司は関羽と孫策の挑発によって怒り状態である

霞「あほ！あれは作戦やあやっつてうちらを挑発してシ水関を開けさせる為の」

霞が必死になって止めているが

司「だがもう私は我慢の限界だ！あそこまで馬鹿にした罪を奴等に償わせてやる！」

司はそう言つと霞の腕を振りほどき自分の部隊のところへ行つてしまった

霞「くそ張遼隊は虎牢関に下がるで」

兵士「しかし華雄將軍が！」

霞「もううちではアイツを止められん。シ水関が墮ちるのもこのままでは時間の問題や」

兵士「・・・分かりました」

兵士は納得し虎牢関に下がるように伝えに行った

霞「剛鬼司のこと頼むで」

霞はそう言つと一本のナイフを空に投げ自分の隊と一緒に虎牢関に下がつた

司「全員我が武を侮辱した罪を思い知らせてやれ！」

その少し後に司がシ水関の城門を開け連合軍に突撃した

現在虎牢関

剛鬼「さて行くか」

俺は霞の投げたナイフを手を持ちながら司の元へ向かう為恋の元へ行った

何で霞が投げたナイフを俺が持つてゐるかつて？後で説明するよ

剛鬼「恋司を回収しに行つてくると詠と音々に言っておいてくれ」

恋「分かった。剛鬼気をつけて」

剛鬼「ああじゃあ行ってくる。剃」

俺は剃を使い司の元へ向かった

司side

司「ハア！」

ザシュ

劉備兵「がはっ」

私は戦斧で劉備軍を蹴散らしているがはっきりに言って劣勢だった

司「そら！」

ザク

私の部隊も完全におされ始めてきた

司「華雄隊は此所は私に任せ虎牢関へ下がれ！」

ザシュ

兵士「しかし華雄將軍それでは貴方が！」

司「私もすぐに後を追うだから行け！」

ザシュ

私は部隊を助ける為に必死に戦斧を振るう

？「貴様が華雄か？」

司「ああそつだ貴様は何者だ？」

関羽「我が名は関羽 字は雲長貴様のその首もらいつける」

司「ほざけやれるものならやってみろ！」

関羽「参るハア！」

関羽が青龍偃月刀を横風ぎに振るつ

キン

司「くっ！」

私はそれをガードし

司「ハア！」

関羽に戦斧を振るつた



関羽「ふっ！」

ガキン

関羽も青龍偃月刀を振るい私達はつめぜりあいになった

関羽「さすがは華雄と言ったところか」

司「貴様もな」

私は戦斧で弾き距離をとり再び関羽とぶつかった

司 side out

剛鬼「ようやく着いた」

俺はようやくシ水関に到着した

兵士「剛鬼將軍！」

兵士が俺に気付き近寄ってきた

剛鬼「華雄はどうした？」

兵士「私達を逃がす為にまだ戦っています。剛鬼將軍 華雄將軍をお助けください！」

剛鬼「ああその為に来た。お前達少し頼みがある」

兵士「何でしょうか？」

剛鬼「俺が奴等を止めている間にシ水関の城門を閉めてくれ、華雄を見つけたらすぐにお前達のところへ投げる。そしてらお前達は華雄を連れて虎牢関へ向かえ」

兵士「しかしそれでは剛鬼將軍が！」

剛鬼「俺は大丈夫だ頼んだぞ」

兵士「・・・分かりました無事に帰還することを願っています」

兵士はそう言つと近くの兵士達に内容を伝えに行つた

剛鬼「さてと制作こいルシフェル」

俺はルシフェルを装着し両手に剣を出現させシ水関のまわりにいる敵を斬りながら司を探した

剛鬼「ふっ！」

俺は持っていた剣を何十個も地面に刺しながら敵を斬りさく

剛鬼「見つけた」

俺は司を発見し司の元へ向かった

司side

司「ちっ」

私は戦斧を振るうが簡単に関羽にそれをガードされる

司（全員逃げきるまで時間をかせがねば）

関羽「もらった！」

ガキン　ザク

司「しまった！」

武器を弾き飛ばされ私はなすすべがなくなった

司「くっさあさっさと殺せ」

私は潔く殺されることを選んだ

関羽「ならば言葉通り死ね！」

関羽が青龍飛偃月刀　を振り上げた瞬間

シュッ

私の後ろから何かが関羽に向かって飛んで行った

関羽「何！」

関羽はそれを弾き飛んで行った剣のような物は地面に刺さった

そしてそのすぐ後に私のすぐ隣を通りすぎ前に立つ男がいた

いつもピンチの時の私を助けてくれるあの男が

司「剛鬼？」

剛鬼「よう司助けに来たぞ」

そう剛鬼が来てくれたのだ

司 side out

関羽「貴様何者だ？」

剛鬼「鬼面と名乗っておこつ」

俺は名乗った後振り返り司を見た

剛鬼「さてととりあえず」

俺は司を持ち上げ近くに刺さっていた戦斧を拾い上げた

司「一体何を？」

剛鬼「飛んでけこの猪が！」

司「なあー！」

俺はシ水関のギリギリ空いている城門の部分を狙い司と戦斧を投げた

見事に空いている部分を司が通過し兵士が確認すると城門を完全に閉めた

関羽「どういっつもりだ貴様は？」

関羽が聞いてきたので俺は振り返った

剛鬼「アイツ等を逃がす為だ」

関羽「その為に貴様は此所で死ぬ気か？」

剛鬼「死なないよ、ただ俺達の兵が虎牢関に退くまでお前達には俺の相手をしてもらっぜ」

関羽「たった一人でしかも包围された状態で何が出来る？」

剛鬼「さあ何が出来るかね！」

俺は覇気と殺気をフルに出した

その瞬間

バタ バタ バタ

俺を囲んでいた兵士全員と俺の視界に入る兵士全員が気絶した

関羽「何だ私が震えている！」

関羽は耐えているようだが身体が震えている

剛鬼「さて邪魔者はいなくなった始めようか」

俺はそう言い両手の剣を構えた

関羽「我が名は関羽雲長恐れるものなど何もない！」

関羽もそう言い青龍偃月刀を構える

剛鬼「行くぞ」

シュン

関羽「何消えた！」



俺は剃を使い懐に入る

剛鬼「遅いな」

関羽「くっ」

剣を刺そうとしたが関羽はそれを身体を左に倒し避け俺から距離をとった

関羽「何だ今のは？」

剛鬼「離れているからって油断は大敵だ」

関羽「何！」

俺は関羽の背後に移動し剣を振るった

関羽「くっ」

キン

だが関羽はそれをギリギリガードした

関羽「はあ！」

関羽は剣を弾き俺に突っ込んできた

剛鬼「遅い！」

俺は剣で関羽の突きの軌道を逸らし蹴りを見舞ってやった

関羽「ガハッ」

関羽は方膝をついた

剛鬼「ふっ！」

俺はそこに拳を見舞った

ゲシッ

だが関羽はそれを青龍偃月刀でガードした

関羽（何て重い一撃だ！拳でここまでの威力がだせるとわ）

しばらくつめぜり合っていると

？「うりゃりゃ！」

？「隙あり！」

剛鬼「鉄塊」

ガキン

背後から二人攻撃してきたので鉄塊でガードした

？「ありゃ？」

？「何故斬れない？」

剛鬼「話にならん」

シュン

二人「消えた（のだ）！」

俺は剃で三人と距離をとった

剛鬼「お前等誰だ？」

一応名前を聞くことにした

張飛「鈴々の名は張飛 字は翼徳なのだ」

趙雲「我が名は趙雲 字は子龍」

剛鬼「ほう猛将が三人も揃うとはな、まあ俺の相手じゃないがな」

関羽「何！」

趙雲「我等を侮ってもらっては困るな」

張飛「鈴々が本気出せばお前何かけちょんけちょんなのだ！」

剛鬼「ほうならやってもらおうか餓鬼？俺は此所から動かないから俺にダメージをおわせてみる」

張飛「鈴々は餓鬼じゃないのだー」

関羽 & a m p ; 趙雲「待て鈴々」

張飛は二人の言うことを無視し俺に突撃してきた

張飛「うりゃー！」

張飛は蛇矛を全力で振るった

剛鬼「鉄塊」

ガシッ

俺はそれを鉄塊を使い掴んだ

張飛「ありや？」

剛鬼「飛べ餓鬼」

俺は張飛を蛇矛ごと関羽のところへ投げた

関羽「鈴々！」

関羽は張飛を受け止めた

関羽「貴様よくも鈴々を！」

張飛「いてててもう許さないのだ！」

趙雲「参るはあ！」

関羽 張飛 趙雲が同時に俺に向かってきた

剛鬼「紙絵」

俺は三人の攻撃を全て紙絵を使い避ける

剛鬼「どうした三人がかりでこんなもんか？」

俺は避けながら三人を挑発する

関羽「嘗めるな！」

張飛「この！」

趙雲「てーい！」

三人の攻撃を全て避けてみせる俺

関羽「何故当たらない？」

剛鬼「むきになって攻撃するからさ」

関羽「ほざけ！」

趙雲「私はむきになってなどいない！」

張飛「うりゃ！」

剛鬼「はあ全く自分では気づいてないようだな」

俺は溜め息を溢した

剛鬼「ああいい加減飽きたな」

俺は剃で距離をとった

関羽「飽きただと？」

関羽が怒気を混じらせ言った

剛鬼「ああお前等の相手は飽きたそれに時間かせぎはもう十分だろ」



趙雲「だが城門はもう閉まっているどうやって虎牢関に戻るつもりだ？」

剛鬼「飛び越えるんだが」

三人「はあ？」

三人が呆れた顔で言った

剛鬼「じゃあな雑魚ども」

俺はそう言い後ろを向いた瞬間

三人「てりゃー！」

剛鬼「鉄塊 空木」

ガキン バアン

三人が再度攻撃してきたので鉄塊 空木でガードした

三人「なっ！」

三人は軽く吹っ飛んだ

関羽「何故斬れない？」

張飛「何で攻撃が効かないのだ？」

趙雲「何かの妖術か？」

三人はそう言い立ち上がって武器を構えようとしたが

三人「う腕が上がらない（のだ）！」

剛鬼「お前達のさっきの斬撃の衝撃を全てお前達の腕に返したから当然だ」

三人「何！」

剛鬼「それじゃあまた会おうお嬢さん達」

俺はシ水関に向かって走り出した

三人「待て！」

三人は立ち上がり追いかけようとしたが

剛鬼「ふっ」

ザク ザク ザク

俺は三人のすぐ近くの地面に剣を三つ投げた

関羽「何処を狙っている？」

張飛「地面を狙っても意味がないのだ」

趙雲「何か狙いがあるのか？」

剛鬼「よく分かったな趙雲その通りだ」

俺は薔薇を投げた

そしてその瞬間刺さっていた剣が全て爆発した

三人「何！」

剛鬼「じゃあな」

俺はその間にシ水関に向かった

関羽「動ける者は奴を追え！」

趙雲「くこの砂煙では」

張飛「前が見えないのだ」

三人は剛鬼を追おうとしたがあらかじめ刺しておいた剣も全て爆発させた為砂煙が酷く追えない状態だった

剛鬼「さてと」

俺はシ水関の前に到着した

剛鬼「月歩」

俺は六式の月歩でシ水関の上まで向かった

剛鬼「よっと」

無事に上まで到着

剛鬼「劉備軍と曹操軍 孫策軍がシ水関にとりついたか」

俺はシ水関の天辺で様子を見た

剛鬼「さてとじゃあ用がなくなったシ水関を破壊し敵を減らしてお  
くか」

俺はルシフェルを外し制作を開始した

剛鬼「こい約束された勝利の剣」エクスカリバー

俺は約束された勝利の剣を持ちエクスカリバー

剛鬼「破壊力調整シ水関を破壊する程度」

破壊力を調整し

剛鬼「月歩」

俺は月歩を使い中に浮き約束された勝利の剣を振るエクスカリバーった

剛鬼「約束された勝利の剣」エクスカリバー！」

剣から神々しい光が放たれそれはシ水関に直撃した

バァン

一瞬でシ水関は破壊され瓦礫の山となった

虎牢関側

霞「何がおこったんや？」

詠「シ水関が破壊された」

恋「・・・剛鬼」

シ水関のほうを見ていた三人は何がおこったのか理解できなかった

音々「詠司が戻ってきたのです」

恋「何処？」

音々「城門のところにつて恋殿」

恋は聞いた瞬間司の元へ走り出していた

恋「司剛鬼は何処？」

恋は司のところへ着いた瞬間聞いた

司「恋かアイツはまだシ水関にいる」

恋「・・・」

ガシッ

司「何処に行く気だ恋」

恋が無言で近くの馬に乗ろうとしたのを司が止めた

恋「剛鬼のところ」

司「剛鬼は大丈夫だ」

恋「でも・・・」



司「アイツはお前に此所で待ってると言っていた」

司はとりあえず恋を止める為にそう言っておいた

恋「本当？」

司「ああ無視したら剛鬼が怒るぞ」

恋「・・・分かった」

恋は澁々了解した

司「だが一体さっきの光は？」

司達はシ水関のほう再び見た

連合側

劉備 side

凄い眩しい光がシ水関に落ちたと思ったたら一瞬でシ水関は壊れていた

劉備「一体何があつたのかな？」

孔明「分かりません。近くの愛紗さん達に聞いてみないと」

鳳統「他の皆さんは無事でしょうか」

劉備「大丈夫だよきっと」

私はそう言つてまた壊されたシ水関を見た

劉備 side out

北郷 side

一刀「一体何が」

大輝「これは予想外だなまさかシ水関を破壊する奴がいるとわ」

俺と大輝は哑然としていた。さっきの光で完全に瓦礫の山となったシ水関を見て

関羽「ご主人様　大輝殿」

愛紗　鈴々　星が俺達のところへ来た

一刀「よかった三人共無事だったんだね」

趙雲「はい我等は大丈夫ですが」

張飛「でもシ水関にいた部隊の人達は皆恐らく死んじったのだ」

鈴々が悔しそうな顔で言う

一刀「とりあえず愛紗達が無事でよかったよ」

とりあえず俺はそう言っておいた

大輝「ところであの光は誰が放ったか分かるか？」

大輝が愛紗達に聞いた

関羽「はい恐らく鬼面ではないかと」

一刀「鬼面って確か天幕で会った人かな？」

大輝「ああそうだろう。ところで鬼面の實力は分かるか？」

関羽「恐らく飛將軍呂布に匹敵するほどだと」

趙雲「いや恐らく呂布以上だろ」

大輝「そんなに強いのか？」

鈴々「攻撃が全く当たらなかったし当たってもくらってなかったのだ！」

一刀「え？攻撃がくらない？」

関羽「奴は鈴々と星が背後から攻撃しても平気な顔をしており、我等三人が攻撃した時は攻撃が効かず更に腕が上がらなくなりました」

愛紗がそう言い

趙雲「それにまだ力を隠していたようでしたし」

星が悔しそうな顔で言う

大輝「想定外の化け物がいたとは誤算だった」

一刀「ああまさかそこまでの奴がいたとは」

俺はまた破壊されたシ水関を見る

北郷 side out

曹操 side

曹操「まさかシ水関を破壊するとはね」

私は今壊れたシ水関を見ている

夏侯淵「華琳様恐らくあれをやったのは」

曹操「ええ剛鬼でしょうね」

夏侯惇「まさか華琳様いくらあの男でもそんなことは」

春蘭は多少怯えているようね

曹操「春蘭も見たでしょ誰かが空中で剣を振るうところを？」

夏侯惇「はい見ました」

曹操「一光と紅魔はどう思う？」

一光「恐らく鬼面だと思うが」

紅魔「俺も信じられないが同じだな」

曹操「貴方達三人で剛鬼を捕らえることは可能かしら？」

私は剛鬼がほしいあのような武を持つ者がいれば私の覇道を邪魔する者はいなくなるは

一光「無理だな」

紅魔「ああ恐らく無理だな」

夏侯惇「私もそれは無理だと」

驚いたことに春蘭ですら無理と言ったいつもなら任せてください！  
と言つのに

曹操「それはどうしてかしら？」

一光「さつき鬼面の戦闘を監視させていた凧と真桜から劉備の配下  
関羽 張飛 趙雲の三人を相手にしてるにも関わらず、まるで遊ん

でいるようだったと二人が言ったからだ」

夏侯淵「何あの三人を相手に遊んでいるとは！」

秋蘭は驚いているようね。確かにあの三人を相手に遊んでいるとは私も驚きね

紅魔「それに奴は不可思議な技を使う。それに天幕で見たが實力は俺達より遙か上だろう」

夏侯惇「私はさっきのあれを思い出すととても勝てる気が」

曹操「そう、でもそう聞くとますますほしくなるわね」

荀イク「華琳様これ以上男を入れるのは！」

桂花がやはりと思う反応をしてきた

曹操「桂花でも剛鬼の武力は私の覇道を進むのに必要だと思つたのよ」

荀イク「ですが今の話を聞くと我が軍全てを使っても捕らえられる



か分かりません」

曹操「はあ分かったは今回は諦めましょう」

私はやむなく諦めることにしたでも必ず剛鬼を手に入れてみせるは

曹操「それにしてもここまでの力を持っているとはね」

私は再度破壊されたシ水関を見た

曹操 side out

孫策 side

孫策「まさかシ水関を壊しちゃう何て」

私は壊れたシ水関を見てそう言った

周瑜「恐らく鬼面の仕業だろう。思春と竜也が奴が剣を振るつたと

ころを見たそうだな」

孫策「本当なの思春に竜也？」

私は思春と竜也に聞いた

竜也「ああ天幕で会った奴がいきなり中に浮き剣を振っていた」

甘寧「私も海道と同じで、鬼の仮面をかぶった男が剣を振るっているところを見ました」

黄蓋「ほうどうやら敵には凄い者があるようじゃの」

祭が笑顔で言った

孫策「ねえ冥琳」

周瑜「駄目よ」

冥琳はまだ何も言っていないのに即答だった

孫策「あのまだ何も言っていないんだけど」

周瑜「鬼面と戦いたいって言うんでしょ？駄目よ」

孫策「ぶうゝ冥琳のけちんぼ」

周瑜「何と言われようと駄目なものは駄目よ」

孫権「雪蓮姉様は呉の王なのですから無茶なことはしないでください」

孫策「チエツねえ竜也」

冥琳と蓮華が反対してきたから竜也に救援を求めた

竜也「まあ二人共そこまで駄目って言わなくても」

竜也が何とか言ってくれたけど

孫権「竜也駄目よ姉様を甘やかさないで」

周瑜「今回はかりはお前の頼みでも駄目だ」

竜也「すまん雪蓮俺には二人を納得させることはできない」

竜也はすぐに言いくるめられてしまった

孫策「チエツ」

私は舌打ちをしてまた破壊されたシ水関を見た

孫策 side out

剛鬼「さてこれで奴等はシ水関が使えない。それに俺の存在で多少の時間稼ぎは出来るだろう」

俺はその後剃を使い虎牢関に戻った

恋「剛鬼！」

剛鬼「よう今戻ったぞってうわ！」

虎牢関に戻った瞬間恋が抱きついてきた

恋「剛鬼よかったちゃんと帰ってきた」

剛鬼「当たり前だろ」

ナデナデ

恋の頭を撫でながら暫く抱きしめていると

詠&amp;p・音々「ごほん」

剛鬼「ああやべ報告しないとな」

詠と音々が俺達を見て咳払いしたので俺は恋から離れた

恋は残念そうな顔をしているから後で相手をしてあげないと

詠「単刀直入に聞くけどあれやったのアンタ？」

詠がシ水関のほうを指差し言った

剛鬼「ああ俺が破壊した」

霞「まマジで？」

剛鬼「ああマジだ。何か問題があったか？」

俺は詠に言った

詠「いいえ、シ水関を足場にさせないとは考えたわね」

剛鬼「足場がなければ奴等からも多少時間も稼げるだろう」

詠「でもどうやってシ水関を破壊したの？」

霞「うちも気になる」

恋「恋も」

司「私もだ」

音々「音々もなのです」

剛鬼「ああそれは秘密だ」

俺は説明がめんどいので秘密にした

剛鬼「それより詠と司は洛陽に下がれ」

司「何で私まで下がらないといけない？」

司が不満そうに言ってきた

剛鬼「月と詠を守ってもらう為だ」

司「そういうことならしょうがないな」

司は了承してくれた

剛鬼「詠後月を連れて恋の家に来てくれないか？」

詠「どうして恋の家なの？」

剛鬼「目立たない所にたほうがいいからだ」

詠「はあ分かったわよ」

詠も何とか了承してくれた

剛鬼「後もし何か予想外のことがおきたらコイツに助けてもらえ」

俺はそう言つと一枚の紙を出した

詠「この紙をそいつに出せばいいの？」

剛鬼「ああ少し変な奴だが頼りにはなる」

詠「分かったわじゃあ皆気をつけてね」



剛鬼「ああ司 月と詠を頼んだ」

司「ああこの身にかえても守ってみせる」

剛鬼「一応二人にこれを渡しておく」

俺は小刀を二本制作し司と詠に渡した

剛鬼「危なくなったらこれを空に投げてください分かったな？」

二人「分かった」

司と詠は小刀を受け取った後洛陽に向かって行った

剛鬼「ああだるかった」

俺はその場に座りこんだ

音々「もつとシャキつとしますのです」

剛鬼「嫌だね。戦闘の時だけで十分だろ」

恋「次は恋も頑張る」

霞「うちもな」

音々「音々もなのです！」

剛鬼「あだが負けそうになったら投降しろよ、無駄に命を捨てることは全員しないでくれ」

三人「分かった（で）」

剛鬼「じゃあ俺は暫く寝るから」

俺はその後目を閉じ眠りにおちた

遂に開幕した戦い果たしてどちらが勝つのか？次回に続く

## シ水関攻防戦（後書き）

作者「何か君強すぎじゃないか？」

剛鬼「気のせいだ」

作者「絶対気のせいじゃないよな」

剛鬼「まあそんなこと気にするな」

作者「まあいいか オリキャラとそれぞれの武器特殊能力は反董卓連合戦が終わったら書きたいと思います」

恋「また次回に」

作者「あれ恋がいるちょうどいいから二人で最後きめてくれ」

剛鬼& amp・恋「分かった」

作者「では」

剛鬼 & a m p 恋「次回も楽しんで読んでください」

## 激突剛鬼VS孫策軍（前書き）

作者「今回は早く更新出来た」

恋「この調子で頑張る」

剛鬼「まあ確かにこの調子で頑張れよ」

作者「だがその代わりに戦闘部分がかなり楽に書いてしまった」

剛鬼「まああんまり気にするな」

恋「気にしない」

作者「苦勞を考えてほしいな。では楽しんで読んでください」

## 激突剛鬼VS孫策軍

剛鬼「来たか」

霞「ああわんさか来おったわ」

恋「敵たくさん」

音々「返り討ちにしてやるのです」

俺達は虎牢関の上から連合軍を見ている

先頭は袁紹軍その後ろに劉備 曹操 孫策 一番後ろに袁術軍がいる

剛鬼「さあてちよつと準備運動してきますか」

俺はそう言つと立ち上がった

霞「剛鬼何処行くつもりや？」

剛鬼「奴等の数を減らしてくる」

音々「お前何を言ってるのですか？」

剛鬼「出来る限り俺の力で数を減らすお前達もやバそうだったら迎撃してくれ」

霞「まあ剛鬼やったら大丈夫やな、頼むわ」

音々「捕まったらしょうちしないですよ」

恋「……」

恋だけ無言だった

剛鬼「恋俺は必ず帰るからな」

ナデナデ

恋「……うん／＼」

剛鬼「さてとじゃあ後を頼んだ」

俺は反逆と言う名の大剣リベリオンを制作した

剛鬼「お前等にもこれを渡しておく」

俺は三人に小刀を渡した

剛鬼「ヤバくなったらこれを空に投げろいいな」

三人「分かった（で）」

剛鬼「じゃあ行ってくる」

恋「剛鬼気をつけて」

剛鬼「ああ」

俺はその後虎牢関から飛び降りた



剛鬼「さあて殲滅開始！」

俺はリベリオンを振りながら進んだ

袁紹軍「鬼面だー、一斉にかかって討ち取れ！」

袁紹軍が無謀に突撃してくる

剛鬼「邪魔をするな！」

ズバッ　ズバッ

袁紹軍「ぐは！」

袁紹軍「ガハッ」

剛鬼「どうした数と威勢だけか？お前等は」

袁紹軍「く言わせておけば」

また何の考えもなく突撃してくる兵士達

剛鬼「しょうがないリミッター解除」

俺は力のリミッターを外し身体を回転させた

剛鬼「くらえ無能な雑魚ども嵐脚 周断！」

俺は一気に敵を殲滅する為に最強の嵐脚を放った

袁紹軍「うわあ何だあれは！」

袁紹軍「に逃げろー！」

放った周断は力のリミッターを外した為威力は黄巾党の時の倍はあるだろう

袁紹軍は周断により士気が完全に下がり兵の大半も倒れたようだ

剛鬼「所詮この程度か」

俺が追撃しようとしたら

チリン

剛鬼「ふっ！」

ガキン

鈴の音が聞こえその方向にリベリオンを振るったらそこに鈴の音の持ち主がいた

甘寧「くっ外したか」

片手に剣を持った女は俺から距離をとった

剛鬼「不意打ちとはやってくれるな」

甘寧「その割りには驚いていないようだが」

剛鬼「驚いたところで何も変わらんだろ、ところでお前名は？」

甘寧「我が名は甘寧 字は興霸」

剛鬼「甘寧ということは孫策軍が俺を捕らえにきたか面白い」

甘寧「潔く捕まってくれとありがたいんだが」

剛鬼「おとなしく捕まると思っのかお嬢さん？」

俺は甘寧を挑発した

甘寧「貴様！」

剛鬼「リミッター作動こいよ」

甘寧「はあ！」

甘寧は凄いスピードで剣を振るう

剛鬼「遅い！」

カキン キン ガキン

俺はそれを全て軽く弾く

甘寧「ちいやる」

剛鬼「ふっ！」

甘寧「消えた！」

俺は剃で甘寧の背後にまわりリベリオンを振るおとした瞬間

ヒュン

剛鬼「ちっ」

矢が飛んできた為避けて距離をとった

黄蓋「ほうやるなお主」

剛鬼「誰だ？」

黄蓋「わしは黄蓋 字は公覆じゃ、思春ここは一度退くぞ」

甘寧「分かりました」

剛鬼「袁術の所へ誘い込み俺を暴れさせるつもりだろ？」

黄蓋「はて何のことやら」

剛鬼「まあいいだろう誘いにつてやるよ」

俺は袁術軍の所へ向かった

袁術 side

袁術「七乃ハチミツ水をもっと持ってたもれ」

張勳「はい美羽様」

袁術「はて何やら外が騒がしいようだが？」

張勳「そう言えばそうですね」

まあ問題ないじゃろうと妾は思っていたのじゃが

兵士「報告！鬼面が我が軍に突撃してきました！」

張勳「ええー！」

袁術「そのような輩すぐに何とかせよ！」

兵士「しかしこのままでは奴はここまで」

袁術「ちょ張勳何とかするのじゃ」

張勳「いや無理ですよ」

袁術「どうしたらいいのじゃ！」

妾は途方にくれてしまった

袁術 side out

剛鬼「何だよ齒応えがないな」

ザク

袁術軍「ぐわ！」

袁術軍「ば化け物だー！」

俺は袁術軍を斬りながら進む

袁術軍は袁紹軍と同じで雑魚すぎる

数で圧倒しそして突撃まあ大将があればこうなるな



剛鬼「これぐらい殺せばいいだろう」

俺は虎牢関へ向かおうとした瞬間

？「はあ！」

剛鬼「鉄塊」

ガシッ

誰かが剣を振るってきたので鉄塊を使い剣を掴んだ

剛鬼「ほう孫策軍の大將がわざわざくるとわな」

孫策「フッフ貴方と戦ってみたくてね」

剛鬼「ふん面白い」

俺は剣を離し距離をとった

剛鬼「一人で俺の相手をする気か？」

孫策「まさか、行くわよ」

そう言つと孫策のまわりに甘寧 黄蓋 天幕で会つた海道達が現れた

孫策「貴方は強いからこれぐらいで行かないと勝てるか分からないのよね」

甘寧「大人しく捕まつてもらうぞ」

黄蓋「多人数で相手をするのは好きじゃないんだがな」

竜也「まあ覚悟してもらおうか」

全員が武器を構える

剛鬼「ふん上等」

俺はリベリオンを投げて消し斬を抜いた

黄蓋「うん？お主さっきの剣はどうした？」

剛鬼「いないから消したんだが」

孫策「消したって何処に？」

剛鬼「お前等が知る必要はない」

俺は闘気をフルに出し孫策達を見た

甘寧「な何だこの闘気は！」

黄蓋「まさかこれほどとはな」

竜也「ここまでの力を秘めているとは」

孫策「確かにこれは凄いわね」

全員何とか耐えているようだ

剛鬼「さあ始めようか」

俺は斬を構える

孫策「はあ！」

孫策が南海霸王を手に持ち俺に向かってきた

それと同時に甘寧と海道も向かってきた

竜也「そら」

海道が鎌を横に振るい

剛鬼「遅い」

カキン

俺が斬で防いだ瞬間

シュッ

剛鬼「ちっ」

黄蓋が矢を二本射てきたのでそれを避ける

孫策「はあ！」

剛鬼「嵐脚」

ガキン

避けた先に孫策が剣を振るってきたので嵐脚で弾き

チリン

剛鬼「紙絵」

ブン

その隙について甘寧が背後から剣を横尻ぎに振るいそれを紙絵で避ける

剛鬼「コンビネーションは抜群なら先にうざい黄蓋から倒すか」

シュン

全員「な消えた！」

俺は剃で黄蓋の前に移動し

黄蓋「ちっ！」

シュツ シュツ

黄蓋は咄嗟に矢を放つが

剛鬼「鈍い！」

俺は全ての矢を弾き黄蓋に拳を見舞ってやった

ゲシッ

黄蓋「ふう危ないところじゃった」

黄蓋はギリギリ持っていた剣で俺の拳を防いだが

剛鬼「それはどうかな三王指銃」

黄蓋「なっ！」

バアン

俺は三王指銃を放ち黄蓋を吹っ飛ばした

黄蓋「くっやってくれるな」

バタ

黄蓋は倒れた、一応手加減はしたんだがな

甘寧「ちつよくも祭様を！」

甘寧が向かってくるが

剛鬼「ふっ！」

俺は甘寧に向かってクナイを投げた

甘寧「こんな物！」

キン

剛鬼「それを弾いていいのかな？」

甘寧「何！」

ドカン



甘寧「こしやくな」

剛鬼「油断大敵」

甘寧「何！」

ゲシッ

甘寧「くっ」

バタ

起爆札を付けたクナイを弾いた為クナイが甘寧の近くで爆発し、その煙を利用して甘寧に拳をぶつけ甘寧は気絶した

剛鬼「さて残りは二人どうするまだやるか？」

孫策「当然やるに決まってるでしょ」

竜也「その首をもらっ」

海道が向かってきたから俺も応戦する

剛鬼「やらねえよ」

ガキン キン カキン

俺は海道の攻撃を全て弾き

剛鬼「飛天御剣流 龍巢閃」

竜也「連閃！」

俺が龍巢閃を放つと海道も鎌の連撃を放った

互いの連撃がぶつかりつめぜりあいになった

剛鬼「くう」

竜也「どうした力をいれているのか？」

剛鬼「何だと？」

俺はジリジリおされてきた

剛鬼「ちっ力では負けるか」

俺は剃を使い距離をとった

剛鬼「なら速さで補うまでだ」

竜也「遅い！」

ブン

剛鬼「ちっ」

海道が俺の背後に現れ鎌を振るってきたのでそれを身を屈めて避けたその後ジャンプした

剛鬼「飛天御剣流 龍槌閃！」

竜也「甘い！」

ガキン

海道に龍槌閃を放ったが奴は鎌を振り簡単に弾いてきた

剛鬼「ちつ簡単に弾かれるとわ」

恐らくこの男力だけなら俺を越えているだろう

剛鬼「しょうがないこれを使うか飛天御剣流 九頭龍閃」

俺は決着をつける為に九頭龍閃を放った

竜也「速い！なガハッ！」

海道は何も出来ず九頭龍閃をくらいその場に血を吐き倒れた

竜也「くっ何だ今のは？」

剛鬼「安心しろ最後の突きは柄をぶつけたただけだ」

俺はそう言い斬を鞘に入れ孫策を見た

剛鬼「まだやるか？」

俺は孫策に問う

孫策「いえやめておくわ」

剛鬼「なら倒れてる三人を連れて消えろ」

俺はそう言い虎牢関へ向かおうとしたら

孫策「何で私達を殺さないの？」

孫策が聞いてきた

剛鬼「まだ強くなる奴等を殺しても面白くないだろ。お前も更に強くなりまた俺を殺しに来い」

俺はそう言い虎牢関に向かおうとしたが

剛鬼「ああちょうどいいこれを渡しておく」

俺は鞆から小さな小瓶を二つ出し孫策に投げた

孫策「何これ？」

剛鬼「飲めばどんな怪我でも病気でも毒でも治せる薬」

孫策「本当？」

剛鬼「嘘をついても意味はないだろ、お前はいつでも持っておけ」

孫策「何で？」

剛鬼「いずれ分かる。その時は怒りに我を忘れるなよ」

俺はそう言った後虎牢関に向かった

孫策 side

孫策「まさかここまでやるとわね」

私は虎牢関に向かって行く鬼面を見ている

孫策「はあますます私達のところに来てほしいな」

私はその後倒れてる三人を連れて冥琳の所へ戻った

勿論帰ったら冥琳と蓮華に正座で説教させられたトホホ

孫策 side out

剛鬼「数はそこそこ減らしてはいるがやはりまだ俺達の方が不利か」

俺は斬で向かってくる兵士を斬りながら進んで状況を分析している

剛鬼「まあ何とかしますか」

俺はまた敵を殺し進む

剛鬼は連合に勝ち仲間を守ることが出来るのだろうか？  
こつこつ期待  
！



## 激突剛鬼VS孫策軍（後書き）

作者「ああそう言えば後のストーリーにFateのある能力を持った人物が出ます」

剛鬼「ほう他作品の能力ねえ」

作者「まだ少し先ですけどね」

剛鬼「まあじゃあ恋最後のやろう」

恋「うん」

剛鬼&amp;恋「次回も楽しんで読んでください」

張遼捕縛と謎の青年（前書き）

作者「やっと更新出来た」

剛鬼「お疲れ」

恋「頑張ってた」

作者「ああ頑張ったよだが疲れた文が若干おかしいかもしれないけど」

剛鬼「ちゃんと書けよ全く、では楽しんで読んでください」

## 張遼捕縛と謎の青年

時間は少しさかのぼって

恋 Side

剛鬼が敵に向かって行って暫くして恋も戦場に向かうことにした

恋「音々行く」

霞「うちも行くで」

音々「了解なのです」

今敵軍は剛鬼の攻撃で士気が下がってる今行けば敵に確実にダメー  
ジを与えられる

恋「行く」

霞「ああうちも腹くるで」

音々「恋殿はあの劉備軍を霞は曹操軍のほうを頼むのです」

恋「分かった」

霞「ああ分かったで」

恋「霞生きて帰る」

霞「分かつとるよ呂布ちゃん」

恋はその後劉の旗の元に向かった

恋「・・・弱い奴は死ね」

ザシュ

劉備兵「ぐは！」

劉備兵「がは！」

劉備兵「呂布覚悟！」

恋「……五月蠅い死ね」

ザク

劉備兵「が！」

関羽「待て！」

恋「……誰だ？」

恋の目の前に五人立ち塞がってきた

関羽「我が名は関羽」

趙雲「我が名は趙雲」

張飛「鈴々の名は張飛なのだ」

一刀「俺は北郷一刀」

大輝「俺は伊東大輝すまないが此所で仕留めさせてもらつよ呂布」

音々「恋殿そんな奴等すぐにボコボコしてやるのです!」

恋「……無理全員強い、でも恋は負けられない皆守る」

大輝「なら行くぞ」

槍? みたいなのを持った奴がそう言つと全員武器を構えてきた

恋「……行く」

恋対一刀達の戦いが始まった

恋 side out

霞 side

霞「うりゃーどかんかい！」

ザシュ　ザク

曹操兵「ぐわ！」

曹操兵「な！」

バタ　バタ

うちは今曹操軍と戦っちやる最中や

曹操兵「囲め！包囲して討ち取れ」

霞「そう簡単に包囲させへんよ」

グサ

曹操兵「が！」

バタ

いつもならこのぐらい敵殺してると少しばててたんやけどまったくばてる気配がない

龍巢閃の鍛錬のおかげで持久力がかなりついたようやな

？「全員下がれ！」

そう言っただけ誰かがうちの所へ来た

霞「誰やアンタ？」

夏侯惇「我が名は夏侯元讓 曹孟徳に仕えし家臣なり」

霞「有名な魏武の大剣がわざわざうちに何のようや？」

うちは夏侯惇に聞いた

夏侯惇「我が主曹孟徳様よりお前を捕らえる為に参った。」



霞「なら一騎討ちで勝負しようやないか、うちが負けたらおとなしく捕まるで、でもうちが勝ったら虎牢関に退くまで何もしないでもらおうか」

夏侯惇「いいだろう」

？「はいちよつと待った」

何や男が夏侯惇の所へ向かってきた

夏侯惇「一光お前どうして此所にいる？」

一光「華琳からの命令で春蘭の代わりに張遼を捕らえろだってよ」

夏侯惇「な何でお前が代わり何だ？」

一光「文句は華琳に言え」

夏侯惇「くそー」

夏侯惇は凄い悔しそうな顔で男の後ろに下がった

一光「さて自己紹介しておこう俺の名は杉浦一光 魏の天の御遣いだ」

霞「うちは張遼 字は文遠や」

こいつやる全く隙があらへん

一光「さてとじゃあ始めるかな」

一光ゆう奴は少し刃が長いナイフを取り出した

うちも飛龍偃月刀を構える

夏侯惇「ああやっぱり納得出来ない！」

と言うと夏侯惇が一光の横に立つ

一光「春蘭命令だからしょうがないだろ」

夏侯惇「五月蠅い華琳様のお叱りがあっても構わん！」

一光「だが張遼は俺が捕らえる」

夏侯惇「くつしょうがない誰か私の相手をしろ！」

夏侯惇がうちを諦めてまわりの奴を呼ぶが

夏侯惇「何故全員離れる？」

まわりかなりびびって離れて行くみたいやまあ当然やな

？「じゃあ俺が相手になるよ」

いきなり隣から声が聞こえうちが横を見るとそこにはいついたのか男が立っていた

夏侯惇「誰だ貴様？」

知也「我が名は斎藤知也」

霞「お前うちの敵か？」

うちは隣に立っている知也という男に聞く

知也「剛鬼の友人兼援護人と言えいいか？」

霞「本当か？」

知也「ああ本当だ証拠にならんかもしれないが夏侯淵隊を潰してきたが」

霞「なっマジか？」

曹操兵「報告！夏侯淵隊が何者かに手により壊滅した模様！」

夏侯惇& a m p ; 一光「何だと！」

二人はかなり驚いているようやな

知也「これで俺が味方だという証拠になったかい？」

知也がうちに言ってきた

霞「まあ信用してやろうないか」

うちはこいつを信用することにした

霞 side out

知也 side

知也（援護だけするつもりが夏侯淵隊を思わず潰してしまったがまあいいか）

シュッ

知也「危ないな」

矢が飛んできたので避けたら矢を飛ばした奴がこっちにきた

夏侯淵「貴様よくも我が隊を！」

夏侯惇「秋蘭何があつたんだ？」

一光「誰にやられたんだ？」

夏侯淵「姉者と一光か奴にやられたんだ」

夏侯淵はそう言つて俺に弓を構えた

夏侯惇「一光、張遼はお前に任せる私は奴を仕留める」

夏侯淵「姉者奴は強い私も一緒に戦おう」

夏侯惇「ああ分かった」

知也「さてどうやら二人相手のようだな」

夏侯淵「貴様には悪いが死んでもらう」

夏侯惇「覚悟！」

知也「じゃあ戦闘開始」

俺は戦闘を開始した

知也 side out

霞 side

霞「あつちはまだ始めたようやな」

一光「ああそのようだな」

霞「うちらもそろそろ始めよか」

うちは飛龍偃月刀を構える

一光「いいだろう」

そして一光ゆう奴もナイフを構える

霞「ほな行くで！」

うちは突っ込んで連続で突きを放ったが

一光「速いなだが」

ガキ キン カキン

うちの突きは全部軽く弾かれてしまう

一光「どうしたこんなものか？」

霞「くつやるなそんな短いもんでうちの突きを全て弾く何てな」

一光「そんなことはないさ、じゃあこっちから行くぞ！」

一光はナイフで突きを連続で放つ

霞「速！」



キン キン ザシュ

全部防ごうと思ったが肩を若干斬られた

霞「くっまだや！」

ブン

一光「遅いな」

偃月刀を横風ぎに振るったが簡単に避けられた

霞「まだやはあ！」

うちはその後突きを全力で放ったがそこに一光はいなかった

ゲシッ

霞「が！」

いつの間に背後にまわったのかうちは蹴り飛ばされた

一光「さてそろそろ終わらせるか」

そう言っで一光は再度うちにナイフを構える

霞「剛鬼悪いうちここまでみたいや。でもただでは負けへん」

うちは飛龍偃月刀を構える

霞「うちの全力や行くで飛天御剣流 龍巢閃！」

うちは今もてる限りのパワーとスピードで龍巢閃を放った

一光「ほうなら閃撃」

一光も放ってきた

キン カキン ガキン

お互いの連撃がぶつかり火花がちる

霞「くう」

だがずっと全力で放っている為にうちが段々おされてきた

比べて一光は若干余裕な顔をしている

そして

一光「終わりだ」

カキン ザク

霞「うちの負けやな」

一光の攻撃によりうちの飛龍偃月刀は弾き飛ばされ地面に刺さった

一光「さすがの腕だな張遼、最後の連撃は本気でいかないと危なかったよ」

霞「アンタ強いな。まあうちの負けやから部隊と一緒に投降する」

一光「ああじゃあ華琳の元へ行こうか」

霞「了解や」

うち達は一光の後について行った

霞 side out

知也 side

知也「張遼は負けたようだな」

俺は投降している張遼を見て言った

夏侯惇「貴様戦闘中によそ見をするなど私を嘗めているのか!」

夏候淵「ずいぶん余裕みたいだな」

俺は現在この二人と戦闘中

まあ戦闘中と言っても俺は一切攻撃していないがな

知也「悪いが俺は退却させてもらっ

夏候惇& a m p・淵「何！」

夏候淵「何故だ？」

知也「用事が出来てな」

そう言い退却しようと思ったが

夏候惇「逃がすと思っているのか？」

知也「ふっ！」

バン

俺は夏候惇の目に向かっていた矢をマグナムで射ち落とした

夏候惇「なっ！」

夏候淵「何だその武器は？」

二人共驚いているようだ

まあこの時代に銃はないからな

知也「今俺が近寄ってきた矢を落とさなかったら夏候惇、お前の目は片方なくなっていた」

夏候惇「確かにそうだな」

夏候淵「確かにあのままじゃ姉者の目は片方なくなっていたな」

夏候惇「一応礼を言っておくぞ」

知也「まあ気にするな。じゃあ俺は退却させてもらっ

夏候淵「そうはせん！」

夏候淵は俺に矢を放ってきたが俺はそれを全て射ち落とした

知也「閃光弾」

俺は制作能力で閃光弾を作り放った

夏候惇「う何だ！」

夏候淵「前が見えない」

曹操軍の大半が閃光弾の光でまわりを見えなくしてやった

知也「剛鬼に連絡しないとな」

俺はその場を離れ携帯を出し剛鬼の携帯に電話をした

知也 side out

時は戻り現在

ブーン ブーン

剛鬼「うん？」

俺は敵を斬りながら進んでいたら携帯に電話がかかってきた

剛鬼「知也か？」

知也「ああちよつと伝えたいことがあってな」

剛鬼「何だ？」

俺は敵を殺しながら聞く

知也「張遼が魏の御遣いとの一騎討ちに敗れて投降した」



剛鬼「そうか一騎討ちで負けたんなら俺が助けに行くわけにはいいかないな」

行っただとしてもきつと霞が許さないだろう

剛鬼「連絡ありがとうな知也」

知也「ああじゃあ俺は洛陽に行き様子を探ってくる」

剛鬼「了解した。気をつけろ」

知也「分かっている。じゃあな」

プツ  
ツ―  
ツ―

剛鬼「やはり俺達の敗けのようだな」

俺はポケットに携帯を入れ前を向いた瞬間

？「君もイレギュラーのようだね」

剛鬼「誰だ！」

背後から声が聞こえ距離をとり振り向いたらそこには一人の青年がいた

？「まあ今の状態だと話が出来ないからちょっと待ってくれ はあ  
！」

青年はそう言った後片手を上げた瞬間あたりを光が包み込んだ

剛鬼「何だ今のは？」

光が消えあたりを見ると

剛鬼「敵が止まっている？」

俺のまわりにいた兵士が全員止まっている

？「時間を止めたから当然だよ」

青年がそう言い俺のほうを見る

剛鬼「お前は何者だ？」

俺は制作で刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ボルグを作り構えるが

剛鬼（こいつ隙が全くない）

青年はふざけているような態度をとっているが隙が全くない

？「そんなに殺気だつてばかりいると君の大好きな呂布に嫌われちゃうよ」

こいつ俺を嘗めているのか？

剛鬼「質問に答えろ。お前は何者だ？」

？「君と同じイレギュラーだよ。名前は零レイとでも名乗っておこう」

剛鬼「お前は何の目的で此所に来た？」

零「僕と同じイレギュラーである君達を見にきたのさ」

剛鬼「何の為に？」

零「それは教えられない」

剛鬼「何故だ？」

零「まだ教える時ではないからだよ」

剛鬼「では何故俺に接触してきた？」

零「率直に言おう。僕の仲間にならないかい？」

剛鬼「断る」

俺は即答してやった

零「まあそういっただろうと思ったよ。君には呂布がいるからね」

一々恋を出してくる。こいつ本当に俺を嘗めてるのか？

剛鬼「話は終わりなら時間を元に戻せ」

零「分かったよ。まあいずれまた僕のほうから会いに行くよ。ああ  
ついでに他にもイレギュラーが敵で来ると思うから気をつけて」

剛鬼「敵で来るだと何故お前はそんなことを知っている？」

零「さあ何でだろうね、それじゃまた」

零はそう言った後何処に消え時間は元に戻った

剛鬼「奴は一体」

俺は考えながらまた敵を殺しに向かった

剛鬼に接触してきた謎の青年零。彼は一体何者なのだろうか？そして彼の目的とは？ではここご期待！

張遼捕縛と謎の青年（後書き）

作者「新たなオリキャラついに登場」

剛鬼「奴は味方なのか？」

作者「それを教えたら面白くないだろ」

恋「でも知りたい」

剛鬼「まあ恋そのうち出てくるだろうからそれまで待とう」

恋「分かった」

剛鬼「じゃあいつものやりますか」

恋「うん」

剛鬼& a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」

飛將軍を守る者（前書き）

作者「ようやく更新出来たー」

剛鬼「お疲れさん」

作者「戦闘シーンは書くの苦手だな」

剛鬼「まあそう気にするな」

恋「頑張って書けば大丈夫」

作者「でも今回の戦闘シーンかなりしょぼいな・・・」

剛鬼「まあ元気出せよ。じゃあ楽しんで読んでください」

飛將軍を守る者

恋side

関羽「はあ！」

張飛「うりゃー！」

恋「遅い」

ガキン

向かってくる二人を簡単にいなし

趙雲「隙あり！」

恋「甘い」

キン



不意を狙ってくる奴も軽くないなす

一刀「くそはあ！」

大輝「ふっ！」

恋「はあ！」

ガキン

また向かってくる二人も軽くないなす

さつきからずっとこの繰り返し二人が向かってきて一人が隙をつき  
そしてまた二人が向かってくる

恋「お前達さつきから同じことしかしない」

一刀「まあそうだな」

大輝「それが作戦だからな。さて皆もういい後は俺がやろう」

趙雲「大丈夫なのか大輝殿よ」

大輝「ああおそろくな」

愛紗「危なくなったら我等も攻撃するからな」

大輝「ああ」

張飛「大輝お兄ちゃん危なくなったら鈴々が助けるのだ」

大輝「ありがとう鈴々」

一刀「絶対死ぬなよ」

大輝「分かっている。では行くぞ！」

そう言うとな人が向かってきた

恋「ふっ！」

ブン

大輝「当たらないよ」

攻撃したけど外れた

大輝「確かに速くて威力はあるだが」

恋「死ね」

ブン

大輝「当たらなければ意味はない」

そう言って槍？を振るってきた

恋「くっ」

ガキン

それを防ぎ蹴りを放った

ゲシッ

大輝「ぐ！」

大輝は腹を抑え距離をとった

大輝「体術も出来るとは流石飛將軍呂布だな」

恋「お前さつきより動きがいい」

大輝「まあなさてじゃあ俺の技を見せてやる迅雷！」

そう言つと大輝の持っていた槍？から電気が流れ足に電気が帯びた状態になった

大輝「行くぞ呂布」

ヒュン

全員「消えた！」

恋以外の奴等も驚いていた

大輝「ふっ！」

恋「くっ」

ガキン

恋「はぁ！」

攻撃を防いだ後恋が 攻撃したけど大輝はもうそこにいなかった

大輝「遅い！」

恋「くっ」

ガキン

何とか直感でガードするが

大輝「何処を見ている？」

恋「！」

大輝は攻撃が弾かれた瞬間すでに恋の背後に移動していた

大輝「はあ！」

恋「く！」

ズバッ

恋はそれに反応し避けようとしたが左腕を少し斬られた

恋「くう お前いきなり速くなった」

大輝「ああそうだな。悪いがこのまま仕留めさせてもらうよ」

恋「来い」

恋は負けられない皆守る

恋side out

音々side

音久「恋殿！」

音々は目の前の光景が信じられなかった

最初圧倒的におしていた恋殿が今たった一人の男に左腕を斬られたことに

でも恋殿はそれでもまだ戦いを続けている

音々「このままじゃ恋殿が危険なのです！」

でも軍師である音々 には今の状況はどうすることも出来ない

音々「恋殿！」

また恋殿が攻撃され防戦一方になっている

音々「音々はどうすればいいのですか？」

傷ついていく恋殿を見ながら必死に考える

音々「あっそうなのです！」

音々は剛鬼から渡された小刀を出し剛鬼の言ったことを思いだした

剛鬼「危なくなったらこれを空に投げろ」

かけてみるのですアイツの言葉に

音々「剛鬼 恋殿を助けてくれなのです！」

音々は力いっぱい小刀を空に投げた



音々「お願いなのです!」

音々は必死に願った

音々 s i d e o u t

剛鬼「これは音々に渡した小刀」

俺は今敵を斬りながら自分の元へ帰ってきた小刀を見て考える

音々が危険な状態になるなどあり得ないだろ

アイツは軍師だから戦っているわけでもあるまいし

剛鬼「いや待てよ」

音々はいつも恋の傍にいる。そして音々が危険な状態になるのは恐らくないつまり

剛鬼「恋が危ない！」

俺はそう思った瞬間敵を全て無視し恋の元へ向かった

思っていたことはただ速く恋を助けることだった

恋Side

恋「ハアハア」

大輝「流石呂布だなこんなに手こずるとは」

恋は全身切傷があり息もあがっていた状態だった

大輝「だがこれで終わりだな。まあよく俺の迅雷に反応出来たな」

恋「.....」

大輝「終わりだ死ね呂布！」

大輝が恋に槍？を振るった

音々「恋殿！」

音々が恋の名前を叫んでいた

恋「剛鬼ごめん 恋死んだ」

そう言った瞬間

剛鬼「鉄塊」

ガシッ

恋「え！」

恋が死を覚悟した時恋の一番大切な人が目の前に立っていた

恋「剛鬼？」

剛鬼「助けに来たよ恋」

そう剛鬼が恋を守ってくれた

恋 s i d e o u t

剛鬼「何とか間に合うことが出来た」

俺が後ほんの少しでも来るのが遅かったら恋は死んでいた

剛鬼「恋大丈夫か？」

俺は振り返り恋を見る

恋「大丈夫」

恋はそう言っているが全身切傷だらけだった

もっと早く俺が来ていれば

剛鬼「お前かこれをやったのは？」

俺は伊東を睨む

大輝「ああ俺がやった」

伊東は普通に答えてきた

剛鬼「恋ちよつと待ってる。コイツに恋を痛めつけた分ボロボロにしてくるからよ」

恋「分かった気をつけて」

剛鬼「ああ」

俺は制作でベオウルフを作り装備した

大輝「鬼面悪いがここで死んでもらう」

ヒュン

剛鬼「ほう速いな」

伊東はかなり速いスピードで移動しているようだが

剛鬼「そこか」

ゲシッ

大輝「ぐは！」

俺は薙刀を振ろうとした伊東の腹に拳をぶつけた

大輝「くまだだ！」

ヒュン

また消えた

剛鬼「そこだろ」

ゲシッ

大輝「が！」

今度は回し蹴りをくらわした

大輝「く何故だ何故お前は俺の攻撃するタイミングが分かる？」

剛鬼「さあ何でだろうな」

ヒュン

大輝「何！」

俺は一瞬で伊東の前に剃で移動した

剛鬼「これで勘弁してやるよ」

ゲシッ  
ドカ

大輝「ぐはぁ！」

俺は伊東の腹に拳をぶつけその後関羽達のほうに蹴り跳ばした

剛鬼「俺とやる奴はまだいるか？」

一応聞いてみたが

一刀「いや・・・遠慮しておくよ」

北郷がそう答えたので

剛鬼「ならそいつらを全員連れてさっさと失せろ」

と俺は言った後恋の所へ向かった

一刀side

一体何がおこったのか分からなかった



いきなりあの鬼面が呂布の前に現れたと思ったたら大輝をあっさり倒した

剛鬼「俺とやる奴はいるか？」

そう聞いてきた鬼面に愛紗達に向かいそうだったので

一刀「いや・・・遠慮しておくよ」

そう答えるしかなかった目の前にいる男は格が違いすぎる

俺達が戦っても恐らく勝つことは不可能だろう

剛鬼「ならそいつらを全員連れてさっさと失せろ」

鬼面はそう言つと呂布の所へ向かつて行つた

一刀 side out

剛鬼「恋行くぞ」

俺は恋の元へ行くと恋を抱き上げた

恋「何処に？／＼／」

恋が顔を赤くしながら聞いてきた

剛鬼「洛陽にだよ」

俺はそう言い音々の元へ向かった

音々「恋殿！」

音々の元へ向かったら音々が走ってこっちに来た

音々「恋殿ぐす　よかったです。」

音々は泣いているようだった

恋「音々心配かけてごめん」

恋が申し訳なさそうな顔で音々に言った

剛鬼「音々この戦いは俺達の敗けだ洛陽に戻るぞ」

音々「でもまだ霞が」

剛鬼「霞は一騎討ちで敗けて曹操に投降した」

音々& a m p・恋「え！」

二人は驚いているようだった

音々「何故お前は霞を助けに行かないのですか？」

音々は霞を助けに行かない俺に怒っているようだ

剛鬼「条件を出して一騎討ちをして敗けたんだ、だから投降したんだろう。音々は霞の武人としての誇りを汚して俺に霞を助けに行け

というのか？」

音々「それは・・・」

音々は何も言えなくなったようだ

剛鬼「とにかく洛陽に戻るぞいいな？」

音々「・・・分かったのです」

音々が了承したので俺達は洛陽に戻った

洛陽に戻った剛鬼達には一体何がおこるのか？こつこつ期待！

飛將軍を守る者（後書き）

作者「君強すぎだな」

恋「恋もそう思う」

剛鬼「そんなことないさ」

作者「少し弱くしたほうがいいかもしれないな」

恋「うん」

剛鬼「おいやめろよ」

作者「考えておこつ」

剛鬼「ああそうならないことを期待しよう。じゃあ恋いつものやろ  
う」

恋「うん」

剛鬼 & a m p 恋「次回も楽しんで読んでください」

## 戦いの終結 倒れた剛鬼（前書き）

作者「やっと更新出来た」

剛鬼「ああようやく話が進むな」

作者「でもやっぱり文才がほしいな」

恋「頑張れば大丈夫」

剛鬼「恋の言う通りだな」

作者「まあ引き続き頑張りますか。では楽しんで読んでください」

## 戦いの終結 倒れた剛鬼

剛鬼「これはどういうことだ？」

恋「？」

音々「どうなっているのですか？」

俺達が洛陽に戻ったのだが

剛鬼「誰もいない」

洛陽の市には人が誰もいない状態だった

剛鬼「とにかく恋の家を目指すぞ」

恋「うん」

音々「分かったのです」



俺達が恋の家に向かおうとした瞬間

？「キエーイ！」

白装束の奴等がいきなり現れ襲いかかってきた

剛鬼「失せろ」

ザク

白装束「ぐは！」

剛鬼「どうやらこいつ等の仕業のようだな」

そう言った瞬間

白装束「悪の根源鬼面に死を！」

白装束の大群が突如現れた

剛鬼「悪の根源だと？寝言は寝て言え」

ザク　ザシユ

白装束「ぐは！」

俺は白装束をひたすら殺して行くが数が全く減らない

剛鬼「恋　音々俺にすっかりつかまっている！」

俺は音々を恋の上に置き行った

音々「わ分かったのです」

恋「分かった」

剛鬼「一気に恋の家に向かう」

俺は縮地を使い恋の家に一気に向かった

白装束「覚悟！」

剛鬼「黙れ」

ザシュ

白装束「がは！」

白装束「キエーイ！」

恋「五月蠅い」

ザク

白装束「消えろ！」

司「貴様がな」

ザシュ

白装束「ぐは！」

俺達は恋の家の前で戦闘中

司「はあはあきりがない」

恋「疲れる」

剛鬼「くそ」

さっきから一体何人殺したのだろうか。いくら殺してもこいつ等は  
何処からかわいて出てくる

月「きゃあ！」

白装束「フッフ」

詠「この月を離しなさい！」

剛鬼「しまった！」

目の前の敵に集中していたら月が人質にされてしまった

白装束「全員動くなよ動いたら」

ザク

剛鬼「動いたら何だ？」

白装束「がは！」

バタ

俺は白装束の背後にまわり込み殺した

剛鬼「月 詠 音々そこに固まれ！」

月「え！分かりました」

詠「分かったわ」

音々「りよ了解なのです」

三人が一ヶ所に固まった後俺は剣を三つ作り三人の近くの地面に刺し結界を作った

剛鬼「三人共そこから出るなよ」

月「はい分かりました」

詠「分かったわ」

音々「了解なのです」

剛鬼「さてそれじゃあ恋 司行くぞ」

司「ああ」

恋「うん」

俺達は再び白装束軍団と戦闘を開始した

徹底的殺しまくり一体何時間戦っていたらろうか

剛鬼「ようやく来なくなっただな」

軍団の群れがようやく来なくなった

司「これで終わりか」

恋「疲れた」

剛鬼「いやまだだな・・・そこに隠れている奴いい加減出てきたらどうだ」

？「やはり気付いていましたか」

そう言っただ眼鏡をかけた白装束の青年が現れた

剛鬼「雑魚共を操っていたのはお前だな？」

？「よく分かりましたね。左慈が貴方を狙う理由がよく分かる」

司「剛鬼ということだ？」

剛鬼「白装束は全てコイツに操られた傀儡だ。つまりコイツが元凶だ」

司「何！許せんな」

恋「許せない」

司と恋が青年に武器を構えるが

剛鬼「二人共下がっていてくれ。コイツは俺が殺る」

俺は二人に手を出さないように伝えた

司「だが」

恋「司 剛鬼の言う通りにする」



恋がそう言い下がると司も下がった

剛鬼「お前名は？」

？「我が名は于吉といいます」

剛鬼「于吉何の為にこんなことをした？」

于吉「それは勿論……」

と言った瞬間于吉が目の前から消えた

于吉「貴方を排除する為ですよ」

俺の背後にまわり于吉はそう言つと蹴りを放ってきた

剛鬼「当たらねえよ」

俺は蹴りを避け于吉に拳を見舞ったが

ガシッ

剛鬼「ほっやるな」

于吉に普通にガードされた

于吉「フッフその程度ですか？」

剛鬼「嵐脚」

俺は嵐脚をゼロ距離で放ったが

于吉「ふっ当たりませんよ」

于吉は普通に嵐脚を避けた

剛鬼「殺りずらいな」

于吉「しかし普通なら今ので死んでいましたよ」

余裕そうな表情で言う于吉

剛鬼「なら！」

俺は再び拳を振るう

于吉「当たりませんよ」

于吉は拳をガードしようとしたが

于吉「がは！」

顔面に向かったはずの拳は于吉に腹に直撃した

于吉「何故だ？何故拳が別の場所に当たるんだ？」

剛鬼「分析してる暇があるのか？」

于吉「チィ」

再び于吉に拳を振るう

于吉「今度は当たりませんよ」

于吉は右ストレートを顔面を左に動かし避けたが

ゲシッ

于吉「が！」

だがそのすぐ後に右ストレートが于吉の顔面に直撃した

于吉「何故右ストレートは確かに避けたはず？」

剛鬼「このまま終わらしてもらおう！」

俺が向かおうとした瞬間

于吉「どうも私では勝てないようですね。此所は退きますか」

俺は言ったことを無視し于吉に拳を振るったが拳は于吉をすり抜けた

剛鬼「何！」

于吉「流石ですね鬼面これはかなり警戒が必要のようですね。ではまた会いましょう」

剛鬼「待て！お前等の目的は何だ！」

于吉は俺の問いに答えず何処かに消えた

剛鬼「ちっ逃げられたか」

恋&amp;p:司「剛鬼」

剛鬼「どうした二人共？」

司「これからどうするんだ？」

剛鬼「また襲ってくるかもしれないから暫く此处で待機だな」

司「分かった」

剛鬼「恋は何かよう?」

恋「・・・」

恋は黙って俺に近寄ると抱きついてきた

剛鬼「えっと恋どうかしたか?」

恋「剛鬼ありがとう」

剛鬼「何が?」

恋「恋を守ってくれた」

恋はそう言つと俺の胸板に顔を寄せる

剛鬼「当たり前だよ言つたる恋を守るって」

俺は抱きしめながら言った

そのすぐ後に

？「剛鬼ちゃん！」

全員「何だ？」

何かがこっちに近寄ってくる

剛鬼「げ！」

筋肉ムキムキのオカマが俺の目の前に凄い速さで走ってきた

？「剛鬼ちゃん酷いじゃないのあたしというものがありながら」

剛鬼「黙れ貂蟬！俺はそっちに走った覚えはない。それ以上近づくな」

俺は泣いている貂蟬に斬を抜いて刃を向ける

司「な何だコイツは？」

恋「誰？」

音々「な何なのですかコイツは？」

貂蝉「うふふん私の名は貂蝉しがない踊り子よ」

貂蝉は泣き止み名乗った

恋「踊り子？」

剛鬼「恋、疑問に思うところが違うぞ」

司「凄いインパクトだ」

音々「見てるだけで吐き気がするのです」

剛鬼「見た目はこんなのだが強さは俺と互角かそれ以上だ」



全員「えー！」

ああやっぱり皆驚くか

恋「剛鬼本当？」

司「こんな奴がお前と本当に同じ力があるのか？」

剛鬼「ああ本当だ」

詠「最初コイツを紹介された時は一回剛鬼を疑ったは」

剛鬼「まあ確かに疑うな」

月「でも貂蝉さんはさっきの人達からちゃんと私達を守ってくれました」

貂蝉「剛鬼ちゃんの頼みだし当然よ」

知也「元から助けるつもりだっただろお前はよ」

知也がいつの間にかいた

知也「剛鬼、あの雑魚共は貂蟬と一緒にほとんど始末したが、恐らくすぐにまたしかけてくるぞ」

剛鬼「ああ分かっている」

俺はとりあえず結界を作っていた剣を抜いた

とりあえず今襲撃される心配はないだろうからな

詠「奴等はすぐまた来るってどういうこと？」

剛鬼「アイツ等は俺を悪の根源と言っていた。恐らくアイツ等は俺達御遣い全てをターゲットにしてるからだ」

知也「反董卓連合に御遣いは後5人いる。そしてアイツ等はもうすぐ洛陽に到着するだろう」

詠「連合の御遣いも殺す為にまたしかけて来るってことね？」

知也「ああそうだ」

剛鬼「いずれにしろ連合が来るまで俺達は此所にいたほうがいいだろっ」

司「ああそうだな」

音々「迂闊に動くより確かにそのほうがいいのです」

詠「そうね」

剛鬼「じゃあとりあえず恋の家で待つか」

俺達は恋の家に入り連合が来るのを待つことにした

剛鬼「恋そろそろ離れてくれない？」

恋「（フルフル）」

俺と恋は見張りの為に今外にいるのだが、恋は二人になった途端に俺に抱きついてきてキスなどをせがんでくる

剛鬼「なあ恋」

恋「？」

剛鬼「えつと戦乱が終わって平和になったらさ」

恋「平和になったら？」

剛鬼「戦場から離れて二人で暮らさないか？」

普通にはずいことを平然と言ってしまった

恋「うん／＼／」

恋は顔を赤くしてOKしてくれた

内心ちょっとほっとした俺だった

そんな感じで俺は恋と見張りを続け

恋「剛鬼」

剛鬼「ああ来たな」

洛陽内に突如たくさんの気配が出現した

剛鬼「じゃあ恋また頑張るか」

恋「頑張つて皆守る」

剛鬼「そのいきだ」

俺はそう言った後恋にキスをした

恋「キスの分も頑張る／＼／」

恋が顔を赤くしながら言った。やっぱり可愛いな

剛鬼「じゃあ恋、司達を呼んできて」

恋「分かった」

恋はそう言つと家の中に入り貂蝉や司達を呼んできた

知也「さて第二ラウンド開始かな？」

貂蝉「うふふん返り討ちにしてやるわ」

司「いつでも来い！」

恋「皆守る！」

剛鬼「とつとと終わらせるか」

俺達は各自戦闘状態になり白装束達が来るのを待った

だが奴等は一行に俺達の所へ来ない

暫くしたら

一刀「えつと投降してくれないかな？」

現在北郷達に見つかり投降してくれと言われている状態である

剛鬼「今董卓殿がくるそれまで待て」

そして少しして

月「私に話とは？」

月が出てきてこちらに向かってくる

剛鬼「ああ月実は……危ない！」

月「きゃ！」

その瞬間俺は何かか月の元へ飛んでいくのが見え月の元へ剃で移動

し月を突飛ばした

詠「剛鬼アンタ月に何してるのよ!」

剛鬼「.....」

月「剛鬼さん?」

剛鬼「.....」

恋「剛鬼?」

剛鬼「がは!」

俺は血を吐きその場に倒れた

恋「剛鬼!」

恋がすぐに俺の元へ来た



剛鬼「がは、悪い恋ちよつとしくった」

俺の身体には矢が四本刺さっていた

剛鬼（この痛み毒じゃない何か別のものか）

恋「剛鬼しつかりしなきゃダメ！」

月「私を庇って」

少しして月達も俺の所へ来た

司「剛鬼しつかりしろ！」

貂蟬「剛鬼ちゃん気をしつかりもつのよ」

知也「お前はこんなところで死ぬ奴じゃないだろ」

音々「お前が死んだら恋殿が悲しむのです！」

詠「剛鬼しつかりしなさい！」

月「剛鬼さん死んじゃ駄目です！」

剛鬼「悪い皆ちよつと眠るな……」

恋「剛鬼！死んじゃ駄目！死んだら嫌いになる！」

恋の声が聞こえる恋また泣いている悪い恋ごめんな

俺の意識はそこで途絶えた

反董卓連合戦は終わった。結果は董卓軍の敗北

そして俺はたった4本の矢によって倒れた

戦いは終結した。同時に連合に多大な被害を出した剛鬼は戦場の鬼神鬼面と言つ名がついた

## 戦いの終結 倒れた剛鬼（後書き）

作者「剛鬼死す！」

恋「剛鬼は死んでない！」

剛鬼「勝手に殺すな！」

作者「う夫婦が揃うと怖いな」

剛鬼「何か言ったか？」

作者「いえ何でも」

剛鬼「さて次回はオリキャラ紹介です」

恋「恋も紹介される？」

作者「恋はオリキャラじゃないよ」

恋「残念」

剛鬼「まあ恋いつものやろう」

恋「うん」

剛鬼& a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」

## キャラ紹介2（前書き）

作者「キャラ紹介です」

剛鬼「けっこうオリキャラ出てきたから紹介しとかないとな」

恋「恋は？恋は紹介されない？」

作者「それは秘密だ」

恋「けち」

剛鬼「ハハハでは楽しんで読んでください。と言っても短いですが」

## キャラ紹介2

剛鬼こうき

代々はオリキャラ1参照

戦闘をすると誰も勝てないほど強い無茶苦茶な男

特殊能力 制作

頭に思い描いた武器を瞬時に作りだせる能力

更に武器に触れることでその武器の技や情報などを瞬時に解析出来る

ただし剛鬼は切断物や打撃物しか作り出せない

かなりの鈍感だが恋の気持ちには気付いてはいるもよう

現在恋（呂布）と恋人のような関係である

呂布 真名・恋

本作のヒロイン

剛鬼が初めて好きになった女の子

飛將軍呂布と言われ恐れられている三国最強の武将

無口で無愛想な顔をしているがとても友達思いの優しい子である

だが仕事をもっぱらサボるのがたまにキズ

剛鬼に黄巾党から助けってもらった時に好きになったようである

非常に剛鬼への依存度が高く彼の行く所には必ずついて行くこととする

剛鬼とは恋人のような関係

さいとうともや  
斎藤知也

代々はオリキャラ1参照

特殊能力 制作

剛鬼と同じ制作を使えるが、彼の場合は飛び道具関連の物しか作れない

北郷一刀

おなじみの真恋姫無双の主人公

スキルはほとんど同じだが原作と違い普通に強くなっている

武器は日本刀



伊東大輝<sup>いとくだいき</sup>

劉備軍の二人目の天の御遣い

元の世界では世界一の頭脳を持つと言われていた青年

真恋姫・無双の世界でもおそらく全軍師よりも頭がきれる

武器は薙刀の雷炎雷<sup>らいえん</sup>と炎の力を持つ薙刀であり取っ手を離して双剣のように使用することも可能

特殊能力 観察眼

相手の力量や動きを瞬時に解析することが出来る目

発動時は瞳の色が青くなる

杉浦一光<sup>すぎつらかずき</sup>

魏に舞い降りた天の御遣い

元の世界では傭兵をやっていた青年

隠密行動とスピードを活かした戦闘が持ち前

武器は少し刃が長いサバイバルナイフと手投げナイフ

特殊能力 加速

一時的にスピードを限界まで引き出せる

くろがみこうま  
黒神紅魔

魏に舞い降りたもう一人の天の御遣い

実は剛鬼達の時代の100年後の未来から来た青年である

武器は身の丈ぐらいある大剣碎牙

特殊能力 強化

身体や武器などを一時的に強化することが可能

かいどう たつや  
海道竜也

元の世界ではスポーツ選手だった青年

怪力自慢であり力だけなら最強と言える

武器は身の丈を超える巨大な鎌・閃、だが自分の意思で小さくすることも可能

特殊能力 怪力

指定した身体の部分のパワーを限界まで引き出せる

零<sup>ぜろ</sup>

剛鬼の前に姿を現した謎の青年

今のところ武器 特殊能力などは不明

## キャラ紹介2（後書き）

恋「恋が紹介されてた」

剛鬼「よかったな恋」

恋「うん」

作者「次回は本編です」

剛鬼& a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」

## 二人の思い（前書き）

作者「割と早く更新できた」

剛鬼「だるいからってサボったりするなよ」

作者「そんなことしないよちゃんと更新していくさ」

剛鬼「どうだかな。では楽しんで読んでください」

## 二人の思い

剛鬼「・・・・」

ザシュ

兵士「ぐは！」

俺は一体誰だ？何も分からない

一体何処にいるのだろうか？

辺りは一面闇のように暗い

そして闇から敵が出て来るのでひたすら持っている刀で殺す

俺は後何回刀を振ればいい？

後何人殺せばいい？

剛鬼「・・・」

ザク　ザシュ

俺は刀を振り続ける

この闇から脱け出すまで

恋side

恋「剛鬼」

恋は今眠っている剛鬼のすぐ隣にいる

剛鬼が倒れた後恋達はご主人様（一刀）達に投降した

ご主人様はちゃんと剛鬼を助けるって約束してくれた

でも



恋「剛鬼起きない」

あれから剛鬼が倒れた後から二週間経った。でも剛鬼は一向に目を覚まさない

一刀「恋まだ起きてたの？」

愛紗「心配なのは分かるが寝ないと身体を壊すぞ」

恋「もうすぐ寝る、でももうちょっと」

もう少し起きていよう剛鬼が起きるかもしれないから

恋side out

一刀side

一刀「恋毎日あぁやって鬼面が起きるのを待っているのか？」

俺と愛紗は部屋を出て今廊下にいる

愛紗「はいあまりご飯も食べずにずっと待っているようです」

一刀「そうか」

医師の話だと矢の傷は塞がったそうだが、今だに目が覚めない理由は不明だそうだ

一刀「あのままだと恋身体を壊しかねないな」

愛紗「恋のことが心配ですか？」

一刀「そりゃ心配だよ仲間だからね。愛紗は恋のこと心配じゃないの？」

愛紗「それは心配ですが」

一刀「それに鬼面のこともな」

愛紗「ご主人様は鬼面をどうするつもり何ですか？」

一刀「味方になってもらえないか頼むつもりだよ」

愛紗「はあやはりそういうだろうと思いました」

一刀「やっぱり分かってた？」

愛紗「当然です」

一刀「でもそれにはまず鬼面が起きないとな」

愛紗「そうですね」

一刀「俺には何も出来ないのかな」

愛紗「ご主人様？」

一刀「いや何でもない」

愛紗「？」

頼むぞ鬼面、お前が起きないと恋がずっと悲しんじまうぞ

俺は部屋に戻った

一刀 side out

剛鬼「・・・」

ズバッ　ザシュ

何時間経っただろう？

何人殺しただろうか？

闇は一向に晴れない

俺はいつまで此所にいればいいのだろうか？

剛鬼「・・・」

また敵が来る。どうせ雑魚すぐに終わる

前を見た時そこに居たのは一人の女の子赤い髪に二本の触角のような髪がトレードマークの

あれは誰だっけ？その前に何故あの子は武器を持っていない？

剛鬼「・・・」

俺は黙ってその子に近づくことにした

そしてその子の顔を見た瞬間

剛鬼「・・・恋」

自然とそう言っていた

恋side

恋「今日もやっぱり起きない」

恋は諦めて部屋を出ようとしたら

剛鬼「・・・恋」

恋「！剛鬼起きた？」

剛鬼が恋の名前を呼んだでも

恋「起きてない」

剛鬼は目をつぶったままだった

恋はまた座っていた椅子に座った

恋「剛鬼早く起きて恋寂しい・・・また恋のこと抱きしめて・・・  
・恋の傍にいて」

恋は泣きそうになるのを堪えて剛鬼を見る

恋 side out

剛鬼「・・・恋」

恋「・・・剛鬼」

目の前にいる子が誰か分からないいや知っている俺はこの子を

剛鬼「はっ！」

また敵が闇から出現した

剛鬼「危ない！」

恋「！」

ザシュ ザク

何故か身体が勝手に動いた

剛鬼「大丈夫か？」

恋「うん」

剛鬼「あれ？」

いつの間にか声が出るようになっていたのに俺は気付いた

恋「剛鬼」

剛鬼「剛鬼？それは俺の名前」

恋「剛鬼早く起きて恋寂しい……また恋のこと抱きしめて……  
・恋の傍にいて」

剛鬼「あっ！」

その言葉を聞いた瞬間俺は全て思い出した



俺が誰なのか、矢に射ぬかれて倒れたことそして目の前にいる女の子のことを

剛鬼「恋俺は」

その後すぐ闇が全て晴れた

剛鬼「此所は？」

何故か辺りは一面原っぱになっていた

？「ようやく戻ってこれたか」

剛鬼「誰だ？」

後ろを向くとそこに一人の侍の姿をした男が立っていた

剛鬼「お前は斬か？」

斬「いかにも」

剛鬼「斬ようやく戻ってきたとはどういうことだ？」

斬「あの闇は敵を大量に放出しそれを殺し続ける者を呑み込む闇、つまりあのままお前が戦い続ければお前は闇に呑み込まれ消滅していた」

剛鬼「戦いを止めれば闇に呑み込まれなかったのか？」

斬「あの闇の中では戦わないという選択肢は存在しない。だが闇の中で自身の記憶を取り戻すことが闇から脱け出せる唯一の方法」

だから俺は記憶がなかったのか

剛鬼「じゃあ俺があの時思い出したから」

斬「その子に感謝するんだな」

斬が恋を見ながら言う

剛鬼「恋」

恋「剛鬼行こ」

恋が俺の手を掴んで歩き出す

斬「その子を守ってやれよ剛鬼」

剛鬼「ああ分かっている。ありがとうな斬」

俺と恋は原っぱを歩き進んだ

剛鬼「此所は？」

目が覚めるとそこには知らない天井が目に入った

とりあえず起き上がると

恋「剛鬼！」

そこには驚いた顔をした恋がいた

剛鬼「恋おはよう」

恋「剛鬼！」

剛鬼「うわっと」

恋が泣きながら抱きついてきた

恋「シク剛鬼 剛鬼」

剛鬼「心配かけたな」

俺は優しく抱きしめる

恋「グス凄く心配したヒク死んじゃうんじゃないかと思った」

剛鬼「ごめんな恋」

俺は恋の頭を撫でながら言う

恋「でもよかったちゃんと起きてくれた」

剛鬼「当たり前だ。俺はお前の傍にいるよ」

恋「うん」

剛鬼「恋少し痩せたか？」

恋を抱きしめた時前より細くなっていた気がしたので聞いた

恋「剛鬼が倒れてからあんまりご飯食べてなかったから」

剛鬼「ちゃんと食べないと駄目だぞ恋」

恋「うゝ剛鬼のせいであんまり食べれなかったの」

恋がほづを膨らませながら言った

やばい普通に可愛いな

剛鬼「ごめんごめんこれで許してくれ」

俺は恋にキスをした

恋「うゝずるい／＼／」

恋が顔を赤くしながら言う

剛鬼「ところで恋此所は何処だ？」

恋「ご主人様のところ」

剛鬼「ご主人様って誰？」

恋「一刀」

剛鬼「ああ北郷一刀のところか」

あの後俺達は北郷に投降して此所にいる状態なのだろう

剛鬼「まあ今日はもう寝よう」

恋「うん」

俺が布団に寝転ぶと恋も寝転び俺に抱きついてきた

剛鬼「えつと恋何で俺の布団に寝転ぶの？」

恋「一緒に寝る」

剛鬼「此所で流石にそれは」

恋「一緒」  
together

恋が泣きそうな顔で俺を見る

剛鬼「分かったよ」

あの顔は反則だ絶対断れっこねえ

恋「すうすう」

恋は気付いたらすでに寝ていた

剛鬼「無理させてごめんありがとな恋」

恋のおでこにキスをして俺も寝た

此所でも朝大変なことになることを勿論剛鬼はまだ知らない



## 二人の思い（後書き）

作者「剛鬼君は何処にいても好きな人に会えるんだな」

剛鬼「そんなことはない」

恋「でもずっと会っていたい」

剛鬼「ありがとう恋」

恋「うん」

作者「全くこの二人はいつまでもラブラブな気がするな」

剛鬼「嫉妬か？」

作者「五月蠅い」

剛鬼「全くじゃあ恋いつものやるか」

恋「うん」

剛鬼&a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」

**剛鬼劉備の仲間になる（前書き）**

作者「もう少し更新早くしないとな」

剛鬼「まあそんなに気にするなって」

恋「あんまり気にしない」

作者「書かなくていい奴等はいいいよな全く」

恋「元気だす」

作者「ありがとう恋 では楽しんで読んでください」

## 剛鬼劉備の仲間になる

剛鬼「ああよく寝た」

次の日目が覚めると俺は起き上がった

剛鬼「あれ？」

恋「すう」

右に恋が寝ているのは分かるが

星「すうすう」

何故左に趙雲が寝てるんだ？

剛鬼「面倒だな」

とりあえず布団から脱け出し何か身体に変化がないか確かめる

剛鬼「ケルベロス」

頭に思い浮かべ武器名を言うと右手にヌンチャクのケルベロスが握られていた

剛鬼「制作に以上なし身体のはうは」

軽く腕を振って確かめるが特に変わってはいないようだ

剛鬼「身体にも変化なし」

色々身体のチェックをしていると

星「目が覚めたようですな」

趙雲が起きたようだ

剛鬼「ああようやくなところで俺の荷物は何処だ？」

星「貴方の荷物なら主が預かっていますよ」

剛鬼「そうかまあ後で返してもらおうとしよう」

星「戦場で会った時とは別人のようすな。それに顔も以外と男前  
のようすで」

今更だが仮面が外されていたことに気付いた

剛鬼「戦場以外では俺も普通の人間さ」

星「それに恋にかなり優しいようすな」

やばどうやら見られてたようだな

剛鬼「お前昨日何時から見ていた？」

星「恋が泣きながら抱きついたところからです」

ほぼ全て見られていたようだ

剛鬼「ちゃんと警戒しておくべきだったな」

まあ今更そう思ってももう遅いか

星「ところで鬼面殿それは何ですか？」

星は俺が右腕に持っていたケルベロスを見ながら言ってきた

剛鬼「これは名はケルベロス氷の力を宿したヌンチャクだ」

星「ほう珍しい武器ですな」

星がまじまじとケルベロスを見る

剛鬼「まあそうだろうなさてそろそろ恋を起こそう」

俺は恋の元の行き身体を揺すった

剛鬼「恋おきろ」

恋「うゝん剛鬼？」

剛鬼「おはよう恋」

恋「よかった夢じゃなかった」

安心した顔をして恋が抱きついてきた

剛鬼「れ恋嬉しいんだけど趙雲がいるから」

恋「星？」

恋が星に気付き星を見る

星「おや恋おはよう」

恋「星どうして此所にいる？」

星「イヤ何鬼面殿の顔を見にきたのさ」

恋「ならいい」



ならいいって何だったらよくないんだ？

剛鬼「えつと恋　趙雲が見てるから離れてくれないか？」

恋「（フルフル）」

恋は首を横に振り更に抱きついてくる。正直嬉しいんだが趙雲が見てるからはずい

星「フッフ二人共本当に仲が良いことで」

趙雲の野郎この状況を楽しんでいやがるな

一刀「鬼面起きたか？」

愛紗「失礼するぞ」

まず北郷と関羽が入ってきやがった

一刀&amp;・愛紗「な！」

剛鬼「よう」

案の定恋が俺に抱きついている状況を見て二人が驚いており、趙雲がそれを楽しそうに見ている

一刀「えつともう大丈夫みたいだな」

剛鬼「ああもう問題ない。恋後でいくらでも抱きついていいから今は離れてくれないか？」

恋「・・・うん」

恋は渋々離れてくれたが恐らく後が大変だな

一刀「とりあえず皆呼んでくるから」

北郷が場の空気に耐えられず逃げやがった

愛紗「ところで星お前は何故此所に居るんだ？」

星「イヤ何二人の仲がどのくらい深いのか見たくなってるな」

趙雲が笑いながら俺を見てくる。くそ完全に楽しんでやがるな

愛紗「それより恋　鬼面が目を覚ましたならちゃんと警羅をやって  
もらっからな」

恋「……」

恋は無言で俺の後ろに隠れる。何だ俺に何か言えといたいたいのか？

剛鬼「まあ関羽落ち着け」

愛紗「お前には関係ないだろ。私は恋に言ってるんだ！」

完全にまだ俺を敵視しているようだなコイツは

剛鬼「お前も俺を拒絶するようだな」

愛紗「どついう意味だ？」

剛鬼「自分の頭で考える馬鹿が」

愛紗「何だと貴様！」

関羽が青龍偃月刀を俺に向けてくる

剛鬼「何だまた俺と戦いたいのか雑魚？」

愛紗「黙れ！ご主人様に悪いがやはりお前は氣にくわない！」

関羽が青龍偃月刀を俺に振るったが

キンッ

恋「剛鬼に攻撃する奴仲間でも許さない！」

恋が関羽の攻撃を弾き俺の前に立つ

一刀「おーい皆連れて来たぞって二人共何やってるんだ！」

今にも恋と関羽が戦闘を始めそうな時に北郷達がちよつどやってきた

愛紗「何でもありませんご主人様」

関羽はそう言つとすぐに退き恋も武器を収めた

桃香「鬼面さん目が覚めたんですね」

司「心配したぞ剛鬼」

音々「全くお前は心配かけ過ぎなのです」

剛鬼「心配かけたなもう大丈夫だ。で全員揃つて俺に何のようだ？」

大輝「お前に頼みがあつてな」

剛鬼「頼み？」

桃香「鬼面さん私達の仲間になってください」

劉備が頭を下げながら俺に頼んできた

剛鬼「なら劉備お前の目指すものは何か聞かせろ」

まあ恐らく阿呆な理想を言うと思うが聞いておこう

桃香「私は戦いが無く平和で皆が笑って暮らせる世の中を目指しています」

自信満々に言う劉備やっぱり理想主義者のようだな

剛鬼「妄想いや幻想を言ってるなよ劉備」

桃香「え！」

俺の一言に場の空気がまた悪くなった

桃香「理想や幻想じゃありません！私達は本気で目指してるんです」

剛鬼「お前もくだらない理想主義者の一人だったようだな」

愛紗「貴様！」

関羽が青龍偃月刀を俺に振るおうとするが

剛鬼「失せる雑魚死にたいのか？」

闘気と殺気をフルに関羽に向け睨み付けると

愛紗「うぁ！」

関羽が青龍偃月刀を落としその場に膝をついた

？「愛紗さん大丈夫ですか？」

一人の少女が慌てて関羽に近づいて行った

剛鬼「劉備君は関羽が敵に殺られたらどう思う？」

桃香「え！それは敵を憎みます」

剛鬼「その時点でお前は矛盾している。じゃあ関羽を倒した敵をお前が殺したら敵はどう思う？」

桃香「敵は私を憎みます」

剛鬼「そうだ。お前はそれを断ち切って平和を実現出来るか？味方を犠牲にしても平和を実現出来るか？出来ないだろお前は甘いどうせ味方は誰も死なせないとか言って味方が捕まったら味方を助けることを優先して逆に味方を危険にさせるだろう」

桃香「……」

剛鬼「お前は王とは言えないその考えは王に相応しくないからな」

桃香「じゃあ味方を犠牲にして勝利することが王のすること何ですか！」

剛鬼「阿呆かお前は？」

桃香「どういう意味ですか？」



剛鬼「王は全てを背負わなければならないだがお前はその覚悟があるか？」

桃香「・・・・」

剛鬼「大勢を助ける為に一人を犠牲にする覚悟がお前にあるか？」

桃香「犠牲にしません！」

剛鬼「何？」

桃香「犠牲を出さずに皆助けてみせます！」

剛鬼「俺が聞きたいことはそう言うことじゃなくて」

桃香「私は犠牲を出さずにこれから進んでいきます！仲間を見捨てることなど私にはやっぱり出来ません！」

剛鬼「フッフハハハ」

桃香「？」

剛鬼「ハハハ面白い覚悟を聞いたら開き直りでこの俺を圧倒するとはな。いいだろうお前の理想につきあつてやる」

桃香「え！」

剛鬼「守つてやるよ俺がこの安い命でお前の仲間をよ」

一刀「本当に仲間になってくれるのか？」

剛鬼「なると言ってるだろ。だが劉備いつか必ず覚悟をしなければいけない時が来る。その時に聞かせてもらつお前の覚悟をな」

桃香「はい」

剛鬼「まあ恋がいるからしょうがなくなのだがな」

俺は恋を引き寄せ劉備に言う

桃香「仲良いんですね恋ちゃんと鬼面さん」

剛鬼「剛鬼だ」

桃香「え？」

剛鬼「俺の名は剛鬼だ」

桃香「私は劉備 字は玄德 真名は桃香 皆も自己紹介して」

一刀「俺の名前は北郷一刀」

大輝「俺は伊東大輝」

？「ははわわしょ私は諸葛亮 字は孔明 真名は朱里でしゅ」

ベレー帽のようなのをかぶった少女が自己紹介したが何故かかみま  
くつてる

？「ああわわ私は鳳統 字は士元 真名は雛里でしゅ」

何かこっちの魔女がかぶっているような帽子をかぶっている子もかなりかみかみだった

剛鬼「二人共どうかしたのか？顔が赤いぞ」

朱里「はわわだ大丈夫でしゅ」

雛里「き気にしないでください」

またかんでるよ本当に大丈夫なのか？

星「我が名は趙雲 字は子龍 真名は星」

鈴々「鈴々は張飛 字は翼徳 真名は鈴々なのだー！剛鬼お兄ちゃん宜しくなのだー！」

剛鬼「おいと」

何か鈴々がいきなり抱きついてきた

恋「鈴々 剛鬼に抱きついていいの恋だけ」

あれ恋一体何を言ってるのかな？

鈴々「えー恋だけずるいのだー！」  
何か二人が喧嘩を始めた

愛紗「……」

剛鬼「お前は俺が気に入らないから名乗らないのか？」

愛紗「……我が名は関羽 字は雲長 真名は」

剛鬼「真名は言わなくていい」

愛紗「何故だ？」

剛鬼「気に入らない奴に真名を呼ばれたらさぞ不快だと思っからさ」

愛紗「やはりお前は気に入らない！」

剛鬼「だから何だ？ 気に入らない相手にはそういう態度をとるのか？ 器量が小さい奴だな」

愛紗「私と勝負しろ！ その口を黙らしてやる」

剛鬼「雑魚がよく吠えるな」

愛紗「勝負はしないのか？ なら私の不戦敗にするが」

まだ何も言っていないのだが

剛鬼「自分より力量が上の相手に挑発するとは愚かな奴だな。 いい  
だろうその勝負うけよう」

俺達はその後調練場に向かった

愛紗「準備はいいか？」

剛鬼「ああ構わんよ」

愛紗「貴様武器を持たず腕も出さずに戦うとは私を嘗めているのか

「？」

剛鬼「ごたくはいいから来いよ雑魚」

愛紗「貴様！」

関羽が青龍偃月刀を振り俺に襲いかかってくるが

剛鬼「遅いな」

俺は関羽の攻撃を全て普通に避け続ける

愛紗「どうした避けてばかりでは勝てないぞ！」

剛鬼「五月蠅い奴だなそういうことは一撃でも当てたら言ってもんだと思うが」

愛紗「黙れ！」

関羽の攻撃を全て避け続けるがさすがに飽きてきたな

剛鬼「終わらせよ」

俺は後ろに下がり距離をとった

愛紗「やっと攻撃する気になったか？」

剛鬼「一瞬で終わらせてやる」

俺は抜刀状態で構える

愛紗「あれはご主人様と同じ構え」

関羽も青龍偃月刀を構え攻撃に備えている

剛鬼「飛天御剣流 奥義 天翔龍閃！」

愛紗「な！」

瞬時に関羽の前に移動し斬を抜刀した



バシッ

愛紗「がは！」

関羽は空中に吹っ飛び地面に落ちた

剛鬼「これが実力の差だ」

俺は斬を鞘にしまい関羽の元へ向かった

愛紗「ここまでの腕とは」

剛鬼「動くな」

俺は関羽を抱き上げた

愛紗「な！いきなり何を！」

剛鬼「加減はしたが衝撃はすさまじかった筈。事実立てないだろ」

愛紗「・・・すまないな・・・真名は愛紗だ」

関羽が顔を赤くしながら言ってきた。ようやく敵視しないでくれたようだ

剛鬼「宜しくな愛紗」

俺はそれに笑顔で答えると愛紗は顔が真っ赤になっていた

剛鬼「どうした愛紗？」

愛紗「な何でもない」

剛鬼「？」

その後桃香達の所へ向かったら恋の機嫌が非常に悪く、機嫌をとるのにかなり苦労したよ

そして夜になり更に困ったことが

剛鬼「なあ恋もう離れてくれないか？」

恋「（フルフル）剛鬼好きただけ抱きついていいって言った」

恋がいつまで経っても離れてくれない。嬉しいには嬉しいんだが動きにくいし冷やかさをくらうので面倒だ

剛鬼「しかも部屋は恋と同じ部屋って何故何だ！」

恋が桃香と一刀に頼んで部屋を同じにしてもらったらしい

恋「剛鬼 恋が抱きついてると迷惑？（ウルウル）」

剛鬼「そんなことはないよ」

だめだ恋のあの目と顔に俺は勝てない絶対に

剛鬼「ああもうどうにでもなれ」

もう恋が飽きるまで抱きしめてやったが、恋は寝る時も俺から離れなかった為嬉しいさもあつたがかなり疲れた

と言っか俺って恋に甘過ぎるのかな？

剛鬼劉備の仲間になる（後書き）

剛鬼「恋」

恋「剛鬼」

作者「何だよ二人共見つめあつてよ」

剛鬼「まあそう怒るなつて」

作者「五月蠅い！」

剛鬼「ああ全く嫉妬は怖いな」

作者「ふん」

恋「剛鬼 作者何で怒ってる？」

剛鬼「ただの嫉妬だよ じゃあ恋いつものやろっ」

恋「うん」

剛鬼&a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」

## 賊討伐（前書き）

剛鬼「ようやく更新出来たな」

作者「これから更新すぐにしたいな」

剛鬼「全くだな。では楽しんで読んでください」

## 賊討伐

剛鬼「ああだるい」

何か目が覚めて早々桃香に最近村に出る賊を捕らえてくれとか言われて恋と向かっている

剛鬼「代々俺と恋が行く必要あるのか？他の奴に行かせればいいだろ」

何か知らんが暇なのは俺と恋しかいなかったらしいが

剛鬼「それに恋が着いて来る必要ないだろ」

何故か一刀と桃香が恋と一緒に行くようにとか言ってきたし

剛鬼「まさか恋二人に頼んだんじゃないだろうな？」

恋「！うん」

ああやっぱそうか恐らく涙目上目遣いにあの二人は敗れたのだろう



剛鬼「別に俺は一人でよかったのに」

恋「一緒」

恋が腕を掴みながら言ってきた

剛鬼「恋少し俺から離れても大丈夫になんない」と

このまま俺が傍にいないと駄目などとなったら、俺が一人で何処かに行く時などにまた駄々をこねられてはたまらん

恋「・・・分かってる」

本当に分かってるのか？帰ったら少しその辺厳しくしよう

およそ半日ほどかけて目的地の村に到着した

剛鬼「さてとまずは村長の所へ向かって話を聞こう」

恋「うん」

剛鬼「恋　話が長いからって寝ないようにな」

恋「・・・うん」

長い沈黙心配だな

その後俺達は村長の所へ向かった

剛鬼「劉備の家臣の鬼面とこっちが呂布です。要請を受けて来ました」

村長「要請に答えていただき感謝します。私がこの村の村長です」

お互い軽く自己紹介をし本題に入った

剛鬼「最近賊が現れるそうですがどのくらいの数か？」

村長「それが・・・一人のようなのです」

剛鬼「一人？」

村長「はい」

剛鬼「それで被害は？」

村長「被害は食料だけなのです」

剛鬼「他は？」

村長「ありません。金目の物を持っていたとしてもそれらは盗られていないのです」

剛鬼「金目の物を無視して食料だけを奪うねえ」

村長「何とかかりますか？」

剛鬼「まあその為に来たので何とかしてみせますよ。なあ恋」

恋「すうすう」

剛鬼「寝るな馬鹿！」

ゴチンッ

恋が眠っていたので頭に拳骨を落とした

恋「うゝ剛鬼痛い（ウルウル）」

恋が頭を抑え涙目で俺を見てきた

剛鬼「はぁ全くでは悪いですが今日の夜賊が出る所に食料を置いてほしいのですがいいですか？」

村長「はい構いませんが」

剛鬼「置いたらすぐにその場を去ってください。後は俺達がどこにかしますんで」

村長「分かりました」

剛鬼「では俺達は行きますので」

村長「はい気をつけてください」

その後俺と恋は村長の家を後にした

剛鬼「なあ恋」

恋「ふん」

何か恋の機嫌がかなり悪い。恐らく拳骨をしたからだろう

剛鬼「なあ恋聞いてるか」

恋「ふん」

いつもと違う怒り方をしている恋もけっこう可愛い

剛鬼「恋拳骨したこと謝るから許してくれよ」

恋「やだ」

即答されたー！しかも恋に

剛鬼「じゃあどうすれば許してくれるんだ？」

恋「して／／／／」

恋が顔を真っ赤にして言ってきた

剛鬼「してってまさか？」

恋「してくれるって約束してくれたら許す／／／／」

約束しないと恐らくずっと怒って口を聞いてくれないなこりゃ

剛鬼「分かったよじゃあ帰ったらな」

恋「うん」

恋が上機嫌になり抱きついてきた

剛鬼「はあ全く面倒だな」

やれるのは正直言つと嬉しいが終わった後の後始末が大変何だよな

剛鬼「とりあえず夜になるまで被害者から情報をえよう」

恋「うん」

とりあえず俺と恋は暫く被害者から情報聞き集めた

情報を集めた結果分かったことは

性別不明

容姿を毛皮で隠している

必要以上に人を殺さない

警備の奴等が束になっても勝てない

狙うのは食料のみ

推測すると

目的は食料のみ奪ってすぐに何処かに行くヒットアンダーウェイ戦法

剛鬼「恋じゃないの？」

何となく恋にそう言ってみた

恋「（フルフル）恋やってない」

剛鬼「だって恋なら金目の物に目もくれず食べ物を盗むだろうからさ」

恋「うゝ恋じゃあない（ウルウル）」

剛鬼「いや冗談だからマジになるなって」

恋「剛鬼の馬鹿」

からかっていたら恋が拗ねてしまった



剛鬼「ごめんごめん恋許してくれって」

頭を撫でながら恋に謝ると

恋「あんまりそついうこと言ってほしくない」

恋が下を向いて言ってきた

剛鬼「ああ分かってるよ」

そんな痴話喧嘩のようなことを続けていたら夜になっていた

少しとんで現在森の中

今俺と恋は村長の命令で食料を運んでいる奴等から離れた場所を歩いている

剛鬼「もつすぐ目的地に着くな」

恋「うん。敵が出たら恋が倒す」

剛鬼「そうか　なら殺さずに捕らえてくれ」

恋「分かった」

暫くすると前方の奴等が止まり食料の入った荷車を置いた

剛鬼「後はアイツ等が離れれば　何！」

いきなり何かが凄いスピードで接近し荷車のまわりの奴等を襲った

恋「行く」

剛鬼「待て恋」

俺は向かおうとした恋を止めた

恋「どうして？速くしないと逃げられる」

剛鬼「此所で戦っても逃げられたら終わりだ。アイツが住処に行く

まで我慢しろ」

恋「・・・分かった」

恋は少し納得していなかったようだが行くのをやめてくれた

剛鬼「恋戦う時に油断をするなよ。恐らくスピードならお前と同じぐらいかもしれないからな」

恋「分かってる」

話している間に標的はまわりを確認した後荷車をひいて歩き出した

剛鬼「よし気配を消して追跡をするぞ」

恋「うん」

追跡を開始して辿り着いた場所森の中にあるボロい家

標的は荷車を置くと中に入ってしまった

剛鬼「此所がアイツの隠れ家のような」

俺と恋は荷車の所まで移動し家を見る

剛鬼「まあ何の為にこんなことしてるんだか」

恋「食料を奪うのはお腹が空いてるから」

剛鬼「まあそうかもしれないけど」

ガタッ

話していたらドアが開き標的が俺に襲いかかってきた

剛鬼「鉄塊」

キイイイン

？「！」

攻撃がくらっていないのを見て驚いているようだ

剛鬼「いい攻撃だ。だが殺意がこもっていないな」

標的の戟を持ち戟ごと投げ飛ばし姿を見ながら言う

身長は恋より低く何かの毛皮をかぶっているので顔は分からないが  
身長を超える戟を片手で持っている

恋「剛鬼 恋が相手する」

そう言つと恋が俺の前に立ち方天画戟を構えた

？「！」

何故か標的が恋を見て驚いているがまあ気にしないでおう

剛鬼「油断をするなよ。それと絶対に殺すな」

恋「分かった」

恋はそう言い向かって行った

剛鬼「気をつけろよ恋」

俺はそう言い恋の戦いを見る

恋side

恋「恋が相手」

？「・・・」

キン

毛皮の奴は何も言わず恋突撃してきた

恋「速いけど甘い」

？「！」

毛皮の奴は何回も攻撃してくるけど全て弾く

恋「お前の攻撃には殺意がない」

？「・・・」

キイン

恋「殺意がない攻撃じゃ恋は倒せない」

毛皮の奴の攻撃は速いけど殺す覚悟がないように思える

簡単にいなせる

恋「次は恋から」

？「・・・」

ガキイイイン

？「！」

恋が武器を振るってそれをガードした毛皮の奴は軽く吹っ飛ばされた

恋「ふっ！」

キイイイン

？「！」

毛皮の奴も戟を振るって応戦してる

恋「終わり」

ガキイイイン

？「！」



バタッ

木にぶつかって毛皮の奴は気を失ったようだ

恋「とどめ」

恋が毛皮の奴にとどめをさそうとした瞬間

剛鬼「恋！」

ガシッ

恋「剛鬼？」

何故か戟を掴まれた。剛鬼は怒っているようだった何故？そう思っている

ペシッ

恋「え！」

恋の頬が叩かれた

恋 s i d e o u t

剛鬼「恋！殺すなと言った筈だぞ」

恋「忘れてた」

ペシッ

恋「痛い何で恋を叩く？」

恋が泣きそう顔で言ってきた

剛鬼「恋 お前は人の命を平然と奪い過ぎだ。人を殺して悔いたこととはあるか？」

恋「ない」

剛鬼「やっぱりな」

恋「敵を殺して悲しむのは変」

ペシッ

恋「痛い 何で恋を叩く剛鬼 恋のこと嫌いになった？」

恋は泣きそうになってるでも言わなくてはいかない

剛鬼「恋 人を殺した時にそういうことを思わないとダメだ」

恋「どうして？」

剛鬼「それでは黄巾党と同じになってしまっからだ」

恋「・・・」

剛鬼「何も思わずただ敵だから殺すのはアイツ等と一緒にだ。だから恋にはあまり戦以外で人を殺してほしくないんだよ」

剛鬼「アイツ等のような考えになってほしくないんだよ!」

恋「・・・ヒクごめんなさい」

恋は泣いていた。俺は恋を優しく抱きしめ

剛鬼「いや俺もごめん。いきなり叩いてでも恋にはそうなってほしくないから」

昔の俺のように何も思わずただ人殺しをする道具のような考えになつてほしくないから

俺も何時から何も感じなくなつたんだろうな

剛鬼「ごめん恋」

恋「（フルフル）恋がいけなかったから剛鬼悪くない」

剛鬼「とりあえず倒れた奴の顔を見ておかないとな」

恋「うん」

恋を離し毛皮をかぶった奴の所へ向かい毛皮を取ろうとした瞬間

剛鬼「鉄塊」

キイン

？「！」

剛鬼「全く危ないな。俺じゃなきゃ死んでたぞ」

？「・・・・」

剛鬼「別に俺達はお前を殺しに来たんじゃない。だから話を聞いてくれないか？」

？「・・・・」

剛鬼「ダメか？」

？「・・・分かった」

やっと声が聞けた。けっこうまだ幼い感じの声だ

剛鬼「とりあえず顔を見せてくれないか？気になるからさ」

？「分かった」

その子は毛皮を取り顔を出した

剛鬼& a m p・恋「え！」

顔を見て二人は驚きを隠せなかった

## 賊討伐（後書き）

作者「次回かその次くらいに番外編を書こうと思います」

剛鬼「何かリクエストがあったかららしい」

恋「どういう話が気になる」

作者「まだ秘密だ」

剛鬼& a m p・恋「けち」

作者「五月蠅いー!」

剛鬼「まあいいかじゃあ恋いつもの」

恋「うん」

剛鬼& a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」

**剛鬼お父さんになる（前書き）**

作者「今回は魏の曹操と天の御遣いの一光君に来てもらいました」

華琳「皆さん初めましてかしら？」

一光「初めまして」

華琳「ところで作者さんいつになったら私達は出るのかしら？」

作者「もう少ししたらでるよ」

一光「その前に更新速くしろよ」

華琳「一光そう急かしてはダメよ。きっと作者さんは私達の為に頑張っているのだから」

作者「いや別に君の為に頑張っているわけでは」

華琳「何か言ったかしら？」



作者「いえ！何でもありません！」

一光「先が思いやられるな。では楽しんで読んでください」

剛鬼お父さんになる

剛鬼&a m p・恋「な！」

俺と恋は毛皮を取った奴の顔を見て驚いた。その訳は

剛鬼&a m p・恋「恋？」

何と毛皮の下には恋と同じ顔をした少女の顔があったのだ

まあ髪の色は水色で違うが恋が小さくなった感じだな

？「？どうしたの？」

剛鬼「イヤあまりにも恋に似ていたものでな。俺の名前は剛鬼」

恋「恋は呂布」

剛鬼「それで君の名前は？」

？「呂花」

剛鬼「分かったじゃあ呂花」

呂花「（フルフル）由衣<sup>ゆい</sup>」

剛鬼「いいのか？由衣って真名だろ」

由衣「いい」

恋「なら恋も真名で呼んでいい」

由衣「分かった」

剛鬼「じゃあ由衣何で盗賊のようなことをしたんだ？」

由衣「皆にご飯を食べさせる為に」

剛鬼「皆って？」

由衣「来て」

由衣に手を引かれ恋と共に家に入ると

少女「お姉ちゃんお帰り。あれこのお兄さんとお姉さん誰？」

少年「わあーこのお姉さんお姉ちゃんにそっくりだー」

家の中にはたくさんの子供達と動物が数匹いた

恋「この子達の為にやってたの？」

由衣「うん」

剛鬼「そういうことだったのか」

少年「ねえお兄さんお姉さん遊んで」

少女「遊んで」

剛鬼「俺は君達のお姉ちゃんに話があるからこっちのお姉さんが遊

んでくれるよ」

恋「うん」

恋が子供達と遊んでいる間に俺は由衣に桃香のところに来ないか聞かないと

剛鬼「由衣俺のいる所に来ないか？」

由衣「……この子達も一緒にいい？」

剛鬼「ああ構わないよ」

由衣「ならいい」

剛鬼「よしなら明日行く前に一回村長の所へ行こう。一緒にごめんなさいって謝らないと」

由衣「一緒に謝ってくれるの？」

剛鬼「ああ事情を話せば恐らく分かってくれるだろ」

由衣「ありがとう」

剛鬼「いいよ別に」

由衣「剛鬼思っていたより優しい」

剛鬼「そんなことないよ」

由衣「（フルフル）優しい」

剛鬼「まあ由衣が可愛いからな」

そう言い由衣の頭を撫でると

由衣「ありがとう／＼／」

顔を赤くしながら礼を言ってきた

何か顔が恋そつくりのせいか赤くなった顔も普通に可愛いな

といかんいかん何を思っているんだか俺は

剛鬼「由衣は兄姉とかはいるのか？」

あまりにも恋と容姿が似ているので聞いてみることにした

由衣「（フルフル）いない由衣一人」

剛鬼「そうか家族は？」

由衣「……皆賊に殺された。残ったのは由衣だけ」

剛鬼「そうだったのか、悪いな辛いこと思い出させて」

由衣「（フルフル）剛鬼知らなかったから」

家族の話をしている由衣は凄く悲しそうな顔をしていた

まだ幼いからやはり親が恋しいのだろうな

俺はそんなことなかったが

由衣「剛鬼、由衣のお父さんみたい」

剛鬼「何処がだよ？」

由衣「優しくて強いところが」

剛鬼「優しいのは分からんがまあ強いのは確かだな」

由衣「ねえ……お父さんって呼んでいい？」

剛鬼「俺のことをか？」

由衣「うん」

お父さんが正直俺はそんな奴にむいてないと思うけどまあいいか

剛鬼「いいよ由衣」



そう言って俺は由衣を優しく抱きしめた

由衣「ありがとうお父さん／＼／」

由衣の笑顔を見ると何か俺まで嬉しくなっちまうな

剛鬼「そうなるとお母さんは恋か？」

由衣「うん」

恋がお母さんねえ。まあ子供の相手してる恋は母親のように見えるからな

恋「剛鬼何してる？」

噂をしたら恋がこっちに来た

剛鬼「恋、子供達は？」

恋「皆寝ちゃった」

恋の後ろを見るとさっきまで遊んでいた子達が皆布団の上ですやすや眠っていた

剛鬼「そうか。恋、由衣がお前のことお母さんって呼んでいいかだつてさ」

由衣「呼んでもいい？」

恋「うん。呼んでいいよ」

恋は即答だった。正直普通の時でもこのぐらいのスピードで答えてほしいな

由衣「お母さん」

由衣はそう言い恋に抱きついた

恋は由衣の優しく抱きしめ微笑んでいる

何か凄く幸せそうな顔してるな二人共

剛鬼「俺達家族になっ たんだな」

俺はそう言い二人を抱きしめた

恋&a m p ;由衣「うん／／／」

剛鬼「守ってやるからな二人共俺が命をかけて」

由衣「ありがとうお父さん」

恋「ありがとう剛鬼」

剛鬼「まあそれが俺の存在意義だからな」

俺にようやく家族が出来た。初めてのちゃんと俺のことを思ってくれる。信じてくれる家族が

**剛鬼お父さんになる（後書き）**

作者「次回は番外編になります」

華琳「何でもばれんたいんとやらの話らしいわよ」

一光「こっちでやっていいのかが疑問だが」

作者「では最後は剛鬼君と恋ちゃんのやってるのでお願いします」

一光 & a m p ・ 華琳「次回も楽しんで読んでください」

番外編・チヨコ渡し戦（前書き）

傀儡師「番外編です」

剛鬼「今回はバレンタインの話だ」

傀儡師「更新遅れましたが楽しんで読んでください」

## 番外編・チョコ渡し戦

剛鬼「バレンタインをやるだど？」

何か会議があると言われ来たのだが

剛鬼「くだらないことで俺を呼ぶな」

一刀「くだらないこと何かじゃない！」

何か一刀が怒鳴って言った

大輝「いや何もそこまで大声を出さなくても」

愛紗「そもそもご主人様ばれんたいんとは何なのです？」

一刀「バレンタインとは女の子が好きな男に自分の気持ちとチョコを挙げる日なんだよ」

星「ほう天の国にはそのような日があるのですか」

朱里「天の国は進んでいるんですね」

雛里「気持ちとチョコと一緒に挙げる何て」

司「面白いことをやるんだな」

音々「音々にはそんな奴はいないからどうでもいいのです」

月「そんなことをする日がある何て」

詠「ふーんそんな日があるの」

鈴々「鈴々は挙げるより貰いたいのだ!」

桃香「じゃあさ明日皆でチョコ作って好きな人に渡そうよ」

朱里「はわわ!明日ですか?」

雛里「あわわ!そんな急に」

愛紗「そうですよ桃香様」

桃香「えーいいじゃんねえご主人様」

桃香はそう言い一刀に抱きついた

一刀「なあいいだろ皆それぐらいさ」

大輝「女たらしが」

一刀を見て大輝は呆れているようだ

愛紗「まあご主人様がそう言つのならやりましょう」

愛紗は渋々了承したようだ

星「だがただ作って渡すだけでは面白くない。此所は最初に思いにチヨコを渡した人が思い人の恋人になると言うのはどうだろう？」

桃香「それいいですね！そうしましょう！」



剛鬼「ああもう俺は戻るからな」

俺はだるくなったので自室に戻ることにした

恋「恋も行く」

そう言い恋も俺について来た

剛鬼「話を聞かなくていいのか恋？」

恋「・・・うん」

若干考えたようだがやめてしまったようだ

その後はとりあえず自身の部屋に恋と戻った（部屋は一刀に頼み別々にしてもらった）

恋「剛鬼はチョコ欲しい？貰えたら嬉しい？」  
恋が不意に聞いてきた

剛鬼「そりゃ貰えるんなら欲しいし嬉しいさ」

恋「なら恋頑張る」

剛鬼「何をだ？」

恋「何でもない。剛鬼また後で」

そう言つて恋は部屋から出て行つた

剛鬼「何か素っ気ないな」

いつもなら二人になったら無茶苦茶甘えてくるのに、今日の恋はすぐに部屋から出て行ってしまった

剛鬼「まあ何か用事があるのかな？」

特に気にせず俺は瞑想を開始した

恋side

恋「チョコの作り方分からない」

剛鬼にチョコを作って渡そうと思ったけど恋は料理などをしたことがないから何も分からない

音々「恋殿ー！」

どうするか考えながら歩いていたら音々が恋の元に来た

音々「どうしたのですか恋殿考え事などして、はっ！まさか剛鬼に何か酷いことをされたのですか？」

恋「（フルフル）剛鬼酷いこと何かしない」

音々「なら何を悩んでいるのですか？」

恋「チョコを作りたいけど作り方が分からない。音々は作り方分かる？」

音々「それならさっきの会議でアイツ（一刀）が説明したのを聞いたので分かるのです」

恋「じゃあ作り方教えて」

音々「いいですけど明日の為に作るのですか？」

恋「うん」

音々「じゃあ誰に渡すのですか？」

恋「剛鬼」

音々「やっぱりですか」

恋「音々は作らないの？」

音々「音々は渡す人がいないので別に作らないのです」

恋「ご主人様には？」

音々「別に音々はアイツのこと何か好きじゃないのです」

恋「音々も一緒に剛鬼に渡す」

音々「別に音々は剛鬼のこと好きじゃないのです」

恋「いつもお世話になってる」

音々「うゝ恋殿がそう言うのなら音々も一緒に渡すのです」

恋「じゃあ早速作る」

音々「はいなのです」

恋達はその後調理場に向かった

恋side out

剛鬼「今日はやけに静かだな」

瞑想を終わらせ部屋にいる俺だが今日は静か過ぎる

いつもなら鈴々達が騒いでいるのに

剛鬼「こつも静かだと逆に気味が悪いな」

とりあえず城内を歩いていると食堂が凄いことになっていた

剛鬼「静かな原因はこれか」

食堂には愛紗達女性陣が全員チョコを夢中で作っているようだ

剛鬼「仕事のほうもこれぐらいやってくれと助かるんだがな」

などと呟いて俺を自室に戻った

次の日バレンタインをやるせいか何かそこら辺から殺気が

俺は自室から出て城内を歩いていると

侍女「剛鬼さんチョコ受け取ってください!」

剛鬼「おいマジかよ」

侍女の後ろからも凄い数の女性陣が俺に向かって来た

剛鬼「やば逃げろ！」

何故か危険だと判断し俺は逃走したが

女性陣「剛鬼さん待ってください！」

剛鬼「くそいつまでついて来るんだ」

逃走していても奴等何処からともなく現れやがる

そしてちょうど一刀が俺と同じ所に走って来た

一刀「よう剛鬼お前も凄い人気みたいだな」

剛鬼「大輝はどうした？」

一刀「アイツなら朱里と雛里からチョコ貰ってたから大丈夫だろ」

剛鬼「奴は口りだったのか？」

一刀「そうみたいだ」

とりあえず走っていたら大輝と朱里と雛里がいた

大輝「二人共清々頑張れよ」

朱里「はっはわわ！が頑張ってください」

雛里「あっあわわ！凄い数の人が追い掛けて来ます」

一刀「ああ頑張るよ」

剛鬼「まあ出来る限りな」

尚も逃げ続ける俺達二人の前に



桃香「ご主人様 剛鬼君」

愛紗「やっと見つけましたよ」

星「探すのに苦労しましたよ」

鈴々「にやはは見つけたのだ」

逃走中の俺達の前に一番出会いたくない奴等と出会ってしまった

一刀「ねえ皆とりあえず今逃げてるから退いてくれない？」

剛鬼「捕まりたくないんでな」

愛紗「ならご主人様が剛鬼殿どちらか私のチョコを受け取ってください！」

桃香「あつ！愛紗ちゃん狡い。ねえご主人様 剛鬼君私の貰ってよ」

星「いや是非ともお二人には私のを貰ってほしい」

鈴々「鈴々のを挙げるのだ」

愛紗「いや二人は私のを貰うんだ」

桃香「違うよ私のだよ」

星「いやお二人は私のを貰うに決まっている」

鈴々「違う鈴々のを貰うのだ!」

何か4人は言い争いを始めやがった

一刀「剛鬼俺は今非常に嫌な予感がするんだが」

剛鬼「奇遇だな俺も同じだ」

桃香「もうご主人様と剛鬼君に選んでもらおう」

愛紗「そうですね」

星「そのほうが早いな」

鈴々「賛成なのだ！」

4人はそう言い此方に向き

4人「ご主人様 剛鬼（君 殿 お兄ちゃん）誰のを貰うか選んで」

4人は凄く怖い笑顔で俺と一刀に言ってきた

一刀「えっとじゃあ俺は」

一刀が威を決して選びにかかるが

桃香「ご主人は勿論私のを貰ってくれるよね」

桃香は凄く怖い笑顔で片手に剣を持ちながら言っていた

愛紗「勿論私のですよねご主人様」

愛紗もそう言いながら青龍偃月刀を片手に言い

星「主無論私のですよね」

星も片手に竜牙を持ちながら聞き

鈴々「鈴々のをもらわないと酷いのだ！」

鈴々も同じように蛇矛片手に怒鳴っている

最早脅しになっているな

そんなことを考えていると桃香が此方を見て

桃香「剛鬼君は誰のを貰うの？」

と桃香がもの凄く怖い笑顔で聞いてきた

これはやばいなと思っていたら

恋「剛鬼」

剛鬼「危な！」

恋が走りながらこっちに向かってきて俺に抱きついてきた

剛鬼「いきなりどうした恋？」

一応理由を聞いてみると

恋「これ剛鬼にあげる」

恋がそう言い俺にリボンがしてある袋を渡してきた

剛鬼「これってチョコか？」

恋「うん／＼／」

中身を確認すると確かにチョコが入っていたしかもハート形の大きいのが一つ

剛鬼「恋が作ったの俺の為に？」

恋「うん／＼／」

恋が顔を真っ赤にしながら頷いた

剛鬼「ありがとう恋」

お礼を言くと恋は更に顔を赤くし

恋「剛鬼恋とずっと一緒／＼／」

全員「なっ！」

まさかの独占宣言に周りの奴等全員が驚いている。だがそんな中俺は

剛鬼「ああ何があってもずっと一緒だよ恋」

そう笑顔で答えておいた

剛鬼「じゃあ俺は部屋に戻るから後頑張れよ一刀。行こう恋」

恋「うん／＼／」

俺と恋は唾然としている奴等をおいて部屋に戻った

恋「剛鬼チョコ食べて」

剛鬼「ああじゃあ食べるかな」

パキッ

部屋に戻りチョコを一口食べてみた

恋「美味しい？」

恋が心配そうな顔をして聞いてきた

剛鬼「美味しいよ」

恋の作ったチョコは普通に美味かった。ほど良い甘みと苦味がよくまっちしている

恋「本当？」

恋がまた心配そうに聞いてきた。本当何だかな

剛鬼「じゃあ恋も一緒に食べよう」

俺はそう言った後チョコを少し多めに口に入れ恋にキスをした

恋「ん！／＼／」

その後は恋の口の中にチョコを入れ二人で舐めた

暫くして唇を離し

剛鬼「どうだ美味かったろ？」



恋「うん／＼」

恋は顔を真っ赤にして頷いていた。いきなりだったから驚いたみたいだけど

けど凄い嬉しそうな顔をしている

剛鬼「恋は料理とか出来たの？」

気になったので聞いてみた

恋「（フルフル）音々に教えてもらった」

教えてもらって個々まで出来るとはやはり恋は天才だな。今度色々教えてみよう

コンコン

剛鬼「入っていいぞ」

ドアがノックされたのでそう言うと月と音々が入ってきた

月「ごっ 剛鬼さんあのこれ貰ってください!」

月はそう言いながら俺にリボンがしてある箱を渡してきた

剛鬼「チョコか?」

月「はい」

剛鬼「ありがとうございます」

月「じゃじゃあ私はし失礼します!」

月はそう言つと部屋を出て行ってしまった

剛鬼「音々もチョコくれるのか?」

音々も何か持っているようで聞いてみた

音々「この前守ってくれたのでそのお礼なのです」

音々はそう言い箱を渡して来た

剛鬼「ありがとうな音々」

そう言い音々の頭を撫でた

音々「うーじゃあ音々は戻るのです」

音々も顔を赤くしながら戻って行った

剛鬼「ああ眠いから今日はもう寝るかな」

恋「うん」

俺がベットで横になると恋も横になったので今日は俺が恋を抱きしめ一緒に眠った

こんな感じで俺にとっては初めてのバレンタインは終わった

おまけ

一刀「くそーもう勘弁してくれー！」

愛紗「ご主人様待ってください！」

桃香「ご主人様ー！」

鈴々「お兄ちゃん待つのだー！」

星「主ー！」

一刀は今だに追い掛けられていた

大輝「たいへんそうだなあ」

朱里「えっと止めなくていいんでしょうか？」

大輝「まあ自分から言ったんだからこうなるのは覚悟の上だったからいいだろ」

雛里「あわわ大輝さん冷たいです」

大輝「雛里俺にあの集団を止めれると思うのか？」

大輝が追い掛けている愛紗達を指差し言う

雛里「む無理ですね」

大輝「だろ」

朱里「でもあのままじゃあ」

大輝「そうか朱里は俺より一刀を心配するのか悲しいな」

わざと大輝がそう言っていると朱里は

朱里「はっはわわ！確かにご主人様は心配ですが大輝さんに怪我はしてほしくありません」

慌ててそう言った

大輝「本当かな？」

朱里「ほ本当です！」

大輝「ならもう寝よう眠くなったからさ」

雛里「えっと大輝さん」

大輝「？何？」

雛里「えっとその／＼／」

雛里が顔を赤くしもじもじし出した

大輝「雛里今日はチョコくれたから一緒に寝よう」

大輝は雛里の肩に手を置きそう言った

雛里「はっひゃい／＼／」

大輝「勿論朱里もな」

朱里「わかりましゅた」

大輝達はその後部屋に向かった

一刀「いつまで逃げればいいんだー！」

一刀君は逃げ続けたが最後は捕まりその後どうなったのかは誰も知らない

番外編・チヨコ渡し戦（後書き）

傀儡師「番外編は書くのがけっこうたいへんです」

剛鬼「だがリクエストがきてよかったじゃないか」

傀儡師「まあな。リクエストなどあつたら言ってください」

剛鬼「頑張つて書きますので」

傀儡師「次回は本編です」

傀儡師「では今回は剛鬼と私でいつものを」

剛鬼「ああ」

傀儡師& amp ;剛鬼「次回も楽しんで読んでください！」



## 剛鬼 白装束と戦う（前書き）

傀儡師「更新送れてすいません」

剛鬼「ちよくちよく更新していかないと」

傀儡師「そうですね。では楽しんで読んでください」

## 剛鬼 白装束と戦う

次の日

剛鬼「という訳何です」

村長「そうでしたかこの子が子供達の為に」

俺は今村長に由衣のことを説明していた

剛鬼「何とか許してもらえないでしょうか？」

村長「分かりました。以前にも助けてもらいましたし」

剛鬼「以前とは？」

村長「貴方が黄巾党に襲われていた村を助けた時です。その村に私もいましたから」

剛鬼「そうだったんですか。じゃあ私達はこれで」

村長「はいどうもありがとございました」

その後村長の所を後にし俺達は桃香達の所へ帰る為歩き出した

少し子供が歩くには遠いので馬車などに乗してもらって帰っていたのだが

剛鬼「しくつたな」

恋「いる」

現在森の中を歩いているのだがどうやら敵が来たようだ

剛鬼「恋 由衣と子供と動物達を連れて桃香のところへ行け」

恋「剛鬼はどうするの?」

剛鬼「俺が囧になって奴等を引き付ける」

恋「剛鬼は絶対帰ってくる?」

恋が心配そうな顔で聞いてきた

剛鬼「ああ必ず帰る。だから由衣達を頼んだ」

恋「分かった」

由衣「お父さん」

剛鬼「大丈夫だ。俺は必ず帰るから子供達を頼んだぞ」

由衣「うん」

恋「剛鬼必ず帰ってくる」

剛鬼「ああ必ず帰るだから行け」

由衣「死なないでお父さん」

由衣が泣きそうな顔をして言った

剛鬼「大丈夫だ俺は死なないから」

由衣「うん分かった」

その後恋達は子供達と動物を連れて先に行き俺はその場に残った

剛鬼「もういいだろ出て来いよ」

？「まさか逃げずに残るとわね」

俺がそう言つと木陰から一人の白装束の男が出て来た

剛鬼「左慈の仲間だな」

？「ああ名前は紅君<sup>くれない</sup>を仕留めに来た」

剛鬼「だからそこら中に傀儡がいるのか」

紅「さて始めようか行け！」

白装束「キエーイ！」

紅が叫んだ瞬間白装束が一斉に現れ襲いかかってきた

剛鬼「傀儡任せか？くだらん。来い鉄碎牙！」

妖刀の鉄碎牙を作り出し構え

剛鬼「金剛槍破！」

白装束「ガッ」

白装束「グハッ」

金剛槍破を放ち傀儡共を一掃した

剛鬼「こんなもんか？」

鉄碎牙を紅に向け言う

紅「やはり人形では勝てないか」

紅はそう言い真紅の刀を抜いた

紅「覚悟はいいかい？」

剛鬼「ご託はいい来い」

紅「なら」

ヒュン

剛鬼「何！」

紅「遅い！」

キイン

紅は一瞬で俺の背後に移動し攻撃してきた

剛鬼「金剛槍破！」

攻撃を弾いた後金剛槍破を放ったが

紅「効かないよ」

紅は放った無数の金剛槍を全て真紅の刀で破壊した

剛鬼「何！馬鹿な！」

紅「そんな模造品の刀の技など効きはしないよ」

剛鬼「言ってくれるな」

だが確かに俺の能力は思い描いた刀を作り出すだけであり、剣自体はオリジナルとは言えない

剛鬼「なら自身の刀でお前を斬る」



鉄砕牙を捨て斬を抜き構える

紅「能力無しで僕に勝てると思ってるの？」

剛鬼「じゃなきゃ戦わねえよ」

キイイーン

互いの刀が激突した

紅「やはり実力もあるようだね」

剛鬼「能力だけに頼っていたら実力が衰えちまうよ」

キイイーン

こいつ実力は確かに高いだが何か妙だ

キイイーン

剛鬼（スピードとパワーがさっきより上がっているのは気のせいかな？）

紅の動きが攻撃するにつれ速くなっている気がする

剛鬼「お前力を隠しているのか？」

紅「まさか最初から全力だよ」

キーン

剛鬼（全力だと？なら何故さっきよりも強くなっているんだ？）

キーン

紅「どうしたの？どんどん動きが鈍くなっているよ」

剛鬼「くっ！」

奴のスピード　パワーがどんどん上がっていくこのままでは

紅「そろそろ種明かしをしようか」

そう言うと紅は距離をとった

剛鬼「種明かしだと？」

紅「そうまず僕的能力について」

剛鬼「能力だと？」

紅「僕的能力は二つあって一つは模造品の攻撃 技などがくらわな  
いこと」

だから金剛槍破が効かなかったのか

紅「そして二つ目は攻撃がぶつかるたびに相手の力を減らしていく  
ことさ」

剛鬼「力を減らすだと？」

紅「妙だと思ってたんだろ？戦闘中に僕のパワーやスピードが上が

つたつて」

剛鬼「それはお前が強くなったんじゃないやなくて俺の力が減ってきていたからか」

紅「ご名答」

剛鬼「だがそれでも！」

キイイイン

紅「今の君の力では僕には勝てないよ」

剛鬼「ちっ！」

一端距離をとつたが

紅「遅いよ」

剛鬼「何！」

ズバッ

剛鬼「くっ！」

咄嗟に回避したが背中を軽く斬られた

紅「もう今の君の力は将より低いんだ勝ち目などないよ」

剛鬼「それはどうかな」

紅「何？」

剛鬼「今の力では勝てないなら普段の力に戻すだけのこと」

俺はそう言い右腕にの仕掛けに触れ

剛鬼「力量解除」

力のリミッターを外した

紅「力量解除？何の悪あがきだい？」

剛鬼「一瞬で決める」

俺は抜刀状態で構える

紅「今の君の力では僕に勝てないとまだ分からないのかい？」

剛鬼「ならばその油断と共に死ね 瞬天殺！」

紅「何！」

紅が気付いた時には剛鬼は彼の後ろにいた

紅「何だただの見せかけかい？」

剛鬼「阿呆が」

紅「何？ガッ！」

紅は血を吐きその場に膝をついた

紅「一体何が！」

剛鬼「ただ速く攻撃しただけだ」

紅「力が落ちている状態で僕にそんなこと出来る訳が」

剛鬼「言っただろ力量解除をしたと」

紅「何故これほどの力を君は隠す？」

剛鬼「お前に教える気はない」

そう言い俺は紅に斬を向ける

紅「僕の敗けか、だが僕の上にはまだ4人の強者がいる。果たして君は4人に勝てるかな？」

剛鬼「俺の目の前に敵で現れるなら全て殲滅する」

紅「ああ後さっきの女の子の所に速く行ったほうがいいよ」

剛鬼「何どついうことだ？」

紅「ハハハさてどついうことかな」

剛鬼「死ね」

ザシュッ

紅の首を斬り殺し俺は恋のもとへ向かった

剛鬼「くそ奴等！」

恋のもとへ急ぐと恋と由衣が白装束と戦っていた

剛鬼「鉄砕牙」



鉄砕牙を再び作り出し

剛鬼「消える雑魚共金剛槍破！」

雑魚共に向け金剛槍を大量発射

白装束「ゲハッ」

白装束「ガハッ！」

雑魚共はほんの一瞬で壊滅

恋「剛鬼！」

由衣「お父さん！」

二人が俺に気付き走ってきたのだが

剛鬼「何故スピードをおとさない？」

二人はスピードをおとさず

剛鬼「ゴフッ！」

見事俺の腹に突っ込んできた

剛鬼「痛いじゃねえか恋 由衣」

恋「剛鬼大丈夫怪我してない？」

由衣「お父さん大丈夫？」

剛鬼「ああ俺は大丈夫だよ。二人は大丈夫か？」

二人「大丈夫」

剛鬼「そうかならよかったリミッター作動」

リミッターを作動させるのを忘れていたので作動させた

剛鬼「じゃあ行くぞ」

二人「うん」

俺達は桃香達のもとへ向け再度歩き出した

## 剛鬼 白装束と戦う（後書き）

傀儡師「もうすぐ他キャラともう何人かオリキャラが出ます」

剛鬼「一体何人出るんだ？」

恋「気になる」

由衣「教えて」

傀儡師「それは企業秘密ですよ」

恋& a m p ; 由衣「ケチ」

傀儡師「何を言われようと教えませんよ」

剛鬼「つれない奴だな。まあいいかじゃあ恋 由衣いつものやろう」

恋& a m p ; 由衣「うん」

剛鬼&a m p・恋&a m p・由衣「次回も楽しんで読んでください」

## 異空間（前書き）

傀儡師「同じ頃の白装束達の様子です」

剛鬼「ついに他キャラが出現だ」

傀儡師「では楽しんで読んでください」

## 異空間

何処かの異空間で白装束は集まっていた

？「紅が鬼面に敗れたようだ」

？「ほう奴が」

于吉「紅は妖術はあまり使えませんが、戦闘力に例の能力を加算すれば中々の実力者になるのですがね」

左慈「あんな奴に敗けるようなら俺がとつくに殺している」

于吉「左慈はよほど彼を殺したいみたいですな」

左慈「当然だ！本当なら今すぐにでも奴を殺したいところだ！」

？「左慈よまだ待て、感情に任せて我等の使命を忘れるな」

玉座に座っている男が言う

左慈「チッ」

？「現時点で重要人物を殺すことは可能か？」

于吉「難しいですね。劉備の所には鬼面を含め北郷一刀と伊東大輝、魏には杉浦一光と黒神紅魔、唯一呉には海道竜也一人だけです」

？「だが呉にも我等に敵対している者が一人います」

左慈「上海木綿じょうかいもくめんとかいう男か？」

？「ああ」

于吉「それに零とか言う男もいますしね。どうします長？」

于吉は玉座に座っている男に聞く

長「現段階では奴等を殺すことは不可能だろう。もう少し様子をみよう」



全員「御意」

？「おやおや、どうやら取り込み中のようなですね」

全員「誰だ！」

突如何者かの声が聞こえ全員が声がしたほうを見ると其所には一人の男がいた

？「そう敵視しないでください。私は皆さんに協力したいだけです」

于吉「ほう協力ですか」

？「作用です」

長「誰か知らぬがお前は何者だ？何処から此所に侵入した？」

？「ちょっとある女性を追っていたら突然光に包まれましたね。気付いたら此所にいたんですよ」

左慈「貴様も奴等と同じ存在か！」

長「左慈よまあ待て」

男に攻撃態勢にはいつていた左慈を長が止める

左慈「しかし長！」

長「貴様が私達に協力する見返りは何だ？」

？「見返りですか？そうですね、私の追っている女性を探してほしいのですがよろしいですか？」

長「よからう。では貴様は今偵察中の我等の仲間のもとへ行ってもらおう」

？「了解しました。ではこの女性を探してください」

男はそう言い一枚の写真を出した

長「分かった。見つけたら知らせよう」

？「頼みますよ」

長「では于吉奴のもとへ案内してやれ」

于吉「はいでは此方へえっと」

？「ああ私の名前は天海と言います」

于吉「では天海殿此方へ」

天海「はい」

そう言い于吉と天海は何処かへ消えた

左慈「よろしいのですかあのような者に協力させて？」

長「使える駒を使わない手はないだろ。お前達は引き続き警戒と奴の言っていた女を探せ」

全員「御意」

返事をした後全員その場から消えた

## 異空間（後書き）

傀儡師「さて天海が出たことで凄まじいほど非難がくると思うので、  
何て言おうか考えないと」

剛鬼「たいへんだな」

傀儡師「何もう慣れましたよ」

恋「頑張つて」

傀儡師「ありがとうございます恋」

剛鬼「ではまた」

剛鬼& a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」

**剛鬼 問いつめられる（前書き）**

傀儡師「更新送れて申し訳ありません」

剛鬼「最近作者は忙しいみたいだな」

傀儡師「では楽しんで読んでください」

剛鬼 問いつめられる

剛鬼「ようやく帰ってこれた」

恋「無事に帰ってこれた」

白装束の襲撃から逃れ無事に帰還することが出来た

由衣「此所がお父さんとお母さんの住んでる所？」

剛鬼「そうだよ由衣。とりあえずまずは桃香の所へ行こう」

恋「うん」

桃香達のいる城へ歩き出し街の人達と会うと

街人「剛鬼將軍お子さんができたんですか？」

街人が由衣と俺達を見て言う

剛鬼「違いますよ。この子は保護した子で自分と恋の子ではありません」

街人「そう何ですか？呂布將軍に似てるのでつきり」

剛鬼「それでは私達はこれで」

話が進むとややこしくなりそうだから早々に退散したのだが

肉まん屋「おや剛鬼將軍ついにお子さんが出来たんですか？」

いきつけの肉まん屋の親父も同じこと言ってきたが

剛鬼「違いますよ。この子は周りの子と同じで保護した子です」

肉まん屋「そう何ですかアッシはてつきり剛鬼將軍と呂布將軍の子かと」

剛鬼「確かに恋と似ていますが違いますよ」

肉まん屋「しかし本当に呂布將軍と似てますね」



肉まん屋の店主がまじまじと由衣を見る

由衣「・・・・」

由衣は黙って俺の後ろに隠れた

肉まん屋「おっと嫌われてしまったみたいですね」

剛鬼「この子はあまり人と会ったことがないので、店主を嫌っている訳ではないですよ」

肉まん屋「まあ今後とも、その子達と一緒にうちの肉まんをどうか宜しく願いますよ」

そう言い肉まん屋は奥のほうへ行った

それから城に着くまで色々な人に同じようなことを何度も言われ正直非常に疲れた

兵士「剛鬼將軍 呂布將軍」

門の近くに行くと兵士が声をかけてきた

剛鬼「今帰還した。劉備に用があるんだがいるか？」

兵士「現在将並び軍師は会議中ですが」

兵士が子供達に気付いて視線を俺に向ける

兵士「剛鬼將軍 この子供達は一体？」

剛鬼「ああ賊討伐の際に保護した子達だ。丁度いい少し子達達を見てくれ俺達は劉備のところ向かうから」

兵士「えっちょっと剛鬼將軍！」

何か兵士が叫んでいるが気にせず俺と恋は玉座の間に向かった

剛鬼「由衣子供達と一緒に待っててほしいんだが」

玉座の間に向かっている途中由衣が着いてきていることに気付いて

そう言ったのだが

由衣「お父さんとお母さんと一緒に行く」

由衣はそう言って戻ろうとしない

恋「剛鬼別に由衣がいても問題ない」

剛鬼「そうだけだよ」

まあ恐らく後で全員から質問責めにあうのは変わらないからいいか

などと諦めに入った俺

剛鬼「よし着いた」

そうこうしてる間に玉座の間に着いた

剛鬼「今帰った」

扉を開けながら言い中を見ると全員が集まっていた

一刀「ああ剛鬼お疲れ」

愛紗「思ったより速かった・・・」

愛紗が最後まで言う前に愛紗含めた全員がこっちを見て啞然とし

全員「れっ恋が二人いる！」

と俺の後ろにいる恋と由衣を見ながら叫んだ

剛鬼「ああ紹介する呂花だ」

由衣「・・・名前呂花 宜しく」

由衣が全員に軽く挨拶をした後由衣のもとに全員集まってきた

由衣「？」

そんな中由衣はきょんとしていた

桃香「可愛い！仕草も恋ちゃんみたい」

鈴久「凄いのだ！髪の色と背丈以外恋とそっくりなのだ！」

星「剛鬼殿もすみにおけませぬな」

剛鬼「何のことだ？」

音々「ぬぬぬ髪の色が同じだったら音々でも間違えそうなのです」

朱里「でも恋さんが小さくなったみたいで可愛いです」

雛里「そうだね朱里ちゃん。またライバルが出来たかも」

司「それにしてもよく似ているな。寝ぼけていたら間違えそうだし」

詠「確かに間違えそうね。でも個々まで似ているのも驚きだね」

月「へうまたライバルが出来た気がします」

何か雛里と月がライバルとか言ってるが何のことだ？

大輝「可愛いな。恋も十分可愛いけど何か違う魅力を感じる」

由衣「……」

全員が由衣を見ながら呟いているとやはり少し怯えて俺の後ろに隠れた

由衣「……お父さんこの人達誰？」

剛鬼「ああこいつ等は俺の仲間だよ」

そう言い皆の方を見ると何故か全員固まっていた

剛鬼「おいお前等どうかしたか？」

とりあえず固まっていたいる奴等に聞いてみると

愛紗「剛鬼殿 今呂花が剛鬼殿をお父さんと言っていたのは気のせ

いですよね?」

剛鬼「ハア何言っただ?」

一刀「いや呂花がお前のことお父さんって呼んだ気がしたからだよ」

由衣「・・・お父さん皆私の言っただこと聞こえなかったの?」

剛鬼「そんな訳はないだろ」

一刀「え?じゃあまさかお父さんで本当に言ってるのか?」

剛鬼「由衣はそう何回も言ってるだろ」

全員「おっお父さん!」

全員が俺を見る

星「ほうやはりそうでしたか」

愛紗「何がだ星?」

星「つまり言つとだな。呂花は剛鬼殿と恋の二人の子というわけだ！」

全員「えー！」

剛鬼「ちよつと待．．．はっ！」

星の発言を否定しようとしたら後ろから何かがくると感じ左へ回避すると

バキッ

音々「ちっ！外したのです」

音々が必殺陳宮キックをやってきた。だが威力がいつもと違う

いつもの威力はただの飛び蹴りと同じなのだが今回は床にヒビをいれやがった

音々「お前よくも．．．」



音々が身体を振るわせながら俺を見る

音々「よくも恋殿の初めてを無理矢理奪い、子を産ませて許せないのです！」

剛鬼「音々落ち着け話を聞いてくれ」

音々「五月蠅い！死にやがれなのです！陳宮キック！」

剛鬼「待てっ！」

確かに俺は恋の初めてを奪った。だがそれは恋が同意の上でっ

違う今考えるのはそこじゃない！

というか何で星は恋がお母さんだって分かったんだ？

剛鬼「ちつめんどいな」

恋「音々」

どう音々に説明しようか考えていた時恋が音々を呼んだ

音々「何ですか恋殿？」

音々は動きを止め恋を見る

恋「由衣は保護した子で恋と剛鬼の子供じゃない」

音々「本当なのですか恋殿？」

恋「本当。まだ赤ちゃんはできてない」

あれ何か今恋赤ちゃんって言わなかったか？

と次の瞬間俺の両腕は愛紗と司に掴まれた

司「剛鬼ちよつと恋のさつき言っただけを聞きたいんだが」

剛鬼「え？さつきって？」

司「まだ赤ちゃんができてないと言ったことについてだ！」

愛紗「詳しく説明してもらっぞ。まだできてないということについてな」

星「私も興味あるな」

詠「僕も」

桃香「私も興味あるな」

音々「やはりお前恋殿の初めてを」

朱里「私達も気になるよね雛里ちゃん」

雛里「うんそだね朱里ちゃん凄く気になるね」

月「やっぱり剛鬼さん恋さんと」

あれ何か皆顔がかなり怖いんですが

剛鬼「あのー俺に拒否権はあるのでしょうか？」

答えは分かっているが一応聞いてみた

全員「ある訳ない（です）」

剛鬼「やっぱり？」

ところで俺がお父さんと呼ばれているのかは全員気にならないのだろうか？

そんなことを考えていたら俺は恋と由衣それに鈴々と知らない女の子以外に連れられ別の部屋に連行させられた

そしてお話しと言う名の拷問を5時間も受けるはめになった

内容は恋の言った赤ちゃんのことについて

ひたすら全員に恋としたのだろう？と言われたが全て否定し、面倒だったので全員に殺気をぶつけて無理矢理黙らせた

剛鬼「何で俺がこんな目に合わないといけない」

大輝「人生色々あるそう落ち込むな」

一刀「元気出せって」

げっそりとして戻ってきた後二人にそう言われたが元気など出せる訳がない

恋「剛鬼元気出す」

剛鬼「ああ頑張ってみるよ」

？「帰ってきて早々災難だな」

知らない女の子が話し掛けてきた

剛鬼「ところでお前誰？」

さっきもチラッと見たが誰だか分からん

？「おいおい前に反董卓連合の天幕で会ってるだろ」

剛鬼「悪い存在が薄い奴は記憶に残っていなくてな」

？「存在が薄いつて・・・まあいい私の名前は公孫賛 真名は白蓮だ」

剛鬼「いいのか会ったばかりの奴に真名を許して？」

白蓮「全員お前に真名を預けてるようだからさ」

剛鬼「そうか。俺の名は剛鬼宜しくなハム」

白蓮「ハムじゃない白蓮だ！お前等御遣いは何故必ずハムと呼ぶ？」

白蓮が俺達三人を見て言う

一刀「そりゃお決まりだから」

白蓮「お決まりって何だ訳が分からんぞ！」

何か口論になったので俺は一人部屋に戻り休んだ

子供達は無事に保護されることになったので安心した

**剛鬼 問いつめられる（後書き）**

傀儡師「またもう少ししたら番外編を書く予定です」

剛鬼「この時期だとクリスマスか正月か？」

傀儡師「それは秘密ですよ」

剛鬼「何だよまた秘密かよ」

恋「けち」

傀儡師「まあその内分かりますよ」

剛鬼「本当けちな奴だよ。じゃあ恋いつものやろっ」

恋「うん」

剛鬼& a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」



**番外編 福引き大会（前書き）**

傀儡師「明けましておめでとございます」

剛鬼「新年最初の話しは番外編です」

傀儡師「では楽しんで読んでください」

## 番外編 福引き大会

一刀「新年明けましておめでとう！」

全員「おめでとう！」

新年早々一刀に呼ばれ全員今玉座の間にいる

剛鬼「眠いところを起こしたんだ。ちゃんとした用何だろうな？」

俺は一刀に殺気を出し伝える

一刀「うっ！えつとまあまず落ち着いて」

剛鬼「俺は、十分落ち着いている」

詠「アンタが殺気出してたら、こっちが落ち着けないわよ」

月「え、えつと剛鬼さん。とりあえず殺気を抑えてください」

恋「皆怖がつてる」

回りを見ると桃香や朱里 雛里 音々達が震えていた

剛鬼「・・・すまない」

とりあえず殺気を消し謝っておいた

司「で北郷、今度は何をするんだ？」

司が一刀に尋ねる

一刀「今から、新年福引き大会をすることを此所に宣言する！」

全員「福引き大会？」

桃香「福引きって何、愛紗ちゃん？」

愛紗「私に聞かれても、分かりません」

雛里「ねえねえ朱里ちゃん、福引きって何？」

朱里「うゝん、私も分かんないな」

鈴々「福引きって何なの？それって食べ物なのか？」

星「福引き、一体何なのですか」

大輝「何で、この世界でまで福引きやんだ？」

音々「福引きとは何なのです？」

月「ねえ、詠ちゃんは知ってる？」

詠「知らないよ。どうせアイツが考えたんだから、ろくでもないことじゃないの」

司「うゝん福引き、福を引くのか？」

恋「剛鬼、福引きって何？」

由衣「お父さん、福引きって何？」

御遣い以外のメンバーは、やはり福引きを知らないようだ

剛鬼「一刀君、俺等以外分らないと思うから説明頼む」

一刀「分かった。福引きとは、これを回して出た玉の色で、その玉の色の商品が貰えるんだよ」

一刀はそう言い福引きのセットを俺達に見せた

大輝「一刀、こんなもんいつ作っただ？」

一刀「まあ、暇を見付けて」

愛紗「仕事をサボって、作ったのでしょうか」

一刀「そ、そんなことないよ」

剛鬼「まあ、何にせよ一刀サボった仕事はちゃんとあるから安心しろ」

一刀「えっ！残ってるの？」

朱里「やっぱり、サボって作ってたんですね」

詠「それでついにて、仕事もサボれると思ってこんなことやる気になったのね」

一刀「細かいことは気にしないで、早速始めるぞ！」

このままでは不利になると思ったのか、一刀が強引に話しを先に進めた

一刀「まずは、皆この二つの玉の一つに自分の名前を書いて」

大輝「何で名前？福引きって色のついた玉使うんじゃないっけ？」

一刀「まあ、とりあえず言われた通りに書いてくれ」

とりあえず渡された少し大きめの玉に全員自分の名前を書いた

朱里「ご主人様、書きましたけどこれをどうするんですか？」

一刀「書き終わったら、このガラガラに入れて」

一刀が福引きのガラガラ？を開けたので全員その中に玉を入れた

一刀「じゃあ次は、二つめの玉に今日やりたいことの最初の文字を書いて」

司「やりたいことの、最初の文字？」

一刀「例えば、休暇の場合は休という字を書いて仕事の場合は仕という字を書くんだ」

白蓮「ほう、なら私は」

全員「えっ！いきなり白蓮が！」

星「おや、白蓮殿いつの間に此所に来たのですか？」

突如白蓮が現れ全員が驚いた

白蓮「いつも何も、最初から此所にいたぞ」

全員「えー！」

白蓮「おい、何だその反応は！」

桃香「だって、全然気付かなかったから」

愛紗「いきなり現れたと思いましたし」

鈴々「白蓮は、気付かれずに現れるのが得意みたいなのだ」

白蓮「そんなの得意じゃない！」

剛鬼「ここまでいくと才能だな。白蓮、お前暗殺者にむいてるかもよ」

白蓮「そんなもんにむきたくない！」



詠「密偵の才能もあるんじゃない？」

大輝「まあ正確に言えば、隠密の才能だな」

音々「これは、使えるかもしれないのです」

白蓮「そんなものに、使われたくない！」

司「いいじゃないか、それも一つの才能だ」

白蓮「作者！この作品の私の設定はどうなっている」

傀儡師「新年早々五月蠅いですね。貴方の設定は原作とほぼ同じですよ。まあそれ以上に影が薄かった気がします」

白蓮「おおい！何でそんなに影が薄いんだ！」

傀儡師「何故かって？それが貴方の定めだからですよ」

白蓮「おおい！理由の訳が分からんぞ。というか、完全に理由を言うのが面倒くさいから考えたような台詞じゃないか！」

傀儡師「それでは、私はこれで」

白蓮「おおい！ちゃんと理由説明しろよ」

白蓮が呼びかけたが傀儡師から返事はなかった

桃香「ねえ白蓮ちゃん、誰と話してたの？」

剛鬼「桃香、それを聞いたらいけないよ」

俺は桃香に指摘しながら白蓮を見る

白蓮「何だ？その可哀想なものを見る目は？」

剛鬼「ふっ何でもない」

白蓮「おおい！今絶対人を小馬鹿にしただろ」

剛鬼「ふっしていないさ」

白蓮「はあ、もういい」

白蓮は呆れたようで玉に字を書き始めたようだ

剛鬼「さて俺も書かないと」

とりあえず眠いから寝るの寝という字を書いておこう

恋「恋は何て書こう?」

剛鬼「その前に恋は字が書けたか?」

恋「書けない」

鈴々「鈴々も書けないのだ」

星「鈴々、そこはいばるところじゃないぞ」

剛鬼「はあ、由衣は書けるのか?」

由衣「（コク）」

由衣は玉に字をちゃんと書いていた

剛鬼「偉いな由衣」

そう言つて由衣の頭を優しく撫でた

由衣「ありがとう、お父さん／＼／」

由衣は顔を赤くしお礼を言つた

剛鬼「それに比べて恋は」

恋「剛鬼 恋も頭撫でて」

由衣の頭を撫でたせいか恋が俺の腕を掴み頼んできた

剛鬼「恋は字が書けたらな」

恋「・・・分かった」

恋はそう言い筆を持つが

恋「どうやって持つ？」

どうやら書く以前の問題だったようだ

剛鬼「はあ、恋こう持つの」

俺は背後に行き恋の手に筆を持たせた

恋「持ちにくい」

だが恋はすぐに筆を握って持ってしまう

剛鬼「はあ恋、持ちにくいかもしれないけどこう持つの」

俺は溜め息をはきながら、恋の手に自分の手を置き筆を持たせ固定した

剛鬼「いいか恋こう持つんだぞ」

恋「うん」

手を離れたが恋はちゃんと筆を持っている

剛鬼「良くできました」

そっつい俺は頭を撫でてやった

恋「／／／／」

恋は顔を赤くし気持ちよさそうにしている

桃香「いいなあ、恋ちゃんは剛鬼さんと仲良くて」

愛紗「全く羨ま・・・いや仲がいいな」

星「ふむ、どうしたら剛鬼殿を恋から離せるのだろうか?」

月「わ私も頑張らないと」

朱里「どうすれば、剛鬼さんは興味をもってくれるんだろうね雛里ちゃん」

雛里「うゝん、剛鬼さんは恋さん以外興味なさそうだから、ご主人様や大輝さんより難しいよ」

一刀「今の聞くと、俺と大輝は誰にでも手を出している軽い男と聞こえるな」

大輝「訂正しろ。俺はお前と違ってあまり手は出さん」

一刀「いや、そんなことないと思うけど」

大輝「お前は誰にでも手を出してるだろう？唯一剛鬼が怖くて、恋には手を出してないようだがな。俺はお前と違って、誰これ構わず手は出してない」

一刀「うっ、そう言われると何も言い返せないから悔しい」

鈴々「愛紗、食事の食って書けたのだ」

音々「音々はとりあえず恋殿から剛鬼を……」

司「私は鍛錬の鍛にしよう」

詠「司が鍛錬ならボクは仕事の仕にしよう」

白蓮「私は馬にしよう」

周りでは俺と恋を見て何か言っている者や、玉に何を書こうか言っている者などがいるがまあ気にしない

剛鬼「恋は何て書きたいんだ？」

恋「お昼寝」

剛鬼「じゃあ寝だな。この字を書いて」

俺は自分の手に字を書き恋に見せた



恋「分かった」

恋は玉に字を書くが、やはり字が下手である

まあその点は練習させて何とかしよう

一刀「全員書き終わったみたいだな。じゃあ此より福引きを開始する！」

カランカラン

一刀が手に持っているベル？のような物で音を出し宣言した

剛鬼「さて、一体何がおこるやら」

あまり期待をしないで俺は始まるのを待った

番外編 福引き大会（後書き）

傀儡師「今回は全員の福引きの結果です」

剛鬼「今年も宜しくお願いします」

恋「お願いします」

剛鬼「じゃあ恋新年最初のあれをやるよ」

恋「うん」

剛鬼& a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」

番外編 福引き大会2（前書き）

傀儡師「福引き編の後半です」

剛鬼「皆は一体何が当たったかな？」

傀儡師「フフフでは楽しんで読んでください」

## 番外編 福引き大会2

一刀「それじゃあ今から福引きを始める。一人ずつこのガラガラを回して」

一刀がガラガラ？を出し全員に言う

鈴々「その前にお兄ちゃん、何で最初の玉に鈴々達の名前を書かせたのだ？」

詠「ボクも気になる。まさか変なこと考えてるんじゃないでしょうね？」

詠が一刀を睨み聞く

一刀「まあまあ詠落ち着いて、別に変なこと考えてる訳じゃないから」

音々「じゃあ、何で書かせたのですか？」

一刀「イヤー、ちょっと考えついたからさ」

剛鬼「その考えが、何だか聞いてるんだろ」

俺が眉間をピクピクさせながら聞く

大輝「剛鬼が、きれる前に言わないと三途の川を渡るはめになるぞ」

一刀「えつとだな、まあ名前の書いてある玉を当てた人は、夜までその子と一緒にいるっていうだけだよ」

剛鬼「くだらねえ、そんなこと考える暇があつたら仕事をしろ」

俺は一刀を見て言う

一刀「まあ、そう言わないでさ剛鬼」

一刀が俺の肩に手を乗せ言う

愛紗「ご主人様、このふくびき大会なるものが終わつたら、ちゃん  
と残ってる仕事をしてもらいますからね」

だが愛紗が話しを区切ろうとした一刀に追い打ちをかけた

一刀「え！何で俺だけ？」

愛紗「当然でしょう。なんせ、桃香様より脱走の回数が多いんですから」

愛紗が多少睨みながら一刀を見る

一刀「わ分かってるよ」

一刀は身体を震わせながら答えた

大輝「どうでもいいけど早く始めてくれ」

司「お前がどうなるのかは、後回しにしてくれ」

一刀「皆、何か酷くない？」

朱里「桃香様より、お仕事をサボっているのでは仕方ないです」

雛里「ご主人様も大輝さん達のように、ちゃんとお仕事すれば皆んなこと言いません」

一刀「く今度からちゃんと仕事しよう」

一刀が下を向きながら言っていると

恋& a m p ;由衣「早く始める」

恋と由衣が一刀の服を掴み言った

一刀「じゃあ、最初誰から回す？」

大輝「そりゃ、当然最高の頭脳を持つ俺からだろ」

剛鬼「じゃんけんで決める。意義は聞かん」

大輝が馬鹿なことを言い出したので、俺は殺気を出しそう全員を見て言う

全員「はいそのように!」

全員震えながら了承してくれた

そして16人のじゃんけんが始まった

傀儡師「結果は私傀儡師が報告します」

1番 剛鬼

2番 由衣

3番 白蓮

4番 大輝

5番 星

6番 雛里

7番 恋

8番 鈴々

9番 詠

10位 月



1 1 番 愛紗

1 2 番 音々

1 3 番 朱里

1 4 番 桃香

1 5 番 司

1 6 番 一刀

傀儡師「という順番になりました。最強の剛鬼君は、やはりじゃんけんでも最強のようですね」

剛鬼「当然だ」

傀儡師「影が薄い白蓮さんが、何気にトップ3に入っています。生意気ですね」

白蓮「おおい！何で私が、トップ3に入ると生意気になるんだ！」

傀儡師「そしてこの大会の発案者がビリでした」

一刀「ついてないな。やらなきゃよかったかも」

傀儡師「では商品発表の時にまた会いましょう」

傀儡師は何処かに行ってしまった

一刀「じゃあ剛鬼から回して」

剛鬼「了解した」

ガラガラ

回して回して回す！

コロン

そして玉が出てきたので手に取って見る

剛鬼「桃？そうか俺の商品は桃か」

俺は一人納得していると

桃香「違うよ」

桃香が俺の隣でそう言った

剛鬼「何？」

桃香「玉よく見てよ。剛鬼君」

桃香に言われたので玉を再び見ると

剛鬼「・・・桃香」

玉には桃香と書かれていた

剛鬼「なァー！商品が桃香だと」

何ということだ。何て面倒くさい

一刀「いきなり人物当てちゃったか。ああそう言えば当たっちゃた

人は福引き出来ないからね」

桃香「私、剛鬼君の商品になっちゃった」

桃香はご機嫌なのか俺の腕に抱きついてきた

剛鬼「桃香、頼むから止めてくれ」

桃香「えーどうして？」

剛鬼「どうしてって」

恋「・・・（ジー）」

さつきから恋が俺をじっと見てるんだよ

剛鬼「頼む」

桃香「むっ分かったよ」

桃香はようやく離れてくれた

はあー安心

一刀「はい、じゃあ次は由衣」

由衣「うん」

ガラガラ

コロン

一刀「えつと由衣の商品は鈴々」

鈴々「ニヤハハ鈴々が由衣の商品なのだ、宜しくなのだ」

由衣「うん。宜しく鈴々」

一刀「はい、じゃあ次の人あれ？白蓮何処だ？」

白蓮「お前の目の前にいるんだが」

白蓮が眉間をピクピクさせながら一刀を見る

一刀「ああ悪い、影が薄すぎて気付かなかった」

白蓮「絶対わざとだよな」

白蓮はそう言いガラガラを回した

コロン

一刀「ええっと、白蓮の商品は休暇だ」

白蓮「よっしゃー!」

白蓮は飛び跳ねながら喜んでいる

一刀「はい、次は大輝」

大輝「さて必ず朱里か雛里を」

ガラガラ

コロン

大輝「星か、よし俺は星が出るまで待とう」

大輝はそう言い立ち去ろうとしたが

ガシッ

星「大輝殿、何を言っているのですかな？」

星が大輝の肩を掴み言う

大輝「え何が？」

星「大輝殿、まず私の真名は何ですか？」

大輝「星」

星「玉に書いてあつた文字は？」

大輝「星<sup>ほし</sup>」

星「それは私の書いた玉です」

大輝「いや違う、誰かが星と書いたんだ！」

大輝はそう言い商品は星<sup>ほし</sup>と言う

星「それは私の名を書いた玉です。ほらその証拠がここに」

だが星が指さした部分に小さく趙雲と書かれていた

大輝「くそー！何とかごまかせると思つたのにー！」

大輝は頭を抑えてそう大声で言う

星「フッフ私は大輝殿の商品か。さて何をしてもらおうか」



星は笑いながらそんなことを呟いている

剛鬼「阿呆はほつといて、続けてくれ」

一刀「ああ、じゃあ次は星は大輝に当てられたから雛里」

雛里「ううお願いしましゅ」

ガラガラ

コロン

一刀「ええっと、雛里の商品は鍛錬」

雛里「あわわ、鍛錬ですか」

大輝「雛里、まあ少しは身体を鍛えないとな」

雛里「あわわ、鍛錬より大輝さんのほうが欲しかったのに……」

大輝「何か言った雛里？」

雛里「な何でもないでしゅ」

雛里は顔を真つ赤にし下を向いた

一刀「はい、じゃあ次は恋な」

恋「うん」

ガラガラ

コロン

一刀「ええつと、おお何と！」

一刀が恋の玉を見た後俺を見る

一刀「悪いな剛鬼、恋の商品は俺だ！」

一刀がそう言い俺に玉を見せる

剛鬼「だから何だ？」

羨ましいだろうとでも聞いたそうだったので、軽く睨みながら一刀に言う

一刀「いっいや別に、じゃじゃあ次」

一刀はびびったらしく話を中断し先に進めた

詠「次はボクね、いい商品が出ますように」

ガラガラ

コロン

一刀「ええっと、おっ詠の商品は音々だよ」

詠「何で音々なのよー！」

詠が納得出来ないらしくそう言い

音々「うー、何で詠の商品なのですか？恋殿の商品がよかったのです」

音々も納得出来ないようである

一刀「はい、じゃあ次」

月「へう変な物が当たりにませんように」

ガラガラ

コロン

一刀「何かな、うんと月の商品は朱里だよ」

朱里「ははわわ！えっと月さん宜しく願いします」

月「剛鬼さんがよかったな・・・」

月は小声で何か言い朱里と後ろに行った

一刀「じゃあ次は愛紗」

愛紗「ようやく私ですか」

ガラガラ

コロン

一刀「さて商品は、うんと寝って書いてあるからお昼寝だな」

愛紗「くーやはり残り物には福はないのか」

愛紗が悔しそうな顔で呟く

一刀「はいじゃあ最後は司」

司「ろくな物がなさそうだが、まあしょうがないな」

ガラガラ

コロン

一刀「最後の商品は、仕事だ司！」

司「何ー！何故仕事何だー！」

司は頭を抑え叫ぶ可哀想に

一刀「よし全員終わったな」

傀儡師「では商品結果」

剛鬼の商品 桃香

由衣の商品 鈴々

白蓮の商品 休暇

大輝の商品 星

雛里の商品 鍛錬

恋の商品 一刀

詠の商品 音々

月の商品 朱里

愛紗の商品 お昼寝

司の商品 仕事

傀儡師「こんな結果になりました。それでは私は此にて失礼！」

傀儡師は何処かに去って行った

恋「商品剛鬼がよかった」

恋が俺を見ながら言う

剛鬼「俺も恋がよかったよ。でもしょうがないな。一刀に変なこと  
されたら俺に言えよ、とっちめてやるからよ」

恋「うん」

さて結果も出てそれぞれ皆は何をするのだろうか？

個別話に続く



番外編 福引き大会2（後書き）

傀儡師「次回は個別話です」

剛鬼「全員どうやって過ごすのかな？」

恋「気になる」

傀儡師「二人共次回待ってください」

恋「教えて（うるうる）」

傀儡師「ぐは！そんな顔をしても教えません！」

剛鬼「ちっ！恋のうるうる上目遣いに耐えたか」

恋「残念」

傀儡師「ふう危なかった」

剛鬼「まあ恋いつものやろっ」

恋「うん」

剛鬼& a m p・恋「次回も楽しんで読んでください！」

番外編 福引き個別編1（前書き）

傀儡師「福引きの個別編です」

剛鬼「今回は愛紗&a m p・雛里と鈴々&a m p・由衣の話だ」

傀儡師「では楽しんで読んでください」

番外編 福引き個別編 1

雛里& a m p・愛紗 由衣& a m p・鈴々編

雛里「ええい」

愛紗「雛里少し力み過ぎだぞ」

雛里は現在愛紗と鍛錬をしている

雛里「愛紗さん、いいんですかお昼寝はしなくて？」

雛里はお昼寝をせず調錬場にいる愛紗に聞く

愛紗「安心しろ、ちゃんと睡眠はした。しかし目が覚めてしまったな、眠くなくなってしまったから雛里の鍛錬に付き合っているんだ」

愛紗はそう言い雛里を見る

雛里「すいません。私何かの為に」

雛里は、自分の鍛錬を愛紗に手伝ってもらうのを申し訳ないと思い  
愛紗に言う

愛紗「何、気にするな。それに軍師の雛里に怪我はさせられないか  
らな」

雛里「あわわ、すいません」

雛里はさっきから剣を振っているが落したり投げてしてしまった  
りを繰り返しやっている

軍師の雛里では剣はやはり重いようだ

雛里「あわわ、剣がこんなに重い何て重いませんでした」

雛里は、いつも愛紗や鈴々が身の丈を超える青龍偃月刀や蛇棒を振  
っているのを見ている

その為それより小さい剣はあまり重くないと思っていたようだ

愛紗「それは当然だ。だが、私の青龍偃月刀はもつと重いぞ」

愛紗はそう言いながら青龍偃月刀を片手で持つ

普通は、女の子自体が武器持って戦うのが珍しいのに、その上こんな重そうな武器を片手で振るっていたりするのだ

やはりこの世界は凄いとしか言いようがない

雛里「そんな重い物を、片手で持てる何てやっぱり愛紗さんは凄いです」

愛紗「雛里も毎日素振りや鍛錬をしていけば、普通に持てるようになるぞ」

と愛紗は言っているが、本来女性はこんな武器を持って戦ったりしないので普通は異常と言えるかもしれない

鈴々「雛里は勉強のしすぎだから、少し鍛えた方がいいのだ」

愛紗「なら鈴々は鍛えすぎだから、少し勉強しないとな」

愛紗が鈴々を見て言う

まあ勉強を全くやらず、鍛錬ばかりしている鈴々は頭が悪いのでこ

う言つのもしょうがない

鈴々「そそれは勘弁なのだ！」

鈴々は由衣の後ろに隠れて言う

勉強が嫌いな鈴々はやっているだけで頭が痛くなるらしい

由衣「護身用に少し鍛えないと、危なくなったら危険」

雛里「あわわ、いつもご主人様達が頑張っているせいで、忘れてました」

愛紗「私達もできるだけ危ない目にあわせたくないが、いざというとき身体が動かないと危険だからな」

由衣「だからこれからも、少しずつ身体を動かしたほうがいい」

雛里「はい、えつと私頑張ってみます。ええい」

雛里はそう言いまた素振りを始めた

愛紗「由衣は恋と違って、しっかりしているんだな」

由衣「お母さんもちやんとしっかりしてる」

由衣は愛紗を少し睨んで見て言う

「一応母親だからそういうことを言われたら怒るのは当然だ

鈴々」でも、恋のしっかりしてるとこ何か見たことないのだ」

由衣「・・・・」

由衣は黙ってしまった

自分は、しっかりと恋のしっかりとしたところを見たことがある

だが鈴々達は見ることがなく言っても信じてくれるか分からないからである



由衣「……お母さんの悪口お父さんの前では禁止」

鈴々「どうしてなのだ？」

由衣「お父さん、お母さんの悪口言う奴皆ボコボコにするって言うてた」

愛紗「ごっ 剛鬼殿なら確かにやりかねないな」

鈴々「前に大輝お兄ちゃんが、恋を倒そうとした時凄い目で睨んできたのだ」

二人は反董卓連合の時に大輝を睨んだ時の顔を思い出し納得する

雛里「でも、剛鬼さんの気持ち分かります」

素振りをしながら雛里が言う

鈴々「どうして分かるのだ？」

鈴々は分からないらしく雛里に聞く

雛里「鈴々ちゃんは、ご主人様や愛紗さんの悪口を言う人をどう思う?。」

鈴々「許せないのだ!でもそれと、剛鬼お兄ちゃんの気持ちが分かるのと何か関係があるの?」

鈴々が再び雛里に聞く

愛紗「つまり、自分の好きな人や大切な人を、馬鹿にされるのが許せないということか?」

雛里「そういうことです」

鈴々「はにゃ?」

鈴々はまだ分かっていないようだ

愛紗「つまりな、恋の悪口を言う奴が嫌いということだ」

愛紗が鈴々にそう説明する

だがさつきとあまり言ってることが違わないような

鈴々「じゃあ剛鬼お兄ちゃんは、恋の悪口を言う奴が嫌いってことなの？」

雛里「そういうことですよ鈴々ちゃん」

やっと鈴々は理解をしたようだ

鈴々「じゃあ絶対に恋の悪口言わないのだ。鈴々剛鬼お兄ちゃんに嫌いになってほしくないのだ」

愛紗「私も気をつけないとな」

雛里「ねえ由衣ちゃん、剛鬼さんってどんな人？」

雛里が由衣に聞く、普段の彼は全くもってどういう人間なのか分からないからだろう

由衣「お父さんは、優しくて強くて由衣を大切にしてくれる」

愛紗「強いというのは、よく分かるが」

鈴々「優しいとこ何て、ほとんど見たことないのだ」

普段、剛鬼はあまり優しく接したりしない為二人が疑問に思うのは当然だ

由衣「お父さん、本当は凄く優しい。でもやっぱりお母さんにはもっと優しい」

鈴々「いいなあ。鈴々にも恋みたいに優しくしてほしいのだ」

愛紗「それはかなり難しいと思うな。それに、あの二人の仲は相当深いようだからな」

雛里「剛鬼さんはいつも恋さんや由衣ちゃんには笑顔とか見せてるの？」

由衣「見せてる」

鈴々「むう、恋や由衣ばかりずるいのだ！鈴々も剛鬼お兄ちゃんに甘えたいのだ」

鈴々が頬を膨らませながら言う

愛紗「そんなこと言っても、しょうがないだろ鈴々」

愛紗が少し呆れながら鈴々に言う

鈴々「愛紗だって、剛鬼お兄ちゃんに甘えたくないの？」

愛紗「そそれは……」

愛紗は顔を少し赤くし鈴々から目を反らす

愛紗自身甘えてみたいと思ったことはあるようだ

由衣「お父さんは、不器用だからあんまりそういうことしない」

剛鬼は、はっきり言えばあまり人と関わりあったことがないので、人付き合いは苦手なのである

愛紗「不器用か、私も人のことは言えないな」

愛紗は、少し上を見ながらそう言う

確かに愛紗は、少し不器用なところがあるかもしれない

鈴々「雛里、不器用って何なのだ？」

鈴々は不器用と言う意味が分からないらしく雛里に尋ねる

雛里「えつと不器用とは、下手という意味ですよ鈴々ちゃん」

鈴々「剛鬼お兄ちゃんは、何が下手なのだ？」

鈴々はまだ分かっていないらしく尋ねる

愛紗「つまり言えば、剛鬼殿は人と友達になったりするのが下手ということだ」

鈴々「じゃあ友達つくれないから、いつも恋と一緒にいるの？」

愛紗「そうかもしれないな」

愛紗が鈴々にそう言う

まあ確かに、普段剛鬼は一人か恋と一緒にいるかしかないから、そう思うのも無理はない

由衣「でも、お父さんのこと嫌いにならないでほしい」

由衣が全員を見て言う

剛鬼は不器用な態度をとって、嫌われるかもしれないと由衣は思っているようにだ

愛紗「大丈夫だ由衣、私達は剛鬼殿を嫌いになどなったりしない」

鈴々「鈴々もなのだ」

雛里「私もです」

3人共笑顔で由衣を見て言う

由衣「皆ありがとう」

由衣は頭を下げお礼を言う

皆剛鬼のことをちゃんと分かってくれたと由衣は思ったのだろう

本当に彼は幸せ者のようだ

愛紗「さあ、皆お喋りはこのへんにして、剛鬼殿に負けないくらい鍛錬して強くなるぞ」

愛紗はそう言い全員を見る

全員「はい（おうなのだ）」

返事をした後全員鍛錬を開始する

おまけ



その時の剛鬼は

剛鬼「へつくしゅん　へつくしゅん　へつくしゅん　へつくしゅん  
へつくしゅん」

剛鬼はくしゃみを連発していた

桃香「剛鬼君どうしたの風邪？」

剛鬼の腕に抱きついている桃香が聞く

剛鬼「誰かが、俺のことで何か言ってるんだろ」

俺はそう言い特に気にしない

それにしても桃香と一緒にいる何て面倒くさいな、早く夜にならねえかな

そう思いながら俺は桃香と歩く

番外編 福引き個別編1（後書き）

傀儡師「個別編はまだ続きます」

剛鬼「次回は誰の話かな？」

恋「話？」

傀儡師「次回のお楽しみですよ」

恋「けち」

傀儡師「フフフでは次回も楽しんで読んでください」

番外編 福引き個別編2（前書き）

傀儡師「更新遅れて申し訳ありません」

剛鬼「今回は月&a m p・朱里 詠&a m p・音々編です」

傀儡師「そして遂に私も登場します」

剛鬼「では楽しんで読んでください」

## 番外編 福引き個別編2

月&a m p・朱里 詠&a m p・音々編

詠「何か、やることないの音々？」

音々「急に言われても、何もないのです」

月「朱里さん、何か皆で出来る遊びとかありませんか？」

全員特にやることがないらしく、何をするか決めてないようだ

朱里「そうですね、じゃあご主人様の天の世界でやっている、とらんぷ何かどうです？」

朱里はそう言いトランプを出した

詠「とらんぷ？」

音々「それは何なのですか？」

月「見たところ、紙みたいですけど」

三人は興味深々で朱里の持っているトランプを見る

始めて見たらこの反応は当然だろう

朱里「このトランプはハート、スペード、クラブ、ダイヤのそれぞれに1〜13のカードがあり、それとジョーカーというカードが1枚あり全部で53枚あります」

朱里がトランプを持って三人に説明する

詠「へー、53枚もそのカードがあるんだ」

音々「そんなにあるんじゃない、大変そうなのです」

月「そんなにあったら、覚えられるかな？」

説明を聞いた三人がそれぞれ思ったことを言う

まあ確かに53枚のカードをいきなり覚えるのはキツいか？

詠「で、そのトランプで何の遊びをするの？」

詠がトランプを見ながら朱里に聞く

朱里「なら、シンケイスイジャク何かどうですか？」

音々「ししんけいすいじゃく？」

詠「随分と長い名前ね」

月「どういうゲーム何ですか？」

月が頭をひねりながら朱里に聞く

いきなりシンケイスイジャク何て言っても普通は分からないからな

朱里「シンケイスイジャクとは、カードを全部裏にした状態でカードを2枚引き、それが同じ数字のカードだったらカードは引いた人の物になり、同じカードを当てた人は何回でも引くことができます。勿論ハズレたらカードは取れませんか？次の人の番になります」

朱里は、一刀と大輝から聞いたやり方をメモした紙を見ながら三人に説明する

詠「ようするに、記憶力と運の勝負になりそうね」

音々「詠には、絶対負けないのです!」

月「わ私も頑張ります」

朱里「じゃあ始めますか」

朱里はトランプのジョーカー1枚を抜き全て裏でカードを置いた

朱里「始めは誰から引きます?」

音々「じゃんけんで決めます」

月「じゃあじゃんけん」

全員「ポイ」

順番は最初のじゃんけんであっさり決まった

順番

1番 月

2番 朱里

3番 詠

4番 音々

月「じゃあまず私から」

月はトランプを捲ったが

捲った数字はダイヤの1とクラブの5

月「へうハズレです」

朱里「次は私ですね。えっと」



朱里は腕を組み考えながらカードを見る。かの諸葛亮も本気になっているようだ

朱里「これと、これです」

朱里はトランプを捲った。見事それはハートの5とダイヤの5

朱里「当たっちゃいました」

朱里は嬉しそうにカードをとる

詠「流石朱里、いきなり当てる何て」

音々「くうーいきなりですか」

月「流石、朱里さんです」

朱里「えへへ」

朱里は嬉しそうな顔をし次のカードを捲ったが

朱里「はずれちゃいました」

朱里は残念そうな顔をする

詠「次はボクの番、さあて」

詠は慎重にカードを選び

詠「これと、これ！」

一気に2枚捲ったが カードはクラブの9とハートの2

詠「くう、はずすとけっこう悔しい」

音々「いよいよ、音々の番なのです」

音々は慎重に一枚を捲ると

音々「スペードの2、なのです」

詠「しまった！さっきボク、ハートの2を捲っちゃた」

音々が慎重にハートの2を探し

音々「これなのです！」

自身満々にカードを捲ったが、カードはハートのキング

音々「あー！間違えたのです！もう一つ隣のカードだったのです！」

詠「馬鹿ね音々」

叫んでいる音々に、詠が笑いながら言う

月「これとこれです」

月の番になり月は、音々が取れなかった2のカードを冷静に取った

こんな感じで、4人はシンケイスイジャクを2時間やったのだが、  
勿論色々なことがゲーム中にあった

詠が、カードの位置をずらして、音々がずらしたカードを予想通り捲っておちよくったり

朱里が狙ったカードを音々が、「それは駄目なのです！」と言い朱里が笑いながらそのカードを捲ったら、音々の発言通り違うカードで音々が「だから言ったのに」と言いながら笑い朱里が恨めしそうに音々を見ていたとか

月は詠の位置ずらしを警戒し、近くにある同じカードを敢えて捲らないという行動を何回か繰り返し、月が残念そうな顔をしていると詠が月に「もうやらないから、ごめん」と謝っていた

音々はそれを見て、もうずらしはやってこないと思ったのか、横で笑いながら詠を見ていたりなど色々なことがあった

勿論全員すっかりなどが発動し、何もやっていないのにはずしたりしたことは言うまでもない

傀儡師「そして結果は私、傀儡師が発表します」

詠「前から気になっていたけど、アンタ誰？」

傀儡師「何、ただのしがない傀儡師ですよ」

詠「傀儡師？」

傀儡師「はい」

月「あ貴方は、わ悪い人何ですか？」

傀儡師「さあどうでしょうね。では結果発表です。結果は」

1位 月 18枚

2位 音々 16枚

3位 朱里 10枚

ビリ 詠 8枚

傀儡師「以外にも、軍師全員に月が勝利しました」

月「へへうままぐれですよ／＼」

傀儡師「そして、かの天才軍師に勝った2位の音々」

音々「当然なのです」

音々は無い胸をはり言っている

傀儡師「何が当然何ですかね。偶然勝てただけのような気がします」

音々「五月蠅いのです！必殺陳宮キック！」

傀儡師「当たりませんよ」

傀儡師は陳宮キックを避け、音々の後ろに立つと

音々「な何なのです？身体が勝手に動くのです？」

何故か、音々はいきなりそ なの関係ねえのポーズをしだした

傀儡師「傀儡の術、五月蠅いので暫く私の操り人形になってもらい

ますよ」

音々「なあ！、へ変な格好をさせるなのです！」

傀儡師は手の糸で音々を操りえ がちよや、こ ねちなどをさせている

詠「ハハハ！、音々何その格好！」

詠は、腹を抑えながら大爆笑している

月「え詠ちゃん、ダメだよそんなに笑っちゃ・・・ぷ」

月は、詠を注意してはいるが笑いがこらえられず手で口を抑えている

朱里「か可哀想ですけど・・・ぷぷぷ」

朱里は、可哀想だと思っではいるようだが手で口を抑え笑っている

傀儡師「さて、変なポーズをしている音々はおいておいてと」

音々「お前が、音々にやらしてるのです！」

傀儡師「以外にも、3位は天才軍師の朱里でした」

傀儡師は、音々の言葉を無視し発言する

朱里「思ったより難しくて、結構苦戦しちゃいました」

傀儡師「そして最後は、いつもでかい態度をとっているボクっ子軍師の詠でした」

詠「誰がでかい態度よ誰が！」

傀儡師「いやあなたですよ」

音々「そのなのです！詠お前なのです！」

音々はか　ちゃんぺをやりながら言う

詠「ハハハ！音々やめなさいよその格好！お腹がお腹が！」



詠が腹を抑えながら再度大爆笑

月& a m p ;朱里「ぷハハハハハハ！」

月と朱里も我慢の限界だったのか大爆笑している

音々「この、いい加減離すのです！」

音々がギロツと傀儡師を睨む

傀儡師「フッフ、そうですねそろそろ離してあげましょう」

傀儡師は糸を消し

傀儡師「では、また会いましょう」

そう言うつと傀儡師は何処かに消えて行った

詠「結局アイツは誰だったの？」

朱里「ささあ」

月「でも、面白い人でしたよ」

音々「音々は、ちっとも面白くなかったのです!」

奴が誰なのか考えたようだが、それは絶対に分からない

何故かって?それは彼はこの話の作者だからですよ。作者が分からないと書けば、彼女達は絶対に分からないのである

詠「まあ気を取り直して朱里、何かトランプで他のゲームやりましょう」

朱里「はい。じゃあ次は」

この後も、4人は色々なトランプのゲームをやり1日過ごした

無論結果発表では、また傀儡師が出現し音々を操り全員大爆笑させていた

傀儡師「フッフ、今日は楽しい1日でした。では皆さん、また何処かの話で会いましょう」

傀儡師はまた、何処かに煙のように消えた

詠「また何処かの話って、どういうこと？」

朱里「お恐らくまた、何処かの話の結果発表で会おうってことじゃないでしょうか？」

音々「全く、アイツは何者なのですか？」

月「うーん、皆を笑わせてくれる面白い人だと思いますよ」

詠「うんうん、それは言える」

音々「音々は、全然面白くないのです！一々アイツに操られる、音々の気持ちになれなのです！」

音々は、よほど笑われたのが嫌だったのかご機嫌斜めである

そんなこんなで、平和にトランプをしながら今日1日を過ごした軍師達であった

番外編 福引き個別編2（後書き）

剛鬼「なあ」

傀儡師「何ですか？」

剛鬼「何でお前が出てんの？」

傀儡師「私もたまには話に出たいと思ったからですよ」

剛鬼「てかお前本編に出れば絶対強いだろ？」

傀儡師「さあどうですかね。次回は本編が先に書けたら本編で番外編が先に書けたら番外編になります」

剛鬼「何でそうなるんだ？」

傀儡師「本編と番外編の2つをちよくちよく書いているからです」

剛鬼「ああそういうことね」

傀儡師「では！」

剛鬼&a m p・傀儡師「次回も楽しんで読んでください！」

## 剛鬼 昼寝をすること（前書き）

傀儡師「日常本編が書けたので先に更新します」

剛鬼「番外編はまた次回か？」

傀儡師「さあどうでしょうね」

剛鬼「何だそれ。まあ楽しんで読んでください」

## 剛鬼 昼寝をすること

剛鬼「うう」

この日俺は非常に眠かった。理由は、一刀と桃香そして俺自身の仕事を全てやったから

剛鬼「まだ仕事が」

意識が朦朧とする中俺は仕事部屋に行くのだが

剛鬼「此所、何処だ？」

仕事部屋を、目指していたつもりがいつの間にか中庭にいた

剛鬼「こんなところに、いる時間など」

仕事部屋を目指し再び歩こうとしたらが

剛鬼「あれ？やけに景色が斜めに見える」



何か、さつきから景色が斜めに見えるがまあ気にせず歩く

剛鬼「うまく、歩けねえな」

さつきから、歩いてはいるがかなりふらふらしている

剛鬼「眠い、たかが3週間寝てないぐらいでこの様かよ」

実は俺は、寝もせず仕事をやっていたため3週間一睡もしていない

剛鬼「早く、行かねえと愛紗に……」

其所で天と地がひっくり返り俺は意識を失った

恋side

剛鬼、最近全然寝てない。いつも会いに行くと仕事してる

恋「……いない」

今日も部屋にいない。もう起きたのかな？

この前、仮面を外した剛鬼の顔見たら凄くやつれてたし目に隈もあった

あんな、剛鬼の顔見たくなかった

剛鬼は、大丈夫大丈夫問題ないって、言っただけど心配

恋「・・・此所にもいない」

いつも、仕事してる部屋に行っただけど剛鬼、いない

恋「・・・」

心配、いつも剛鬼、無理するから

星「うん？何をしてるんだ恋？」

星が、恋に気づいてこっちに来た

恋「……星、剛鬼何処にいるか知らない？」

星「剛鬼殿なら、仕事をしてるんじゃないのか？」

恋「……（フルフル）部屋にいない」

星「じゃあ、自室で休んでるのでは？」

恋「……（フルフル）いない」

星「心配なのか？」

恋「……うん」

星「まあ、私も探してみよう。中庭は見たか？もしかしたら、居眠りしてるかもしれないぞ」

恋「……まだ、見てないから行ってみる」

恋はすぐに中庭に向かった

恋side out

星side

星「フッフ、恋する乙女はたいへんだな」

恋はすぐに中庭に向かって行った。それはもう風のごとく

星「ふっ、さて私も探すでしょう」

愛紗「星」

剛鬼殿を、探しに行こうと思ったら愛紗が声を掛けてきた

星「おう愛紗、どうかしたのか？」

愛紗「剛鬼殿を知らないか？」

星「何だ、愛紗も恋に剛鬼殿が何処か聞かれたのか？」

愛紗も、剛鬼殿を探しているそうだから聞いてみる

愛紗「いや、最近仕事のしすぎでろくに休んでないようだから、休むように言おうと思ってな」

確かに、最近剛鬼殿は仕事しかしてないようだから、休まないと身体を壊すな

愛紗「で何処にいるか知らないか？」

星「私も、今から探すところだから知る訳がなかつ」

愛紗「そうか、恋も知らないんだな？」

星「ああ。恋なら今ごろ中庭を探しているだろう。私達は別の所を探すしよう」

愛紗「分かった」

愛紗と私は剛鬼殿を探す為歩き出した

星side out

恋side

恋「・・・いない」

恋は今、中庭を探しているけどやっぱりいない

恋「・・・はあ」

何だか眠くなってきた

恋「・・・ちよつとだけお昼寝しよう」

人目があまり来ない所にねっころがって目を閉じる

本当にちよつとだけ・・・

恋 side out

剛鬼「此所は一体、何処だ？」

さつき、目を覚まして起き上がり歩き出したが、寝ぼけている為迷っている状態

剛鬼「眠い」

意識が朦朧としながら歩いていると

恋「すうすう」

目の前で恋が身体を丸くし眠っていた

剛鬼「恋？こんなところで寝てしょうがないな」

とりあえず恋を揺する

剛鬼「恋起きろ。風邪ひくぞ」

意識がすぐにでも切れそうな状態で恋を揺する

恋「うーすうすう」

しかし起きない

剛鬼「恋」

意識をギリギリ保ちながら恋を起こそうとするが

恋「うゝんすうすう」

だがやはり起きない

剛鬼「しょうがないな」

俺は横になり恋を抱きしめる

剛鬼「これで、風邪はひかないだろう……」



其所でまた俺は意識を失った

星 side

星「全く、剛鬼殿は何処に行ったのやら」

城の中を粗方探したが何処にもいない。更に恋の姿も見なくなった

星「中庭に行ってみるか」

まだ、中庭は恋に任せて探していなかったから、私は中庭に向かった

星「ふむ、さて何処から探すか」

何処から探そうか考えていると

愛紗「星」

愛紗の声がし振り向くと、其所には愛紗　鈴々　桃香様　雛里がいた

星「何だ大勢でどうかしたのか？」

雛里「えっと、剛鬼さんは見つかりましたか？」

星「まだ見つかっていない」

鈴々「剛鬼お兄ちゃんは、何処に行つたのだ？」

星「中庭以外には、いなかったから恐らく中庭にいるだろう」

愛紗「今の剛鬼殿の状態で、市に行くのは無理だろうしな」

ほう、愛紗はよく剛鬼殿の体調のことを、分かっているようだな

桃香「そそんなに悪いの？」

桃香様は少し震えながら愛紗に聞いている。概ね、自分の責任でもあると思っっているのだろう

愛紗「それはそうですよ。剛鬼殿は、ご主人様と桃香様の仕事と一緒に、剛鬼殿自身の仕事も寝ずに片付けたんですから」

愛紗が桃香様を少し睨みながら見ている。おお怖い怖い

桃香「ごめんなさい！」

桃香様は愛紗の機嫌に気づきすぐに謝ったようだ

鈴々「皆ー！剛鬼お兄ちゃんいたのだ！」

どうやら鈴々が剛鬼殿を見つけたようだ

雛里「何処にいるの？」

鈴々「こっちなのだ。でも五月蠅くしちゃ駄目なのだ」

愛紗「どうしてだ？」

鈴々「来れば分かるのだ」

私達は鈴々の誘導のもと剛鬼殿の所へ向かった

星「そういうことでしたか」

鈴々のさっき言っていた、五月蠅くしては駄目な理由は

剛鬼「すうすう」

恋「すうすう」

其所には、剛鬼殿が恋を抱きしめながら、一緒に気持ちよさそうに眠っていたからだ

愛紗「確かに、これでは五月蠅くしてはいけないな」

桃香「恋ちゃんの寝顔も可愛いけど、剛鬼君の寝顔も可愛い」

雛里「あわわ、凄く幸せそうな顔して眠ってます」

鈴々「うゝ、鈴々も剛鬼お兄ちゃんと一緒に寝たいのだ」

星「これは、かなり無防備ですな」

普段の剛鬼殿とは思えないほど今の剛鬼殿は無防備だ

恋「・・・剛鬼、ちゃんと休まないとすうすう」

恋が寝言を言っている。寝ながらも恋は剛鬼殿を心配しているようだ

愛紗「恋が、寝ながら心配しているというのに剛鬼殿は何も言わな  
いか」

星「相当疲れていたようだからな、ぐっすり眠っているのさ」

剛鬼「恋、風邪ひくすうすう」

雛里「剛鬼さんも、寝ながら心配してるみたいですね」

ふっ本当にこの二人の仲は深いようだな

桃香「ねえねえ、ちよつと剛鬼君の頬っぺ触ってみようよ」

桃香様が無防備な剛鬼殿を見ながら言う

星「桃香様、いくら寝ているからと言って、剛鬼殿にそのようなことをするのは危険ですぞ」

剛鬼殿なら、無意識の内にでも刀を振りそうで怖い

桃香「やっぱり？」

鈴々「うわぁ、剛鬼お兄ちゃんの頬っぺ柔かいのだ」

しかし鈴々が剛鬼殿の頬っぺたを触っていた

桃香「えー本当？どれどれ」

桃香様もつられて剛鬼殿の頬っぺを触る

剛鬼「う」

剛鬼殿は、嫌そうな顔をしているが起きないようだ

桃香「嫌がる剛鬼君の顔、可愛い」

桃香様は、完全にはまってしまったらしく剛鬼殿の頬を触っている

剛鬼「うやめろ」

雛里「桃香様、そろそろやめたほうが」

桃香「大丈夫大丈夫」

剛鬼「やめろや」

ブン！ メキメキ

桃香「え？」

桃香様が、調子にのって触っていると、剛鬼殿の拳が、桃香様の真横を通過し、その真後ろにある木に拳圧で穴があいた

そして更に

ブン

桃香「え！また！」

今度は恋の戟が桃香様のすぐ前を通過した

恋「うー五月蠅い」

其所には、戟を持った恋が寝ぼけながらこつちを見ていた

愛紗「れ恋危ないだろ！」

恋「・・・剛鬼が、寝てるの邪魔しない」

恋は寝ぼけながら私達を見る

恋「・・・剛鬼、疲れてるから休ませすうすう」

だがすぐにまた眠ってしまった



星「愛紗、大人しく寝かせておいて向こうに行こう」

愛紗「ああ星、そうだな」

雛里「桃香様に鈴々ちゃん、私達も行こう」

桃香「ううん」

鈴々「分かったのだ」

私達は眠っている二人を残して城内に戻った

星 s i d e o u t

剛鬼「ああ、よく寝た」

起きるともう辺りは暗くなっていた

恋「すうすう」

剛鬼「恋は、まだ起きないのかしょうがない」

俺は起こさないように、恋を慎重におんぶした

剛鬼「さて、部屋に向かうか」

今日はもう休もうと思い歩き出す

恋「・・・剛鬼」

剛鬼「？起きたか？」

質問するが、返ってこない。まだ眠っているようだ

恋「・・・ちゃんと休まなきゃ駄目」

そう言つとまたすうすうと眠ってしまった

剛鬼「ちよつと、無茶すぎたな」

3週間も、寝ないで仕事する何て俺はかなりの阿呆だな

剛鬼「さて、早く戻って寝よう」

俺は恋をおぶって自室に向かった

恋side

恋「・・・」

目が覚めたら、剛鬼の背中の上にいた

疲れてるのに、恋をおんぶしてる

本当なら早く降りなきゃいけないけど

恋（・・・剛鬼の背中温かい）

部屋に着くまで、もうちょっとこのままでいよう

恋 side out

剛鬼「さて、部屋に着いたが」

恋は今だに起きない。さてどうしたもんか

剛鬼「恋、いい加減起きろよ」

身体を揺すつてみると

恋「・・・剛鬼？」

やけに起きるのが早い、もしや起きてたな

剛鬼「恋、お前起きてたろ？」

恋に一応聞いてみると

恋「・・・うん」

はあ、起きてたなら早く言ってくれよ全く

とりあえず、ベッドに恋を降ろそうと思ったのだが

剛鬼「恋、背中から離れてくれ」

恋「……（フルフル）もうちょっと」

恋が、背中から離れてくれない。もう勘弁してほしい

剛鬼「面倒だな」

俺は恋をおんぶしたままベッドに倒れた

剛鬼「俺は寝るから、好きなだけ背中にいなさい」

恋「……うん」

恋にそう告げ俺は眠った。全く今日も散々だった気がする

恋side

恋「・・・温かい」

剛鬼は、恋をおぶったまま寝ちゃった

剛鬼には、悪い気がするけど何か離れたくなかった

剛鬼の身体に触れてるだけで、恋幸せな気分になるから

恋「・・・ふぁーおやすみ、剛鬼」

眠くなってきたから、恋も寝る。今日一日剛鬼と一緒に寝れて恋は  
凄く嬉しかった

けど、ちゃんと休んでほしい。剛鬼にまた何かあったら恋は・・・

恋side out

おまけ

桃香「うわーん！もう勘弁してよ！」

一刀「な何で俺まで」

愛紗「泣いても駄目ですよ。剛鬼殿に押し付けていた分と今日の仕事を、ちゃんと全部やりきるまで寝かせませんので」

剛鬼と恋が幸せそうに眠っている時、泣きながら徹夜で仕事をやった、2人がいたとかいなかったとか

尤も本当かどうかは、起きていた者にしか分からないことであるが、2人にとっては大迷惑なことであったと言えるだろう

剛鬼 昼寝をすること（後書き）

剛鬼「なあ」

傀儡師「何でしょう？」

剛鬼「題名は昼寝より、倒れたにしたほうがよかったんじゃないのか？」

傀儡師「まあ結局は寝てるんですからいいでしょう」

恋「……細かいことは気にしない」

剛鬼「分かったよ。じゃあ恋いつものやるか」

恋「……うん」

傀儡師「次回も番外編が先に書けたら番外編、本編が先に書けたら本編になります」

剛鬼「では」



剛鬼&a m p・恋「次回も楽しんで読んでください」

### 番外編 福引き個別編3（前書き）

傀儡師「番外編を書けたので更新します」

剛鬼「今回は一刀と恋編だ」

傀儡師「そう言えば、地震の被害は皆さん大丈夫でしたか？」

剛鬼「傀儡師は、静岡出身だが地震の時上から金槌が落ちて頭に直撃したという被害があったな」

傀儡師「地震は怖いですね」

剛鬼「地震で大変な方も皆さんめげずに頑張ってください」

傀儡師「では今回も宜しくお願いしますね」

### 番外編 福引き個別編3

一刀&amp;p・恋編

恋「はむはむ」

一刀「イヤー癒されるな」

商品が、恋だったので現在俺は恋と一緒に市にいる

最初恋は何か元気がなかったけど、肉まんを見た途端に元気になったようだ

恋「はむはむ、ご主人様にも挙げる」

恋はそう言い俺に肉まんを渡してきた

一刀「ありがとう」

肉まんを食べてみると、俺の知っている肉まん屋のより美味しい

恋「はむはむ、ご主人様美味しい？」

恋が食べながら言う。くくマジで癒されるし可愛い！

剛鬼は、いつもこんなに癒される顔が見れて羨ましいな

一刀「美味しいよ」

恋の顔を見ているだけでも十分肉まんが美味しく感じるな

一刀「なあ恋」

恋「はむはむ？」

恋が食べながら俺を見る

一刀「食べ終わってからでいいよ」

恋「はむはむ、うん」

その後も恋は、美味しそうに肉まんを食べていた

恋「」

恋は肉まんを食べて、すっかりご機嫌になったようだ。しかし

剛鬼「あっ！」

桃香「あつご主人様と恋ちゃんだ」

目の前から、剛鬼と桃香が腕を組みながら歩いてきた

恋「・・・・・・（ジー）」

恋は剛鬼と桃香をジーっと見ている

剛鬼「逃げる」

そして数秒後、桃香を抱き上げて消えた

相変わらず速い。目で追うのが正直やっとなスピードだな

恋「……………」

何か恋は、ご機嫌斜めのような

一刀「剛鬼が、桃香と腕組んでて怒ったの？」

恋「……………怒って何かない。ただ胸が痛くなったから」

嫉妬かな？愛紗とかも、たまにそうだけどこれは嫉妬なのかな？

一刀「大丈夫だって、剛鬼が他の女の子好きになる何てないよ」

恋「……………本当？」

一刀「ああ、本当だよ」

少しでも恋を元気にしないと

恋「……………」

一刀「なあ、恋は俺のこと好き？」

話を変える為、俺はかなりアホなことを言ってしまった

恋「……………好き」

一刀「えっ！本当に？」

マジか！俺のこと好きなのかよ

恋「……………うん」

一刀「じゃあさ、剛鬼と俺どっちが好き？」

これで恋が、俺だと言えば俺の勝ちだ！

恋「……………剛鬼のほうが好き／＼」

フッフ負けた。まあ最初から分かってはいたことだな

一刀「やっぱり、剛鬼には勝てないか」

恋「……ご主人様は、恋のこと好き？」

一刀「そりゃ好きだよ」

可愛いし和むからな

恋「……じゃあ、剛鬼のことは好き？」

え？剛鬼のこと？

一刀「うゝん恋、普通男は男に好きとは言わないんだよ」

恋「……じゃあ、何て言う？」

恋が首を傾げて聞いてくる。可愛いな



一刀「どう思ってるかな」

恋「……どう思ってる？」

一刀「そうだな、最初に会った時は怖かったかな。大輝を瞬殺して、俺達を睨んできた時はマジで怖かったな」

あの時の剛鬼は、本当に鬼神のようだった

恋「……今は？」

一刀「今は全然、そんな感じがしないな。逆に恋想いのいい奴かな」

戦いでは正に鬼神、でも日常は恋想いのいい奴

何ともギャップが激しい。でもそれは恋も同じかな？

戦では三国無双、でも日常では動物好きな優しい子

何か2人には共通点があるな

恋「・・・よかった」

一刀「？何が？」

恋「・・・嫌いとか、居なくていいって、思われてないみたいだから」

ああそういうことか。恋は剛鬼がどう思われてるのか、心配だったんだな

一刀「誰も、そんなこと思ってないよ。剛鬼は仲間何だから」

少なくとも俺はそう思っている。今は仲間何だから

恋「・・・なら安心」

恋は安心したらしく前を向いた。すると

恋「・・・（ジュル）」

恋が、涎をすすりながら目の前の点心屋を見ていた

一刀「点心食べる？」

ついつつかり破滅への道に俺は向かってしまった

恋「・・・点心食べていい？」

一刀「いいよ。恋の好きなだけ食べて」

俺は、この時忘れていた。恋はもの凄くたくさん食べることを

恋「・・・うん」

恋の嬉しい顔を見たら、自分の財布のことなど忘れていた

そして

恋「

恋は、点心をお腹いっぱい食べてご機嫌である。対する俺は

一刀「ハハハ、財布が軽いなハハハ」

現実逃避していた。理由は貯めていた金が、全て点心代に消え財布がほぼすっからかんになったからである

恋「・・・・ご主人様」

恋が俺を見る。まだ何か食べたい何て言うのだろうか？

一刀「ハハハ、何だい恋？」

恋「・・・・ごめんなさい」

一刀「え？」

恋は何故か謝ってきた

一刀「恋、別にいいんだよ。謝んなくて」

恋「……恋のせいで、ご主人様お金無くなった」

俺のこと、一応心配してくれてるみたいだな

恋「……恋は、いつも剛鬼という時も、たくさん食べて迷惑かけてる」

恋の表情は、さっきまでの嬉しそうな顔でなく、凄く申し訳なさそうな顔になっていた

一刀「いいんだよ。今日は、剛鬼にも言われてるから」

恋「……剛鬼に？」

一刀「ああ、恋が何か食べたいって言ったら思いっきり食べさせてやってくれたって」

あの時剛鬼は苦笑いしながら言ってたな。それと悪いなって

恋「……ご主人様」

恋が、突然俺の手を掴み何かを置いた

一刀「恋これ」

手にあつたのは少しの小銭だった

恋「……足りないけど、点心のお金」

恋は自分の持っている、お金を全て俺に渡してきた

俺が現実逃避何かしないで、普通にすれば恋はずっと嬉しい気持ちでいられたのに

一刀「いいんだよ恋」

恋の手に小銭を返す

恋「……でも、ご主人様お金無い」

嬉しいな。真剣に俺のこと心配してくれて

一刀「まだ、秘密の小遣いがあるから大丈夫だよ」

嘘ではない。確かにベッドの下に隠している

恋「・・・本当？」

一刀「本当だよ。だから心配しなくて大丈夫だよ」

恋の頭を撫でながら笑顔で言う

恋「・・・分かった」

恋はそう言つと俺の手を掴んだ

一刀「恋？」

恋「・・・今日は、ご主人様とたくさん遊ぶ」

そう言つと恋は歩き出した

一刀「ハハハ、剛鬼もいつも大変だな」

その後も、色々な所に恋と一緒に行き楽しく過ごした

帰り道

恋「……ご主人様は、どうして恋達を助けた？」

帰り道で恋が聞いてきた

一刀「いきなりだな。何でそんなこと聞くんだ？」

恋「……あの時、連合は皆月を倒すって言ってた。でもご主人様は、剛鬼が倒れて恋達を殺せたのに殺さなかった」

一刀「……まあ理由は、可哀想だったからかな」

恋「……可哀想？」

一刀「月は何もしていないのに、ただ民達と普通に暮らしていたの



に、暴君扱いされて殺す何て可哀想じゃないか」

でも、それを見抜いていながら俺達は連合に参加してたんだよな

恋「……ご主人様は不思議」

一刀「どうして?」

恋「……普通はそんなこと思わない。皆特をする為に戦つか、傷つきたくないから戦う。それが戦争」

一刀「……恋」

恋の言っていることは、正しいだろう。この時代の人間は、普通可哀想だからと言って人を殺さない訳がない

今の時代、全員少しでも特をする為か傷つきたくない一心で戦っているのだろう

一刀「……俺は、特をする為に戦っている訳じゃないから。傷つけないという理由はあるけど」

恋「……仲間を傷つけない為？」

一刀「ああ、それに俺達を慕ってくれる民の為かな」

恋「……ご主人様はやっぱり凄く優しい」

一刀「そうかな？」

恋「……うん」

俺は優しいか。よくお人好しと言われるけど、優しいとはあまり言われないな

恋「……恋は間違ってた。剛鬼が言ってくれるまで」

一刀「剛鬼が何か言ったの？」

恋「……うん。剛鬼は何で戦争をするのか教えてくれた」

一刀「……何で何だ？」

恋「……人は確かに、特をする為か傷つきたくない一心で戦争をする。けど実際は、皆大切な人達を守る為に戦っているって言った」

大切な人を守る為に戦っているか

恋「……敵も皆、守る為に戦ってる。それと、恋達がやっていることは決して正しいとは限らないって言った」

一刀「やってることは、決して正しいとは限らないか」

確かに俺達が、領土を広める為に戦争をしたら平穏に暮らしていた人達が、戦いに巻き込まれその領土を戦って奪ったら、それは正しいこととは言えない

その領土の人達に言わせれば、平穏な生活を奪った俺達が悪という認識になるだろう

恋「……恋はずっと、戦争は敵が悪いと思ってた。でも、本当はこの前の連合戦の時みたいに何も悪くないのに、恋達が悪者って決め付けて、戦争が始まることもある」

確かにそうかもしれない

恋「・・・恋は剛鬼に言われて、恋達がしてることが本当は、正しいことじゃないかもしれないって知った」

一刀「俺も、それに気付いてなかったかもしれない」

反董卓連合の時も、自分達が悪いと知っていながら俺達は戦った

更にその理由は力をつける為に

一刀「俺達は、本当は悪者になってるかもしれないんだな」

恋「・・・でも、肝心なことは、恨まれる覚悟があるかどうかって言ってた」

一刀「・・・覚悟？」

恋「・・・自分が、正しいと思ったことをする。でも、それによって恨まれてもいい覚悟が必要」

一刀「・・・覚悟か」

俺にはまだ、ないのかもしれないな

恋「……ご主人様は、凄と思う」

一刀「俺が？何で？」

恋「……普通、敵を仲間にしたりしないから」

確かに、今の世では普通は打ち首だからな

一刀「俺は出来る限り、人を殺したくないんだ。それが敵であつてもね。それに……」

恋「……それに？」

一刀「恋みたいな可愛い子を、殺すこと何か出来ないよ」

そう言つて恋の頭を撫でる

恋「……やっぱり、ご主人様は凄い」

一刀「そうか？」

恋「・・・うん。皆、ご主人様について行くの分かる。ご主人様は、凄くて優しいから」

一刀「ありがとう恋」

俺と恋は、その後城に帰って別れたが今日は色々なことが分かりとても充実した1日だった

後日

剛鬼「すまないな一刀。恋にたくさん食べさせて、財布すっからかんだろ？」

剛鬼が俺の所に来た

一刀「いや、その変わり恋と楽しく過ごせたから、俺はよかったよ」

剛鬼「そうか。でも、恋が食った分の金くらいは、払わせてくれ」

剛鬼はそう言つと金を置いた

一刀「剛鬼、俺は別に金何か」

剛鬼「いや、俺の気持ちでもあるから、受け取ってくれ。それと、恋淒く楽しかったってさ。ありがとうな」

剛鬼はそう言つた後部屋から出て行つた

一刀「ふっこりややっぱり、恋に手は出せないな」

そう言つた後、俺は仕事をする為部屋に向かった

番外編 福引き個別編3（後書き）

傀儡師「次回も番外編が書ければ番外編、本編が先なら本編になります」

剛鬼「次回の更新は割と早いかもしれませんが」

傀儡師「では」

傀儡師& a m p・剛鬼「次回も楽しんで読んでください」



**番外編 福引き個別編4（前書き）**

傀儡師「番外編です」

剛鬼「今回は俺と桃香の話だ」

傀儡師「では楽しんで読んでください」

## 番外編 福引き個別編4

剛鬼& a m p・桃香編

桃香「剛鬼君、これはどうかな？」

そう言い桃香は俺に黒いチャイナ服を見せる

現在桃香と一緒に俺は服屋にいる

何で服屋にいるのかって？そりゃ桃香が行きたいって駄々をこねたからだ

剛鬼「もうちょっと、明るい色のほうが似合っと思っぞ」

一応ちゃんと意見は言っている。まあ適当に似合っ似合っと言っていたら怒られたからだが

桃香「じゃあこれは？」

次に持って来たのは青色のチャイナ服

剛鬼「微妙だな。うーむこれがいんじゃないか？」

俺はそう言い少し薄い桃色のチャイナ服をとって見せる

桃香「へー桃色か。でもどうして？」

剛鬼「何となく」

理由は面倒くさいから、劉備は桃園の誓いが有名だから桃色にしてみただけで言えない

桃香「でも明るいいし、気に入ったからこれでいいや」

桃香はそう言い服を持って会計を払いに向かった

桃香「すいませーん。これください」

店主「これは桃香様、毎度ありがとうございます。お値段は」

桃香「じゃあこれ（じゃあこれで）え！剛鬼君？」

店主が値段を言い桃香が代金を払おうとしたが俺が横から金を出した

店主「宜しいんですか？」

桃香「剛鬼君、ちょっと待っ！」

剛鬼「いいですよ」

桃香が待つてくれと言うのをシカトし店主に言う

店主「じゃあ受け取ります」

店主は、そう言い代金を受け取り服を袋に入れた

店主「それにしても、剛鬼將軍珍しいですね。普段は一人か呂布將軍と来るのに今日は桃香様とですか？」

剛鬼「ちよつと訳有りだな」

店主「ははーん、ひょっとして浮気ですか？」

店主がニヤけながら俺を見る

剛鬼「否！断じて否！」

店主の、言ったことに驚いてしまい、ついばうロボットアニメの台詞を言ってしまった

店主「ハハハ、分かってますよ」

店主は笑いながらそう言うが本当に分かってるのか？

桃香「へー、剛鬼君はいつも恋ちゃんと此所に来るんだ」

何か桃香は一人納得している

店主「そう何ですよ。全くたまには違う人と来てもいいだろうに」

何かボロクソ言われた気がする

別に誰と来ようが勝手だろうがよ

剛鬼「店主」

俺は店主を眉間をピクピクさせながら見る

店主「すいませんでした剛鬼將軍！」

どうやら、危険察知能力が発動したらしく店主が土下座して謝ってきた

桃香「剛鬼君、そんなにすぐ怒っちゃ駄目だよ」

桃香が土下座している店主を見てそう言う

別に怒っている訳じゃないんだがな

というか、こんなんで怒ってる何て言ったら、本気で怒った時何て言うんだか

剛鬼「ええ店主、もういいですから頭上げてください」

店主「本当に申し訳ない」

店主はもう一度頭を下げその後立ち上がった

剛鬼「いえいえ、気にしないでください。じゃあ桃香行くぞ」

桃香「うん　じゃあ店主さんまた」

店主「毎度、ありがとうございました」

その後俺達は店を後にし歩き出した

剛鬼「桃香、いい加減腕を組むのをやめろ」

桃香「えー、いいじゃん別に」

桃香は歩く時、何故かずっと俺と腕を組んで歩いている

正直、桃香は歩くのが遅いので、歩幅を合わせないといけないから歩きにくい

桃香「それともやっぱり、私より恋ちゃんと腕組みたいの？」

剛鬼「そういう、訳ではない」

「々恋を出してきやがる。全く面倒くさい

桃香「ならいいじゃん」

剛鬼「はあ」

桃香はご機嫌のようだが俺は憂鬱だ

こんなところを恋に見られたら何て言われるか

恋「・・・」

一刀「あ！」

桃香「あ！恋ちゃんとご主人様だ」



剛鬼「何でこうなる」

案の定恋と一刀と会ってしまった

恋「・・・（ジイー）」

恋は俺を不機嫌そうな目で見る。此所はやはり

剛鬼「逃げる」

桃香「え！剛鬼君／＼／」

俺は桃香を抱き上げ

剛鬼「剃！」

毎度おなじみの剃で恋達の目の前から逃走した

剛鬼「はあ、此所なら大丈夫だろ」

少し離れた丘で、俺は溜め息を吐きなが桃香を下ろし呟く

桃香「もう、いきなりびっくりしたよ」

剛鬼「すまんすまん」

俺はそう言い地面になっころがる

桃香「ねえ剛鬼君」

桃香かが真剣な顔で俺を見て呼ぶ

剛鬼「何だ？」

桃香「私って、やっぱり王に相応しくないのかな？」

桃香がそう言う。何を今更言ってるんだか

剛鬼「相応しくないに、決まってるだろ」

桃香「むう、そんなにはつきり言わなくなっっていいじゃん」

桃香は頬を膨らませながら俺を見る

剛鬼「前にも言ったが、王とは多くを助ける為に、必ず少しの犠牲を出さなくてはいけない。だがお前は、犠牲を出したくない何て阿呆なことを言ってるんだから、王には相応しくない」

桃香「はい……」

剛鬼「そして、全てを背負う覚悟もない。それじゃあ、王何かになってもそれは王と言えないと俺は思う」

桃香は、王として必ず必要なものがいくつもない。というより、自分からそれを否定して必要ないとも思っているのか？

剛鬼「お前は王何かになるより、仲間の笑顔を守れる人間になったほうがいいと思うが」

そうすれば、大切な仲間の笑顔をずっと守れるんだから

桃香「でも私は……」

剛鬼「まあ、俺はお前の生き方をどうこう言つつもりはないがな」

どうせ言っても聞かないだろうし

桃香「私は、困っている人を救いたい。犠牲は出さずに」

剛鬼「なら、好きにしろ。だが、下らない答えを出したらその時は俺がお前を殺す！覚えておけ、劉備玄德」

桃香「それでも、私は私の信じた道を行います！たとえ剛鬼君に殺されようとも」

桃香は俺を見て言う。ふっいい目をしているな

剛鬼「まあ、そんなことがないよう祈ってはいるがな」

俺はそう言い空を見る。今日もいい天気だ

剛鬼「まあ、代々皆が笑って平和で暮らせる何て一生無理だと思うがな」

桃香「そんなことないよ。頑張ればきつと出来るよ！」

絶対無理だろ。俺達の世界ですら、まだ完全な平和はきていないというのに

いくら、頑張ったって人は私利私欲ですぐ戦いを始める

平和になったとしても、俺のような影の存在は必ずいる

そして、私利私欲に吞まれた奴が俺達のような影の者を動かし、罪のない者を殺させまた戦いが始まる

人は後、何回同じループを繰り返すのだろう

剛鬼「まあ、せいぜい平和になるよう頑張れ」

桃香「絶対に、平和にしてみせる」

全く凄い理想主義者だよ桃香は、そんなこと不可能だと思わないんだから

桃香「ねえ、剛鬼君は何の為に戦ってるの？」

若干呆れていると、桃香から思いもよらない質問がきた

剛鬼「何の為に、さあな」

何の為に戦う？それは、俺が一番よく分かっていることだ

俺の世界では、ただ生きていく為に金が必要だから暗殺業何かをやっていた

つまり言えば、金の為に戦っていたことになるだろう

だが今はどうだ？明確な理由も無く、ただ敵がいるから殺しているだけなのだろうか？

桃香「やっぱり、恋ちゃんの為？」

剛鬼「分からない」

俺は、一体何の為に戦っているのだろうか？恋の為か？それともただ単に人を殺したいからか？

恋を守る、という理由は勿論ある。だが、それと人を殺したいというのもある

俺は、一体どっちの理由で戦っているのだろうか？

剛鬼「一つ、言えることはお前のような、信念のあるような理由じゃないということだ」

桃香「そうなの？」

剛鬼「ああ」

人を、殺す為に戦っている何て言えないからな

俺は一体何の為に

そう思いながら空を見る

桃香 side

桃香「剛鬼君」

何か剛鬼君の元気がない。私が余計なこと言っただけかな？

桃香「えっと、剛鬼君そのごめんなさい」

謝っておく恐らく私のせいだから

剛鬼「何故謝る？」

でも剛鬼君は不思議そうな顔をして私を見ていた

桃香「剛鬼君、私が余計なこと言っただけから、元気なくなったと思って」

剛鬼「そんなことないよ、ちょっと考えてただけだ」

そう言ってまた剛鬼君は空を見出した。



剛鬼君はやっぱ不思議。初めて話を聞いた時愛紗ちゃん 鈴々ちゃん 星ちゃんの3人を軽くあしらって、大輝君を瞬殺したって聞いた時は凄く怖い人だと思った

でも初めて会った時は、そんな感じがなくて、不器用だけど恋ちゃん思いの凄く優しい人だった

今も、私のことを思ってた色々と言ってくれたみたいだし

剛鬼「?どうかしたか?」

桃香「ううん、何でもないよ」

剛鬼君は、空を見て一体何を考えてるんだろう?

空を見ている、剛鬼君の目は何か凄く悲しそうな感じがする

昔のことでも、思い出しているからかな?

桃香「剛鬼君、空見て何を考えてるの?」

思い切って、聞いてみることにした

桃香 side out

桃香が、何を考えてるのか聞いてきた。はっきり言えば思い出して  
いたんだがな

剛鬼「昔のことをな、ちょっと思い出してた」

桃香「昔のこと?」

剛鬼「ああ」

桃香「どんなこと?」

剛鬼「それは内緒」

人殺しのことを思い出してた。何て言えないから内緒と言っておく

桃香「えゝ教えてよ」

剛鬼「桃香が、俺より強くなったら教えてやるよ」

桃香「うゝそんなの無理だよ」

剛鬼「まあ、そうだな」

普通に考えて、桃香が俺より強くなるのは無理だな

桃香「じゃあさ、今からちょっと私を鍛えてくれない？」

桃香から、思いもよらない言葉が聞こえた

剛鬼「別にいいが、怪我しても知らんからな」

ちよこつと脅してみるが

桃香「それでもいい」

桃香は即答だった

剛鬼「じゃあ、ちょっと遊んでやるか」

俺は立ち上がり桃香を見ると、もう桃香は剣を構えていた

桃香「行くよ！剛鬼君！」

剛鬼「いつでもどうぞ」

俺がそう言つと桃香が走つて接近してきたが

桃香「きゃ！」

しかし桃香は途中でずっこけ倒れた

剛鬼「おいおい、まだ何もやってないんだが」

桃香「うゝ今度こそ」

桃香は立ち上がり、今度こそ俺に接近し剣を横風ぎに振った

剛鬼「遅い」

俺はそれを指2本で止める

剛鬼「桃香、剣を振る時はあまり大振りでないほうがいい。隙がかいからな」

剣を離し桃香に言う

桃香「分かった。やってみる」

桃香は、再度俺に向かって剣を振るが剣速が非常に遅いので、ちょっと身体をずらして避けおでこにデコピンをした

ピシッ

桃香「うゝ、剛鬼君痛いよ」

桃香は、おでこを抑え泣きそうになっている。かなり加減してるんだがな

剛鬼「桃香、これじゃあ鍛錬にならないぞ」

一々軽く攻撃して、泣かれたらたまらんからな

まあ攻撃しなければいいだけ何だが、どうしても隙だらけで攻撃しなくなってしまう

桃香「うゝ分かってるけど」

剛鬼「はあ、ちょっとおでこから手をどけてくれ」

桃香「うん」

桃香がおでこから手を離れたので、俺は自分の手を置き

剛鬼「氣功治療」

桃香の頭に氣を流し、痛みを消してやり手を離す

桃香「え？今の何？」

桃香は何がおきたのか分からず、俺を見ている

剛鬼「俺の氣を、お前のおでこに流して痛みを消した」

氣は非常に便利だ。あの時師に教えてもらっておいでよかった

桃香「氣？」

剛鬼「氣とは、どんな人間でも身体の中に秘めている力だ」

桃香に簡単に氣について説明すると

桃香「その氣って私でも出来る？」

何と桃香が氣を使えないか聞いてきた

剛鬼「うゝむ、出来るには出来るが」

桃香「じゃあそれを教えて！」

剛鬼「いいが、まずは身体の氣を解放しないといけないぞ？」

確か師は、そんなことを言っていた気がした

桃香「どうやって？」

やっぱり解放の仕方何て知らないよな

剛鬼「普通なら、才能がある奴は自分で解放出来るらしいが、出来ない奴は氣のつぼを氣を扱える奴がつぼに氣を流すことで解放出来る」

と師が言っていた気がした。実際俺は自分で解放することが出来たが

桃香「じゃあ剛鬼君が、私に氣を流せば私も出来るってこと？」

剛鬼「ああ、一応な。だが使い過ぎると倒れるからな。それと、氣を解放したら氣は垂れ流し状態になる。だからすぐに氣をコントロールして身体に留めるんだ。分かったか？」



桃香「うん。何とか」

本当に分かってんのか？まあ俺がアシストすればいいか

剛鬼「じゃあ、服を捲って背中を出してくれ」

桃香「ううん／＼」

桃香は服を捲り背中を出す。こんなところを恋に見られたらどうなるか

剛鬼「よしじゃあいくぞ？」

桃香「うん／＼」

背中の氣のつばに氣を流すと

桃香「な何これ！？」

桃香の身体から氣があふれでてきた。思ったより氣の量が多い

剛鬼「意識を集中しろ。そして流れてる氣を身体に留めるんだ」

桃香「ううん。分かった」

桃香は目を瞑り、意識を集中させた。暫くすると氣の排出は止まった。氣を身体に留めることに成功したようだ

剛鬼「よし、成功だ。どうだ今の感じは？」

桃香「ううん、よく分かんない」

剛鬼「まあいい。後は自分の意思で氣を扱えるようになればいいだろう」

その後、俺は氣のONとOFFのやり方を桃香に教えて現在は氣の使い方を教えている

てか普通ONとOFFだけでも、けっこう時間掛かる筈なのに桃香はすぐに出来るようになった

やはり劉備だから才能があるのだろうか？

桃香「うゝん難しい」

剛鬼「そう簡単に、出来たら苦労しないよ」

桃香「氣を足に纏えば、剛鬼君みたいに速く移動出来るんでしょ？」

剛鬼「今の移動スピードよりは上がるが、俺の速度に追いつくのはまだ全然無理だ」

というか、桃香にスピードで追いつかれたら俺の努力が

桃香「きゃっ！」

などと、思っていると桃香がまたずっこけた

桃香「痛た。うゝ足が軽くなった気がして走ってたら足挫いちゃったよ」

桃香が足を抑えながら俺を見る

剛鬼「全く、普段運動しないからそうなるんだよ」

挫いた足を氣功治療で痛みを和らてやる

桃香「うゝまだ痛い」

桃香はまだ足を抑えて唸っている

剛鬼「悪いが、俺もまだ治療のほうは修行中だな。完全に治療することは出来ない」

そう言って俺は桃香に背を向ける

剛鬼「おんぶしてやるからのれ」

桃香「えっ！ううん／＼」

桃香が俺の背中に乗る。思ったより軽いだが恋より重いな

桃香「重くない？」

剛鬼「全然、じゃあ城に戻るぞ」

桃香「うん／＼」

俺は、桃香をおんぶして城に向かった

剛鬼「はあ、何とか誰にも見つからなかった」

桃香をおぶりながら、桃香の部屋に入りとりあえず安心する

剛鬼「おい桃香」

桃香「すうすう」

桃香は、いつの間にか眠ってしまったようだ

剛鬼「全く、世話が妬ける」

桃香をベッドに下ろし、立ち去ろうとした時

ガシッ

剛鬼「？桃香？」

部屋に戻ろうとした時、桃香が服を掴んだ

桃香「・・・一緒にいて・・・すうすう」

どうやら、寝惚けて掴んだようだ

剛鬼「本当に、世話が妬ける」

近くの椅子を、ベッドのすぐ近くに置き座る

剛鬼「全く、これがあの劉備とはな」

髪を撫でながら、桃香を見る

剛鬼「でも、確かに一刀達が惹かれるのも分かる気がするな」

何となく、何で桃香に全員が着いて行くのか分かる

剛鬼「これが、優しさの力なのか師匠？アンタの言っていた、武力より優しさの力が世界を救うってことが、本当の真実なのか？」

師匠は言っていた。武力で、世界を平和にするのではなく、優しさの力でこそ世界を平和にするべきだと

剛鬼「でも、桃香にそんなことが出来るとは思えないな」

こんな、武力もないような子にそんなこと出来るとはな

剛鬼「まあ、師匠。アンタが言ってたことが本当に正しいのを見し  
てもらおうよ」

桃香を見て呟き、俺は目を閉じ瞑想を開始する

暫くして

？「・・・君 剛君 剛鬼君」

剛鬼「うん？」

目を明け、前を見ると桃香が起きたていた

剛鬼「やっと、起きたか？」

桃香「うん。ごめんね服掴んだまま寝ちゃって」

剛鬼「別にいいよ。じゃあ俺は部屋に戻るよ」

そう言い、立ち上げりドアに向かう

桃香「剛鬼君」

剛鬼「何だ？」

桃香が呼んだから振り向く



桃香「今日はありがとう。とっても楽しかったよ」

剛鬼「楽しかったならよかったよ。じゃあな」

俺は、桃香の部屋を後にし自室に行き休んだ

勿論部屋には、恋がいたので一緒に寝た

## 番外編 福引き個別編4（後書き）

傀儡師「さて次回も、同じように番外編が先なら番外編、本編が先なら本編になりたす」

剛鬼「番外編も次回で終わるな」

傀儡師「まあ、リクエスト何かありましたら言ってください。頑張  
って書きますので」

剛鬼「じゃあ」

傀儡師& a m p・剛鬼「次回も楽しんで読んでください」

**剛鬼と恋迷子を届ける（前書き）**

傀儡師「更新遅れて申し訳ありません」

剛鬼「この野郎、今度はアニメのほうも書き始めたようだぜ」

傀儡師「良ければ、そちらも読んでみてください。尤も同じぐらいの駄文ですがね」

剛鬼「では、楽しんで読んでくれ」

## 剛鬼と恋迷子を届ける

剛鬼「平和だな」

恋「・・・うん」

現在警邏をしてる為、市の見回りをしている

恋が一緒にいる理由は、俺を見つけたからだそうだ

剛鬼「恋、非番の時は別について来ていいが、警邏中とかはついて来るなよ」

一応言っておく。言わないと、愛紗達から怒られるのは恋ではなく俺だからだ

何故、俺に怒るのは知らんが

恋「・・・うん」

長い沈黙、こりゃ次の日には忘れてるな

剛鬼「ところで恋、何で腕を組んでいるんだ？」

恋は何故か、俺を見つけた瞬間腕を組んできた

前に、桃香と腕を組んで歩いていたらだろうか？

恋「……ダメ？」

剛鬼「いや、別にいいけど」

正直言つと恥ずかしいが、まあもう気にしないことにしている

それどころか

住民「いやー剛鬼將軍、今日も呂布將軍と仲がいいですね」

もうほとんどの人は、俺と恋が一緒にいるところ言ってくるので気にならなくなった

剛鬼「それにしても、最近は治安もよくなってよかったよ」

恋「・・・皆、毎日頑張ってるから」

剛鬼「そうだな」

などと、平和に会話をしていると

？「うえええん！お母さん！」

男「どけどけ！」

目の前から、泣き叫ぶ子供を片手に持ちながら剣を持った男が走って来た

男「おら！其所の二人邪魔だ！」

男は俺達にそのまま向かって来た

剛鬼「阿呆が、恋ちよつと腕離してくれ」

恋「・・・うん」

恋が腕を離した後、俺は男に接近する

男「邪魔だつて、言ってんのが聞こえねえのか！」

男は接近した俺に剣を振ったが

剛鬼「失せろ」

男「が！」

？「きゃ！」

剣を指2本で掴み、男の溝内に蹴りを見舞い気絶させると、同時に連れていた女の子を受け止め下に降ろす

剛鬼「おーい！誰か兵はいないか？」

とりあえず、兵士がいなか呼んでみるとすぐに俺達の所に来た

剛鬼「誘拐犯だ。連れてけ」

兵士「了解しました。剛鬼將軍」

兵士は男を連れて行った。さてと

剛鬼「お嬢ちゃん、大丈夫か？」

男が連れていた女の子に話し掛けると

？「うえええん！変なお面の人！」

剛鬼「な何、変だと！？」

お嬢ちゃんは、俺のかぶっている鬼のお面が怖かったのかまた泣いてしまった

？「うえええん！お面かぶった怖い人！」

変な人と言われ、次は怖い人けっこう精神に効くな



恋「・・・泣かない、大丈夫」

恋が、女の子の頭を撫でながら言う

？「ひつく・・・本当に大丈夫？怖い人じゃない？」

女の子は泣き止み恋の顔を見る

恋「・・・大丈夫、だから安心して」

？「ひつく・・・うん」

お嬢ちゃんは俺を見るが、また泣きそうになっていたのであれをやることにした

剛鬼「お嬢ちゃん」

？「？」

剛鬼「よく見てろよ。はっ！」

俺は顔に手を当てる。すると鬼のお面が一瞬で兎のお面に変わった

？「あつ！兎になった」

恋「・・・兎になつてる」

剛鬼「もういっちょ、はっ！」

また手を顔に当てると、今度は猫のお面になった

？「今度は猫になった！」

恋「・・・猫、可愛い」

女の子も恋も楽しそうに見ている。どうやら女の子も、もう警戒してないようだ

剛鬼「とりあえず、落ち着いたかな？」

？「うん、ねえもう一回やって」

恋「……やって」

剛鬼「いいよ。はっ！」

また顔に手を当てると、今度は犬のお面になった

？「凄い！凄い！」

恋「……凄い」

剛鬼「さてと、じゃあとりあえずお嬢ちゃん、名前は何て言うの？」

名前が分からないので聞く

？「うんとね、名前は璃々って言うの」

剛鬼「璃々ちゃんは、一人で此所に来たの？」

璃々「うんうん、お母さんと一緒に来たんだけどはぐれちゃって、それでさっきの人に捕まっちゃった」

剛鬼「要するに、迷子になってたら拐われたってことだね？」

現状を理解し璃々ちゃんに聞く

璃々「うん」

璃々ちゃんは頷く。迷子をほったらかしにするわけにもいかないな

剛鬼「はあ、じゃあ一緒にお母さんを探してあげるよ」

璃々「本当に？一緒に璃々のお母さん探してくれる？」

剛鬼「本当だよ。いいよな恋？」

恋「・・・うん」

璃々「ありがとう。お面のお兄ちゃんと優しいお姉ちゃん」

璃々ちゃんが笑顔でお礼を言う。まだ探してもいないのに

剛鬼「じゃあ探すか。璃々ちゃん、何かお母さんに特徴はない？」

闇雲に探しても、意味ないから璃々ちゃんに聞く

璃々「うんとね、お母さんは髪が長くて璃々と同じ髪の色しててね、お姉ちゃんよりもおっぱいがすごく大きいの」

おい！こんな子供に一体親はどんな教育してんだ？

普通子供がおっぱい何て言わねえだろ

剛鬼「璃々ちゃん。おっぱいが大きいとかは大きな声で言っちゃいけないよ」

今の内に教育をしておこう

璃々「えー、どうして言っちゃいけないの？」

恋「・・・何で？」

恋も疑問に思ったようだ

剛鬼「羞恥心に関わるからだよ」

恋「・・・羞恥心で、何？」

璃々「なあに？」

2人が首を傾げて聞いて来る。何か頭痛くなってきた

剛鬼「ああ、もうとりあえず言わないように、分かった？」

恋「・・・うん」

璃々「はい」

璃々ちゃんも恋も、どっちも本当に分かったのか心配だ

剛鬼「とりあえず、璃々ちゃんと同じ髪の色で長い髪の人を探せばいいの？」

璃々「うん」

剛鬼「じゃあ探すか。璃々ちゃん、またはぐれて拐われちゃいけないから手を繋いで行こう」

璃々「うん」

俺は、璃々ちゃんの手を握りその後恋の手を握った

剛鬼「ちよつと歩きにくくなるから、恋これで我慢してくれ」

恋「・・・うん／＼」

恋は少し顔を赤くし頷く。腕組む時は普通だったのにどうしてだろう？

まあとりあえず、璃々ちゃんのお母さんを3人で探した

だが、特徴を注目して探してはみたが中々見つからない

剛鬼「いないな」

恋「・・・いない」

璃々「お母さんいない」

璃々ちゃんが、泣きそうな顔になっている

剛鬼「璃々ちゃん、大丈夫だ。君のお母さんは絶対にいるから」

そう言い璃々ちゃんの頭を撫でる

璃々「うん。ありがとうお面のお兄ちゃん」

剛鬼「何、元気がない子を安心させるのは当然だよ」

璃々「お兄ちゃんって、凄く優しいんだね」

剛鬼「そうか？」



よく言われるが、俺って本当に優しいのかな？

璃々「うん」

恋「・・・剛鬼、凄く優しい」

あまり自覚はないがそうなのかな？考えても分からんな

剛鬼「まあとにかく、諦めずに探せば見つかるだろ・・・」

ヒュン

最後まで言う前に、目の前から矢が飛んできた

剛鬼「何だ？危ねえな」

矢を掴み、見てみると一応矢の先端は潰してあるようだ

恋「・・・剛鬼、攻撃した奴見つけた！」

恋がそう言い、矢が飛んで来たほうに向かって走って行った

剛鬼「待て恋！璃々ちゃんちよつとごめんな」

璃々「え！？」

璃々ちゃんを抱き上げ、俺は恋を追った

追いついた先で見た物は

？「く！速い！」

恋「・・・剛鬼に攻撃した奴、恋が許さない！」

弓を構えた女と恋が戦っていた

弓を持っているほうは、凄い速さで何本もの矢を恋に向けて放っている

恋はそれを可能な限り避け、当たりそうなのを方天画戟で弾き接近している

剛鬼「やるなあの人。弓であの恋とまともに戦えるとは」

恋は接近しようとしているが、相手は上手く矢で牽制してずっと同じ距離を保っているようだ

？「璃々を離さない！」

ヒュン

矢が3本凄いスピードで飛んできた

剛鬼「知也の銃ほどではないな」

右手で璃々ちゃんを持ち左手で抜刀し矢を全て斬る

璃々「お面のお兄ちゃん！あの人が璃々のお母さんだよ！」

剛鬼「何？なら」

？「な！消えた！」

剃で一氣に向かい、女の弓を弾き前に立つ

？「く！」

剛鬼「止めろ、俺達は別に何もしない。恋もこっちに来い」

恋「・・・分かった」

恋を呼び女を見る。確かに璃々の言っていた通り、長い璃々ちゃんと同じ髪の色であり恋よりでかい胸をしていた

？「璃々を返してください！」

女は俺を睨んで言う。俺が誘拐したとも思ってるのか？

剛鬼「ああ」

璃々ちゃんを下に降ろすと

璃々「お母さん！」

？「璃々！」

女が璃々ちゃんを抱きしめ泣いていた。よほど心配だったのだな、まあそれが親子なら当然か

璃々「お母さん！お兄ちゃんとお姉ちゃんに謝って」

暫くすると璃々ちゃんが女に言う

？「でも璃々、この人は璃々を誘拐したんじゃない」

璃々「違うよ！お兄ちゃんは拐われそうな璃々を助けてくれて、お姉ちゃんと一緒にお母さん探してくれるのも手伝ってくれたの！」

璃々ちゃんが怒鳴って言う。子供だが、けっこう声がでかい

？「え！そうだったの？てっきり、怪しいお面の人に拐われたと思  
って」

また怪しいって言われた。そんなことはない筈何だかな

？「申し訳ありません！娘を助けてくれた恩人と知らず攻撃してしまい。本当にすいません！」

女が何回も頭を下げて謝ってくる

剛鬼「いや、私は特に気にしてませんから頭を上げてください」

？「そちらの貴方も申し訳ありません！」

女は恋にも謝る。さて恋は何て言うかな？

恋「・・・剛鬼が、許してるから恋も許す」

ほう、何も文句を言わず恋が許すとは以外だな

？「ですが・・・」

女はまだ納得していないようだ。さてどうしよう

剛鬼「ならとりあえず、名前を教えてくださいませんか？」

？「あっはい。私は黄忠 字を漢升と言います」

ほうこの人が黄忠か。俺の予想では、本来黄忠は爺さんだったから、婆さんかなと思ってたんだがな

黄忠「今、何か失礼なことを思いませんでした？」

黄忠が、怖い笑顔で俺に聞いてくる

剛鬼「いえ何も」

鋭い。やはり女は年齢のになると、恐ろしいほど鋭くなるな

剛鬼「とりあえず黄忠さん、私は別に気にしていませんし、それにこんなお面かぶってたら怪しまれるのをしょうがないと思っているので、謝らなくていいですよ」

黄忠「・・・分かりました。ではせめて、私の真名をお受け取りください」

真名受け取らないといつまでも謝ってそうだな

剛鬼「分かりました。受け取りましょう」

黄忠「はい。私の真名は紫苑と申します」

剛鬼「紫苑さんですか。確かに受け取りました」

璃々「お面のお兄ちゃん」

真名を受け取った後璃々ちゃんが俺の所に来た

剛鬼「璃々ちゃん、此所でお別れだ。お母さんに会えてよかったな」

璃々「もう、行っちゃうの？」

剛鬼「仕事があるからな」

璃々「また会える？」



剛鬼「また俺に会いたいなら、璃々ちゃんにこのお面を預けよう」

俺はかぶっていた犬のお面を璃々ちゃんにかぶせる

剛鬼「俺が璃々ちゃんを見つけるか、璃久ちゃんが俺を見つけるかで、このお面を璃々ちゃんに預けるよ」

璃々「うん、分かった。絶対だよ。絶対取りに来てね」

剛鬼「ああ」

俺は璃々ちゃんの頭を優しく撫で

紫苑「璃々の為に、ありがとうございます」

紫苑さんが俺にお礼を言う

剛鬼「いえいえ、では紫苑さんにはこれを」

俺はポケットから、紫色のブレスレットを出し紫苑さんの前に出す

紫苑「これは？」

剛鬼「何、魔除けのお守りですよ。迷惑かけましたから」

紫苑「迷惑だ何て、寧ろ私が迷惑をかけたのに」

剛鬼「まあ、受け取ってください。私のけじめでもあるので」

紫苑「分かりました。ありがとうございます。大切にしますね」

紫苑さんは嬉しそうに、ブレスレットを受け取ると腕にはめていた

剛鬼「喜んでいただけたなら何よりです。では帰り道お気をつけて行くぞ恋」

恋「・・・うん」

俺は恋の手を握り反対を向いて歩き出す

紫苑「待ってください！貴方の名は！？」

名前が普通に名乗ってもつまらないし、さて何て言おうかな？うーんそうだ！

剛鬼「何、ただのしがないお面屋ですよ」

そう名乗って俺と恋は歩き出した

璃々「ばいばい！お面のお兄ちゃんと優しいお姉ちゃん！」  
最後に璃々ちゃんの声を聞きながら俺と恋は歩く

紫苑 side

紫苑「不思議な人ね」

私はさっきお面屋と名乗った彼を璃々と後ろから見ている

璃々「またお兄ちゃんと会えるかな？」

紫苑「きっと会えるわよ」

何故かしら？私も璃々と同じで、彼にまた会いたくなってしまったみたい

紫苑「フッフ、今度会ったら口説いてみようかしら」

璃々「口説く？」

紫苑「何でもないわ璃々。じゃあ私達もお家へ帰りましょう」

璃々「はい」

私は璃々と手を繋いで歩き出した。唯一残念だったことは、彼の名前と顔が見れなかったことかしら？でもそれはまた会った時に確認しましょう

紫苑 side out

剛鬼「恋」

恋「……………」

剛鬼「なあ恋」

恋「……………」

何だよ。何で無視するんだよ？

怒ってんのか？俺何か悪いことしたか？

紫苑さんと璃々ちゃんに物挙げたからかな？

というかそれ以外思い浮かばない

剛鬼「はあ、全くしょうがない。恋」

恋「……………」

俺は鬼のお面をはずし、俺の言葉を無視している恋の頭にかぶせた

恋「……………剛鬼、これ」

恋は、頭のお面を手に取り俺を見る

剛鬼「それやるよ」

恋「……いいの？このお面、剛鬼がいつもしてるやつ」

剛鬼「恋は特別だから、いつも俺がかぶってるお面挙げるんだよ」

頭を撫でながら言う。正直、恋にはこれぐらいしか挙げる物がないんだよな

恋「……剛鬼、ありがとう／＼」

恋は顔を赤くしお面を胸に抱く

恋「……絶対、大切にする／＼」

剛鬼「そうか。大切にしてくれるなら、俺も嬉しいよ」

そう言った後別のお面を取り出しかぶる

恋「……今度のは、鬼の色が違うお面？」

剛鬼「ああ、それは予備ないから色違いをかぶっておくんだよ」

最初の、鬼のお面は白だが今度のは黒である

まあ、まだ色ちがいはたくさんあるが敢えて黒にしておく

剛鬼「でも、さっき恋に無視された時寂しかったなあ。俺も今から暫く恋の言葉無視しようかな？」

恋「（フルフル）ダメ」

ちよっと、意地悪なことを言つと恋は直ぐに反応し腕に抱きついてきた

恋「……恋のこと、無視しちゃダメ（うるうる）」

ちよっとだけ、意地悪をしたつもりが恋はマジで泣きそうになっている

剛鬼「ごめんごめん、恋冗談だよ。無視しないから泣かないでくれ」

恋「・・・本当に、無視しない？（うるうる）」

剛鬼「しないよ」

そう言うと安心した顔をしていた

剛鬼「腹減ってきたから、ラーメンでも食って帰るか」

恋「・・・うん」

俺と恋は、ラーメン屋に行きラーメンを食った後城に戻った



## 剛鬼と恋迷子を届ける（後書き）

傀儡師「今回は、早めに更新するよう努力します」

剛鬼「まあ四つも書いてるんじゃあまり期待出来ないがな」

傀儡師「出来る限り頑張ってみますよ」

剛鬼「では」

傀儡師& a m p・剛鬼「次回も楽しんで読んでください」

番外編 福引き個別編5（前書き）

傀儡師「更新遅れてすいません。リアルで色々あったもので」

剛鬼「今回で、福引き編は終わりだ」

傀儡師「では楽しんで読んでください」

## 番外編 福引き個別編5

大輝&amp;・星編

星「うゝむ」

大輝「星、いい加減負けを認めたら？」

現在、俺と星は将棋をやっている

星は、さっきからうゝむと唸りながら将棋の駒を睨んでいる

まあ、王手飛車角取り状態ではこうなるのも頷ける

星「もう少し、待ってくれ」

星はそう言つと、また駒を見る

大輝「て言つか、王手でもあるんだから王動かさなきゃ負けだぞ」

星「うゝむ、やはり王を動かさなければ」

星は、王を動かし王手を回避したが

大輝「はい。詰み」

王の一つ前に、金を置き詰んだ

星「くう、また私の負けですか」

星が、頭を抑えながら俺を見る

大輝「頭脳戦で、俺が負けるなどあつてはならないことだからな」

はつきりと言ってやる。俺は一刀や愛紗達のように、武で勝負ではなく頭脳で勝負だからな

そして、頭脳戦ではかの諸葛亮 鳳統 陳宮 賈馱ですら俺に一度も勝てたことはない

星「大輝殿、もう一度だけ」

星が、もう一度と言うがこれで20回目何だかな

大輝「やめとけ星。何回やつても結果は同じだ」

星「く！そう言われて、何も言えない私が悔しい」

フッフ、武では勝てないが頭脳戦では星にも十分勝てる

全員星を、苦手になっているようだが俺は全然苦手じゃないな

弱みを握られるても、自慢の頭脳で何とかなるしな

星「くうゝ、大輝殿」

星が俺の腕を掴み見てくる

星「お願いします！激ウマメンマの作り方を教えてください！」

大輝「それは、勝ったら教えてやると言っただろ？」

普通に、教えてもいいけどそれじゃあつまらないからな

星「くぅ～お願いします。大輝殿おほひでみ」

な何！星が涙目上目遣いをするだと！

大輝（こっこれは、朱里や雛里くらい強烈だ！）

星「大輝殿」（うるうる）」

うっ！これはもうやばい！

大輝「分かったよ。ほら」

俺は懷から、メンマの作り方を書いた紙を出し星に渡す

星「フッフ、ありがとうございます大輝殿」

星はすぐにもとの星に戻り紙を見出した

ちっ！わざとくれると思ってやりやがったな

大輝「星、わざとあんな顔したろ？」

星「はて、何のことやら」

ニヤけながら星は俺を見る

大輝「さっきから、ずっと座ってて疲れたな」

軽く腰を叩く

星「なら、何処か静かな所で酒でもどうです？」

星は何処から出したのか、酒瓶片手にそう言ってきた

大輝「ああいいよ。じゃあ森にでも行こう」

星「フッフ、分かりました」

そう言つと星は俺と腕を組んだ

大輝「星、何で腕を組むんだ？」

普通に、腕何か組んで歩くとか恥ずかしいんだけど

星「まあ、良いではないか」

大輝「いや、そう言われても」

もし星と、腕組んできるとこを朱里と雛里に見られたらどうなるか・

星「さあ、大輝殿行きましょう」

大輝「せ星ひつぱるな！」

星に、無理矢理ひつぱられながら俺達は森に向かった

星「さあ、では飲みましょう」



森に行き、木陰に座ると星が酒瓶を出す

大輝「俺は、あんまり強くないからたくさん飲めないぞ」

逆に飲みすぎると、俺は意識が消えるんだよな

星「分かってますよ。ではまあ一杯」

星は杯を俺に渡した後杯に酒を入れた

大輝「ありがとう。じゃあ星も一杯」

星の杯にも酒を入れる

星「では、飲みましょう」

大輝「ああ」

二人で酒を飲む

星「ところで大輝殿」

大輝「何だ？」

星が酒を飲みながら俺に尋ねてくる

星「大輝殿は、剛鬼殿をどう思います？」

何？剛鬼をどう思うだと？

大輝「そうだな。最初は化け物と思っていたが、今は仲間と思っているよ」

俺は、奴と遭遇した時本気で死ぬと思った

心の中では、あの飛將軍を追いつ込んだ俺なら、何とかなるかもしれないという慢心が、あった為向かって行った

だが結果は、ボコボコにされ敗北

化け物と思い、恐れていたが奴が仲間になった時は正直ほっとした

また、あんな化け物みたいな奴と戦わなくてすむという思いと、仲間になってくれて心強いという思いもあった

大輝「星はどう何だ？剛鬼のことどう思うんだ？」

酒を飲みながら、星に尋ねる

星「私も最初は、一瞬恐怖したほど怖いと思いましたな。だが、仲間になったら怖いなど思わなくなり、逆にどう剛鬼殿を誘惑しようか考えるようになりましてね」

ハハハと笑いながら星は言う

大輝「へー。で誘惑は出来そうなのかい？」

星「それが、今の難題何ですよ」

星が、杯を置き両腕で腕でを組ながら俺を見る

星「まず、剛鬼殿が主みたいな性格なら誘惑しやすいのですが」

大輝「剛鬼は、一刀と違って真面目だからな」

逆に一刀みたいな性格の剛鬼など考えられない

星「そして、恋以外に全く興味が無いようすだな」

大輝「まあ、確かにそうだな」

実際のところ、星にとってはそこが一番の問題なのだろう

星「大輝殿。何かいい策はないか？」

大輝「ないな」

というか一応、5つほど考えついたが恐らく全て失敗するだろうか  
と言わない

星「大輝殿でも即答ですか。うゝむ何か手はないものか」

星はまた考え始めたようだ

俺的に言えば、あの二人の中に入り込むのは不可能だと思うがな

大輝（それにあの二人の、キスしてるとどこか見たら尚更無理だな）

この前剛鬼の部屋に行き、隙間から何をしてるのか見たら、何と剛鬼と恋がキスしていた

しかも、キスした後恋抱きしめてたし

あんな剛鬼は正直初めて見たよ。そして同時に、恋に手を出したらどうなるかなど考えてしまった

そしてどうなるか考えた結果。恐らく殺されるだろう

それは剛鬼に、妙ないたずらを考えても同じだろう

大輝「まあ星、失敗しないように頑張れよ」

軽く合掌し、星にそう言っておく

星「何ですか大輝殿？合掌などして私はまだ死にませんよ」

大輝「いや、まあ頑張れ」

そう言い酒を飲む

星「ところで、大輝殿は天の世界では何をやっていたのです？」  
突然の話題変更、まあ星にとってはいつものことか

大輝「俺はまあ、学生をやりながら護身用に身体を鍛えてたよ」

代々は、簡単な学校の授業を受けた後、身体を鍛えていた

星「大輝殿、そのがくせいとは何なのですか？」

ああ、やっぱり分からないか

大輝「学生とは、まず俺達の世界には勉強を教えてくれる施設、学

校があるんだ。学生とは学校に通う人達のことを言うんだよ」

こんな感じの説明で分かるよな？

星「ほう、じゃあ天の世界の住人は皆その学校に行っているのですか？」

大輝「まあ、行けない奴等もいるが代々はそうだな」

星「行けない奴等とは、やはり貧しい人などですか？」

大輝「ああ、それとこの世界のように戦っている奴等だな」

星「やはり、天の世界でも争いはおこっているんですね」

大輝「人は、何度も同じ過ちを繰り返す。戦わなくてもいいのに、わざわざ戦い戦火を拡大しいつも必ず無関係な人間が血を流す」

人は後、何回戦うのだろうか？いつ過ちに気付くのだろうか？

星「過ちですか。大輝殿は、今の世でも同じ考えを持っているので

すか？」

大輝「今の時代も、俺の時代でも思うことは同じだよ。話し合いで解決出来る戦いを、わざわざ戦って戦火を拡大し大勢の罪の無い人間が血を流す。何処の世界でも、やることは同じだからな」

結局人は、戦いというものからは逃れられない存在のようだ

むしろ戦いは、永遠に続く呪いとも言えるだろう

星「そうですか。武人の私とは、やはり全く違う考えなのですね」

大輝「星は、強い奴と戦いたいから戦うんだろう？」

星「失敬な。私もしつかり、平和になると思いながら戦っていますぞ」

本当かよ？何か怪しいな

大輝「まあ、俺は俺でこの世界を平和にするよう努力してみるよ」

星「フッフフそうですか。なら私も、平和の為に頑張るとしましょう」



だが、それはそう簡単なことではない。だけど、俺はもう覚悟を決めた。必ず、この世界を平和にし、朱里と雛里を幸せにすると

大輝「星、今日は限界まで飲むぞ！」

星「ほう、大輝殿が積極的に自分から酒を飲もつと言うとは、珍しいですな」

星は、笑いながらそう言い酒を注ぐ

大輝「何か、飲みたい気分何でな」

その後俺は星と限界まで酒を飲んだ。予想通り、途中から記憶が消えてその後のことは覚えていない

そして朝になると

星「すうすう」

大輝「何故だ？」

何故か、星と一緒にベッドで寝ていた

大輝「何故、こうなってしまうんだー！」

俺は叫んだ心の底から。だが・・・

朱里& a m p・雛里「ジー」

ドアの隙間から、朱里と雛里がこっちを見ていた

俺は、慌ててドアを開け二人に近付く

大輝「えっと二人共、これは違うんだ」

何とか、機嫌を損ねないようにしようとしたが

朱里「一体何が違うんだろうね雛里ちゃん？」

雛里「ちゃんと説明してほしいよね朱里ちゃん」

どうやら、逆効果だったようだ

大輝「えっと、だからなこれはその」

そう言つて二人に近付こうとすると

朱里&amp;・雛里「どうせ私達何かより、大輝さんは胸が大きい  
星さんのほうがいいんだ！」

そう言つと二人は走つて行つてしまった

大輝「二人共待つてくれ！誤解何だ！」

必死で俺は、二人の後を追いかけて誤解を解くのにかなりの時間がか  
かった

だけど、星と二人でいた時間も悪くなかったと思う

それどころか、星のあの時のうるうる上目遣いが、まだはつきり覚  
えていてもう一回見たいななどといふ思つてしまった

番外編 福引き個別編5（後書き）

傀儡師「次回からは、しっかり更新出来るようにしていくつもりです」

剛鬼「リクエスト何かあったら、遠慮なく言ってくれ」

傀儡師「では」

傀儡師& a m p・剛鬼「次回も楽しんで読んでください!」

**剛鬼 任務を依頼される（前書き）**

更新遅れてすいません。

ちよつとリアルで色々あり過ぎて

それでもめげずに書いていきますので宜しくお願いします

## 剛鬼 任務を依頼される

剛鬼「大輝の奴、一体俺に何の用だ？」

朱里や雛里達と、書類を片付けていたら詠に大輝が呼んできると言われ、今向かっているところだ

剛鬼「大輝、俺だ」

大輝「ああ、入ってくれ」

許可が出たので、部屋に入り適当に椅子に座った

剛鬼「わざわざ俺を呼ぶとは、用件は何だ？」

大輝「実は、お前にこれを持ってくるついでに、偵察をしてきてほしいんだ」

そう言い大輝は2枚の紙を俺に渡してきた

剛鬼「これは？」

大輝「見れば分かる」

大輝がそう言ったので紙を見てみると

剛鬼「武器の設計図か？」

大輝「ああ、ちょっと試しに書いてみたんだ」

剛鬼「ほう」紙には武器の形や内装や外装が詳しく書いてあった

剛鬼「螺旋槍と豪天砲と言うのか、この武器は？」

大輝「ああ」

剛鬼「この時代に、これをつくることは可能なのか？」

設計図を見る限り、1つは槍の長さになったドリルと、もう1つは回転弾倉式のパイルバンカー

螺旋槍は、設計図を見る限りリーチが長くなったドリル

豪天砲は、近接戦ができ遠距離戦では銃のように弾丸を打ち出せる設計になっているようだ

螺旋槍は、欠点がなさそうだが豪天砲の欠点は、恐らくこの設計図を見る限りでは武器がでかいことだろう

まあ、この時代ではしょうがないか

大輝「何でも魏にいる李典とか言う奴が、凄いカラクリ好きらしいんだよ」

剛鬼「ほう、だがカラクリと武器は違うと思うが」

大輝「だが、カラクリ好きならこの設計図を見れば目を輝かせると思ってな」

剛鬼「まあ確かにな」

大輝「で、本題何だがこの設計図を魏に売ってきてほしいんだよ」

剛鬼「俺は構わんが、二人が納得するかな？」



大輝「二人？」

剛鬼「恋と由衣だよ」

大輝「う、その件は俺が何とかしてみよう」

剛鬼「了解した。いつ行けばいい？」

大輝「それはおいおい伝えるよ」

剛鬼「了解。では失礼する」

俺はそう言い大輝の部屋を後にし自室に戻った

剛鬼「魏か、行くのなら変装をして行かないとな」

現在俺は自室で現代の雑誌などを見ている

理由は曹操と夏侯姉妹は俺の素顔を知っているので変装出来る格好を探しているからだ

剛鬼「何か、顔を隠してるキャラクターとかいねえかな？」

鞆の中から雑誌やゲーム情報誌などを出しパラパラめくるが中々良いのが見つからない

剛鬼「お！これは良いかもしれねえな」

見つけたのは格ゲーのキャラののっぺらぼうのような面をかぶったキャラ

剛鬼「探すの面倒いから、こいつに変装しよう」

俺はそのキャラが載っているページを何枚か切り取り市に向かった

まず行った場所は行き着けのお面屋

剛鬼「店主」

お面屋「ああ 剛鬼將軍、今日はどのようなご用で？」

剛鬼「実はこのお面を作ってほしいんだ」

そう言い俺はキャラの顔の部分の載った紙を見せる

お面屋「これは？」

剛鬼「少し任務に使うんだ。どうだ出来そうか？」

お面屋「問題ありません。任せてください！」

問題ないとはつきり言っつてこの店主凄いな

お面屋「この髪の毛も作りますか？」

剛鬼「ああ、頼む」

お面屋「分かりました。出来上がったら知らせますんで」

剛鬼「ああ、了解した」

次は服屋に行きこのキャラの服を頼みに行った

剛鬼「どうですか、何とかなりそうですか？」

服屋「北郷様や伊東様に、色々頼まれて作っているんです。任せてください！」

この服屋の店主も凄いな、まさか、別世界のキャラの服を任せてくださいと言って作るとは

剛鬼「なら頼んだ。出来たら知らせてくれ」

服屋「分かりました！」

さて、これで代々準備は整ったな後は

剛鬼「恋と由衣に、何て言うかだな」

由衣は、最近鈴々達と仲がいいから何とかなると思うが、恋はどうだろうか？

はつきり言って、大輝に説得出来るとは思えない

まあその時は、俺が説得すればいいか

後は、いつ行ってくれと言われてもいいように準備をしておくことと、白装束共が入れないように細工をしておくぐらいか

色々やることを考えながら、魏へ行くことを考える

剛鬼「まあ、何事もなく行ければいいかな」

そんなことを思いながら、準備をする俺だった

## 剛鬼 任務を依頼される（後書き）

傀儡師「どうも作者の傀儡師です」

剛鬼「よく分からない設定の剛鬼だ」

傀儡師「最近、色々と鬱になることが多く執筆に集中出来ない状態が続いています」

剛鬼「それでも一応、頑張って書いているからどうか読んでくれる皆さん、この阿呆な作者を見捨てないでやってくれ」

傀儡師「リクエストも引き続き、募集しますので遠慮なく言ってくださいね」

剛鬼「では次回も宜しくお願いします」

## 剛鬼 一刀に警告する（前書き）

傀儡師「今回は割と早く更新出来ました」

剛鬼「だが今回は長いな」

傀儡師「すいません。夢中になって書いていたら長くなってしまいました」

剛鬼「ちなみに今回後書きに別の小説からゲストが来る」

傀儡師「では最後まで宜しくお願いします」

剛鬼 一刀に警告する

剛鬼「こい恋」

恋「・・・行く！」

キイイーン

現在恋と鍛錬中。魏へ行くまでに出来るだけ強くする為である

剛鬼「嵐脚」

恋に向かい嵐脚を複数放つが

恋「・・・当たらない」

恋はすぐに回避し嵐脚を避けた

恋「・・・ふっ！」



避けた恋はすぐに牙突の構えをし俺に向かってきたが

剛鬼「紙絵」

牙突を紙絵で避け上に跳ぶと

恋「・・・牙突三式」

剛鬼「ほう」

恋が以前少しだけ教えた牙突三式を放ってきた

剛鬼「飛天御剣流 龍槌閃」

互いの剣撃が激突し双方地面に着地した

剛鬼「やるな恋、これは牙突のとおきを教えてもいいかもな」

恋「・・・とおき？」

だがまだ教えるには早いな

剛鬼「まあ、まだ教える気はないがな」

剃で移動し恋に抜刀する

恋「・・・く！」

恋はガードをするが、そのすぐ後ろに移動し袈裟斬りをする

恋「・・・っ！」

恋は咄嗟にガードするが

剛鬼「終わりだ」

同時に蹴りで方天画戟を弾き飛ばし斬を恋に向ける

恋「・・・また負けた」

恋が残念そうな顔で俺を見る

剛鬼「いや、さっきの牙突三式放った時はちょっと焦ったよ」

というよりちよつとの説明で出来るって凄いぞ

だが、まだ俺のスピードに反応が完全に追いついていないな

恋「・・・鍛錬してるから」

剛鬼「恋は、いつも偉いな」

俺は恋の頭をいつも通り優しく撫でる

恋「・・・／／／」

一刀「いつも仲がいいんだな二人共」

朱里「羨ましいです」

一刀と朱里が俺達を見ながら笑顔でこっちに来た

剛鬼「よう一刀、お前も鍛錬か？」

一刀「ああ」

剛鬼「朱里もか？」

絶対違うと思うがあえて聞く

朱里「いえ私はご主人の鍛錬を見ようかなと」

まあそんなことだろうと思ったが

一刀「なあ剛鬼、俺の鍛錬相手になってくれないか？」

一刀が俺を真剣な顔で見て言う

剛鬼「ほう面白い、いいだろう」

俺は無手の状態で構える

一刀「行くぞ剛鬼！」

一刀は刀を抜き俺に突っ込んで来た

剛鬼「ほう、中々速いな」

速さは愛紗ぐらいか

剛鬼「だが」

一刀「はあー！」

キイイン

刀と拳がぶつかる

一刀「まだまだ！」

一刀は俺に刀を振るう。うむ中々筋はいいようだ。まあまだ俺には及ばないな

剛鬼「ほう、中々いい太刀筋だな」

一刀の攻撃を回避しながら分析する。だが何か妙だ

剛鬼（こいつまさか？）

一刀の太刀筋は確かにいい、袈裟斬りも右薙ぎも左薙ぎも速くあまり隙がない

剛鬼「一刀止まれ！」

一刀「何だ、どうかしたか剛鬼？」

違和感を確かなる為に一刀を一回止める

剛鬼「一刀、今から俺は此所から動かないから、殺す気で俺の身体を全力で斬れ」

一刀「何！」

おお驚いてる驚いてる。まあ、いきなり自分の身体斬れ何て言えば当然か

一刀「本当に、全力でいいんだな？」

ほう何か言うと思ったが、以外だな

剛鬼「構わん、来い」

朱里「そそんな、いくら何でも危ないですよ！」

朱里が俺を心配したのかそう言うが

恋「・・・朱里、大丈夫」

だが恋がそれを止めた

朱里「でも恋さん」

恋「・・・心配ない」

一刀「はあー！」

一刀は俺に向かって全力で近付き抜刀したが

剛鬼「鉄塊」

ガシッ

刀を振った瞬間に鉄塊で一刀の刀を掴んだ

剛鬼「やはり、そうだったか」

一刀「何がだ？」

剛鬼「お前、人を殺したことがないな？」

一刀「何！」

朱里「え！」

恋「………？」



一刀「何故、そう思うんだ？」

剛鬼「ふつ、今から教えてやるよ。恋ちよつと来い」

恋「……？」

一刀に分かりやすく教える為恋を呼ぶ

恋「……剛鬼どうかした？」

剛鬼「恋、一刀に言ったように殺す気で全力で俺を斬れ」

恋「……分かった」

恋はそう言い方天画戟を牙突の構えで俺に向ける

剛鬼「よし、来い恋」

恋「……行く！」

恋が全力で俺に向かって牙突を放つ。前より速くなっているな

剛鬼「鉄塊」

キイイイン

俺は牙突を鉄塊で受け止めたが

剛鬼「く！」

ガードしきれずダメージを受けた

恋「・・・剛鬼、大丈夫？」

恋が心配そうな顔で俺を見る。まあ正直けっこう痛いが

剛鬼「大丈夫だ。さて一刀」

俺は一刀を見る

剛鬼「今の恋の攻撃で分かっただろ？俺が何故分かったのか？」

一刀「恋は、本当に殺す気でお前の心臓を刺した。だが俺はお前の腕を攻撃したからか？」

剛鬼「そうだ」

理解は出来ているようだな

恋「……？どういうこと？」

恋は分かっているようで俺を見て聞く

剛鬼「恋は、殺す気で俺の心臓を刺した。だが、一刀は心臓ではなく俺の腕を攻撃した。つまり一刀は、俺を殺す気で攻撃しなかったことだ。分かったか恋？」

恋「………うん」

長い沈黙こりや分かってねえな

剛鬼「朱里お前は知ってたんだろ？一刀は人を殺せないって？」

俺は朱里を見て聞く

朱里「はい」

朱里は普通に肯定した。分かっているながら、こいつを戦わせるとは

剛鬼「そうか、知ってるんじゃない」

俺はそう言った後一刀を見る

剛鬼「一刀」

一刀「何だよ剛鬼？」

剛鬼「お前は戦場に立つな」

一刀「何！」

朱里「どうして？」

恋「……?」

一刀「何で俺は戦場に出ちゃ駄目何だ?」

一刀は納得せず俺を睨み聞いてくる

剛鬼「殺す覚悟もない奴は、戦場に立つ資格はない!」

一刀「な!」

一刀にはつきりと言ってやる

一刀「別に人を殺せなくても問題何かないだろ!」

剛鬼「じゃあ、お前は今まで刀で何処を斬っていた」

俺の予想では、恐らく腕や足を斬り相手を殺さず、戦闘不能にしたのだらう

一刀「戦えないように、両腕や両足を斬って戦闘不能にしていた」

予想通りかよ

朱里「でも、それはご主人様が優しいから」

朱里が一刀を庇おうと俺にそう言うが

剛鬼「優しい？それは違うな」

朱里を見ながら俺ははつきり言う

剛鬼「兵士は、戦えなければ意味はない。腕や足を斬られたらその兵士はどうなる？」

朱里「・・・兵士としては戦えなくなります」

剛鬼「兵士は死ぬのを覚悟で戦っている。なのに、両腕や両足を斬られたらその後無惨に殺されるか、兵士として戦えなくなるのどちらかだ。お前の戦い方では、兵士の誇りを汚しているに等しい！」

一刀「・・・」

剛鬼「そんな、半端な覚悟で戦っているお前に倒された兵士は、さぞ無念だろうな」

朱里「……」

二人は何も言えないようだ

剛鬼「お前は、本気で戦う兵士をその中途半端な覚悟で侮辱してるんだよ」

一刀「ならお前はどうかだよ？人を殺して何とも思わないのか！」

剛鬼「何も思わねえよ」

一刀「ふざけんな！」

一刀はそう怒鳴ると俺の胸ぐらを掴んだ

一刀「人を殺して、何も思わないだど？お前は、血も涙もねえのかよ！」

剛鬼「そういうお前は、自分の覚悟の無さを兵士を殺さず助けたいという考えで、誤魔化そうとしてるだけじゃねえのか？」

一刀「それは……」

剛鬼「確かに、俺は人を殺しても何も感じない。だがな、俺はしっかり殺した奴等の顔を、頭にやきつけてるんだよ」

一刀「……頭にやきつける？」

剛鬼「俺は、人を殺しても何も思えなくなった。だがな、殺した奴の顔を覚え、そして殺した人間に恨まれようがその仲間に恨まれようが、俺はその恨みを背負って生きていく覚悟がある！お前にその覚悟があるか？人を殺してどんなに恨まれようが背負っていく覚悟が？」

一刀「……」

剛鬼「覚悟もないような奴が、この乱世で何かを守れると思うな」

一刀「俺は……」

一刀はその場に崩れた



剛鬼「人を殺せない理由に、他人を使うなよ」

俺は素晴らしい一刀の刀を持つ

一刀「・・・何を？」

剛鬼「今のお前に、これを持つ資格はない」

バキイイイン

一刀「な！」

朱里「ははわわ！」

恋「・・・！」

俺は一刀の刀を目の前でへし折った

一刀「・・・」

一刀は何も言わずに地面を見ている

剛鬼「覚悟が出来たら、俺の部屋に来い」

俺はそう言い自室に戻った

一刀side

一刀「俺は……」

剛鬼に言われたことの大半は当たっていた

人を殺すのが怖くて、恨まれるのが怖くて、俺は殺すことができなかった

そして、それをいつの間にか相手に生きてほしいという考えで、誤魔化そうとしていた

恋&amp;mp;朱里「ご主人様」

恋と朱里が俺を見る。心配されてるな

一刀「大丈夫だ」

俺は二人に笑顔でそう言う

実際全然大丈夫じゃないんだけど

朱里「元気、出してくださいご主人様」

一刀「ああ……」

俺は、どうすればいいんだろうか？

一刀「なあ、朱里俺はどうすればいいんだ？」

朱里に聞く。朱里なら何か答えを教えてくれると思い

朱里「……剛鬼さんの言った通り、覚悟をするしかないですね」

朱里は、頭をひねり考えたようだけど、結局この答えになったようだ

一刀「覚悟か」

別に、覚悟がないから戦ってはいけないはないだろう

一刀「剛鬼の奴、何も戦場に出るなとまで言わなくていいだろう」

恋「・・・剛鬼、ご主人様のこと心配してる」

一刀「え？」

恋から、思いもよらない言葉が聞こえた

一刀「アイツが、心配してる？」

恋「・・・うん」

朱里「私も、そう思います」

一刀「何で？」

信じられない、アイツが俺のことを心配してる何て

恋「……今の、ご主人様の戦い方じゃ、いつか必ず殺される」

一刀「どうして？」

恋「……ご主人様が倒した敵が、誰かにご主人様は腕と足しか狙わないって言ったら、敵はそれを利用してくる」

朱里「そうになったら、恐らくご主人様は勝つことが難しくなります」

二人が俺を見てそうはつきりと言う

一刀「アイツは、それを心配して俺に戦場に出るなって言ったのか？」

恋「……うん」

朱里「そうだと、思います」

俺の、戦い方を見ただけでそこまで予測するとはな

一刀「殺す覚悟か」

俺は立ち上がり空を見る

一刀「俺は・・・」

人を殺す覚悟がない奴が、何かを守れると思うなか

一刀「なら俺は」

俺は、決心し剛鬼の部屋に向かう為歩き出した

朱里 side

朱里「ご主人様！」

ご主人様が、いきなり立ち上がったから私はびっくりした

でも、ご主人様の目はさっきまでと違った

何か吹っ切れた目をしていた

一刀「剛鬼の所へ、行つて来る」

そう言うと、ご主人様は行ってしまった

恋「……ご主人様、さっきと目が違う」

恋さんも、ご主人様の变化に気付いたみたい

朱里「……ご主人様、人を殺す覚悟が出来たんでしょうか？」

恋「……違う」

朱里「え？」

恋さんは、私の言ったことを否定した

恋「……ご主人様、違う覚悟した」

朱里「違う覚悟？」

恋「・・・うん」

違う覚悟？まさかご主人様！

朱里 side out

剛鬼「さて、アイツはどうなるかな」

覚悟も出来ずに、悩みまくるか戦うのをやめるかどうなるかな

まあどうなっても俺には関係ないが

コンコン

剛鬼「入っていいぞ」



一刀「剛鬼」

一刀が入ってきた

剛鬼（ほう、さっきとは目が違うな）

一刀の目は、さっきまでとは違う目をしていた

剛鬼「さて、で覚悟は出来たのか？」

一刀「俺は、やっぱり殺す覚悟は出来なかった」

剛鬼「なら、戦場に出ないことを選んだのか？」

一刀「違う!」

一刀は俺を見てそう言う。ふっさっきよりいい目をしているな

剛鬼「なら、何の覚悟をしたんだ？」

一刀「俺は、殺す覚悟は出来なかった。だがその代わり守る覚悟をした」

剛鬼「・・・守る覚悟だと？」

一刀「そうだ！」

何を言い出すと思えばこいつは

剛鬼「言っただけで、人を殺すことも出来ない奴が、この乱世で何かを守ることなど出来ない」と

こいつは、やはり分かっていないのか？

一刀「俺は、大切な仲間を守る為なら・・・敵を殺す」

剛鬼「何？」

一刀「俺は、俺の戦い方で仲間に危険が及ぶなら敵を殺す。大切な仲間の為に！」

一刀は俺にはつきりとそう言う

剛鬼「フフフハハハ、仲間為に敵を殺す？今まで自分の戦い方で、仲間が危険になるかもしれないとも思っていなかったお前がか？」

本気かこの馬鹿は？それともこの場だけの言い訳か？

一刀「そうだ！」

剛鬼「なら、手始めに俺を殺してみろよ」

一刀「何？」

何を、不思議がつてんだこの阿呆は？

剛鬼「俺は、もしかしたら敵になってお前達を殺すかもしれない。なら今の内に始末したほうがいいぜハハハ」

笑いながら一刀に言うと

一刀「てめえ、やっぱり俺達を裏切るつもりか！」

一刀が俺の胸元を掴み怒鳴る

剛鬼「威勢だけはいいな。・・・着いてこい」

一刀の手をほどき俺達は調練場に向かった

調練場には恋と朱里がまだいて俺のほうに来た

朱里「剛鬼さん、何を始めるんです」

恋「・・・剛鬼、何する？」

剛鬼「彼の、覚悟を確かめるんだよ」

二人にそう言った後俺は一刀を見る

剛鬼「さて、では君の覚悟を見せてもらおうか？」

俺は制作で刀を出し一刀に投げる

一刀「・・・分かった」

一刀は刀を抜き俺に構える

剛鬼「さあ、来いよ」

一刀「俺はお前を！」

一刀が俺に向かい刀を振るうが

剛鬼「阿呆が」

ゲシッ

一刀「ぐは！」

一刀を蹴り飛ばした

剛鬼「殺す気で来いよ。それとも、お前は俺を舐めてんのか？」

また一刀は腕を狙ってきたので言う

一刀「く！はあ！」

再度向かってはくるが

剛鬼「鉄塊」

キイイイン

今度は足を狙ってきた

剛鬼「飛天御剣流 龍翔閃」

一刀「がは！」

一刀は硬直していたので、そのまま顎を打ち上げてやった

剛鬼「話にならん。お前の覚悟は口だけか？」

一刀「くう」

さっきの、覚悟に満ちていた目も今では最初と同じになっている

やはり口だけか。しょうがない、なら

剛鬼「仲間一人ずつ殺せば、覚悟出来るか？」

一刀「な何だと！」

剛鬼「覚悟がないみたいだから、覚悟が出来るまで一人ずつ殺してやるよ」

俺はそう言い、近くの朱里のもとへ向かう

朱里「ご剛鬼さん、じょ冗談ですよね？」

剛鬼「冗談だと思うなら、そう思ったまま死ね」

朱里「はわ！」

そう言い刀を朱里に振ったが

キン

恋「・・・剛鬼、駄目」

恋に防がれ殺し損ねた。邪魔だな

剛鬼「恋、邪魔だどけ」

恋を睨み言っが

恋「・・・嫌、仲間殺したら駄目」

恋も俺を睨み言っ

剛鬼「知るか、邪魔するなら殺すぞ？」

恋「・・・それでも、殺させない！」



恋が方天画戟を振り、俺に攻撃してきた

ガシッ

剛鬼「無駄だよ」

ゲシッ

恋「・・・う！」

振ってきた戟を素手で掴み、恋の腹部に拳を叩き込み気絶させた

剛鬼「さて、恋は後で解体するとして」

恋の戟を鉄塊もせずに、素手で掴んだ為手から血が滴り落ちている

俺は、血のついた手を舐めながら朱里を見る

剛鬼「ハハハ安心しろ朱里。すぐに楽になるから」

笑いながら朱里に近づく

朱里「や止めてください、剛鬼さん！」

剛鬼「断る。じゃあな朱里」

今度こそ、朱里に刀を振るっただが

ガキイイイン

一刀「……」

朱里「ごご主人様！」

今度は一刀に防がれた

一刀「……お前楽しいか？仲間を殺して？」

一刀が俺を睨み言う

剛鬼「仲間？何だそれ？」

一刀「ふざけるな！」

一刀が怒りの表情で俺に刀を振るう

剛鬼「危ない危ない」

一刀「嘗めるな！」

一刀はそのまま俺に刀を振り続ける。もう今の一刀に甘さはないようだ

一撃一撃が、俺を殺せる部分を狙っている。仲間の為に敵を殺す。その覚悟は本当だったようだな

だが、ちょっとやりすぎたかな？確かめる為とはいえ、恋を気絶させて朱里を殺そうとしたし

今の一刀は、完全に仲間を死なせな為に俺を殺そうとしている

今更、あれは芝居と言つのも悪いしな

よし、ちょっとここは刀を弾いて戦闘を中断させよう

剛鬼「いい攻撃だ。正確に俺を殺せる場所を狙っている」

一刀「随分余裕じゃないか？俺の攻撃を解析する暇があるとはな！」

前言撤回、動けなくなってもらうかな

剛鬼「調子にのるなよ」

キイイイン

一刀「チィ！」

力で強引に一刀弾き飛ばし、俺は構える

剛鬼「力の差を、教えてやるよ」

刀の刃の部分を手で持ち

剛鬼「飛天御剣流 九頭龍閃」

一刀「く！なら！」

一刀も、同時に刀を振るったようだが

一刀「ぐ！」

発生前に、攻撃しなければいけない九頭龍閃より速くなかった為、身体に柄の部分の攻撃が炸裂し一刀はその場に倒れた

一刀「くう、さっさと殺せよ」

倒れた一刀は俺を見ながら言う。意外と潔いみたいだな。まあ殺さないけどな

剛鬼「一刀合格だ」

一刀「何！？」

おお驚いてる驚いてる

剛鬼「お前の覚悟、確かに見せてもらった」

一刀「え？じゃあさっきのは？」

剛鬼「芝居だ」

一刀「し芝居！お前さっき、マジで恋を攻撃してなかったか？」

剛鬼「そりゃ、芝居だとばれないようにする為には、マジっぽく見せないといけないだろ」

朱里「ごーきさん！」

一刀と話していると、朱里が鬼の形相で立っていた

剛鬼「朱里悪かった。驚かしてごめんな」

朱里の頭を撫でながら謝る

朱里「あ頭撫でるくらいじゃ、許しません／＼」

そうは言っているが、朱里は顔を赤くしながら気持ちよさそうにしている

恋「・・・うん」

同時に恋が目を覚ました

剛鬼「おはよう恋」

恋「・・・」

恋は黙って方天画戟を構える

剛鬼「恋、あれは冗談だからもう何もしないよ」

俺は、何とかなると思い恋にそう言ったが

恋「・・・恋は、冗談が嫌い」

恋は俺を睨んで言う。やはり怒っているようだ

剛鬼「ごめんな恋」

恋「・・・それに、剛鬼お腹殴った。けっこう痛かった」

恋は、腹を抑えながら俺を見て言う

完全にご機嫌斜めのようにです。さてどうしたもんか

剛鬼「えっとそのごめん」

恋「・・・今日、剛鬼恋と一緒に寝てくれたら許す／＼」

一緒に寝るねえ。まあ別に問題ないからいいか

剛鬼「分かった。一緒に寝よう」



恋「……うん／＼」

顔を赤くし頷いてるから、どうやら機嫌よくなったようだ

一刀「うわー！まさかの剛鬼の爆弾発言」

朱里「ははわわ！やっぱり一緒に寝るってことは、剛鬼さんは恋さんとあんなことやこんなことを！」

一刀と朱里が、何か騒いでいるがスルーしておこう

恋「……剛鬼、手」

恋が俺の右手から、血が出ているのを見て心配しているようだ

剛鬼「大丈夫だ。こんなのほっとけば止まる」

恋「……駄目、手当てする」

恋はそう言つと、俺の右手にそつと包帯を巻いてくれた

剛鬼「ありがとな」

ギュッ

恋「・・・あっ／＼」

何故か、それが嬉しくて恋を抱きしめてしまった

一刀「おい、此所は調練場ですよ」

恋を抱きしめていると、一刀が何か言っている

忘れていた

剛鬼「ごめんな恋、また後で抱きしめさせてくれ」

恋「・・・うん／＼」

何か離れるのが、名残惜しいので恋に小声でそう言い離れた

一刀「仲が良いのは結構だが、場所考えろよ」

剛鬼「見つからないように、こそそいちゃついているお前に言われたくないがな」

一刀「な何で知ってるんだ!？」

阿呆かコイツは、まあ歩いていると周りを気にしながら愛紗や星と歩いていて、人気がない場所で抱きしめたりしてるのを見てるから何だかな

剛鬼「男なら、こそこそしないで堂々としろよ」

一刀「いや、お前は恋だけだからいいけど、俺が堂々と女の子抱きしめてたら殺されるよ」

剛鬼「まあ、そんなことどうでもいいから俺の部屋に來い」

一刀の話を中断し、俺と一刀は部屋に向かった

一刀「で部屋に來たけど、何なんだよ？」

剛鬼「こいつをお前にやる」

俺はそう言い、一本の刀を一刀に渡した

一刀「この刀は？」

剛鬼「妖刀・村雨丸、殺気もって刀を抜けば刀身から水気がほとばしる妖刀だ」

一刀「何でそんな刀を俺に？」

剛鬼「言つたろ。お前は合格だと、戦場に出るのに刀無しでは死ぬぞ」

一刀「・・・俺は戦場に出ていいのか？」

剛鬼「守りたいんだろ？なら守る為に戦え」

一刀「・・・分かった」

決心はしているようだ。そうでなければ、困るんだけどな

剛鬼「後、その封の札を剥がすなよ」

一刀「どうして？」

剛鬼「それは、妖力を封印している札。それを剥がしたら、妖力が全て解放されるからだ。だが、本当に守りたい者を守る時にそれを剥がせ。その時お前が、刀の妖力に負けなければ新たな力を手に入られる筈だ」

俺も一応使えるが、今のこの刀はコイツが持っていたほうがいいだろ

一刀「分かった。ありがとうな」

一刀は、村雨丸を腰に差し俺に頭を下げる

剛鬼「一刀・・・戦う理由を見失うなよ」

一刀「・・・戦う理由？」

剛鬼「・・・ああ、お前は仲間を守る為だろ？なら何があってもそれを貫き通せ」

戦う理由を見失い、俺のようになってほしくないからな

一刀「分かっている。・・・剛鬼は、どんな理由で戦っているんだ？」

俺の戦う理由、前までははっきりしてなかったが、今ならはっきり言えるな。だが

剛鬼「お前が、俺より強くなったら教えてやるよ」

だが敢えて一刀に教えない

一刀「何だよそれ。でもお互い頑張ろうな」

剛鬼「ああ、・・・さて、もう用はないから行っていいぞ」

一刀「分かった。じゃあな剛鬼。ありがとう」

一刀は一礼して部屋から出て行った

剛鬼「甘い奴だ。だが見せてもらおうか、アイツの覚悟を」

俺はそう言った、後ベッドに行き眠った

剛鬼「あっ！そう言えば！」

途中で、恋と寝ることを思い出し起きたのだが

恋「すうすう」

いつの間にか、俺に抱きつきながら一緒に寝ていた

とりあえず俺も再び眠りについた

## 剛鬼 一刀に警告する（後書き）

傀儡師「今回、真似と開閉と世界旅行からその主人公の二人、五十嵐咲君と大澤亮君がゲストで来ています」

亮「宜しく大澤亮です」

咲「五十嵐咲だ。宜しく」

剛鬼「久しぶりだな。二人共」

咲& a m p ; 亮「久しぶり」

知也「久しぶりの登場。そしてはじめてまして二人共」

咲& a m p ; 亮「はじめまして」

剛鬼「そっちの恋、可愛いくていいよな」

咲「いやそっちの恋も十分可愛いだろ」



恋「……ありがとう咲」

咲「別人だと分かっていても、いつもの恋に見えてしまう」

剛鬼「まあ同じキャラだからしょうがない」

亮「ねえ、ところで明命はいないの？」

知也「残念ながら、まだ出ていないから出せないんだよ」

亮「な何だつて！」

傀儡師「すいません。私の執筆が遅いもので」

亮「いえ、気にしないでいいですよ」

由衣「亮さんも咲さんと同じでいい人」

亮「うおー！小さい恋が現れた。咲こっち来てみる」

咲「な何！本当だ髪の色が違う小さい恋だ」

由衣「名前由衣宜しく」

咲「仕草も恋と同じ可愛いな」

亮「まさか剛鬼、もう恋との間に子供が」

剛鬼「違う。その子は保護した子だ。決して俺と恋の子ではない」

咲「だよな。そうだと思ったよ」

亮「実は咲も、俺と同じこと思ってたんじゃないの？」

咲「別に」

知也「それじゃ俺からどっちか二人にプレゼントだ」

咲「これトリガーマグナムとガイアメモリーじゃないか？」

知也「そうだよ。ああなみにそれはメモリーによってちゃんと必殺技変わるからな」

咲「有り難く貰っておくよ」

剛鬼「さて、そろそろ時間だ」

咲「そうかなら俺達は行くでしょう」

亮「だな」

恋「・・・咲も亮もまた遊びに来てね」

由衣「来てね」

咲& a m p ; 亮「ああ、また来るよ」

剛鬼「それでは」

剛鬼& a m p ; 亮& a m p ; 咲「次回も楽しんで読んでください」

刀が落ちてくること（前書き）

剛鬼「今回は、タイトルの通り刀が天より落下してきます」

知也「それでは楽しんで読んでください」

刀が落ちてくるのこと

一刀に警告した次の日

剛鬼「すう　すう」

恋「すうすう」

俺と恋は気持ちよく眠っている

ドオオオオオン！

剛鬼「なっ何だ？」

何か物凄い音が聞こえて起き上がる

恋「・・・うん、今の音何？」

恋も目を擦りながら起きたようだ

剛鬼「イヤ俺も分から」

ゴツウン！

剛鬼「痛！」

な何だ？何がおきた？いきなり頭に激痛が！？

恋「・・・剛鬼！」

恋が、頭を抑えている俺に驚き寄ってきた

剛鬼「痛いな。何だよ一体」

恋「・・・剛鬼、大丈夫？」

恋が、俺の頭をさすりながら聞いてくる

剛鬼「ああ、大丈夫だ。でも何がぶつかったんだか」

そう言い振り返ってみると、後ろにはバスケットボールくらいの、  
大きさの岩が転がっていた

剛鬼「何でこんなでかい岩が」

恋「……誰かが、剛鬼にぶつけた？」

剛鬼「イヤそれはない。恐らくさっきの音が原因な気がする」

というか絶対そうだろ？そうとしか思えない

剛鬼「たく、朝からついてねえな」

そう言うと、再び俺はベッドに寝転がる

恋「……剛鬼、また寝る？」

恋がそんな俺を見て訪ねてくる

剛鬼「正直言うと、まだ眠いんだよ。恋は起きるなら椅子にでも座  
っててくれ」

恋「……じゃあ恋も寝る」

恋はそう言つと、寝転がっている俺に抱きついてきた

剛鬼「なら、お休み恋」

恋「……ん」

何故か恋が、俺に顔を近付けてきた

剛鬼「恋、顔が近い」

恋「……お休みのキス／＼」

ああ、だから顔を近付けてきたのか

剛鬼「分かったよ」

恋「……ん／＼」



恋に優しくキスをした。だが何でだろう？何故か唇をすぐに離れたくなかった

恋「・・・んん・・・んっ／／／」

長く深く恋を求めていた。何故だろうか？

分らない。ただ、恋と長くキスしていたいと思っていた

恋「・・・んっはぁ／／／」

剛鬼「はぁはぁ」

唇を離し、お互い深呼吸して俺はまた恋を見る

恋「・・・／／／」

恋は顔を赤くし、目がトロンとしている

剛鬼「・・・もう一回いいか？」

何故か、もう一回キスしていいか恋に聞いてしまった

恋「・・・うん／＼」

そしてまた唇を重ねた瞬間

バタアアン！

雛里& a m p・月「剛鬼さん！たいへんです！」

剛鬼& a m p・恋「！」

雛里と月がいきなり俺の部屋に入って来た

雛里& a m p・月「あっ！」

雛里と月は、俺と恋を見て固まり

雛里& a m p・月「し失礼しました！（しゅた）」

同時に二人は、顔を赤くし出て行ってしまった

恋「・・・ん／／」

見られたのにも関わらず、俺は恋とキスを続ける。そして暫くして唇を離れた

恋「・・・見られた／／」

剛鬼「ああ、見られたな」

正直、キスしてるの見られたの何かどうでもよかった。逆に、邪魔されたほうが嫌だったからな

剛鬼「別に見られたって、問題ないだろ？」

恋「・・・問題ないけど、恥ずかしい／／」

恥ずかしいとは思っていたんだな

剛鬼「そりゃ確かにな」

そう言つて、俺は起き上がった

剛鬼「何か、たいへんらしいから行かないとな」

恋「・・・うん」

恋も、起き上がったので、俺と恋は部屋を出て玉座の間に向かった

だがしかし、玉座の間に行っても誰もいなかった

剛鬼「？全員何処にいるんだ？」

恋「・・・？」

暫く何処にいるか考えていると

兵士「剛鬼將軍！呂布將軍！」

一人の兵士が、俺と恋の所に来た

剛鬼「おお、丁度いいところに来た。他の奴等は何処にいる？」

兵士「はい！ただ今全員中庭にあります！お二方もお急ぎください！」

剛鬼「了解した」

恋「……（コクッ）」

兵士「それでは、私は此れで」

兵士は、俺達の返事を聞くと何処かに走って行った

剛鬼「とりあえず、中庭に向かうか」

恋「……うん」

その後俺と恋は、少し急ぎ足で中庭に向かった

中庭に向かうと、俺と恋以外の将と軍師が既に全員集まっていた

更に中庭には、かなり砂塵がまっついていて向こう側が見えなくなっていた

剛鬼「おい。どうかしたのか？」

近くにいた雛里に聞いてみる

雛里「ひゃひゃい。えつとあのその／＼」

何か、かみかみの上に顔が赤くなっているが大丈夫だろうか？

詠「ああ剛鬼に恋、ようやく来たわね」

詠が、俺と恋に気付いてこっちに来た

恋「・・・詠、何があった？」

詠「それを、今調査してるのよ」

詠が、砂塵がまっているほうを指差し言う

雛里「今、ご主人様達が砂塵の中に行ってる所でしゅ／＼／」

雛里は、やっと落ち着いているようだがまだ顔は赤い

剛鬼「分かった。じゃあ俺達も行くか恋」

恋「・・・うん」

俺と恋も、砂塵の中に入ろうとした時

剛鬼「砂塵が目障りだな。・・・旋風丸」

俺は、風の力を宿した薙刀・旋風丸を制作し

剛鬼「恋、ちよつとごめんな」

恋「・・・！／／／」

恋を片手で抱き寄せ、薙刀を片手で高速で回転させ

剛鬼「消えろ！」

その突風で砂塵を消し飛ばした

しかし

剛鬼「ああやば、加減するの忘れてた」

砂塵がまっていたほうを見ると、全員突風に吹っ飛ばされて倒れていた

更に面白いことに一刀と大輝の状況は

大輝 side

大輝「痛いなきなり何だ全くうん？何か両手に柔らかい物が」

大輝はその何かを掴んでみると



愛紗「きゃっ！だ大輝殿／＼／」

何故か愛紗の声が聞こえ、俺は恐る恐る前を見てみると

愛紗「だ大輝殿！は早くどいてください！／＼／」

何と、俺は愛紗の上に胸を鷲掴みした状態で倒れていた

大輝「うわっ！すすまない！」

俺は、凄い早さで愛紗の上からどいた。でももうちょっと触っていたかったなあゝ

愛紗の胸、柔らかくて気持ちよかったなあゝ

などと考えていると

朱里&amp;mp;雛里「…………大輝さんの馬鹿！」

大輝「ぐはっ！」

朱里は厚い本で、雛里には厚い巻物で顔面を殴られた。あれは事故で俺は無実なのにー！

大輝 s i d e o u t

一刀 s i d e

一刀「な何だ？今の突風は？」

砂塵の中に進んでいたら、いきなり突風に吹っ飛ばされて偶然何か柔らかい物を掴んで耐えたんだが

ていうか、この柔らかいの何だろう？

ムニユムニユ

恋「…………ん／／／」

あれ？何か色っぽい恋の声が聞こえるな？

剛鬼「・・・ほう一刀、お前俺の目の前でいい度胸してるな？」

一刀「え？ままさか！」

目を開けると、何と俺は恋の胸を鷲掴みして倒れてる状態だった

ていうか剛鬼、顔が怖い顔が！

一刀「えっと剛鬼、これは突風に吹っ飛ばされてだな」

ムニユムニユ

恋「・・・んゝご主人様、そんなに揉んじやっ／＼／」

剛鬼「・・・一刀君、君覚悟は出来てるかい？」

何かまた、恋の胸を無意識の内に揉んじやっていたら、剛鬼が凄い怖い笑顔で俺を見ている

一刀「ちょちよつと待った！剛鬼顔が怖い顔が怖いから！」

剛鬼「もう一回吹っ飛べ種馬！」

剛鬼の薙刀から、突風が吹きその突風が俺を襲った

一刀「ぎゃー！何でこうなるんだー！」

俺は、そう叫びながら吹っ飛び地面に激突した

一刀 side out

全く、あんな奴に触れたら恋の綺麗な身体が汚れる

大輝のは爆笑ものだが、一刀のは爆笑の訳がない

あんな種馬に、大切な恋の身体強いて言えば胸を揉まれた何て、すぐにでも奴を殺したくなる

って俺は何を思っているんだ？でもこう思っのが普通何だよな師匠？

剛鬼「じゃあ恋、落下地点に向かう」

恋「・・・うん」

俺と恋は、落下地点に向かい歩いていると

桃香「うゝん抜けない」

星「抜けませんな」

司「よし、今度は私と星でやってみるか」

星&amp;司「せーの！」

何か、桃香と星と司の三人が何かを抜こうとしていた

愛紗「どうだ？何かあったか？」

司と星が、頑張っている途中で全員が落下地点に集まった

司「やはり抜けないな」

星「抜けませんな」

一体さつきから、何を抜こうとしてるんだ？

一刀「なあ、一体何を抜こうとしてるんだ？」

種馬が、桃香達に聞く

星「ああ主、落下したところに刀が刺さっているんですよ」

全員「刀？」

何で刀何か刺さってんだ？ていうか、刀刺さったぐらいであんな隕石落ちたみたいなことにならないだろ

剛鬼「まあ、とりあえずどんな刀何だ？」

そう言いながら、刀を見てみると刺さっている刀は漆黒のようにつ黒な日本刀

一刀「よし、今度は俺がやってみるよ」

種馬が、そう言い刀に触れ抜こうとするが

一刀「ぬうううう！抜けない！」

種馬は、顔を真っ赤にし頑張っているようだが抜ける気配がない

一刀「はっはあ、無理だ抜けない」

種馬は、諦めてしまったようだ。使えねえ野郎だ

恋「……次は、恋が抜く」

そう言っつて、恋も抜こうとしたが

恋「……抜けない」

だが、すぐに諦めてしまったようだ

剛鬼「しょうがない。俺が抜こう」

そう言つと、全員が俺を見た

剛鬼「何だ？」

白蓮「いや、剛鬼に期待してるぞ」

音々「恋殿が、抜けなかったのですから後は剛鬼だけが頼りなので  
す」

朱里「でももし、剛鬼さんでも抜けなかったらこの刀はどうしまし  
ようか？」

愛紗「まあ、剛鬼殿なら大丈夫だろう」

詠「剛鬼の力で、さっさと抜いちゃいなさい」

月「ご剛鬼さん、頑張ってください」



由衣「お父さん頑張って」

鈴々「剛鬼お兄ちゃんなら、絶対抜けるのだ！」

雛里「あわわ、が頑張ってください」

司「剛鬼なら、必ず抜けるさ」

星「頑張ってください。剛鬼殿」

一刀「まあ、早く抜いてくれ」

大輝「お前なら抜ける。俺は信じているぞ」

桃香「剛鬼君なら、絶対抜ける筈だよ！」

恋「……剛鬼、頑張って抜く」

何か全員、俺が抜けると思っているようだが、俺も人間抜けないかもしれないんだがな

剛鬼「・・・せい！」

俺は、硬度を調べる為旋風丸で刀を斬りつけたのだが

バキンッ

剛鬼「・・・ほう」

旋風丸は、刀にぶつかった瞬間粉々に砕けた

何らかの力で、出現させた武器では無理か。やはり普通に抜くしかないのか

剛鬼「じゃあ、抜くぞ」

そう言つて、刀に触れ少し力をいれて持ち上げてみたら

ズボッ！

全員「なっ！」

剛鬼「簡単に抜けたが？」

何と、いとも簡単に抜けた。まだあんまり力いれてないんだがな

剛鬼「別に、普通の刀と重さも変わらないと思うがな」

などと、全員に言っている

？「汝か？我の使い手になるのは？」

剛鬼「？」

何だ？頭に言葉が響いてくる

剛鬼<sup>そうた</sup>

？「では汝が、我の使い手になれるかどうか試させてもらう」

剛鬼（何？何をする気だ？）

？「汝の心の中で、一番大切な人物を何があっても信じていられるかどうかだ」

剛鬼（面白い。いいだろうやってやる）

？「威勢のいい男だ。ではまた会おう。強き者になれない弱き者よ」

強き者になれない弱き者ねえ。まああたってるかな？

恋「・・・剛鬼、やっぱり凄い」

剛鬼「あれ？」

目の前には、恋が立っているが不機嫌な顔を全員していない

数分ではあるが、俺はぼんやりしてたと思っただがな

恋「・・・剛鬼、どうかした？」

恋が俺を、心配そうに見てきた

剛鬼「いや、何でもない。・・・それより」

俺は、抜いた日本刀の柄に力をいれ鞘から抜こうとしたが

剛鬼「ぬ抜けない？」

全員「え？」

何故か、鞘から刀を抜くことが出来ない

剛鬼「どうやら、この刀はまだ俺を主と認めてないようだな」

そう言うと、俺は刀を腰に差した

由衣「抜けないんじゃない、お父さんその刀どうするの？」

剛鬼「別にどうもしないよ。その内、抜けるようになると思っていれば抜けるだろ」

恐らくあの声は、刀の声。ならさっきの言葉通りなら、何らかの試

験をクリアした後に抜けるのだろっ

なら、その試験がおきるまで気ままに待てばいいだろう

剛鬼「さて、刀は抜けたんだ。さっさと仕事をするぞ」

そう言った後、俺達は全員それぞれの持ち場に向かった

数日後に、たいへんな事件がおこることも知らずに

## 刀が落ちてくるのこと（後書き）

傀儡師（ハザマ状態）「死ね死ね死ね！」

亮（ラグナ状態）「死ぬのはてめえだ！」

知也「現在、真似と開閉と世界旅行で感想を書いて、ハザマになった傀儡師とそれを仕留める為に来た、真似と開閉の主人公の一人ラグナの姿になった亮が戦闘中」

剛鬼「全く、擬きの分際で何時まで戦う気なんだか」

恋「……痛！」

咲「戦いの余波で、恋が怪我をしたぞ！」

剛鬼「何？リミッター解除！おいそこの擬き二人！ちょっと面貸せ！」

知也「きれた剛鬼が、向かって行ったようだ」

咲「そして数分後、片手に鉄砕牙を背負いボロボロになった二人を、引き釣りながら剛鬼は戻ってきた」

二人「うう何て強さだ」

剛鬼「雑魚が！擬きの分際で俺に勝てると思うな」

知也「まあこの三人は置いておいて」

知也&a m p・咲「次回も楽しんで読んでください」



## 辻斬り 前編（前書き）

傀儡師「前後にしたのに、長くなってしまった」

剛鬼「まあ、題名の通り今回は前編です」

傀儡師「では、楽しんで読んでください」

## 辻斬り 前編

落下した刀を手に入れ、謎の声が言った試練とやらもおきないまま二日が過ぎた

だが三日後に、不可解な事件が発生した

一刀「夜に、頻繁に人が襲われる？」

愛紗「はい。ご主人様」

緊急の、軍議と言われて来てみると何やら面倒ごとのようだ

大輝「夜になると、暗闇を利用し街人を斬り殺すとゆう事件が報告された」

剛鬼「まあ、辻斬りのようなものだろう」

夜道に、待ち伏せしてるのかは知らんが

朱里「昨晚の時点で、数十人が何者かに襲われています」

既に、数十人が襲われ死傷者が出ているか

詠「その犯人の、目処はたっているの？」

雛里「襲われた人達の情報によると、犯人は黒い装束に身を包んだ人物だそうです」

情報が少ないな。それも狙って、夜襲撃しているのだろうか

司「早く捕まえないと、更に死傷者が出そうだな」

剛鬼「下手したら、死者だけになるかもな」

一刀「それで皆、何か対策はある？」

自分で少しは考えろよ。全くあんま使えねえ種馬だ

大輝「夜も、警羅をするのが一番だと俺は思うよ」

朱里「私も、それが一番だと思います」

雛里「私も、同じ意見です。それと街の人達に、夜あまり出歩かないように知らせたほうがいいと思います」

夜も警羅をするねえ。まあ確かにそれが一番妥当か

だが、夜出歩くなと言ったところで街の奴等が素直に聞くとは思えないな

一刀「分かった。じゃあ今日から、夜も警羅をするようにな。それと、夜あまり出歩かないように大輝と朱里は、兵士に街の人達に伝える手配を頼む」

大輝「分かった」

朱里「御意です」

一刀「じゃあ、後は皆普段通りに仕事をしてくれ」

一刀がそう言うと、全員それぞれの持ち場に向かって行った

剛鬼「・・・恋、いい加減起きろ」

恋「すうすう」

恋は何故か、この場に来た瞬間から大爆睡をしていた

無論愛紗が、怒っていたが俺が何とかしておいた

剛鬼「しょうがない」

俺は、恋を抱き上げ自室に向かった。何故自室なのかは、何か恋の所には愛紗が仁王立ちして待っていていそうだから

剛鬼「はあ、全く世話がやけるよ」

自室のベッドに、恋を寝かせて俺は自分の仕事をしに向かった

剛鬼「平和だと思ったら、謎の敵による辻斬り事件が発生。夜まで警羅する何て面倒くさいな」

現在は、昼間の通常警羅の最中。特に何もなく、いつも通りに警羅をしていた

剛鬼「強き者になれない、弱き者か」

あの声の、言っていたことは恐らく事実だろう

俺はまだ、昔と何も変わらず弱いまま

剛鬼「はあ、全く何を考えてるんだか俺はよ」

そんなことを、言いながら俺は警羅を続けた

剛鬼「今日も特に以上なし」

警羅を終わらせ、自室に戻ると恋が椅子に座っていた

恋「・・・あっ！剛鬼」

剛鬼「？どうした？」

何故か、恋がいきなり抱きついてきた

だが、抱きついてきた瞬間微かに臭った

剛鬼（？気のせいかな？）

俺はそれを、気のせいと思いあまり深く考えなかった

恋「……………」

何か、抱きしめてるだけでえらくご機嫌だな

剛鬼「ところで恋、朝の軍議はちゃんと聞いていたか？」

恋「……………うん」

目を反らして頷いたよ。しかも間が長いしよ

剛鬼「そうか。じゃあ夜やることを教えてくれ」

恋「……………」

答えられないようである。まあ爆睡してたみたいだから当然か

剛鬼「……全く、素直に聞いてないと言えよ」

そう言って俺は恋から離れた

恋「……………何で離れる？」

剛鬼「嘘ついたから、その罰だよ」

そう言っで、俺は部屋を出ようとしたのだが

恋「……………待って！」

恋が、俺の背中に抱きついてきた

恋「……………嘘ついて、ごめんなさい」



恋が、ちゃんと俺に謝った。反省してるみたいだから許してやろう

剛鬼「これからは、ちゃんと正直に言えよ」

俺はそう言って、正面を向いて恋を抱きしめた

恋「……………うん」

恋は、俺の胸元に顔を寄せ頷いた

剛鬼（何か、今日の恋は変だ）

恋の身体は、ずっと少し震えている。何かに脅えているかのように

剛鬼「……………恋、大丈夫か？身体が少し震えてるぞ」

恋「……………大丈夫。でもこのままでもいい」

恋は、そう言つと抱きしめる力を強くしてきた

剛鬼「いいよ。安心するまで抱きしめててやる」

俺は、日が暮れるまでずっと恋を抱きしめ続けた

そして夜

剛鬼「さて、そろそろ警羅に行かないとな。悪いな恋」

俺はそう言って、恋から離れた

恋「……うん。剛鬼、警羅気をつけて」

剛鬼「ああ、まあ用心はするよ。恋も気をつけろよ」

そう言い、恋の頭を撫でる。抱きしめてる時に、一応何があって夜警羅をすることになったと説明しておいた

恋「……うん」

剛鬼「それじゃ、行ってくるな」

俺は、恋に軽くキスをした。何でか最近恋によくキスしてしまう

恋「・・・剛鬼、行ってらっしゃい／＼」

剛鬼「ふっ行ってくるな恋。俺の部屋で寝ててもいいからな」

そう恋に言った後、俺は警羅をしに夜の市に向かった

剛鬼「特に以上は無いな」

夜暗い中で、警羅をしているが特に何も起きていない

剛鬼「そろそろ、星と合流しよう」

夜の警羅は、一応将二人で別々の方向へ行き、最後合流し何かあったか知らせるというのである

剛鬼「星がないな？」

合流場所に、向かったが星がない

剛鬼「・・・星の氣は」

目を瞑り、星の氣を探してみると星の氣と思わしきものと、別の氣が星の向かった場所で感じられる

剛鬼「・・・まさか！」

俺は急いで星の元へ向かった

星side

星「くう！」

？「・・・」

剛鬼殿と別れ、警羅をしていたら突如黒装束が私に襲いかかってきた

星「貴様！目的は何だ！？何故このようなことをする！」

？「……………」

黒装束は答えず、私に短剣を飛ばしてくる

星「ちい！このままでは埒があかん」

私は、短剣を叩き落とし黒装束に向かう

星「てえい！」

黒装束「……………」

キイイイン ガキイイイン

星「はいはいはい！」

黒装束「……………」

私は、自身の竜牙を黒装束に振るうが全て短剣に弾かれ、突きを放つても全て避けられる

黒装束「・・・・・・・・！」

ガキイイイン

星「くう！」

何だ！この重い一撃は！？

黒装束「・・・・・・・・」

黒装束が、離れると再び短剣を飛ばしてきた

星「そんな物！」

短剣を、全て弾くと目の前に黒装束はいなくなっていた

星「な！何処に！？」

上を向いた瞬間、黒装束が上空で短剣を飛ばしてくる

星「いくら投げようが無駄だ！」

短剣を全て弾いたが、その瞬間黒装束がすぐ目の前に接近してきていた

星「な！速い！」

キイイイン ガキイイイン ザクッ

星「しまった！」

攻撃を弾いた後、距離をとったが竜牙が弾かれ、地面に刺さった

星「くう！このままでは」

黒装束「・・・もらった」

星「しまっ！」

ザシュッ

星「ぐはっ！」

黒装束に、腹部を×字に斬られ血を吐きながら私は倒れた

星「ここまでか・・・」

黒装束「・・・終わりだ」

黒装束が、倒れた私に短剣を向ける。ここまでか私は・・・と死を覚悟した瞬間

トリガーマキシマムドライブ！！

？「トリガーフルバースト！」

黒装束「・・・！」

星「何だ！？」



謎の音が聞こえた瞬間、光の弾が黒装束を上下左右から襲った

黒装束「……………！」

黒装束は、短剣で飛んできた弾を弾いているが

黒装束「……………！」

全てを、弾ききれなく黒装束は左腕に弾が直撃した

黒装束「……………っ！」

？「やれやれ、近くを通ったから来てみれば随分物騒だな」

声ができるほうを見ると其所には

星「と知也殿！」

其所には、片手に青い銃を持った知也殿が立っていた

黒装束「…………！」

バキィィン

知也「当たるかよ」

知也殿は、青い銃から弾を発射し短剣を破壊した

知也「さて、顔を見せてもらおうか」

知也殿は、そう言い青い銃を向けた瞬間

黒装束「…………！」

黒装束は、銃口を向けられた瞬間に屋根に跳び何処かに消えた

星「ま待て！がっ！」

私は、追おうとしたが口から血を吐き動けなかった

知也「おい星！大丈夫か！？」

知也殿が私の元へ来た

星「大丈夫です」

知也「すまない。もう少し早く来ていれば」

知也殿は、申し訳なさそうな顔をして私を見ていた

星「いえ、助けに来てありがとうございます」

剛鬼「星！」

剛鬼殿が、此方へ来たようだ

星side out

剛鬼「星！」

星の元へ向かうと、其所には腹部が出血している星と何故か知也が立っていた

剛鬼「知也、居たのか？」

知也「ああ、丁度近くを通ったんでな」

剛鬼「そうか。とりあえず、星を助けてもらって礼を言っよ」

知也「いいよ礼何てよ。それより星を運ばぶぞ」

そう言うのと、知也は星を抱き上げ歩き出したのでそれに俺も続いた

城に戻り、すぐに星は治療を受ける為部屋に向かって行った

そして暫くして、大輝が星の部屋から出てきた

剛鬼「星の状況は、どうだ？」

大輝「傷は、そんなに深くはない。だが暫くは安静にしてたほうがいいだろ」

剛鬼「・・・そうか」

ちなみに、大輝は医療担当でもある。こいつは、色々な薬を調合して医者紛いなことをやってるからだろう

知也「一体、今何が起きてるんだ？」

剛鬼「今日報告されたんだが、何者かが辻斬り紛いなことをしてるみたい何だよ」

知也「辻斬り？あの黒い装束の奴がか？」

剛鬼「お前、犯人を見たのか？」

知也「ああ、少しだが戦闘もした」

大輝「どんな奴だったか分かるか？」

恐らく知也も、犯人の顔は見てないと思うがな

知也「残念ながら、顔は見えていない。武器はダガーナイフのような短剣だ。そして、腕も星を倒すほどだから相当な腕だろう」

星に、動けなくなるほどの傷をつけるとは確かに侮れない

大輝「とりあえず、今日はもう遅いから対策のは明日立てよう。知也はよかった空き部屋に泊まって行ってくれ」

知也「ああ、サンキュー。じゃあ二人共また明日な」

知也はそう言い、空き部屋に向かって行った

大輝「じゃあ俺も失礼するよ」

剛鬼「ああ」

大輝も、自室に戻ったので俺も自室に戻った

剛鬼「敵の狙いは不明。何故こんなことを？」

そう呟きながら部屋に入ると

恋「・・・」

剛鬼「なっ！恋！」

恋が、片腕から血を流し倒れていた

剛鬼「おい恋！おい！」

俺は、すぐに駆け寄り脈を確認する

剛鬼「脈はある。よかった」

とりあえず、安心はするが恋は目を瞑ったままである

剛鬼「恋、大丈夫か恋」

身体を揺するが、反応がない

剛鬼「恋！」

恋「・・・・・・！」

大声で、恋を呼んだら目を開けた

恋「・・・・・・剛鬼？痛！」

恋は目を覚ますと片腕を抑えた

剛鬼「全く、心配させやがって」

俺は、恋の怪我してる所に手を当て氣功治療をした

剛鬼「これで、痛みは軽くなっただろ？」

恋「・・・・・・うん」

その後、腕に包帯を巻き処置を完了した

剛鬼「恋、何があつた？誰にそんな怪我させられたんだ？」



見つけたら、ソイツは半殺しの後拷問だな

恋「・・・分からない。気がいたら剛鬼がいて、腕怪我してた」

嘘は、ついていないようだ。何でかって？真っ直ぐ俺の目を見てるからだよ

剛鬼「そうか。でも無事でよかった」

ギュッ

安心して、恋を抱きしめた本当に無事でよかった

恋「・・・心配かけてごめんなさい」

剛鬼「いいよ。恋が無事ならそれで」

ギュッと、恋を抱きしめていると

ガチャッ

知也「剛鬼、ちょっと話が・・・失礼した」

知也は、俺と恋を見てドアを閉めて行ってしまった

剛鬼「いけねえ。じゃあちよつと話してくるな」

恋「・・・うん」

剛鬼「すぐ戻るな」

恋の頭を撫でて、俺は知也の元へ向かった

知也「よう剛鬼、恋はもういいのか？怪我してるみたいだったか？」

知也の部屋に向かうと、知也は水を飲んでいた

剛鬼「ああ、ちゃんと処置はしたから大丈夫だ」

知也「そうか。で話何だかな」

知也の顔が、かなり真剣になった

剛鬼「何だ？」

知也「・・・恋は、どっちの腕を怪我していた？」

剛鬼「左腕だが、それがどうした？」

知也「・・・剛鬼、恋に注意しろ」

何？どういうことだ

剛鬼「知也、何を言っている？恋に注意しろとはどういう意味だ？」

知也「・・・さっき一発だけ敵は俺の弾に当たった。それも左腕にな」

剛鬼「な！馬鹿な！」

まさかそんな！

知也「さっき、怪我してる箇所を見たが推測したところ弾が当たった場所だ」

剛鬼「・・・何が言いたい？」

知也「・・・これは俺の推測だが、恋が犯人かもしれない」

恋が犯人？そんな馬鹿な

剛鬼「違う絶対に違う！恋のわけがない」

信じたくない。絶対に！

知也「あくまで、俺の推測の話だ。本当に犯人なのかは分からない。だが注意はしろよ」

剛鬼「・・・」

俺は黙って、知也の部屋を後にし自室に戻った

恋「・・・・剛鬼、おかえりなさい」

恋は、俺が戻ってきた瞬間抱きついてきた

だが、やはり昼間と同じように身体は震えている

剛鬼「・・・・恋、何を怖がっている？」

恋「・・・・恋、何も怖がって何かない」

剛鬼「じゃあ何で、昼間からずっと震えてるんだ？」

恋「・・・・！」

恋は驚いた顔をして俺を見た。全く、気付かないと思っていたのか？

剛鬼「・・・・話してくれないか恋？」

真っ直ぐ恋を見つめる。何とかして、安心させたいから

恋「……夜になると、恋最近変になる」

真っ直ぐ俺を見ながら、恋はそう言う

恋「……夜になると、意識を失って気付いたら違う場所にいたりする」

剛鬼「何で、そうなるのか分かるか？」

恋「……（フルフル）分からない。それに……必ず全身血塗れになってる」

剛鬼「何!？」

まさか、今の話が本当なら犯人は恐らく恋になる。いやそんなわけはない。絶対何かある筈だ

恋「……それで、今日剛鬼から夜に人が襲われてるって聞いた。……ひょっとしたら、恋がその犯人かもしれない」

剛鬼「違う。恋は犯人何かじゃない」

ガチャッ

剛鬼「誰だ！」

突然部屋のドアが開き、ドアのほうを見ると一刀と愛紗が立っていた

一刀「ごめん。聞く気はなかったんだ。でも」

愛紗「恋、お前は暫く尋問をさせてもらい、その後は牢に入ってもらう」

剛鬼「何だと？」

恋を、尋問し牢に入れるだと！

剛鬼「今の話だけで、そんなことが出来ると思っているのか？」

愛紗「残念ですが、被害者の全員が犯人の顔を見たと言っています。呂布の顔を見た」と

剛鬼「なっ！馬鹿な！」

そんな馬鹿な！そんなわけが！

愛紗「とにかく、恋お前は私達と来てもらう。無論抵抗すれば力  
ずくでな」

愛紗が青龍偃月刀を、一刀が村雨丸を構える

剛鬼「待て！お前等正気か？恋が、本当にそんなことをすると思っ  
てるのか？」

一刀「思えないよ。でもこんなに、証言があつて恋本人も血塗れで、  
他の場所にいる何て聞いたら普通に、恋なのかもしれないって思っ  
ちまうよ！代々お前はどうかだ剛鬼？お前だって恋が、犯人かもし  
れないって思ってるんじゃないのか！？」

剛鬼「・・・思つて何かない。俺は恋が犯人何て思っていない」

恋「・・・剛鬼」



剛鬼「俺は、誰が何と言おうと恋を信じている！絶対に、犯人は恋じゃないってな」

俺は何があっても恋を信じる。そう心に決めたんだよ

一刀「お前が何て言おうと、こうなってしまったたら恋を捕まえるしかないんだよ！」

剛鬼「やってみろ雑魚が」

恋「……剛鬼!？」

俺は恋を抱き上げ

剛鬼「恋は俺が守る。剃！」

愛紗「なっ！待て！」

そのまま剃で、その場を逃走した

知也 side

知也「ああ、全くあの馬鹿はよ」

由衣「迷惑かけて、ごめんなさい」

知也「別にいいよ。俺は、由衣とあの二人の味方だからよ。ああそれと、由衣は何もしなくていいぞ。俺が相手するからよ」

由衣「分かった」

由衣に呼ばれ、剛鬼達が追われていると聞いて、俺と由衣は城門の前にやって来た

そして城門の前で、トリガーマグナムを片手で回していると一刀と兵士達が来た

一刀「知也に由衣？丁度いい所に、剛鬼達を探すのを手伝ってくれないか？」

由衣「嫌」

知也「嫌だね。てかよ」

俺は一刀達に、トリガーマグナムの銃口を向ける

知也「俺は、あの二人の味方だよ！」

俺は一刀達に、引き金を弾いた

兵士「ぐはっ！」

兵士「ぐえ！」

愛紗「なっ！知也殿何のつもりです？」

知也「言つたら、俺はあの二人の味方だつてよ。此所を通りたいなら、俺を倒すんだな」

兵士の大半は、追尾弾が避けられず倒れたようだ。まあ、当たっても気絶するだけだから問題はない

大輝「くそっ！どけ！」

大輝が、一瞬で俺に近づいて双刀？を振るうが

知也「遅ーんだよ」

ゲシッ

大輝「ぐっ！」

斬撃を避け、回し蹴りを喰らわしてやった

知也「どうした？かかってこないのかい？」

一刀「くっ！」

俺がコイツ等を止めてる間に、剛鬼辻斬りのほうは頼んだぞ

犯人が誰にしろ。お前がけりをつけるよ

知也 side out

剛鬼「誰も、追ってこないようだな」

森の中に逃走し、俺は恋を下ろした

恋「……剛鬼、ごめんなさい」

剛鬼「何故謝る？恋は謝る必要何てないよ」

俺はそう言い、恋の傍に座る

恋「……恋のせいで、剛鬼追われることになった」

剛鬼「追われるのには慣れてる。問題はない」

恋「……後、ありがとう」

今度は、お礼を言ってきた

剛鬼「何で礼なんか言う？俺は約束を、果たしているだけだぞ」

周囲から、人の気配は感じない。近くには誰もいないようだ

恋「……それでも、ありがとう」

恋が、笑顔でお礼言ってきた。……恋の笑顔は可愛いな

ギュッ

恋「……あっ／＼／！」

恋を抱きしめてしまった。……やはり、まだ恋の身体は震えている

剛鬼「ふっそうか。……絶対に守ってやる。だから安心しろ。もう大丈夫だからよ。」

恋「……うん／＼／」

さて、とつとと犯人を探さないとな。恋を、ちゃんと無実だと証明させないとな

剛鬼「？何だ？」

いきなり、大きな氣が現れた。・・・来たか

剛鬼「恋、敵が来た。・・・俺は行かなくちゃいけない。恋は此所にいてくれ・・・いいな？」

恋「・・・うん、分かった。氣をつけて」

剛鬼「ああ」

恋「・・・剛鬼」

剛鬼「何ん！」

恋から、離れようとした瞬間恋にキスされた

恋「・・・帰ったら、して／＼／」

剛鬼「必ず戻る。そしたらベッドでな」

何を、言ってるんだろうな俺は？でも、俺はやっと人に戻れそうだ

剛鬼「恋、結界をはるから動くな」

恋「・・・うん」

恋から離れ、俺は剣を三本制作し地面に刺し恋の周りに結界をはった

剛鬼「じゃあ、行ってくる」

恋「・・・うん。必ず帰って来て」

剛鬼「ああ、恋とする為に絶対に帰るよ」

俺はそう言い、恋を残し敵の元へ向かった



## 辻斬り 前編（後書き）

傀儡師「次回は後編です」

知也「恋に、格好つけた剛鬼はどうなるかな？」

剛鬼「知るか」

知也「密かに、する約束もしてた剛鬼は果たしてどうなるか」

剛鬼「五月蠅い」

傀儡師「では」

剛鬼& a m p ; 知也「次回も楽しんで読んでください！」

辻斬り 後編（前書き）

傀儡師「更新遅れてすいません」

剛鬼「今回は後編だ」

傀儡師「では楽しんで読んでください」

## 辻斬り 後編

敵の氣が、感じられた所に向かったが其所には誰もいなかった

剛鬼「おい、いるんだろ？・・・出て来いよ」

于吉「フッフ、やはり来ましたか鬼面」

木陰から、眼鏡を掛けた男于吉が姿を表した

剛鬼「お前だろ？恋を操って街人を襲わせ、目撃者に犯人は恋と言わせたのも」

于吉「ほう。流石鬼面氣付いていましたか」

嘲笑うかのように、于吉は俺を見る

剛鬼「目的は何だ？俺と戦いたいなら、一人の時を狙えばいいだろう？」

于吉「目的は、貴方自身に呂布を殺させ精神的に追い詰め、殺人鬼

に戻ってもらおうと思ったのですが、残念ながらそれは失敗してしまいました」

何故、コイツ等が殺人鬼の状態を知っている？

剛鬼「誰から、殺人鬼のことを聞いた？ そう言えば、そちらには左慈がいたか」

于吉「本来なら、失敗した時点でやめる筈だったのですが、貴方の持っているその黒い刀を、回収しに来ました」

何？ この刀は奴等の物なのか？

剛鬼「何故この刀を狙う？ この刀はお前等の物なのか？」

于吉「残念ながら、その刀は我々の物ではありません。しかし、その刀を抜かれる前に回収しないと、貴方が更に脅威な存在になりますので」

剛鬼「ほう、お前等が回収するなどそんなにこの刀は凄いのか。さて早く始めないか？ 俺は今無性にお前を殺したい」

殺気を剥き出しにし、于吉を見る

于吉「残念ですが、相手は私ではありません」

剛鬼「何？っ！」

背後から気配を感じ、しゃがむと真上を蹴りが通過した

？「ちっ！外したか」

そう言い、男は于吉の隣に立つ。この声は……ハハハハハようやくお出ましか

剛鬼「よう、久しぶりだな……左慈」

其所にいたのは、俺をこの世界に來させ、俺が尤も殺したいと探していた男

左慈「久しぶりだな剛鬼。長から漸く許しが出てな」

剛鬼「御託はいいから、早く殺ろっぜ。お前を殺したくてしょうが

ない」

身体が、一秒でも早くアイツに向かおうとしてしまう

左慈「死ね！」

その瞬間、左慈は視界から消えた

剛鬼「久しぶりに、格闘戦をするか」

左慈「しっ！」

剛鬼「はっ！」

左慈の蹴りに、合わせ俺も蹴りを放ち相殺し

左慈「まだまだ！」

剛鬼「もっと楽しませろ！」

蹴りと拳の激突。左慈の連続蹴りを俺は全て拳で相殺する

左慈「どうした。こんなものか？」

剛鬼「それは俺の台詞だ。お前の蹴りなど恋や愛紗の一撃より遅い」

左慈「ほざけ！」

シュッ！

スピードが上がり、頬をかすったようだな

左慈「今から俺は本気で前を叩き潰す！お前も力を隠さず本気を出せ！」

本気を出せ？おいおいマジで言ってるのか？

剛鬼「いいだろう。リミッター解除」

力のリミッターを、外し左慈を見る

左慈「行くぞ！」

また、視界から左慈が消えたが

剛鬼「遅い」

左慈「がつ！」

俺は左慈の背後に回り上空に蹴り飛ばし

剛鬼「落ちろ」

左慈「ぐはっ！」

左慈の鳩尾に、かかとおとしを喰らわせ地面に落とした

左慈「ば馬鹿な！」

剛鬼「弱すぎるな。ちゃんと修行をしていたのか？」



左慈に拳を見舞うが

左慈「そんな単調な攻撃！」

左慈は普通に身体を反らし避けたが

左慈「がつ！」

しかし、避けた筈の拳が左慈の顔面に直撃した

左慈「な何だ今のは！？」

剛鬼「つまらん。終わらせるか。メタルフィスト、モード・サイクロンメタル」

鋼鉄の棍棒を、制作し左手に持ち

メタルマキシマムドライブ！

メモリーをメタルフィストに装填し

剛鬼「メタルツイスター！」

メタルフィストの、両側から出る風を利用し回転しながらメタルフィストを左慈に叩きつける

左慈「くっ！がつ！」

左慈は、身体を氣でガードしてるようだがそう長くはもちまい

そして数秒後

左慈「ぐっ！」

遂に、体制が崩れたその瞬間

剛鬼「死ね！」

渾身の一撃を、左慈の身体に叩き込んだ

左慈「がああ！馬鹿な！」

左慈は、粉々になり消えた

于吉「まさか、左慈が殺られるとは!？」

剛鬼「五月蠅い、死ね」

于吉「なっ!」

于吉の前に、行き抜刀し于吉も粉々になり消えた

剛鬼「リミッター作動。・・・偽者か。つまらん」

そう、さっきの二人は偽者である。何故かって? 左慈も于吉も、そんな簡単に殺せるほど弱くないからだ

剛鬼「恋の所に戻ろう」

そう呟き、俺は恋の元へ向かった

剛鬼「だるいな。何でこうなるんだろうな」

恋の元へ、向かったが其所に恋の姿はなかった

更に結界をはっていた剣は、三本全部折られていた

剛鬼「・・・で何の真似だ恋？」

恋「・・・」

恋が、後ろで短剣を持って立っていた

剛鬼「操られてるか。なら目を覚まさせてやるよ」

恋「・・・」

恋は何も言わず、俺の目の前に接近して来たが

剛鬼「迂闊だな」

瞬時に、両手の剣を叩き落とし抜刀したが

恋「・・・・剛鬼」

剛鬼「！」

恋が、俺の名前を言った瞬間、俺は斬を斬る直前で止めてしまった

恋「甘いな」

剛鬼「ぐっ！」

鳩尾を思いきり殴られた

剛鬼「ふっ、そんなに俺を殴りたいか恋？なら好きなだけ殴れ」

俺は、斬を鞘に納める。恋にかけてみよう

恋「・・・・」

その後は、ひたすら恋に殴られ続けた。何度も何度も殴られ地面に倒れた

しかし、急に恋が止まった

恋「……ご剛鬼、れ恋を殺して」

恋が泣いた。自分を殺してくれと言いながら

剛鬼「断る」

恋「……もう、これ以上剛鬼殴りたくない。大好きな、剛鬼を傷つけたくない」

それでも、俺はお前を殺す訳にはいかない

剛鬼「なら負けるな。俺を殴りたくないなら、自分の意思で洗脳から脱しろ」

恋「……あー!」

恋が、頭を抑え呻き出した。俺はそれを黙って見る。恋負けるな

恋「……恋は絶対に負けない」

剛鬼「そうだ。負けるな恋。洗脳に打ち勝て」

恋「くう、小娘抵抗するな！」

恋「・・・恋の中から出て行け！」

恋「うあああ！」

叫んだ瞬間、恋の身体から黒い闇が出てきて恋はその場に倒れた

剛鬼「漸くお出ましか」

恋を抱き上げ、その場から離し剣を刺し結界をはる

？「貴様なら、この小娘ごと私を殺すと思ったが予想が外れた」

剛鬼「勘違いするな。本体と、戦いたいから殺さなかったただけだ」

本当は、殺したくなかったからだがな

？「ならば、お望み通り本体に戻るとしよう」

闇がそう言つと、人形に変形し目の前に現れた

剛鬼「それが、お前の本体か？」

目の前に現れたのは、長い黒髪でつり目の男

？「いかにも、さあ最後の死合を始めるとしよう」

銀髪はそう言つと、黒い刀を抜いた。するとその刀は

剛鬼「何！？馬鹿な黒い鉄砕牙だと！？」

刀は、漆黒の鉄砕牙に姿を変えた

？「いざ、勝負！」

剛鬼「面白い！受けて立つ！」



此方も鉄砕牙を出現させ、黒髪に突撃する

？「愚かな。正面から私に突撃してくるなど」

黒髪の、黒い鉄砕牙と俺の鉄砕牙が激突した。剣撃と剣撃が幾度もぶつかる

剛鬼「何て力だ！本物かどうかは知らんが鉄砕牙が押されるとは！」

刃と刃が激突する度に、鉄砕牙が奴の黒い鉄砕牙に競り負けている

？「どうした？全力を出さないと、君は私に敗北するぞ」

剛鬼「ちい！リミッター解除！」

俺は距離を取り、リミッターを解除した。あのままでは、俺に勝ち目はなかったからな

？「そうだ！貴様の全力を見せる！」

黒髪が黒い鉄碎牙を上に向ける

剛鬼「いいだろう」

俺も鉄碎牙を上に向け

「「金剛槍破」」

俺の、青い金剛槍破と黒髪の黒い金剛槍破が激突した

剛鬼「くそ！」

だが最初は、互角だったが次第に俺の金剛槍破が押され始めた

？「偽物の刀の金剛槍破では、この刀の金剛槍破は止められない！」

剛鬼「くっ！まずい」

このままでは、俺の金剛槍破が破られる

そう感じた数秒後

剛鬼「しまっ！」

俺の金剛槍破を破った、奴の数本の金剛槍が俺の腕に突き刺さった

そして、一瞬金剛槍破を出すことが出来ず、その一瞬に奴の金剛槍が俺の全身に突き刺さり

？「冥道残月破」

更に、どす黒い冥道残月破が俺に直撃した

剛鬼「がっ！」

大量の血を、全身から流し口から吐血をしながらも、俺は斬を杖がわりにして立ち奴を睨む

？「勝負ありですか？」

剛鬼「馬鹿言ってるじゃねえ」

身体に突き刺さった、金剛槍を素手で全て引き抜き鉄砕牙を捨てる

剛鬼「はああ、まだ終わりじゃねえよ」

？「そんな身体で、まだ戦うんですか？何故、其処までして戦うんです？其処までして、私に勝ちたいのですか？」

剛鬼「お前に、勝つ何てことはどうでもいい。ただお前は、恋に憑依し街人や仲間を襲い恋を犯人にしたてあげた」

？「そんな理由で、私を倒そうと言っのですか？」

そんな理由？まあお前にとっては確かにそんな理由だな。だが俺にとっては・・・

剛鬼「・・・そして、お前は一番やってはいけないことをやった」

？「一番やってはいけないこと？」

剛鬼「・・・お前は、恋を泣かせた。恋に涙を流させた」

？「それが、やってはいけないこと？ハハハ何を馬鹿なことを」  
馬鹿なこと？俺が戦う理由には十分だ

剛鬼「・・・お前を排除する」

抜刀の体制で構える

？「ふつ、破壊者剛鬼。この世界で彼女に合って変わったようだな。  
貴様なら託してもいいな」

黒髪は、そう言つと刀を鞘に納めた

剛鬼「何！？何の真似だ！？」

意味が分らん。圧倒的有利な状況で刀を納めるなど

？「無礼を許してくれ。全ては、君に力を託すかどうかの試験だったのだ」

試験？じゃああの時の声は

剛鬼「お前が、あの時俺に語り掛けた奴なのか？」

？「ええ、そうですよ」

何か、声が違う気がするが気にしないでおう

？「後は、僕が説明しよう」

声が聞こえた瞬間、周りが真っ白の世界になった。驚きながら、後ろを見ると

剛鬼「お前は・・・零」

後ろには、反董卓連合戦で俺の前に現れた男零がいた

零「久しぶりだね。剛鬼君」

剛鬼「さっきの、于吉と左慈の偽者、そして辻斬りもお前の仕業か？」

零に、殺気を飛ばしながら問う

零「ああ、あれは僕じゃなくて敵側の人間の仕業だよ。僕達がやったのは、彼に呂布に憑依してもらって君と戦う所まで」

剛鬼「何故、そんなことをした？」

返答次第では、殺す

零「それは、君をどうするか決める為だよ」

何？

剛鬼「それは、どういうことだ？それと、何故こんな空間に移動した？」

零「この空間に、移動した理由は他の人達に、話を聞かせない為だよ。どういふことは、まだ早いけど教えていいかな？」

零は黒髪に尋ねる

？「全てを、言わなければ構わないだろう」

どういうことだ？俺に一体何の秘密があるんだ！？

零「じゃあとりあえず、君が何なのかを言っよ」

俺が、何なのかだと？どういう意味だ！？

そして、零は俺に言った

零「・・・君は、人間じゃない」

そう、はっきりと俺に向かって言った



## 辻斬り 後編（後書き）

傀儡師「今回は、色々とう剛鬼君の隠された秘密が分かります」

剛鬼「俺は・・・」

恋「・・・剛鬼」

傀儡師「とりあえず、いつものお願いしますよ」

剛鬼「ああ」

恋「・・・うん」

剛鬼& amp・恋「次回も楽しんで読んでください！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6808m/>

---

真・恋姫無双 新たな6人の天の御遣い!

2011年9月27日13時45分発行